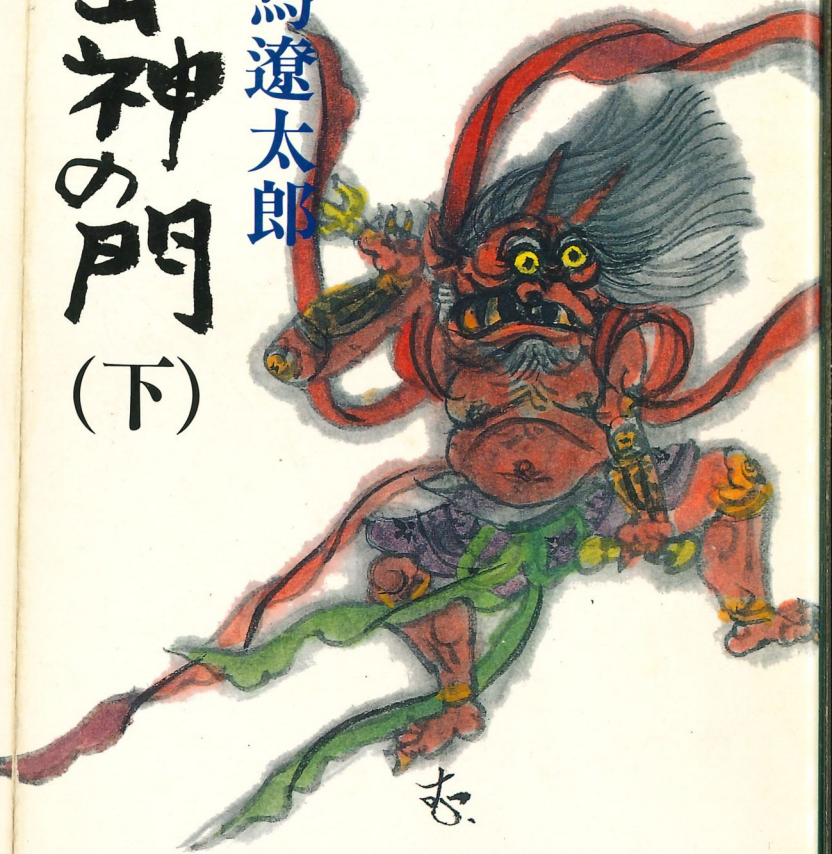
風神の門（下）

司馬遼太郎

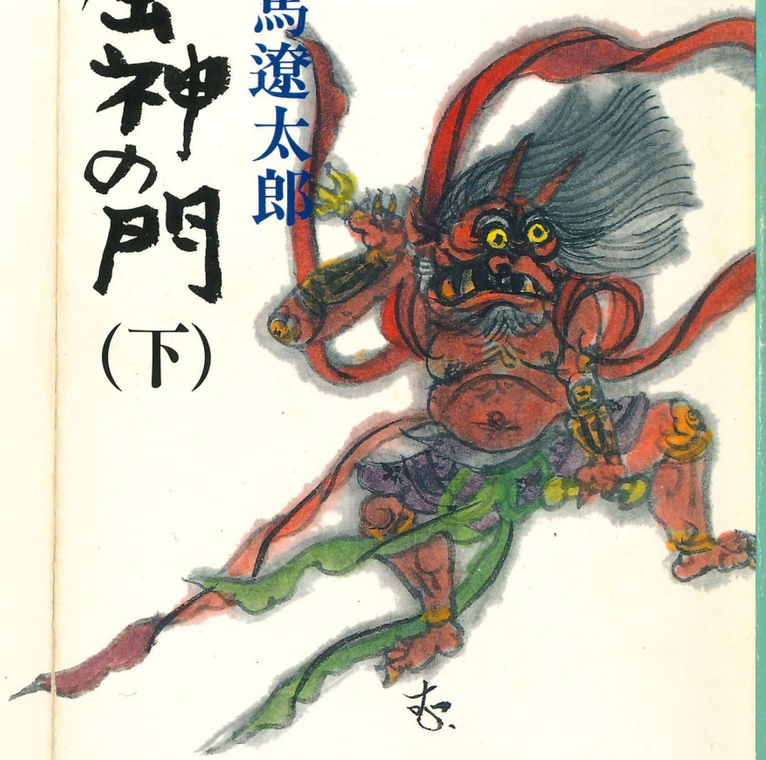


新潮文庫

カバー　村上豊

風神の門（下）

司馬遼太郎



新潮文庫

風神の門（下）

司馬遼太郎

し 9 35 新潮文庫 480

9784101152356

1910193004800

定価480円（本体466円）

大坂冬の陣に西上してくる徳川家康の首をねらうため、霧隠才蔵らは駿府城下に潜入し、徳川の忍者、風魔獅子王院たちと血闘をくりひろげる。そして、駿府城内にしのび込んだ才蔵は、家康の寝所の天井裏に立つのだが……。人間性を抹殺された忍者たちの中で、いかなる組織にも属さず、ただひとり人間らしく生きようとした才蔵の悲哀を通して、〝忍び〟の世界を現代の眼で捉えた長編小説。

ISBN4-10-115235-7

C0193 P480E

新潮文庫
司馬遼太郎の本

梟の城
人斬り以蔵
国盗り物語（一〜四）
燃えよ剣（上・下）
新史太閤記（上・下）
関ケ原（上・中・下）
峠（上・下）
花神（上・中・下）
城塞（上・中・下）
果心居士の幻術
馬上少年過ぐ
覇王の家
歴史と視点
胡蝶の夢（一〜四）
項羽と劉邦（上・中・下）
風神の門（上・下）
アメリカ素描

カバー印刷　錦明印刷

新潮文庫

風神の門

下巻

司馬遼太郎著

新潮社

風神の門(下)

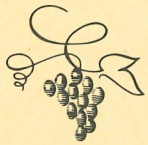
司馬遼太郎著

新潮文庫

風神の門

下巻

司馬遼太郎著



新潮社版

3738

風神の門

下巻

ちちろ斬り

参州岡崎についたのは、翌々日である。

東海道最大といわれる矢矧ノ橋をわたると、左手にみえる城は、岡崎五万石本多家の居城であった。

が、三人は城下のほうにはゆかず、渡って右へ折れ、五丁ばかりあるいて、西福寺という門徒寺の門前に出た。

「なるほど、三河の門徒寺というのは大きいときいていたが、まるで城のようじゃな」

門徒宗という宗旨は、一向宗、浄土真宗、真宗、本願寺宗というようにさまざまの呼び名をもってよばれている宗派で、戦国末期にぼっ興した強大な新興宗団であった。

宗祖は親鸞である。

この鎌倉時代に存世したという多分に伝説的な人物は、生きている当時はほとんど無名にちかかったが、死後二百年をへて、八世蓮如にいたって大いにこの法統が興り、武力をたくわえて、戦国の諸豪とあらそうにいたった。

いまも、末寺のはしにいたるまで、寺のつくりは、小城郭にちかい。

この西福寺も、まわりに石垣と高塀をめぐらし、堀をうがち、太鼓櫓と称する物見ヤグラをそなえている。

「ここが今夜の宿所か」

才蔵がきくと、佐助は上機嫌で、

「この法城が、じつは海道すじの大坂甲賀者の根城になっている」

「根城？」

「この寺の住持西念と申す僧が豊臣恩顧の者で、寺を貸してくれているのだ」

「また海瀬良玄の二ノ舞になるのではあるまいな。医者とぼうずはゆだんがならぬというぞ」

「まず、大事ない」

「佐助は人がよいのう」

「そのほうが得よ。才蔵のように人を疑っては、仕事はできぬわ」

「人をうたがうのは、伊賀のならいじゃ。わしにはじまったことではない」

三人は、方丈に通され、西念がでてきてあいさつをし、下にもおかぬもてなしをうけた。

西念は七十ぐらいの小柄な老僧で、なるほど好人物そうにみえる。

「寺をぞんぶんにおつかいくだされ。もし徳川方に露顕して刑死に遭おうと、もはや惜しからぬ命でござる」

西念がさがってから、佐助は、

「明夜、海道すじの甲賀者が二十人ほどこの寺にあつまる。家康が隠棲する駿府がいよいよちかづいてきたゆえ、城へ忍び入る打ちあわせをするつもりじゃ」

「いよいよじゃな」

「岡崎から東はもはや敵地じゃ」

と佐助は武者ぶるいするような表情で、

「今夜は、ゆるりと小若どのとむつごとでもかわしていてくれ」

「これ佐助、戯れごとをいうでない」

と才蔵は不快な顔をした。

「小若どのとわしは、道中の体裁だけのみょうとじゃ。間違うでない」

「のう、霧隠才蔵」

と佐助はめずらしくこわい顔をした。

「みょうとは、作って出来るものではない。ちぎらねばことばのはしばし、仕草のどこかに、ぎごちなさが出る。な、そうであろう、小若どの」

才蔵と小若は、小僧に案内されて本堂のうらの別室に入った。

臥床はひとつしか敷かれていない。

「小若どの、そこもとの臥床はそれじゃ」

小若がくすっと笑って、

「才蔵さまは？」
「どこでも寝るさ」
「こまったお方」
「なぜかな」
「それほど小若がこわいのでございますか。きっと小若とちぎれば、こまることがおありなのでございましょう。……たとえば」
「ふむ？」
「好きなおひとがあるとか」
にらんだ目が、おどろくほどお国に似ている。
「訊くことがある」
と才蔵は話題をかえ、
「そこもとは、隠岐殿の侍女お国の異母妹と申したな」
「はい」
「姉のお国が、関東に通じていることを存じておるのか」
「そのことは、佐助どのからきき、おどろいております」
べつに、動じている気色もない。
「お国が関東に通じれば、妹であるそちも疑われることになるはずだのに、そちは平然としている。なにか理由があるのか」

「ホホホ……、お国姉上とわたくしとが姉妹であるとは、佐助どののほかは、隠岐殿でさえ知りませぬ。知らぬものを、なぜ疑われることがありましょう」
小若の語るところでは、小若の実父甲賀の望月喜太夫は、かつて故太閤の忍者であった。
喜太夫は伏見城下の拝領屋敷にいたころひそかに幾野という秀吉の侍女に通じ、懐妊させた。
幾野は祐筆佐治助右衛門という者の子で、懐妊したと知るや、すぐ病いといつわって宿へさがった。
助右衛門は、娘に子供の父の名を問いただしたが、ついに幾野は明かさず、お国を産むとほどなく病没した。
そのためお国は、助右衛門夫婦の子として届けられ、お国自身もそう信じて成長し、助右衛門が死んだあと、亡父が懇意だった大野修理（治長）の屋敷にひきとられて、修理の妹隠岐殿の侍女になった。……
「すると、お国はいまでも、実の父の名も、そちと姉妹であることも知らぬわけじゃな」
「いえ、父の望月喜太夫がその後お国どのに会い、ひそかに明かしたそうでございます」
「喜太夫は、いま甲賀に住んでいるのか」
「はい」
「達者か」
「まだ二十里を一日で走れると申しておりますし、下忍を使うて間忍のしごともいたしてお

ります」
「わかった」
「なにが？」
「すべてが、よ。そちの父望月喜太夫は、ふたりの娘のうちの一人を関東方に売り、一人を大坂方に売っているわけじゃな」
「そこまで明かしました以上は、もはや小若は、才蔵さまとは離れませぬぞ。お覚悟なされませ」
「覚悟とは」
どういうことだ、と才蔵は小若をみた。
「才蔵さまは、伊賀者でございましょう。伊賀者に甲賀者の秘密を明かした以上、ただではすみませぬ。小若を、才蔵さまのおなごにしていただかねばなりませぬ」
「これはおどろく。わしは、その秘密とやら明かしてくれと頼んだおぼえはない。そちらから明かし、しかも明かした以上は覚悟せよといわれては、わしは立つ瀬がない」
「それは」
と、小若は急にいたずらっぽい男の子のような表情をして、
「こまった。ほんとうは、そのような大層なつもりで申したのではありませぬ。さきほど佐助どのが申しましたとおり、駿府への道中のあいだだけでも、みょうとにしていただきたい

と思うだけ」
「まことかな」
「本当でございますとも」
「いや、なんとしても甲賀女はこわい」
どういう魂胆で、なにをたくらんでいるのかわからぬところがある。才蔵はこの女にだけはうかつに触れたくないとおもっている。
その夜、才蔵は部屋を出たきり、ついにもどらなかった。
夜明けに佐助がはいってきて、
「ほう」
と見まわし、
「ゆうべも、ひとり寝でござったか」
「小若の力が足りぬのでございましょう」
「才蔵は用心しているものとみゆる。まことに伊賀者の心はとらえにくい」
佐助は、不安なのだ。
いまのところ、才蔵の心をつなぎとめているのは、佐助との友情だけなのである。
佐助とはちがい、才蔵は真田幸村に対して主従でもなく、豊臣家に恩義があるわけでもない。ただ才蔵は、
「大きなことをしてみたい」

という伊賀者独特の気負いだけで、駿府城忍び入りという途方もない大仕事に乗りかかっているだけなのである。

「小若どの、女の髪は象をもつなぐと申すではないか。ぜひとも、才蔵と深うちぎっていただきたい」

「才蔵さまには、きっと好きな女性がおられるのにちがいありませぬ」

「無用の心配じゃ。伊賀者の心をうばうほどの女性が、この世にいようか。うばうとすれば、小若どののほかにない」

「ホホ、佐助どのはお気楽な」

「なぜかな」

「佐助どのに男女のことはわかりませぬ」

「いうたものよ」

苦笑した。

そのとき、膝の下の床が、コツコツと三度鳴った。

佐助がそれにこたえて、人さし指で畳を二度はじくと、その畳がゆっくりと持ちあがって、ひとりの男が顔を出した。佐助の配下の甲賀者である。

畳のあいだから湧きあがった顔が、

「晴海入道どのを亀山城の牢からお救い出し申し、当屋敷のそとまでお連れ申しましたが、いかがいたしましょう」

といった。佐助は、

「入道か」

と、にがい顔をした。

入道を亀山城からたすけ出すようにとは命じておいたものの、このさき駿府までのだいじな道中を、あの粗豪な男を連れにする気はまったくなかった。

「万一、あの男と同行したがために、大事な役目をしくじることがあっては、なにもならぬ。紀州九度山へ追いかえせ」

「はっ」

と、顔が消えようとしたとき、佐助はあわてて手をふり、

「鄭重にな。あの入道どのは偏屈ゆえ、疎略に追いかえしてはならぬぞ。よく機嫌をとり、なめらかに追いかえせ」

「はい、なめらかに追いかえしまする」

畳がもとどおりになるのと、障子がひらくのと同時だった。

三好晴海入道が立っていた。

「佐助、きいたぞ。なめらかに追いかえせとは、なにごとじゃ。おれにはおれの一分がある。駿府城まで行ってひと手柄をたてねば、おれの武士がたたぬわい」

「ま、まった」

「いいわけはきかぬ。いまの雑言をもう一度おれに申してみい。この法杖でこなごなにしてくれるぞ」
「も、もうしわけない」
「あやまれというてはおらぬ。駿府まで連れてゆけと申しておるのじゃ。おれの十人力がかならず役にたつぞ」
「堪忍してくりゃれ。これからさきの仕事は、もはやおぬしのような万夫不当の勇士は必要でない。われわれ忍者にまかしてくれぬか」
「わしは、殿から駿府へゆけとのおことばをいただいている。この岡崎からおめおめと帰れば、切腹せねばならぬ。佐助は、この入道に腹を切らせるつもりか」
とまでいわれれば、佐助は人のいい男だから、たって帰れとはいいきれず、
「やむをえぬ。同道しよう」
「よし、それでこそ佐助じゃ」
と、入道は上機嫌になり、つと小若のほうにむきなおって、
「これはうつくしい。おぬしは、なんと申す」
「小若と申します」
「わしは三好晴海というわ。佐助のいろか」
「いいえ」
「では、才蔵のいろじゃな」

「霧隠才蔵の妻でございます」
「うそをつけ。あの才蔵は伊賀者じゃ。伊賀者に女房などあるものか。ひっきょう、この城下の遊び女とみた。これ、わしに手をにぎらせよ」
小若の手をつかんだとき、入道は、
「うっ」
とうめいた。みるみる顔が青黒くなり、ひたいから汗がにじみ出てきた。
「入道さま。おとなしゅうなさりませ。おとなになされば、はなしてさしあげまする」
小若は、入道の小指を逆手にとってねじあげていたのである。しかもほのかに微笑さえたたえていた。
その宵、陽がおちてから小若は、厠へ立った。回廊を渡ったとき、ふと、気配がして、庭をみた。
（……）
なんの変哲もない。
植えこみのなかに、庭石が五つ、闇にしずんでいる。二つは立ち、三つは寝て、昼間みたとおりのたたずまいだった。
が、その石の影が、いかにも重い。
小若は、それをにらみすえるように見つめた。

やがて、五つの石はゆっくり動いた。

甲賀者であった。

いずれも忍び装束に身をかためていた。

五人の甲賀者は、影のように庭を横切って小若に近づき、どの男も、そっと目礼した。小若が甲賀望月家の息女であることを、かれらは知っている。

ひとりが、

「小若さま、佐助どのは、この棟におられまするな」

といった。

小若はうなずき、

「あとの者は？」

「なにぶん、この海道の各宿場から三人、五人と小人数であつまってくることでございますゆえ、多少おくれて参る者もおりましょう」

「そなたの忍び名は？」

「駿府の城下にひそんでおりまする小石ノ又次でござりまする」

「又次か。ご苦労さまじゃな」

「……では」

男たちはぬれ縁にはあがらず、スイと床下にくぐった。

かれらは、佐助の部屋の床をはずし、畳をあげて入るつもりなのである。この寺の住職や

家族の目にも、自分たちの出入りを見せないための配慮だった。

ほどなく、むこうの塀からも黒い影が三つ盛りあがり、音もなく、その影は、邸内にふわりととびおりた。

……やがて、二十人の甲賀者が、佐助の部屋にあつまった。

最後に、才蔵が、障子をカラリとあけて無造作に入ってきた。

「おお、才蔵、どこへ行ったのかと案じていたわ」

佐助は、うれしそうに、

「昨夜はとうとう部屋へもどらなんだな」

「本堂の阿弥陀仏のうしろで寝ていた」

（まあ）

という顔を、小若は才蔵にむかってしてみせた。

佐助は一同に才蔵を紹介し、

「この仁は、伊賀の霧隠才蔵どのである。心安うしていただくがよい。この道中では、阿蘇大宮司家の家来斎藤縫殿ということになっており、小若どのはその内儀。わしはその家従。心得ましたな」

一同は、だまってうなずいた。

「ところで、駿府の大御所はいま御在城か」

「御在城でござる」

「お達者か」
「風邪も召さぬということでござる。ときどき、軍勢を催して鷹狩をなされておりまする」
「ほう、七十の翁が」
「大坂の豊臣家をほろぼすまでは、石にかじりついても生きるつもりでござろう」
「では、大御所を討つのは、鷹狩のときを襲うか、城に忍び入るかのどちらかじゃな。鷹狩のときの人数は、いつもいかほどか」
「さて、勢子はふくめず侍だけで五百人はござろう」
「五百人か。さすがに警固はきびしいのう。やはり忍びらしく城内に入り、夜陰に寝所に忍び入るしか手がないの」

「佐助どのご覧くだされ。これに、駿府城の見取り図がござる」
と、小石ノ又次が、一枚の図面をとりだして佐助にみせた。
むろん完全な絵図ではない。うわさを集めたり、城外から城のかまえをながめて忍者独特の「城入り」の知識で内部を想像したりしてつくりあげた図面だから、空白の部分が多い。
「大御所の寝所はどこか」
「はて、この本丸の郭内にある桔梗殿がそれではありますまいか」
「桔梗殿？　そういう名の御殿があるのか」

「いや、それがしがつけました。人のうわさでは……このあたりに」
と又次は図面を指さし、
「広い林泉（庭）があり、池をめぐらした御殿があると申します。庭のひとすみに、奥州の桔梗が植えられているというわさから、それがしが名をつけ申した。大御所の住いにふさわしい建物は、ここしかありませぬ」
「しかし、城内に忍びこんだところでこの絵図ではその桔梗殿への道がわからぬゆえ、はたしてたどりつけるかどうか」
「佐助、話の腰を折るようだが」
と才蔵は横あいから、
「それだけの図面があれば十分ではないか。あとはとにかく城内にしのびこみ、じかに体でさぐりあてるほかはない。おそらく城内に十日も忍び暮らさねばならぬことになろう。要は、見取り図をこしらえるのが目当てではなく、家康の首をとるのが目当てであろう。忍びこんでみるより仕方がない」
「おぬしの口からそれをきいて安堵した」
佐助は、目をほそめ、
「われわれ甲賀者の術でできるのは、この程度の図面づくりまでじゃ。これ以上は、おぬしの力にたよらねばならぬ。おぬしにそのようにいうてもらえば、これ以上にありがたいことはない」

「佐助は口がうまい。おだてには乗らぬぞ」
才蔵は上機嫌であった。
「いやいや、正直な気持でいうている」
そのあと、こまごまとした連絡の仕方や、忍具の用意、忍び入ったあとの食糧のことなどを話し合って、やがて会合は一刻ほどでおわったが、最後に又次は、
「ひとつ懸念なことがござる」
といった。
「なにかな」
佐助は、おだやかな表情で又次をみた。
「駿府城には、大御所の忍者獅子王院が在城しているというわさでござる」
「なに、獅子王院が？」
佐助は、急に顔をこわばらせ、
「なぜそれをはじめにいわぬ。獅子王院といえば、小城一つぐらいは一人で攻めおとすといわれた忍者ときいている。そのうわさ、たしかか」
獅子王院という男は、もと甲斐の武田信玄の忍者としてつかえたが、武田家滅亡ののちは、死んだとも、また信州戸隠山にかくれて世を捨てたともいわれている。
忍者の仲間でも、この男の出身が伊賀者か、それとも甲賀者であったのかたれも知らない。その顔さえ見た者がないのである。

ただ伝説的な名人として、そのすさまじいばかりの術技が仲間のあいだに語りつたえられている。
「それが、家康に仕えたのか」
佐助の目に、めずらしく恐怖の色がうかんだ。
「才蔵、これは容易ではないな」
佐助は才蔵のほうをふりむき、
「獅子王院といえば、むかし甲斐の怪人といわれた忍者じゃ。それがいま大御所の身辺をまもっているとなれば、さきほどの忍びこみの話も、よほど考えを変えねばなるまい」
「はてたしかなことかな。獅子王院は武田の滅亡後、戸隠山にかくれたときいているが」
「いや、ありそうなことじゃ。大御所は、かつて日本一の武勇の家といわれた武田家の遺臣を、さかんに召しかかえている。獅子王院が信州戸隠山から呼びだされていま駿府城にいるというのも、不自然なはなしではない」
「それで、佐助は、獅子王院が家康を護っているときいただけで、家康討をやめるというのか」
「いや、なかなかもって」
「それならばなにをおびえている。まず獅子王院を斬ればよい」
「そ、それが才蔵にできるか」

「わからぬ。しかし、やってみるしか仕方あるまい。ただ、勝手のわからぬ城内で獅子王院とたたかえば、かならずおれは負ける」
「あ」
「おどろくことはない。城の外におびきだす工夫をすればよい。そこに紙があるか」
「おお、紙だけでよいのか」
「その紙を群青（青色の一種）の顔料でべったりと塗ってもらいたい。すぐ用意をしてもらおう」
用意ができた。
才蔵は筆にたっぷりと墨をふくませ、それに、
卍
と書いた。
「おう、これは、才蔵の忍びじるしじゃな」
忍者は、どの者も忍びじるしをもっている。
たとえば猿飛佐助の忍びじるしは、真紅の紙に、
申
という文字をかくのである。申とは、十二支のサルという意味だ。
忍者によっては、文字をかかず、絵をかく者もある。
鮒の絵、人間の左耳の絵、小指の絵、雨蛙の絵などがあったと伝えられているが、要するに、忍者がある城下へ入ったばあい、それを町角のどこかへ貼って、あとから潜入してくる仲間に、自分がすでに先着していることを知らせる合図に使われたものであろう。
才蔵は、群青の地に
卍
であった。
「獅子王院ほどの忍者ならば、おれの忍びじるしが群青に卍であることを知っていよう。それを夜陰ひそかに、駿府城の大手門の橋のタモトに貼っておいてもらいたい」
「で、どうする」
「獅子王院は、これが挑戦のシルシであると気づく。すくなくとも霧隠才蔵が駿府城下に来て、なにごとかを策動しつつあるものと察するだろう」
「察すれば？」
「やつは殺そうとするさ」
「それで？」
「獅子王院ほどの男だ、いかなる手を使うてでもおれを探し出して討とうとするだろう」
ふむ、と佐助はうなずき、
「それが、おぬしの思う壺じゃな」
「いかにも。こちらは探す手間はいらぬ」

「しかし、獅子王院のわざが、おぬしよりまさっているとすれば、どうするのじゃ」
「殺されるまでよ」
佐助は、息をのみ、すこし黙ってから、
「おぬし、平気か」
「でなくては、忍者はつとまるまい。おれは、たったいま、座興でも死んでみせることができる」
「座興で？」
と佐助が目をみはった。才蔵はまゆをしかめ、
「からかうものではない、おぬしもそうではないか。座興で死ぬ心のないものは、忍者ではあるまい。忍者が他の武士とちがうのは、その心をもっておるか、おらぬか、ということだけではないか」
「死も座興なら、生も座興、ということじゃな」
「そうだ。佐助よ、よう悟っている」
才蔵は佐助の肩をたたいた。
その動作が、この男にしてはめずらしくはしゃいだものにみえたのは、さすがに獅子王院とたたかうことに心のたかぶりをおさえかねたものにちがいない。
翌朝、才蔵らは岡崎を発った。
海道は、雲ひとつない秋日和で、風に潮のかおりがした。

才蔵の家来に作っている佐助は、才蔵の女房役の小若の足弱をかばうようにしてあるいている。
晴海は、たまたま道づれになった雲水、というかっこうだった。
才蔵は、先頭を深編笠をかぶってあるいてゆく。
「佐助、あの男」
と入道はあごで才蔵をさし、
「たいした男じゃな。街道を歩いてゆくあの背中の重さ、ズシリとして、ひと目で並ならぬ男にみえる」
「わしはどうじゃ」
「おぬしは軽い。才蔵にくらべたならば、どうみても、吹けばとぶような侍奉公人か、旅芸人の格じゃ」
くすっと佐助はわらった。
「なにがおかしい」
「ところがあれが才蔵のわるいところよ。才蔵には、まるで兵法者のような重味がある。忍者は一見して人にめだつようではいかぬ。風のごとく、かげろうのごときものでなくてはならぬ」
「しかし佐助どの」
と小若が横から、

「才蔵さまは、獅子王院をひきだすために、ひと目みて伊賀の霧隠才蔵であることを気づかせたいのでありましょう」

そのとき、スイと通りすぎた飛脚ふうの男がある。

佐助は、それを忍者とみた。

「入道どの、ふりむくでないぞ。いまの男が背後で立ちどまって、われわれの背中を見ている」

「いよいよ敵地じゃな」

「生きて帰れるかどうか、わからぬのう」

佐助は、うそ寒い声を出した。

駿河岡部ノ宿についたときは、まだ陽が高かった。

才蔵がへやでくつろいでいると、佐助が入ってきて、

「どうやら、獅子王院の手先がだいぶ街道へ出ているらしい。わしもそれらしい者を数人みたし、当方の甲賀者からも、そういう報らせが来ている」

「獅子王院は、すでにわれわれ一行に気づいているのじゃな」

「左様、とみた」

「ふむ」

「才蔵、どうする」

「そうさな」

才蔵は腕を組み、明り窓からわずかにのぞいている宇津谷峠を見た。

峠の道は二里。

箱根につぐ東海道の難所といわれている峠だ。

道は馬一頭がかろうじて通れるほどの狭さで、樹木が天をおおい、昼なお暗い。

平安のむかし、在原業平の著といわれる「伊勢物語」にも、

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、蔦楓はしげり、物心ぼそく……

とある。

「……」

むかしも、いまも、宇津谷峠の道のすさまじさはかわらない。

才蔵は、

「あの峠をこえれば、丸子（鞠子）、駿府と道はつづく。峠は、駿府城の西方をまもる屏風になっている。しかも峠の道はせまい。獅子王院にすれば、あの峠のなかにわれわれを取籠めて討ちつくすつもりであろうか」

「なるほど、そうとも思われる」

「ところで、佐助、あの峠には、ほかに間道はあるのか」

「遠く朝比奈のほうにまわれば、樵が分け通る道がないではない。しかし、峠を避けて才蔵

は逃げるつもりか」

「逃げはせぬわ。わしは、今夜、一同とわかれて、ひとり峠の夜道をゆくことにきめた。夜道二里のあいだで襲うてくる獅子王院の配下どもをことごとく斬る」

「わしを連れてゆかぬのか」

「一人がよい。夜のことじゃ。五官にふれる影という影をことごとく斬るつもりゆえ、連れがあってはかえって邪魔になる。おぬしはわしと同時に間道へ出発して、峠のむこうのどこかで落ちあおう」

「ようわかった。落ちあう場所は、山中に牧ケ谷という樵の村があり、村の上の峰に荒れ寺が一つある。そこに決めておこう」

「心得た。ところで」

と才蔵は隣室を視線で指し、ことさらに大きな声で、

「晴海入道と小若どのとは、ここへ置きすてておく」

「……」

それが入道にきこえたらしい。

あわてた入道の足音がきこえ、部屋にとびこんで来るや、

「おい、才蔵」

と声をかけた。が、すぐぼう然とした。

才蔵も佐助も、かき消えたようにいなくなっていたのである。

星があった。

才蔵は、宿場で佐助の配下の甲賀者に用意させた馬にまたがり、ただ一騎、影を落して峠の道をのぼりはじめた。

伊賀に「夜馬の法」というのがある。忍びの術の一種である。

両側に杉木立がおしならび、その枝の下をくぐるようにしてのぼってゆく。

才蔵は、馬上で鞭を鳴らすたびに、目の前を飛びかう物体が、苦もなく落ちた。

むささびである。

この山には、むささびが多い。才蔵の馬蹄の音におどろくのか、しきりに梢から道をへだてた樹へ滑空するのだ。

ときに、才蔵の顔めがけて、貼りついて来ようとするのがある。むろん、才蔵の鞭が、そのものをはらい落してゆく。

が、何度目かのむささびが、馬上の才蔵を襲おうとしたとき、鞍の上の才蔵は、鞭を捨て、腰の刀を天にはねあげて両断した。

（ついに、出たか）

獅子王院の忍者である。

かれらは、むささびを飛ばせることによって才蔵の目をまどわしつつ、ついに隙をみて、樹の枝にかがんでいた男が、むささびのように空を走った。

空を走りながら、鞍上の才蔵を斬ろうとしたのだ。
（伊賀にも甲賀にも、こういう術はないな）
獅子王院の出身が、いよいよわからない。
才蔵は、なおも高らかに馬の蹄を鳴らしつづけた。
敵を誘うためである。
そのとき、にわかに前方が明るくなったかと思うと、杉木立の奥から米俵ほどの大きさの炎があらわれ、人もなくその炎は、暗い空間をふわふわと動きつつ、こちらに近づいてきた。
（はて幻戯の火か）
とおもったが、心を鎮めても火は消えず、目をとじても、まぶたを通して、あたりの明るさがみえる。ふしぎな炎である。
（妙ないたずらをする）
こういう法も、伊賀、甲賀にはない。
才蔵は、それを見まい、とした。見てそれにとらわれれば、相手はその虚に乗じてくるだけだと思ったからだろう。
炎は、才蔵の目の前に近づき、やがて左に跳ね、右におどった。
才蔵は、ただひたすらに無視し、馬を早めた。
炎はくるりと背後にまわった。

あとを追う。
才蔵は、鞭をあげ、いきなり馬腹を蹴って、坂を馬蹄でつかみ捨てるような勢いで駈けはじめた。
が、そのときはすでに馬上に才蔵はいない。
馬をとびおりて地に伏せた。馬のみが、前を走った。
その馬へ、空中の炎はにわかに落下して、ばさりと馬頭にかぶさった。
馬は、声をあげてさお立ちになった。
才蔵はそのとき、はじめて、右の木立にしきりと梢から梢へ飛びわたっている影をみた。
おそらくその者が炎を長い竿のさきにつけて空中に浮游させているのであろうとみた。
（この法も、伊賀にはない）
と才蔵はおもいながら、右手に十字手裏剣をにぎり、左手をひらいて、
ばん
と地を打った。
同時に才蔵の体が暗い虚空にはねあがり、老杉の枝の上に腰をおろした。
すでに才蔵が地上から投げた十字手裏剣が、道のむこう斜面の樹から樹へおどり、渡りつつあった影を射おとしてしまっていた。
馬は。……

才蔵の馬は、はるかむこうに駈けすぎていた。鞍のうえに黒布でつつんだわらがおかれているから、おそらく敵は、それを才蔵のすがただと誤認するだろう。
そのために敵はしばらく混乱する。
それが、才蔵の打った手だった。
敵を混乱させて十分に動かしてみなければ、この闇のなかでは、こちらの出方をきめようがないのである。
（さて、気ながに待とう）
才蔵は、樹の枝のまたにからだを貼りつかせて、待った。
十字手裏剣で射殺された黒い影は、才蔵がのぼっている樹から、十間ばかりむこうの路上に倒れている。
そのそばに、この男の持っていた炎が、すでに燃えつきて白い煙をあげていた。
（殺しはしたが、樹から樹へ炎を舞わしながら飛びわたっていた芸は、なまなかな忍者ではできる芸ではない）
むささびの術、というべきか。
とおもったとき、才蔵は、関東の忍者のなかに風魔という血族集団がいるというはなしを思いだした。
むろん、伊賀者である才蔵でさえ、その一類という者をみたことがない。
樹から樹へとびわたる術に長じ、山中に迷い入った大軍が、わずかな風魔のために悩まされ、ついに武器をすてて逃げたというはなしがある。

（すると、獅子王院という謎の忍者は、風魔のことか）
ふと気づいてみると、路上の死体に、小柄な人影がすり寄ってきていた。
（なるほど、こいつはあの仲間じゃな）
影は、まわりに敵がいないことをたしかめると、死体にまたがって首を掻きおとした。
（顔を見られまいとする風魔のならわしであろう）
影はその首を、おどろくほどの早さで山の斜面に埋めると、さっと逃げようとした。
が、才蔵が影の頭上に飛びおりて、大刀をきらめかせたほうが早かった。
どっと影が倒れた。
影が倒れると同時に、才蔵は百歩、峠のうえにむかって駈けすぎながら、
「風魔」
とよばわった。
「出るがよい。伊賀の霧隠才蔵がこれにあるぞ。伊賀と風魔の忍びの術をくらべたければ首を洗うて出よ」
才蔵の声は風のように走りすぎ、やがてその声に誘われたがごとく、周囲の樹々のこずえが、風もないのにさわぎはじめた。
影が二つ、
星の空から降ってきた。

才蔵は目をつぶり、前後にそれを斬った。
斬りおわったとき、才蔵の影もそのあたりになかった。

才蔵が消えた路上には、死体がふたつ、むかいあってたおれている。
……風魔がいっぴき、
一匹としかいいようのない人間ばなれのした早さで樹の上からするするとおりてきて、死体のそばへ寄った。
たちまち、風魔のむれは、六人になり、一人が例によって仲間の死体の首を掻いた。
一人がその作業をするあいだ、他の五人は円陣を組み、中央に背をむけて四方を見はっている。
頭上の樹々にも風魔のむれがいることは、あちこちで寝鳥がさけびかわしていることでも知れた。
寝鳥が風魔か。
風魔が寝鳥か。
才蔵は、不敵にも、かれらからほんの二十歩ばかりはなれた道わきのガケに体を寄せ、気配を絶っていた。
気配を絶つ術は、伊賀者のふるい伝統技術のひとつで、まず、隠形呪を念ずることによってしだいに思いをほそめてゆき、同時に息をひそめて、ついには、たとえ鼻の前に真綿屑を

たらしても動かないまでになる。
むろん、風魔たちは才蔵に気づかない。
「どこへ失せたか」
低い声だ。
が、才蔵にはきこえた。才蔵がはじめてきく訛である。
和語のようには思われなかった。どこか、ひびきが韓語に似ていた。
風魔とは、もともと乱破とか、水破とかよばれた野伏の集団から出て忍術を身につけたものといわれているがそうではない、ともいわれる。
この戦国のいつほどかに朝鮮、または大陸から流れてきた集団が、土地がないために百姓もできず、血族ごとにかたまっては、流浪して遊芸を売りあるいた。そのうちの一族が、幻術と忍術を身につけて諸方の部将にやとわれ、風魔になったのであろうともいう。
が、才蔵にとっては、どちらでもよい。
一人のこらず斬りたおして、首領の獅子王院を孤立させ、その屍をふみこえて駿府城に忍び入る以外にない。
（六人。……）
と、才蔵の目は、路上の風魔の人数をかぞえた。
（いまなら、一撃で討てる）
という自信があったが、頭上の風魔の群れをどう防ぐかのめどがつかない。

かれらにすれば、地上に六人を立たせているのは、囮なのである。
そのうち、
「火をたけ」
と、風魔の一人が、他の五人に命じた。
たちまち、路上に大篝火があがった。油をそそいでいるのか、燃えかたが異常だった。
「投げよ」
やがて、油のしみこんだ薪を、風魔たちは、路上のはるか遠くに投げた。
薪は美しい弧をえがいて飛び、やがて落ちた。
一つや二つではない。路上に、三間おきに点々と配置するように投げてゆくのである。
ほどなく、路上は、前後二丁にわたって、明るくなった。
（なんだろう）
才蔵は、当惑した。

そういえば、風魔の一族は、火術がたくみである、といい伝えられていた。
事実、そうだった。
才蔵は、目のあたりに、まるで幻術に似たその火さばきをみた。
路上に大篝火をかこんでいる六人の風魔は、大篝火を親火として、子火をとりだしては、路上のはるかな遠くまで投げとばしてゆく。

（しかも）
と、才蔵は、あきれたように、路上に落ちてゆく子火の一つ一つをみた。
子火にはどういう工夫があるのか、落ちるとすぐ炎が、すっと成長するのである。
（たねは、ただの薪にすぎない。どんな仕掛けがあるのか）
（焔硝を仕掛けてあるのか）
それとも、
（薪の一本々々に芯をくりぬいて油布を詰めてあるのだろうか）
才蔵は、まるで、天竺の火のうたげをみるような気がした。
そのあいだも、火は闇にとび、落ちては火の粉をまきちらし、やがて火勢をつよめてあたりを照らしてゆく。
足もとに子火の一つが落ちたとき、
（これは、まずい）
見物しているばあいではなかった。
夢幻火をもやして風魔たちは遊んでいるのではなかった。才蔵の姿を闇のなかから浮かびあがらせるために演じているのだ。
（どうするかな）
工夫がない。
才蔵は、いま、崖のくぼみに体をはりつかせている。

（だいぶあたりが明るくなったな）
いずれ、いやおうなしに、才蔵の姿がかれらの目のまえにうかびあがってしまうだろう。
（いかんわい）
ふと才蔵は、目をあげて樹々の梢をみあげた。
どの樹にも風魔がとまっているのがみえた。どの男も、下を見おろして長い手矢をかまえている。みつけられたが最後、数十本の手矢が頭上を襲うだろう。
（これは、わしも負けたかな）
才蔵は苦笑しつつ、両手をあげて頭上の草をつかんだ。
（しかし、なるように、なるさ）
ひょいとガケの上にはねあがった。
（風魔づれの異俗の者にやぶれたとあっては伊賀の才蔵の名折れよ）
杉の木がある。
才蔵は、その根元まで這った。
路上の火に照らされた側を避け、やがて幹のかげの面にうずくまった。
ひたっ
と、才蔵は杉の幹に両掌をはりつかせた。
おそるべき力だった。
はりつかせた両掌を、ひた、ひた、と上へあげてゆくたびに才蔵の体が、まるで夜露がしずかに立ちのぼるように音もなくのぼってゆくのである。
大枝のまたに、風魔がいた。

大枝のまたの風魔は、まるでふくろうのようにうずくまっていた。
才蔵は、幹のむこうから、その男の頸にむかってそっと右手をのばした。
（うっ）
風魔は頬を幹におしつけられ、無言のままもがいていたが、やがて息が絶えた。
（死んだな）
才蔵は、大枝の上で風魔の黒装束をはぎとって素早く身につけ、死体に自分の衣装を着せて、路上に投げた。
死体は、生ける者がとびおりるような姿勢で、どさりと路上に落ちた。
「それ、出た。……」
とでもいうように、その死体をめがけて、まわりの樹々から、いっせいに手矢が射こまれた。
死体は、むざんにも針鼠のようになった。
「もうよい」
路上の頭株らしい風魔が手で制し、きらりと刀をぬいて死体に近づいた。
そのとき、才蔵は樹の上で手をたかだかとあげ、

ひょう
と手矢を投げおろした。
手矢は、頭株の風魔の首すじに突きささり、胸に貫き通ってしばらくきりきりと路上で舞っていたが、
「……」
血をはく奇妙な音をたててどうと倒れた。
そのとき、すでに才蔵は地上におり立っていた。
ゆっくりと死体に近づき、まわりの風魔たちに、
「おれだよ、風魔のご一類。伊賀の霧隠才蔵と申すのは。……」
「あっ」
風魔たちが仰天したとき、才蔵の剣は風を巻いてきらめき、一時に三人の男が、右肩、胴、左肩から血をふいて倒れた。
才蔵は、ひょいひょいと大篝火を飛び越えた。
そのあとを追って、手矢が、篝火のなかに突きささった。
二矢
三矢
と、才蔵のあとを追い、第四矢が、ひとすじは才蔵の左腕をかすめて飛び、肉を裂いた。
才蔵は傷口を手でおさえて血のにおいをかぎ、

（いかん。……毒を塗ってある）
走りながら、まきをひろい、その炎を傷口に押しあてた。
肉のこげる異様なにおいが鼻をついた。その間も、手矢が降りおちてくるたびに、身をかわさねばならなかった。
（風魔の術中におちたわ。……）
才蔵は、明りの中にいる。
その才蔵を、樹上の風魔のむれは、まるで手負いのけものを射すくめるように手矢を投げおろしてくるのである。
（やむをえぬ、逃げるのじゃな）
火を捨て、おりから飛んできた手矢を刀で横なぐりにはねとばすと、地を蹴った。
二間
三間
四間
と跳び、やがて才蔵の姿は、火の照らす前後二丁の路上から消えた。
が、すでに才蔵の体力が尽きはじめようとしていた。手矢の毒がまわりはじめていたのである。
才蔵は、それからよほど長時間、山中をさまよったらしい。

意識を、ほとんどうしなっていた。
途中、頭上をかすめたむささびのようなものを、反射的に斬りおとした記憶が、腕にのこっている。あるいは、むささびではなく、風魔だったのかもしれない。
ふと、目がさめたときは、わらのなかに臥せており、夜があけていた。
（しまった。……）
はねおきようとした。そのからだを、つよくおさえた者があった。
「何者か」
「小若でございます。夜があければ風魔は出ませぬゆえ、ご安心なされませ」
「……」
才蔵は、あたりを見ようとしたが、かすかに明るさがわかるだけで、目が光をうしなってしまっている。
「お、おれは盲いたか」
おもわず、声をあげた。
「お顔を、毒血のついた左腕でお触れあそばしたにちがいありませぬ。洗うてさしあげておりますゆえ、一日二日もたてば、よくおなりあそばしましょう」
「なぜおれは、ここにいる」
「小若は、あのあと、甲賀者ふたりをつれて丸子からそっと、おあとを追うて参りましたところ、夜のしらじら明けのころに、山中でお気をうしなっておられる才蔵様をみつけまし

た」
「ここはどこじゃ」
「猟師小屋でございます」
小若は、そっと才蔵の手をにぎった。
才蔵は、小若の手くびにふれてまゆをしかめ、
「おぬし、鎖を着込んでいるな」
「はい」
「なぜ、おなごのくせに忍び装束などをつけている」
「小若は、おさないころから、父に忍びのわざをまなびました。おなごの小袖を着るよりも、小若には、このほうが似つかわしゅうございます」
「無用のいたずらじゃ」
と才蔵は、からだをおこした。左腕の手傷は軽かったらしく、屈伸が自在にきいた。
「早うあかるいうちに山を降りよ。怪我があってはつまらぬ」
「しかし、手負いの才蔵さまをすてて山をおりるわけには参りませぬ」
「おれが手負いなものか」
目をわざと見ひらき、
「やがてこの目も、みえるようになる。おれは、今夜も風魔をまつ」

「まあ」
「ひとり残らず斬ったうえで、獅子王院とやら申す風魔の大将とまみえるわ」
「おそれげもないことを」
「霧隠才蔵は、こうとなっては、骨となっても獅子王院をたおしてみせる。おそらく、この小屋にわしがいることは、風魔はよく知っていよう。わしは、日が落ちればここを出て佐助の待っている牧ケ谷の荒れ寺へゆく。獅子王院は、わしの足どりを見て、その荒れ寺へ襲うてくるであろう。それを討つ。わしがそう申していたことを、佐助に知らせておいてくれ」
「しらせるのは、甲賀者でも間にあいまする。わたくしは才蔵さまのおそばを離れませぬ」

日が暮れてから、才蔵と小若は、猟師小屋を出た。
山中の闇はふかい。
才蔵はつめたい夜気を吸いこみながら、
（すでに風魔が、出ている。……）
とみた。
樹のかげ、岩のあいだ、草むらのなかに、風魔の目がひかっている。
むろん見えるわけではない。
が、才蔵の皮膚が、たえず殺気を感じている。
才蔵は小若のしなやかな腰をだいてやりながら、左手で草をつかみ、尾根へのぼっていった。

「才蔵さま、お目はもうだいじょうぶでございますか」
小若はひくい声でたずねた。
「ほぼ、みえる。が、こう闇が濃うては、目も要るまい。しかし小若どの、すでに敵中にあるからには、そなたが怪我をしようと、死のうと、たすけはせぬ。よいか」
「小若も、甲賀望月家のむすめでございますゆえ、覚悟はしております」
「よい心根じゃ」
「もっと抱いてくださりませ」
「こうか」
才蔵は、わざと声を高くしたのは、その声のもとに風魔をひき寄せるためである。
やがて、尾根へ出た。
西の空に、多少の星がみえた。
「小若、さすがにこわいのじゃな」
ふるえている。
「こわい。……もそっと強う抱いてくださりませ」
そのくせ内実は、大胆な女なのだ。
この風魔の環視するなかで、小若は才蔵を濡れごとに誘いこもうとしているのである。
（さすがに、甲賀の女忍者じゃ）

驚嘆した。

大きな赤松のそばまで来た。

ついに小若は才蔵の胸にもたれかかってきて、

「小若は、ここで、才蔵さまに抱かれたままで死にたい」

「したたかなことをいう」

「早う、才蔵さま、抱いてくださりませ」

と小若は、体をつよく寄せてきた。才蔵はふと興をおぼえ、小若の袴のなかに手をいれてからだをさぐると、うそではなく、あかあかとそこは濡れている。

（なんという女であろう）

「そなた、まことにここでたわむれるつもりでいるのじゃな」

「はい。風魔どもに、小若が才蔵さまに抱かれているのをみせてやりとうございます」

才蔵の背後に風魔がひとり、忍びよっていた。

小若は、それに気づいていたからこそ、スキをみせて誘いよせるために痴態をしめしたのだろう。

「ね、うしろに……おりまする」

と才蔵の耳もとでささやいた。

「わかっておる」

風魔が、風のように才蔵のうしろを襲ったとき、才蔵の刀がきらめいて、血が赤松の根も

とへしぶいた。

「小若」

刀をおさめながら、

「なんでございましょう」

「そなたは、おそろしいおなごじゃな」

「忍びに、善いおなごはありませぬものを」

星あかりのなかで、白いのどをみせながら、この女忍者は声もなく笑っている。

さすがの風魔たちも、そこからあとはもはやおそれをなしたのか、才蔵がどう誘いをかけても仕掛けて来なくなった。

夜明けには、牧ケ谷の山寺についた。

「ここじゃな」

屋根のくずれ落ちた山門を見あげた。僧が住まなくなってから、もう二十年も経つような荒れぶりである。

本堂に佐助が待っていた。才蔵をみて、

「よく命があったな」

才蔵はそれには答えず、本堂をゆっくり見まわして、

「恰好の寺じゃ。ここに駿府城の忍者獅子王院をさそいこむとしよう。佐助、甲賀者はこの

付近に何人伏せてある」
「二十人。それでよいか」
「よい」と才蔵はうなずき、
「きくところでは、天正のむかし、近江のまがりノ辻の夜陣で伊賀衆と甲賀衆が相討ったというが、これはいよいよ、それ以来の大がかりな忍び合戦になるのう」
「手くばりは、才蔵が指図してくれ」
「それは佐助にまかせよう。風魔のむれは、おぬしの甲賀者にまかせ、わしはただ、いちずに獅子王院を斬る。……ただ」
「おう」
「風魔は火術がうまい。あの者どもの腕にかかればこの山寺などを一団の火にしてしまうことなどはたやすい。寺ごと燃やされてしもうては手も足も出ぬ。用心してもらいたい」
「それは、十分承知している」
佐助は、自信ありげだった。
才蔵は、休息をとるために横になった。やがて寝息をたてながら、かすかに、
「小若、小若」
と呼んだ。小若がそばへ寄ると、
「今夜か、明夜、ここが修羅場になる。いまから、いずれへなりとも逃げ落ちるがよい」
それからしばらくして、佐助が才蔵のそばへきた。

「才蔵、きこえるか」
「きこえる」
寝息だけはたてている。
「どうやら獅子王院がきたぞ」
「なに」
はねおきようとする才蔵へ、
「いや、たしかではない。実はこの峰の下を藁科川がながれている。そのむこう岸の羽辺という村から、一人の雲水が舟に乗って、こちらへ渡った」
「年のころは？」
「あいにく笠に顔がかくれていて、わからなんだ」
「それならばなぜその雲水が獅子王院とみたのか」
「じつは、わしはかねて甲賀者のひとりに、川岸で舟をうかべて漁をさせておいた。雲水は、岸辺へやってきて、その舟に、向う岸に渡してくれるようにたのんだ」
「ふむ？」
「甲賀者の漁師は、雲水をのせた」
「それで？」
「ところが、こちら岸に着いたときは、甲賀者の姿はなく、雲水ひとりが舟をおりた。その様子のすべてを、葦のなかにひそませてある別の甲賀者がみていた」

「船頭の甲賀者はどうしたのか」
「殺されたのだろう。それほどの男が、獅子王院でないはずはない」
「すると、その獅子王院らしい雲水は、川をわたってこの山の下の牧ケ谷村に入ったのじゃな。そのあとはどうしたのか」
と才蔵がきくと、佐助は、
「それがこまったわ。ふもとの村に入ってからの足どりがわからぬ。白昼、しかも甲賀者にあとをつけられながら、おのれの姿をくらますとは、よほどの達人じゃな」
「そうか。やはり、それほどの術者か」
才蔵はしばらく考えていたが、
「佐助、この寺には、わし一人が寝ころんでいることにする。おぬしは、このあたりの山にでもひそんでいてくれぬか」
「それでおぬしはどうするのじゃ」
「どうもせぬ。昼寝をしている。風魔のことゆえ、昼は出ぬ。夜になれば出る。日が暮れれば目をさまして客を迎える支度をしてもおそくはない」
才蔵は、ふたたびヒジまくらをつき、ごろりと寝ころんだ。
半刻(はんとき)ばかりねむると、吹きあげる夕風にのって、はるかなふもとの村から、犬の鳴く声がきこえてきた。

（はて）
才蔵は、目をあけた。
犬の声がただごとではない。
（おそらく、村に見知らぬ男が入った証拠であろう）
才蔵は、はね起きた。
（獅子王院かもしれぬ）
……山門を出た。
陽(ひ)はかたむきはじめている。しかし暮れるまでには、まだ十分に時間があろう。
（夜を待たずに、あかるいうちに見つけだして斬るほうが、たやすいかもしれぬ）
才蔵は、ふもとへの細い道をおりた。
途中、枯れ枝を背負った樵夫(きこり)ふうの老人に出あった。
背が、四尺ほどしかない男である。男は、ふもとから顔を伏せてのぼってきた。
ふたりは、ゆっくりとすれちがった。
そのとき、その男は、ききとれぬほどのひくい声で、
「才蔵どの、なんぞ、それがしに御用はございませぬか」
といった。
佐助の甲賀者のひとりであった。
「べつにないが、そちは獅子王院らしい男を見たか」

「雲水でござりまするな」
「ばかめ、いつまでも雲水の恰好でいるはずがない」
「見ませぬ」
「さきほどの犬の声は、あれは何か」
「あとでしらべましたるところ、鎮守のひがしの百姓家の庭にいた犬が黒血をはいて死んでおりました」
（何者かが吠えられて、毒を入れた餌を食わせたにちがいない）
「よい、行け」
……才蔵は、さらにおりた。
村の入り口が、鎮守の森になっている。
粗末な農家が一軒たっていた。
（この家の犬じゃな。となると、犬がほえた人間は、この百姓家に入ったか、それとも鎮守の森に入ったか、どちらかであろう。おそらく鎮守の森じゃな）
雑木の森である。
才蔵は、その落葉の散りしいた森の中の小道を、むぞうさに踏みはじめた。

忍びの術には、陰と陽があり、敵に対して身をあらわし、行動を露骨にみせるのが、陽忍といわれている。いまの才蔵の行動がそれだった。

獅子王院がひそんでいるかもしれないこの森のなかで、才蔵は、堂々と陽忍の姿勢で、鎮守の小さなやしろを見あげていた。
ふと、
背後に足音がした。
かさかさと落葉を鳴らしながら近づいてくる。
才蔵は、背中で、その音をきいていた。
音は、才蔵から二十歩の距離で、ぴたりととまった。
とまると同時に、足音のぬしが、ひくくさびた声で、
「伊賀の霧隠才蔵じゃな」
「いかにも」
「おぬしの名は、むかしからききおよんでいる」
「と申すおぬしは？」
才蔵はふりむかずにいった。祠の庇を見あげたままの姿勢である。
「わしか」
と、さびた声がいった。
「風魔には人並な名などはない。しかし人は、獅子王院とよんでいるようじゃな」
なおも、才蔵はふりむかない。いや、ふりむこうにもふりむけなかった。
ふりむけばその隙に相手が乗じてくるにきまっている。

「なんぞ、この霧隠才蔵に用があるのか」
「あるのは、おぬしのほうではないか。きけば、はるばる紀州高野山ふもとの九度山から、この駿河路へやってきたという。詮ずるところ、大坂の右大臣家にたのまれて大御所のお首級を頂戴しにまいったのであろう。申しておくが、駿府の城内にこの獅子王院があるかぎり、そうはさせぬぞ」
「では、どうするのじゃ」
「おぬしを殺すわさ」
獅子王院の声は、虫のように低い。
「才蔵よ」
と獅子王院はよびすてた。
「おたがいに忍者じゃ。話せばわかることが多い。どうであろう。せっかく紀州からここまで来たのは足労であったが、国へもどってはくれぬか」
「なぜかな」
「たがいに怪我はしとうない。そのはなしをするために、この村までわしはやってきた。聴きとどけてもらいたい。承知してくれれば、忍者の作法どおり相当の礼もする」
「聴かぬとあれば？」
「ころすわさ」
（あっ）

と、才蔵は、ぬれ縁にはねあがった。才蔵がもといたそばの樹の幹に、獅子王院が投げたらしい奇妙なかたちの手裏剣がぐさりとつきささっている。
「獅子王院」
と才蔵が呼んだ。が、つぎの瞬間、才蔵は、ぼう然とした。伊賀でうまれ三十余年をこの道で送ってきた才蔵の半生のなかで、もっともおどろいた風景がそこに待っていた。
そこに獅子王院がいなかったのである。

（ふ。風魔にしては味なことをする）
才蔵は、ぬれ縁のうえから、獅子王院の消えてしまった森の風景をみまわして、片頬でわらった。
しかし、術者として才蔵の負けであったことは、あらそえない。
……たしかに、あの男の足音もきいた。
……声もありありと耳にのこっている。
……が、姿をみていない、では、伊賀随一の術者といわれた才蔵が、獅子王院に木偶ノ坊にされたのと、おなじではないか。
（草の根をわけても、さがしてくれるぞ）
森のなかの樹を一本ずつ見てまわる才蔵の目が、ようやく血ばしりはじめている。
けやきの老樹のそばまできたとき、うしろで不意に鳥の声がきこえ、羽音をばたばたさせ

て、枝や葉をかすめてゆく音がした。

（ふん）

才蔵は、ふりかえりもしない。忍術の遁法のなかに、

……鳥遁

という法がある。

ふところの鳥を放って敵の注意をそっちに向け、逆方向に逃げる手である。

「獅子王院、その手はふるいわ」

才蔵は、にがい顔で、姿のない相手にいった。

「陽忍してみせよ（姿をあらわせ）。わしと術くらべをしてもはじまらぬ。素のままでたたかえ」

そのとき、ふと、才蔵は目のはしで、異様な気配をみた。

杉のこずえに、きょうの最後の陽が、あかあかと射しはじめたのである。異はそれではない。それにつれて、黒い隈ができた。

その隈が、つ、つ、とうごいたのである。

（あれに、いたか）

才蔵は、気づかぬふりで、わざとその杉の樹に背をむけて、他の方角を見あげた。

と同時に、杉のこずえの隈はほろほろとふくれあがり、やがて人の形になった。

（獅子王院、見たぞ）

才蔵はむろん見ないが、それを気配で知った。

（相手は逃げるつもりでいる）

わざと、そ知らぬふりをして別方角にあるきはじめた。

こずえの影は、あかるい夕陽をおそれるようにしてしばらくこ、ず、え、にとまっていたが、やがて、

ひょう

と天空に飛んだ。

同時に才蔵の手から十字手裏剣がはなれ、風をきって背後の天へとんだ。

（仕止め損じたか）

影は、地上に落ちなかった。

ただ、ざわざわと樹から樹へ音がすばやく移動しつつあった。

才蔵は、草の上をはねあがり、その音を追ったが、やがて無駄になった。

……日が暮れた。

いったん、山上の荒れ寺にもどった才蔵はひどく疲れていた。

本尊のまえの板敷のうえにごろりと横になった。そのとき、すいと小さな影が忍びよってきた。

「才蔵よ」

佐助の声である。
「首尾はどうであったか」
「討ちもらした」
「では、やはり」
と佐助はつばをのみ、
「下の村で獅子王院を見かけたのじゃな」
「それが、ついに姿を見なんだ。おれのひとり舞におわった。よほど手ごわい男じゃ。佐助、おれは負くるかもしれぬ」
「気のよわいことをいう」
佐助は、自分と才蔵を勇気づけるために、わざと明るい声をだし、
「たかが、風魔ではないか」
「しかし、さすがに駿府の大御所が身辺をまもらせるためにえらびぬいた忍者じゃ。容易な術者ではないように思える」
「ところで、その獅子王院は、どこにいる」
「やがて、ここへ来る」
「ここへ？」
佐助は、小さな驚きをみせた。
「いかにも。おれがこの本堂に入ったことを、もはや知っていよう。風魔は夜が強い。闇(やみ)が

濃くなれば、来る」
「よし」
佐助は、つよくうなずき、
「風魔は、火術がたくみゆえ、かならず火の変幻をもって襲うてくるとみる。火術に対するには、火術をもってせねばならぬ」
「佐助、どうするのじゃ」
こんどは才蔵がおどろく番だった。
「風魔が来れば、この本堂をはじめ、付近の山林を一時に焼こう。かれらの姿を明るみに出せば、討ちとるに容易じゃ」
「そうか。それはまかせる。佐助、すこし眠る」
才蔵は、しばらく、うとうととねむった。
目をさましたときは、すでに夜半をすぎていた。
（まだ来ぬな）
横になったまま、才蔵はうっそりと目をひらき、破れ落ちた蔀戸(しとみど)から暗い空をみた。
今夜も月がなかった。
まきちらしたようにおびただしい数の星が澄みとおった嵐気(らんき)のなかでまたたいている。
（秋じゃな）
この季節も半ばをすぎようとしている。

虫がないていた。

駿河の国は虫の種類が多いのかさまざまな鳴き声が、本堂のまわりの草むらからきこえてくる。

才蔵は、その虫の種類を一つ一つ選りわけて聴き入っていたとき、ふと、きき耳をたてた。

虫がいっぴき、本尊をのせた須弥壇のかげで鳴いているからである。

「ちちろ虫じゃな」

ちちろとは、こおろぎのことである。

才蔵は、次第に呼吸をほそめ、気配を絶ち、全身を耳にして、その虫の声をききはじめた。

ちちろは、高く低く、ときに吟ずるように長くなきつづけている。

虫のなき声は、さらに澄んでいる。

ちち、ちちち、ちち、

ただの虫の声だ、といえばそれまでだが、目をつぶって聴き入っている才蔵には、それが、人間の肺からもれている声におもわれてならない。

（須弥壇のかげで）

と才蔵は、目をあげた。

（獅子王院が鳴いている）

そうおもうと、本尊薬師如来の宝座の下の虫が、才蔵の脳裏でしだいに人間のすがたになり、身を伏せ、手足を折りまげて、才蔵の隙をうかがっている様子が、ありありとみえてくるのだ。

……この場所にいては、いつ襲われるかわからぬ。

そっと身をおこし、板敷のうえをすべって須弥壇のむこうをまわり、本尊の背後に出た。

……と、

虫の声は、やんだ。

あたりは、おそろしいばかりの闇である。

（きやつ、気づいたな）

とおもううち、ふたたび湧きあがるようにちちろは、陰気な声をあげて鳴きはじめた。

が、すでに声の場所は、ちがう。

才蔵は、その声を追って須弥壇をまわりはじめたが、なんと、才蔵がうごくたびに、虫の場所も動いてゆくのである。

（これはならぬ）

才蔵は、やっと気づいた。相手の策がよめた。虫の声に才蔵の心をひきつけておいて、自分のおもう場所にまでおびきよせようとするのであろう。

才蔵は、両耳を指でおさえた。

虫の声にとらわれていた才蔵の六感がよみがえって、頭に異様な気配を嗅ぐことができた。

天井をみた。
凝視した。
見つづけているうちに、格天井に蜘蛛のようにはりついている男の影が、ぼっと網膜に映ってきた。
（そこにいたか、獅子王院。……）
小柄をぬきとるや、するどく天井にうちあげた。
音がない。……ないのは、相手の肉に食い入った証拠である。
しかし、虫は、なおも鳴いている。
才蔵がもう一度小柄をぬいて身構えたとき影はさらさらと天井をつたって逃げはじめた。
才蔵は、追おうとした。その体のくずれを相手はみたのか、影は勢いよく天井を離れて殺到し、才蔵の頭上できらりと白刃が風を巻いた。
才蔵はあやうく身を沈めた。鍔元で受けたとき、火花が散った。鉄のこげるにおいが、鼻をついた。
そのとき、すでに相手はいなくなっている。
容易ならぬ忍者だった。

「獅子王院、出よ」
闇のなかで、才蔵は、刀を八相にかまえながら、うめくように叫んだ。たしかに獅子王院

は堂から逃げていない。なかにいる、とみて、才蔵はいらだった。
「出よ」
なんとそのいらだちを嘲笑するように、ふたたびちちろ虫が鳴きはじめたのである。
頭上で、鳴いた。かとおもうと背後で鳴き、ついには足もとまで近づいて鳴きはじめた。
闇の中で才蔵は、心意をかきみだされ、ついに、
（あっ）
とうめいた。
虫はついに耳のなかに入りこんでいた。虫は耳の中で鳴く。
ち……
才蔵の刀が真っ向から一颯し、さらに横へ一颯して、さっと跳びさがった。
むなしく刀は闇を斬るばかりだった。
「才蔵」
はっ、と場所を跳びうつった。
「おれだ、佐助よ」
「……」
その佐助の姿もみえない。
「どこにいる」
と佐助がよんだ。

「才蔵、声を出せ」
が、才蔵は、闇に身をしずめたまま、用心ぶかくだまっていた。
佐助の声には似ているが、どこかちがうのである。
こんどは、
「才蔵さま」
という、小若の声がした。
「小若でございます。どこにおいでになります」
それも、声がちがう。
獅子王院もまた、闇のどこに才蔵がいるのか、つかみにくくなっているのだ。さまざまに変幻を用いて、才蔵をまどわそうとしているのだろう。
そのとき、急に、あたりが、ぼっと明るくなった。
佐助の配下の甲賀者が、予定どおり、堂の外から火をはなったに相違ない。
（おお。……）
才蔵は、その炎のあかりのなかで、はじめて獅子王院の姿をみた。
横壁に、守宮のようにはりついている小さな男が、それにちがいなかった。
跳躍して、
「獅子王院……」
とさけぶなり、その影を両断した。

が、すでに影が消えていた。
才蔵の幻覚だったのである。
（負けた）
才蔵は、唇を噛み、ぼう然と堂のなかを見まわした。炎は、すでに天井裏にまわっているらしく、堂内が昼のように明るくなった。獅子王院らしい男は、どこにもいなかった。

才蔵は相変らずひまさえあれば寝ころんでいる。
「降るかな」
顔をねじまげて、空をみた。
ここは、駿府の旅籠である。
あけっぱなしにした障子のむこうに裏の寺院の楓の色づいた枝ぶりがみえた。そのむこうに、重い雲をかぶった秋の空がみえる。
「負けたよ」
才蔵は、さきほどから、そのことしかいわない。あまり何度もいうものだから、片すみでつくろいものをしていた小若が、くすりと笑った。

が、才蔵はにがりきったまま、
「負けたな」
とんとんと、指でたたみをたたき、
「よいざまよ。おれは、伊賀随一の忍者と人にもいわれ、自分でもついそのように思いこんできた。まったく嘘の皮さ。おれらが父祖のころは、伊賀随一といえば容易ならぬ術者だったはずだが、ちかごろは、伊賀者の品もさがり、おれごときが随一といわれている。あほうなはなしよ」
「才蔵。そうおのれをくそみそにのしるものではない」
佐助がいった。この男は、あいかわらず、才蔵の家来というふんそうをしている。
「わしの見るところ、おぬしの術が劣っていたわけでもあるまいよ。いかに獅子王院が万夫にすぐれた男にもせよ、たかが風魔あがりの忍びの術に、伊賀や甲賀の術が破れるとはおもわぬ」
「佐助、妙なことをいうのう」
才蔵は目をひからせ、
「おれの術がどうした、というのか」
「術はおぬしのほうがまさっていたというのじゃ」
「ではおれは、なにに負けたのか」
「おこるなよ。才蔵自身の増上慢に負けたのよ」

「なんと？」
「まあ、おこらずにきいてくれ」
佐助は、あいかわらずおだやかにわらいながら、
「おぬしは、獅子王院をあなどっていた。あれほどの忍者を相手に陽忍のまま戦おうとした。いわば、兵法だけで片づけようとした。負けるのが、当然ではないか」
「はて。……」
才蔵はしばらく考えていたが、
「佐助ほどの名人がいうことじゃ。そうかもしれぬ」
と虚心にいった。しかし、もう一度こつこつと畳をたたき、
「この獅子王院との勝負は、おれが大御所の首を掻きとるか、かきとらぬかで、きまる。いかにあの者が秘術をつくして邪魔だてしようと、かならずあの城に入ってみせようわ」
「ところが、才蔵。様子がかわった」
と佐助が急に小声でなにかいいかけたとき、宿の亭主が廊下をわたってくる足音がした。
やがて、障子の外から、
「お人あらためでございます」
といった。
宿場役人の臨検があるというのである。
佐助は、にがい顔をした。

才蔵は、ねころんだままである。

廊下に、役人があらわれた。

才蔵は起きあがり、佐助は、するすると廊下へはい出て板の上にすわった。才蔵の家来としてかれらの質問にこたえるためである。

「阿蘇大宮司家のご家来斎藤縫殿どのでござるな」

「左様でござります」

と佐助がこたえた。

べつに捕物ではなく、ふだんこの宿場ではときどき行なわれている検分らしいことに、佐助はほっとした。

役人ひとりに、下役がふたり付き従っている。

ところが、役人が廊下を去るとき、宿帳を持っている下役の五十四、五の背のひくい男が、無表情な流し目で、ふと才蔵のほうをみた。

男は、すぐ目をそらした。

（こいつ……）

才蔵の勘だが、ただの下役ではなさそうであった。廊下を踏む足に、音がない。

役人が去ってから、才蔵は、

「佐助、なにも気づかなんだか」

「気づいた。宿帳をもった男は、忍者とみたが、才蔵は？」

「おれもそうみた」

「とすれば……」

「あれは獅子王院じゃな」

ふたりでうなずきあった。

あくまでも直感である。が、証拠はない。ないだけに、むしろ見あてているかもしれなかった。

「才蔵」

と佐助はすり寄ってきた。

「すぐ、発とう、あれらは、われらを確かめにきたのじゃ。あと一刻もすれば、この宿は襲われるかもしれぬ。城下で捕物さわぎになっては、斬りぬけるのに難渋する」

「どこへ行く」

「大坂へ」

「駿府城に忍び入らずに、もどるというのか」

「いや、これはとくときいてもらいたい。じつは、先夜、九度山の殿から使いがきた」

使いの口上では、東西の手切れが、間近いという。

使いの口上によると、おそらくあとふた月もすれば、天下に戦乱がおこる、と幸村はみている。

「それほど、急か」

才蔵は、意外な気がした。駿府城の人の動きをみても、とくに戦さ支度でさわいでいるような様子もないのだ。

ただ、……

豊臣秀頼が、駿府の家康のすすめで再建した京の方広寺大仏殿の新鋳の鐘に、

国家安康
君臣豊楽
子孫殷昌

という銘文があり、家康はこれを徳川家に対するのろいであるとして激怒した。あわてて豊臣家では、駿府に対してさまざまな外交工作をしていることは、才蔵もきいている。

「大坂では、内々、合戦を決意したらしい」

と佐助はいった。

「才蔵、ところで九度山の殿は、大坂や京おもてが騒がしくなるゆえ、駿府の仕事が手間どるようならば早う引きあげよ、とおおせあるのじゃ」

「そうか。大坂へ帰れと真田の殿はおおせあるのか。しかし、わしは帰らぬぞ」

才蔵は、あおむけに寝ころがった。

「ほう、帰らずに、ここで何をする」

才蔵は無造作に、

「おれは獅子王院を討つわさ。こうなれば、意地でも討つ。もどるのはそれからよ」

云いだせば動かぬ男だ。それに、佐助とは、立場がちがうのである。

猿飛佐助は真田家の郎党だが、才蔵は、幸村に飼われているわけでもなく、傭われているわけでもない。

佐助は素直に、

「では、大坂で落ちあおう」

といった。

「心得た」

「なにかの役にたつゆえ、小若どのだけは残しておく」

「どちらでもよい」

「まあ」

と小若は、すみであきれたような表情をしてみせ、

「小若などは、どちらでもよいのでございますか」

「聞いておったか」

才蔵は、あくびを一つ洩らして立ちあがり、

「佐助よ、ここで別れる。晴海入道をさがして連れもどすことをわすれるなよ」
それから四日ののち、猿飛佐助は、紀州九度山の真田屋敷へもどった。
庭へまわると、幸村は、山賤のようなかっこうをして、庭の梅の枝の手入れに余念がなかった。
「殿、おんみずから左様なことをあそばさなくても」
「このところ、毎日している。理由は、佐助ならばわかろう」
「は」
幹にうなずきながら、あたりの庭木をしずかに見まわした。
根もとにこやしを入れたり、枝を払ったり、幹にわらをかぶせたりしている。冬を越す支度をしているのである。
「わかったか」
幸村が、関ケ原で西軍に加担したためにここに流されて以来、十五年になる。
幸村は庭木がすきで、手入れは人まかせにせず、自分でしてきた。どの木にも、それぞれ十五年の幸村の丹精の思い出がある。
穴山小助が、手伝いをしていたが、小助は感傷的な男だから、
（殿は、この樹々に別れを告げるために、冬を越す最後のお手入れをなされているのであろう）
とみていた。しかし佐助はさすがにそうは見ない。

（殿は、村人をたぶらかすために、冬を越す庭木の手入れをなされている。村人の目からみれば、冬を越す手入れをしている流人が、あすにも村を脱出するとは思うまい）
佐助の見方のほうが、あたっていた。
その夜、幸村は、佐助がもどってきたのを機会に真田屋敷に詰めている九人の物頭をあつめ、密議をこらした。
「みなの者」
と、幸村は静かな声で一座を見まわし、
「あす、わが真田家は当地を退散する」
むろん、一同は予期していたことで、たれもおどろく者はない。
ただ、あす、という早急さに、一同の表情にさっと緊張が走った。小助が、
「あ、あすでござりまするな」
「あすにきめた理由は、佐助がもどってきたためである。当地は、みなも承知のとおり、紀州浅野家の監視のなかにある。脱出は容易ではない。これには佐助のわざが要る。かねて、当人がもどってきた翌日に九度山を脱けようと考えていた。異存ある者は、申せ」
一同しばらくだまっていたが、こんども穴山小助が代表して平伏し、
「あるはずがござろうか。われらのいのち、一生は、すべてわが君のままでござりまする」

「よう申してくれた。大坂表に参り、天下の大軍を相手にとって、ふたたび戦場に六文銭の旗をかかげるつもりでいるが、さてこの戦さは勝敗の黒白もわからぬ。黒白もわからぬ戦さに、そのほうどもを連れてゆくことは、あわれでならぬ気もする」

「なにをおおせられる」

覚十蔵がひざをにじらせて、

「豊臣、徳川と申せば、日本の武門の二つの棟梁でございます。その一方に組して日本一の大戦さの舞台にのぼりますことは、おのこと生まれた面目このうえもござらぬ」

「勝敗などは、末の末」

と晴海入道の弟伊三入道がいった。

「心底、あいわかった」

幸村は、海野六郎に命じて酒肴の支度をさせ、

「一同、心祝いの酒宴である。すごせ」

と、自分でも、たちどころに数杯をかさねた。

幸村は、平素あまり酒をたしなまなかったから、酔いがほろほろとまわりはじめたが、心はかえって冴えはじめている。

幸村は、二年前にこの流謫の地で亡くなった父昌幸のことを思いだしていた。

幸村の父安房守昌幸は、信玄、謙信におとらぬ軍略の天才だった。

慶長五年、石田三成が家康討滅の兵をあげたとき、昌幸は、信州上田城に拠って秀忠の大軍をひきつけ、絶妙の戦術を展開して、ついに秀忠の大部隊を関ケ原に到着せしめなかったほどの男である。

慶長十六年六月、この九度山で六十五歳を一期に死んだが、その病床にあるとき、

「わしが死んで三年のちに家康は豊臣征討の軍をおこすであろう。死ぬのは無念でならぬ。わしが生きてあれば、かならず豊臣家が勝つ秘策が一つある」

といった。

幸村の父昌幸は、九度山に隠棲してから、頭をまるめ、一翁閑雪と号していた。

ついでながら、この人物の画像が、いま真田旧伯爵家にのこっている。

からだのわりには頭がずぬけて大きく、表情のどこかに沈痛なかげがある。平服ながら右手に、軍陣を指揮する采配をもっている所は、智将真田昌幸の生涯を象徴しているかのようだ。

切れながの目は、ふつうの英雄のように天をにらまず、地にむかって、しずかにまぶたを伏せている。武将というより思想家といったほうがいい。

その昌幸が死の床で、

「徳川をほろぼす秘策われにあり」

とつぶやいたとき、幸村がはっとしたのは無理はなかった。

「そのこと、うけたまわりたく存じます」

昌幸は口をつぐんだ。やがて、
「よしないことを申した。この秘策は、わしで無うては役にたたぬ」
「ぜひともに」
幸村がせがんだために、昌幸はやむなく語った。
その策は、いざ東西開戦のときに、兵三千をひきいて鈴鹿峠を越え伊勢の桑名へ出て城を奪取することからはじまる。
桑名城で東軍をふせぎ、さんざんに手こずらせば、東軍のうちで太閤恩顧の諸大名が動揺し、大坂へ馳せ参ずる者が一、二にはとどまるまい。
そのうち桑名を捨て、鈴鹿の天嶮に拠ってふせぎ戦って時をかせぐ。この段階で四、五の大名は大坂になびく、と昌幸は計算している。
最後の陣地は、瀬田である。
瀬田ノ唐橋を焼きおとして京側の岸に陣をかまえ、鉄砲による線を展開する。
「むかし、楠木正成が千早城にたてこもって天下の兵を誘発したのとおなじ兵略じゃ。こうするうちに、西軍の諸大名は、ぞくぞく大坂城に入城し、右大臣家の兵力はぼう大なものとなろう。しかし」
と幸村を見、
「そちでは、できぬ」
つまり、昌幸の戦術は家康自身が怖れている。また諸大名も、

「昌幸の采配ならば、戦さは勝つ」
とみて、大坂方になびくはずだ。ところが、幸村の実力はほとんど知られていないから、はたして天下の諸侯が動くかどうか。
「そちは、戦さにかけては、おそらくわしを越すほどの名人であろう。しかし、惜しいかな、わしほどに高名ではない。世間というものは、虚名で動くものじゃ。この秘策は、そちにはできぬ」
それから三年、幸村は幸村なりに、秘策を練った。
（要は、ばくちじゃ）
このばくちには、天下を賭けている。歴史をかけているといってもいい。
いざ東西の手切れになれば、軍師をもたぬ豊臣家は、摂津にちかい紀州九度山に閑居する真田幸村を至宝としてまねくのは当然だろう。
とみるのはたれしものことだから、相手の家康が九度山の警戒を怠るはずがない。
紀州の太守浅野家に対しては、何度も駿府からその旨を念達しているし、高野の宗門にも監視の責任を負わせている。
むろん直接の監視にあたるのは、在郷の庄屋たちと、その支配下の百姓である。
浅野家では、九度山村の年寄や、橋本、東家、橘谷の庄屋に対して、
「伝心月叟（幸村の法名）がもし九度山を立ちのく様子がみえれば、取支えて即刻申し立てる

ように」
と厳達してあった。
その夜、佐助が、
「このぶんでは、容易に出られそうにありませぬな」
と案じたのは、このことだ。
幸村ひとりが脱出するのは容易だが、この屋敷には真田家の一族のほかに郎党が二十数人いる。そのほか、屋敷うちにおさめられている武器、金銀、什器いっさいを運び出すとなれば、人目につかずにはいられない。
「どうなされまする」
と佐助がたずねると、幸村は微笑したままだまっている。佐助は、ひょいと首をかしげて、
「たしか、ご出立はあすの夜と申されましたな。あすといえば、長篠で討死なされた御二方様（信綱、昌輝）の御法会をなさるのではございませぬか」
「いかにも」
と幸村はうなずいた。
「御出立の日と御法会とが、相重なっておりまするな」
「佐助、そちは、わざと愚かをよそおう所がある。すでにわしの策を見ぬいていよう」
「なかなかもって」
佐助は泳ぐような手つきで両手をふり、

「やつがれづれに、ご秘中がわかろうはずがありませぬ」
この男が、忍者として霧隠才蔵よりもすぐれているといわれる点は、ここにある。一見愚人のようにみせて、決して才気をあらわさない。
幸村は苦笑して、
「あすの法会には、すでに、近郷の庄屋、年寄、力ある百姓二百人を招いてある。法会の支度として、台所には、所せましと酒樽を積みあげてもある。まだわからぬか」
「いっこうに」
と佐助は首をかしげたが、すでに幸村の一切の策を見ぬききっている顔だ。
「よいか。百姓どもの酒間の接待は、総がかりでする。飲ませて酔いつぶしてしまうのじゃ。そちは手の者数人を使うて、荷を馬に積んでしまえ」
「馬？」
佐助はひょうきんにあわててみせて、
「馬はいずれにおりまする？」
流人の屋敷に馬などはない。
「ばかめ。在郷の主だった者が来るのじゃ。百姓とはいえ、馬でくる。六、七頭はあろう」
「あ」
額をたたき、
「左様でござりましたな」

「どこまで痴けをきめこむつもりか」
「おそれ入りまする」
佐助は幸村の部屋を退出し、ひそかに荷造りの支度をはじめた。

真田屋敷の法会は、昼すぎからおこなわれた。
僧たちの読経がすむと、屋敷じゅうのふすまを取りはずして酒席をつくり、ほどもなく酒盛りとなった。
幸村は、わざわざ百姓たちの下座にすわり、
「おのおのには、平素なにかと厄介になっている。きょうはそのお礼の気持も兼ね、酒肴をととのえました。ぞんぶんに過ごされよ」
と、みずから酒器をとって注ぎまわったから、庄屋、年寄たちはひどくよろこび、
「殿さまのお酌でおささ（酒）を頂戴するとは、末代までの語り草でございます。これはずんと酔いがまわるようじゃ」
元服したばかりの幸村の長子大助幸綱も、如才なく注いでまわり、酒をのめぬ伊三入道は、
「舞なと仕ろう」
と、故郷の信濃の田楽を舞った。
「これは郷の者も負けてはいられぬ」
と庄屋のなかから、今様を歌う者が出たり、幸若舞のまねごとをする者などが出て、酒席

は、主客入りみだれてのにぎやかなものとなった。
「夜具の用意もある。酔うてお腰のたたぬお方は、当屋敷におとまりくだされ」
と穴山小助がいったころから、酒席はいっそうにみだれ、日の落ちるころには、そこここに泥酔して身動きも出来ぬ者も出た。
幸村はころはよしとみて、小助に、
「打ち立て」
「かしこまって候」
と小助は、酒間を周旋している同僚にそれとなく目で合図した。
幸村一行が、橋本へ通ずる九度山の坂道をくだっていたのは、それから四半刻も経っていなかった。
幸い、月があった。
目の下の闇ににぶく光っているのは、紀ノ川である。
一隊は、百姓から奪った馬に小荷駄をおわせ、内室と婦女子は駕籠にのせて進み、その前後を郎党がとりまき、銃をもつ者は火縄をつけ、槍をもつ者は鞘をはずして進んだ。
幸村と大助幸綱とは、馬上である。
橋本、東家、橘谷をへて紀ノ見峠を越えたころ、幸村は佐助をよび、
「大坂へ走り、大野修理どのがもとへ無事脱出のよしを告げよ」
佐助は、闇の峠道に消えた。

ところが、その翌日、幸村はどこで装束をかえたのか、山伏の風体で、ただひとり、大坂城内にある大野修理の屋敷にあらわれた、というはなしが伝わっている。

このはなしのほうがおもしろい。

幸村は取次ぎの侍にいんぎんにあいさつしたというのである。

「これは大峰の山伏でござる。御主人に見参し、御祈禱の巻数をさしあげとうござる。この旨お取次ぎをおたのみ申す」

「ただいま殿は御登城中である。おっつけご帰館に相成ろう。あれにてしばらく待たれるがよい」

と横柄に番所を指さした。

山伏姿の真田幸村が、

「それにて待て」

と指さされたのは、にわか造りの粗末な番所だった。なかに入ると若侍が十数人詰めていた。

ちょうど退屈しのぎにたがいの刀のめきき（鑑定）に興じていたが、幸村をみて、

「ご坊の大小、なかなかいかめしそうじゃ。ひとつわれらに見せてたもれ」

「山伏の刀などは犬おどしのためのもの」

と幸村は苦笑し、

「お見せするようなものではござらぬ」

「たって」

と望まれてやむなく腰間の刀をはずした。

若侍が手にとり、スラリと抜くと、一同、あっと声をのんだ。やいばの匂い、かねの冴え、尋常のものではない。

ついで脇差も抜いてみると、これまたみごとなものだったから、

「中子を見てもよろしゅうござるか」

言葉まで鄭重になっていた。目釘をとりのけ、中をあらためると大刀は貞宗、小刀は信国と銘が刻まれている。貞宗、信国といえばよほどの大名でなければ持てない名器だから、一同、山伏の顔と刀を見くらべてぼう然としているうちに、主人の大野修理治長が下城してきて、幸村を見ておどろき、草履をとるばかりの態度で、

「ご尊来かたじけのうござりまする。いざいざお通りくだされ」

あとで番所の若侍たちはその山伏が真田左衛門佐幸村と知って驚いたという。幸村は大坂入城後、大野家の例の若侍たちの顔をみるたびに、

「刀のめききはあがったかな」

とからかって恐縮させた。

この逸話は「武辺叢話」や「武辺咄聞書」に出ているが、事実としてもおそらく入城のさいのはなしではなかろう。

想像するところ、幸村は、入城するまでに、この逸話にあるような変装をして、何度か大坂城をたずね、大野修理と会っていたとおもわれる。このはなしは、そういうさいの一挿話だったにちがいない。

ありようは、……

九度山をひそかに脱け出た幸村の一隊は、豊臣家の所領である河内に入ったときには朝をむかえ、白昼堂々と大坂に入ったのである。

その幸村の部隊を、豊臣家の家老大野修理はみずから平野口まで迎えに出、幸村とその一党のために旅陣までの手くばりは洩れなく用意されているという気のくばりようだった。

時をうつさず旅陣に秀頼の使いとして速水甲斐守守久が参向し、ねぎらいの言葉をつたえたうえ、当座の手あてとして、黄金二百枚、白銀三十貫目が下賜された。

とにかく、

「真田左衛門佐入城」

の報は、大坂の城内をわきたたせたばかりか、天下に速報されて大きな衝動をあたえた。

霧隠才蔵がそのうわさをきいたのは、駿府城外の茶店であった。

ここは駿府の梅屋敷である。

右のほうに城がみえる茶店の奥で、才蔵はひとり酒をのんでいた。

「これ、おんな」

と才蔵はよんだ。

茶店の軒さきに大きな木臼がおかれてあり、若い女が餅をついていたが、杵をもつ手をやめて、

「餅がほしいのか、それとも酒か」

この宿場の茶店は、どの店でも、一日じゅう餅をつき、つきたての餅を客にたべさせている。駿府は、かつて府中といい、そのむかしは「阿倍ノ市」といった。いまも市中を流れている川を、安倍川という。

この宿の名物の餅は、その名をとって「安倍川餅」とよばれていた。

「酒がほしい」

と才蔵は答えた。

「餅も食え」

女は、もう何度目かの皿を運んできた。

「ああ食おう。それへ置いておけ」

才蔵は、餅をさかなに酒をのんでいる。

そのとき、どやどやと遠乗りの帰りらしい若侍が四、五人入ってきて、

「女、餅をくりゃれ」

と注文し、あとは声だかな雑談をはじめた。

「世の中が面白くなってきたぞ。紀州九度山の真田左衛門佐が、大坂城に入ったらしい」

才蔵は、きき耳をたてた。
「いよいよ、戦さじゃな」
一人が相槌をうち、
「このぶんでは、これは日本はじまってこのかたの大仕掛けの戦さになりそうじゃ」
「聞くところでは、陣触れ（動員命令）は、明早暁に出るらしい」
才蔵は、茶店を出た。
（陣触れは、あすか）
耳よりなはなしである。さっそく、佐助が置き残しておいてくれた甲賀者に告げて、大坂城へしらせてやろうと思った。
才蔵は佐助とわかれて以来、駿府城下のさまざまな場所に野宿している。
数日前から、安倍川のほとりの辻堂に寝ていた。
獅子王院を倒し、あわよくば家康を殺して天下の形勢を変えてやろうと考えているのである。
べつに利欲があってのことではない。自分の手でひそかに歴史を変えることほど忍者にとって快事はないのだ。
陽が落ちてから、六部（巡礼）姿の男が足音もなく辻堂にちかづいてきた。
「そこにいるのは、草か」
才蔵は、ぬれ縁から声をかけた。

「左様」
草という名の甲賀者である。
「耳よりなことがある」
陣触れのことを話してやると、草は、
「当方にも耳よりな報らせがござる。獅子王院は、今夜、下城しておりまするぞ」
「いずれにおる」
「伏見屋と申す茶商の邸内にあの男の休息所がござりまする。そこに、かねておなごを置いておるようでござりまする」
「おなごをな？」
「左様」
甲賀者は、にっと卑しげな笑いをうかべた。
駿府の茶商伏見屋といえば、街道屈指の富商である。
もとは、家康の郷国である三河の土呂村から出た商人で、徳川家とは縁がふかく、茶の御用だけでなく、駿府城のためにさまざまな裏面の用をつとめているらしい。
「伏見屋といえば、山城宇治の茶商上林家と同族ではないか」
と才蔵がきくと、甲賀者はうなずき、
「ようご存じでござる。宇治の上林休庵どのの甥御が伏見屋の当主勘左衛門というお方でご

ざる」

宇治の上林家というのは、山城きっての豪富をほこっている茶商である。

ただの茶商ではなく、家康から朱印状と禄四百九十石をもらっている半商半士で、

休庵

暁庵

とつづいたこの二代の当主が名高い。休庵は、家康がまだ秀吉の大名であったころから忠勤をはげみ、その住居の宇治が京大坂に近いうえに諸大名の屋敷に茶を納入するところから、中央の情勢が手にとるようにわかる位置にあった。

諜報の名人とされた家康は、当然、上林家を京大坂における諜報機関として使ってきた。

石田三成が大坂で挙兵した前後、上林暁庵はしきりと家康に通信を送っていたが、いよいよ石田方が徳川方の伏見城を攻めたとき、商人ながらも武装して落城とともに死んでいる。

宇治上林、駿府伏見屋は、そういう特殊な家であった。

甲賀者も、

「伏見屋は、ただの商家ではござらぬ」

といった。

「旅まわりの手代が二十人もいて、その半分は、じつは徳川家の伊賀者、甲賀者、もしくは風魔でござる。それがしと同村で育った甲賀者もおりまするし、霧隠どの存じよりの伊賀者もおりましょう。みな屋敷のうちの長屋にひそかにすんでいる」

「獅子王院も、そのうちのひとりじゃな」

「左様」

才蔵は、その夜、子ノ刻（午前零時）をすぎたころに、伏見屋の屋根のうえにいた。

星が、天に満ちている。

才蔵は、刀を背負い、ひさしぶりに隙間もなく忍び装束に身をかためていた。

風が、つめたい。

才蔵は、もう半刻ばかりも、この屋根の上で伏せている。

屋敷うちの気配を知るためだ。

犬がいる。

宿直がいるか。

忍び長屋は、どこにあるか。

（人はざっと百人。……）

この広い屋敷内の数多い棟々の下に息づいている、と才蔵はみた。ながい修練がうんだ勘にくるいはない。

才蔵は、母屋の廊下を歩いていた。

足音がない。

このときの才蔵をたとえ廊下で見かけた者があったとしても、雲の影が通りすぎたほどの

気配も、感じなかったにちがいない。

やがて雨戸が音もなくはずれ、才蔵の影が、ふたたび庭へ吐き出された。

足もとの植え込みのかげに、犬が一頭死んでいる。才蔵は伊賀者の定法として、忍びこむ前に、あらかじめ塀の外から犬の餌をほうりこんでおいた。むろん、毒が入っている。犬はそれを食べたのだろう。

才蔵は、棟から棟へと、物蔭をつたいあるいた。

邸内の棟割長屋は、三棟ある。

（いったい、どの棟か）

ふと、一棟の長屋のはしの家に、黒い影がちかづいてゆくのがみえた。

（はて）

その影が雨戸を六つたたくと、繰る音がきこえて、隙間から男が顔を出したのである。

（おお、獅子王院）

大胆にも手燭をもって立っているのが、駿府の旅籠でみた獅子王院そのものだった。

戸をたたいた影は、どうやら手下らしい。なにかの報告をしにきたのだろう。

やがて用がすんだらしく、手下がひきさがった。

手下が去ってから四半刻ばかり才蔵はじっと闇にしずんでいたが、つつと雨戸にちかづくや、さきほど手下がしたように、ゆっくり六つたたいた。

予想どおり雨戸が細目にひらいた。

「あ」

相手が声をあげかけたとき、早くも才蔵の体は家の中に入って後ろ手で雨戸を締め、左腕で相手のくびをしめていた。

と、相手の手から、手燭が落ちた。板敷の上で小さく燃えはじめた。

そのあかりに照らされた部屋は、一間だけの粗末なものだった。夜具がいっぱいに敷かれている。

才蔵がおどろいたことには、その夜具の上に、褐色の粗衣をまとった小さな男が、あぐらをかいてすわっていたことだった。

「霧隠才蔵、とうとうきたか」

才蔵は左腕でかかえていたのが女であることに気づかされた。女はどうやら失神したらしく、才蔵の手から離れて、ずるずると足もとへ崩れた。

「獅子王院、これはそちの妻女か」

「当家の下女よ」

好色な男らしい。察するところ、伏見屋の下婢と通じていて、下城するたびに、この長屋で密会していたのだ。

「はじめて対面する」

と才蔵はいった。

「さきごろは、駿府の旅籠で宿役人の下役に化けているうぬをちらりと見たが、こうしてし

みじみと正体を見るのははじめてじゃ」

才蔵は男を見た。

男は、ニッと笑った。

小肥りで、小さな目がまるい。手足がみじかく、けものが人に化けたような奇態な感じのする四十男だった。

唇が薄い。その刻薄そうな唇が動いて、

「才蔵、死ぬためにきたのじゃな」

「来たさ」

と、才蔵は微笑しつつも、目だけは、獅子王院の髪の毛のそよぎまでも見おとすまいと、見つめつづけている。

（この男が、稀代の忍者なのか）

風魔は、もとは異人種だという。なるほど多少顔つきにそれらしいものは感じられるのだが、しかしふとんの上にあぐらを掻いているこの獅子王院の小さな姿からは、稀代の術者という異様さは想像できない。ただの百姓の作男に似ていた。

「才蔵、気の毒であるが、うぬがこの部屋に入ったことは、長屋じゅうに知れている。もはや、雨戸の外、裏口、厠の入り口までを取りかためているはずじゃ。千に一つも生きては、出られまいぞ」

「もしも……」

と才蔵は、刀の峰で足もとの女の背を、ひたひたと軽く打ち、

「人をよべば、この女を殺すだけよ」

「おお、殺すがよかろう」

獅子王院は、冷然といった。才蔵はおどろいて、

「うぬが情けをかけたおなごではないか」

「わが身には代えられぬ」

「なるほど」

相手は、風魔なのだ。伊賀者などとは、もともと心の成りたちがちがうのかもしれない。

（まだ、じゃな）

才蔵は、時を待っている。飛びこんで獅子王院を斬るのは、いまが時ではなかった。いま斬りこめば、獅子王院ほどの術者なら、それだけの用意があろう。こちらが斬られるか、仕損じるかが、オチであろう。

もともと忍者の刀法というものは、兵法者の刀法とはちがい、天象、人象、地象と織りこんでつかうものだ。樹でもよい。物蔭、ひかり、動物、水、火など森羅万象のさまざまな動きの瞬間をとらえて、忍者の刀術というものは働く。

いま才蔵が使おうとしているのは、足もとに落ちてチロチロと燃えくすぶっている手燭の火だった。

この火だけが、この部屋の明りになっている。
それが、燃えつきようとしていた。やがて闇になる。
その明暗の転換を利用して獅子王院は行動をおこすだろう。この男は逃げる。……その瞬間が、獅子王院の構えがくずれるときだ、と才蔵はみていた。
才蔵は、待った。火はやがて小豆ほどに細り、ふっ、と尽きた。
闇になった。
と同時に才蔵はふみこみ、闇の中で白刃が旋回した。血しぶきが飛び、音を立てて首が落ちた。落ちた、とみた。が、どうしたことだろう。
遠くで、獅子王院のあざ笑う声がきこえたのである。

（なんと。……）
才蔵は、刎ねた首を、すばやく足でさわってみた。
髪がながい。女の首である。
（これは。……）
と才蔵は、ほぞを噛む思いだった。獅子王院は、あの手燭の火が消えると同時に、鬼神のようなすばやさで失神した女を闇のなかでほうりあげ、それをおのれの身がわりにして才蔵に斬らせたにちがいない。その隙に消えている。
（むざんな）

獅子王院のおんなのために傷んだ。化生のごとく人の心がないといわれている伊賀の忍者でも、これほどの無残なことはできない。
（風魔とは、鬼か）
怒りをおぼえるよりも、つめたい恐怖が、背すじを襲ってきた。
……そのとき、突如、闇が動いた。
雨戸が、ふわりとはずれた。
声もなく、気合もなかった。無言で斬りこんできた男の体を、才蔵の剛刀がまっこうから断ち割った。血が飛んだ。闇のあちこちが濡れはじめた。
（長屋に住むという忍者じゃな）
才蔵は、右足をあげ、畳のふちを力まかせに踏んだ。ばん、と音をたてて畳が跳ねあがり、床がのぞいた。
さらにつぎつぎに畳を踏みおして、またたくまに六枚の畳をあげた。それをすみにかさね、その上に才蔵はのぼったのである。そっと、伏せた。
伊賀流忍術ではこの法を、畳城という。
一室を敵にかこまれたとき、即座にその部屋を城塞に化してしまうには、この法しかなかった。
畳の城の真下には、床板があり、その下に堀をうがったように床下がある。室内の城塞といっていい。

床下から這いのぼってくる敵に対しては、頭上から襲うことができ、雨戸から立ちむかってくる敵には、手裏剣が利く。さらに飛び道具に対しては、畳の山のむこう側にかくれれば、かっこうの防弾壁になるのだ。

一人、二人と、闇を動かして敵が襲ってきたが、そのつど、才蔵の巧妙な働きのためにむくろになった。

四人目がきたとき、才蔵はふと気づいた。刀をおさめ、物蔭に身をひそめ、

（これは、風魔のたぐいではなく、伊賀・甲賀の者ではないか）

とすれば、徳川家につかわれているとはいえ、もとは同郷の者である。

斬るのはあわれであった。第一、相手も、この忍び屋敷に侵入した大坂方の曲者が、伊賀の霧隠才蔵とは知っていまい。

才蔵は、小声で、闇の中の敵にむかってささやいてみた。

「おれは、きりがくれ、じゃ。獅子王院のみを討ちとりにきた。無用の怪我をするな」

才蔵が名乗ると、闇の中の人影が、

「これは」

とおどろいたらしい。その男の声をきいて才蔵は、

「小平次ではないか」

「才蔵どのか。いかにもわしは、伊賀上柘植の小平次じゃ。いまは駿府城でやとわれている。

才蔵どのは、大坂方か」

才蔵はしばらくだまっていたが、やがて、

「まあな」

「この長屋の半ばは伊賀者で、あとは甲賀者と風魔がいる」

と小平次は教えた。

「いま才蔵どのに斬られたのは獅子王院の下忍の風魔どもじゃ。伊賀者のよしみゆえ、才蔵どのをお逃がし申そう」

「なあに」

闇の中で微笑をもらした。

「逃がさずともよい。獅子王院は、いずれにいる」

「おそらく書院の庭を通って逃げたのではおじゃるまいか。あの風魔は、いつもその庭の塀からこの屋敷に出入りしているらしい」

「ありがたい。他の伊賀者にも、それとなくわしが伊賀の霧隠じゃと告げてくれ。たがいに無用の殺生はすまい」

おなじ伊賀者なのである。敵味方にわかれていても、それぐらいの便宜ははからうのが通例になっていた。

むかし、越後の上杉謙信に使われていた伊賀者たちは、甲斐の武田信玄方の伊賀者と、つねに山中で会ってたがいの情報の交換をしあっていたといわれる。

むろん、重要な秘密はもらさないが、洩らしてさしつかえない程度の情報は交換し、ときにそのままの情報を自陣にもちかえってお茶をにごすこともあったらしい。

「されば、お望みのごとくに」

と小平次は闇に消えた。

才蔵は、雨戸を出た。

影のように走って、書院の庭に出た。禅院をまねた当世はやりの枯山水の庭がひろがっている。

庭は、海景をかたちどっていた。

白砂が、海になっている。

石があり、七つあった。島のつもりであろう。

才蔵は、白砂の海のふちまできて、ふとたじろいだ。

踏めない。

ふめば、音がするだろう。月もある。月が、白砂の海のうえに才蔵の影を彫りこんでしまう。

やむなく、書院の回廊の下にかくれて、庭の様子をうかがった。ほどもなく、

（おお）

声をあげたいほどの光景が現出した。

白砂のうえに浮かんでいる石の一つが、にわかに動いたのである。

影は、獅子王院に相違なかった。

（気づかれたか）

幸い、その様子はない。

（屋敷を脱け出るつもりじゃな）

影は塀を越えようとしていた。

そのとき、不意に背後で気配がして、

「才蔵どの、さきほどの小平次でござる」

とにじりよってきた。

「あれは」

小平次は声をひそめて、遠い影を指さし、

「獅子王院でござる。あの者は、いつもあの塀をこえ、もう一つ塀を越えてそとへ出るのが癖じゃ。そうと見た以上、才蔵どのは、そとの路上にまわって、お待ち伏せなされ」

「別の道があるのか」

「こちらへおじゃれ」

小平次が案内して書院の裏側へ出、その塀を指さした。

「この塀を越えれば、持仏堂がござる。その堂の裏塀を越えれば、川がある」

「川が」

「いかにも。その川は、駿府城のお堀に通じている。獅子王院は、この屋敷から城内にもどるときは、いつもこの川から舟でゆく。河原の葦のあいだに、獅子王院の小舟があるはずでござる。さ、早う行かれよ」

「世話になった」

才蔵は、小平次の肩に手をのせた。

「堅固でな」

手をはなしたときは、才蔵の影は、塀を飛び越えてしまっていた。小平次の肩を足場にあっというまに跳ねあがったのである。

……やがて、川へ出た。

小平次が教えてくれたとおり、葦のかげに小舟がつながれていた。

待つほどもなく、葦の葉のむれを渡る風の様子が変わり、

（来たな）

影は、葦を分けてやってくる。

才蔵は、呼吸をとめた。気配をころし、闇の中に心神を融かし切ろうとした。

影は気づかない。

さらに近づいた。

（来たか）

才蔵の刀が、抜き打ちに葦の下茎のむれを一挙になぎ切った。

その葦の中に獅子王院の両足があった。骨を断つ音がきこえ、

「ぎゃっ」

と影は横転した、かとみえたが一瞬、トンと逆倒ちになった。才蔵がハッと刀をとりなおしたときは、両手を脚にすばやく逃げかけていた。

みごとな芸だった。

両足が、くるぶしから斬られている。血のにおいがただよった。しかしこの男の両手は、足よりも早かったのだ。

才蔵は、河原を追った。

影は逃げてゆく。まるで奇妙な生きものにみえた。海のひとでが、足をたてて走るに似ていた。

ひとでは舟にたどりつくと、体を舟の上に投げかけ、舟もろともに川の流れにむかって押し入った。

（しまった）

才蔵は刀をくわえ、川に飛び入ろうとしたとき、

「才蔵、逃がしてくれ」

流れの上から、獅子王院の声がきこえた。

「負けた。どうやら、血が流れすぎている。おれは死ぬだろう。ぶざまなむくろを人に見せとうない」

やがて、舟は闇に消えた。

才蔵は、追うことをやめた。獅子王院は、おそらく海に出るつもりだろう。むくろをそこに沈めるつもりに相違ない、とみたのである。

東軍西上

その後数日、霧隠才蔵は、駿府城下の鎮守の社、辻堂、荒れ寺を転々としながらなおこの城下にとどまっていた。

城下は、兵馬で騒然としている。

もう家康の陣触れが出てから、三日にもなるのである。

つぎつぎと駿・遠・参三国をはじめ近国の大小名の部隊が城下に入りつつあった。

駿府城の家士たちは、それらの兵馬を収容するために宿割にいそがしい。すでに城下の本陣、旅籠、富農の屋敷だけでは足りず、城外の部落の小百姓の家にまで兵が満ちていた。

才蔵は、昨夜は慈悲ノ尾山の荒れ寺にとまった。山のふもとまで出て、松のかげから眼下の街道にわきあがる兵塵とおびただしい炊煙の群れをながめ、思わず苦笑した。

「これはもはや、白昼の街道へは出られまいぞ」

才蔵のそばに、佐助が残しておいてくれた例の六部がついている。

「城下のうわさをあつめますると、大御所御出立は、あすの未明じゃそうな」

この甲賀者がききこんだところでは、東軍の行動は二軍にわかれている。

第一軍は、家康みずからがひきい、海道の大名の兵をつぎつぎに加えながら、京都へのぼる。

第二軍の総大将は、江戸の将軍秀忠で、関東、奥州の諸大名の江戸到着を待ってから西上し、第一軍と京都で合流する。

そのほか、中国、四国、九州のいわゆる西国大名は、それぞれ部隊をひきいて京都にいたり、家康・秀忠の麾下に入る、というのだ。

「かくて」

と甲賀者はさすがに昂奮し、いったん唾をのみこんで、

「日本中の大兵が京の市中、郊外にあつまりますのは、十一月の半ばをすぎたころでございましょうか」

「その旨、すでに大坂へ報らせてあるのか」

「ぬかりはござりませぬ」

「なるほど」

さすがに幸村だ、と才蔵はおもった。

佐助が大坂へ帰ったとはいえ、東海道に配置された真田の諜報網は、いささかも活動をゆるめてはいないのである。

東軍の動き、人数は、つねに大坂へ通信され、幸村は居ながらにして敵の動静を知ることができるばかりか、ときにその情報のなかから、家康の顔色まで読みとることができるのだ。敵を知らねば、軍略はたてられない。

「稀世の軍師じゃな」

「左様にござりまする」

この人足にもひとしい甲賀者でさえ、幸村に対して男惚れするような打ちこみかたでいるらしい。

「おそらく」

と甲賀者は話しかけた。

「この戦さが、天下の戦さの仕おさめになりましょう。勝敗はいずれであれ、われらはあの御大将のもとで働きまする冥加が、うれしゅうてなりませぬ。……ところで」

「なにかな」

「霧隠どのは、これからどうなされまする」

「あくまでも家康を討つさ。おれも真田殿に負けてはいられない」

「それは放胆な」

甲賀者はあきれたように、才蔵の顔をまじまじとながめた。

徳川家康が駿府を発したのは、慶長十九年十月十一日である。

このときの服装は、まるで富商の隠居が紅葉狩にでもでかけるような軽装だった。手にむち一本をもっているだけで、甲冑もつけていなかった。

手まわりの兵も五百余人にすぎない。この七十三歳の老将の顔には、かつて関ケ原でしめしたような緊張は露ほどもなかった。家康にはすでに戦わぬ前から大坂を呑む自信があったのだろうか。

午前十時に駿府を発した家康が野陣第一夜をおくるべき駿府田中についたのは、午後四時である。

田中は駿府からわずか五里。

ゆうゆうたる行軍速度といっていい。

この村は、東海道藤枝ノ宿から十丁ばかりそれた片田舎（のちに西益津村とあらため、いまは藤枝市のなかにある）で、名のとおり、田園の中の百戸ばかりの村落である。

ただ、その村の夕もやのなかにしずかに横たわっている古色蒼然たる城があった。田中城という。

当夜、家康の宿陣は、この城である。

この城は東西七百八十間、南北二百八十間というささやかな田舎城だが、戦国の血風のなかに生きのこってきた城といっていい。はじめ今川氏の属城として長谷川正長という者がもっていた。今川氏がほろんだあとは甲斐の武田氏の所属になり、武田滅亡後は徳川氏の手に帰した。いまは、家康の隠居城である駿府城の番城に使われている。

家康が到着すると、すでに京都所司代板倉伊賀守勝重の使者的場余右衛門が来着していた。

西国探題ともいうべき板倉伊賀守は、京大坂の情報責任者として毎日のように使者を送っているのだ。

本多上野介正純からそのことをきくと家康は、すぐにこれへ通せ、といった。しかし正純が平伏して、

「御道中、おつかれでございましょう。それがしが、まず聞いておきまする」

正純は、幼少のころから家康につかえ、日夜側近に侍してきた謀臣である。駿府出発以来この軍旅では、家康の副官兼参謀長といった任にある。

「弥八郎」

と家康は正純を通称でよんだ。脇息をかかえてひざをくずし、小姓に腰をもませているすがたは、ひどく老いこんでいる。しかし目だけはいきいきと、

「年寄りあつかいにするものではない」

機嫌はわるくなかった。

「待て。わしはそちよりも二十三年も長く戦さのめしを食ってきている。弓矢のなかで、生きてきた男だ。戦さのことを聞いて、からだが疲れはせぬ。通せ」

使者がもたらした情報は、家康のこれからの作戦方針にとって重大な問題をふくんでいた。

「大坂方は、糧食弾薬を城に運び、工匠数百人を入れて外郭に城壁をきずき、あらたにやぐらを構えておりまするが、どうやら軍議は籠城に決したようでござりまする」

大坂の作戦方針は要塞戦に決した、との板倉伊賀守の通報をきいて、

「城攻めか」

家康は、にがい顔をした。

かれほどの実戦経歴のながい武将は世界史にもない。半世紀以上を戦いのなかですごしてきた男だが、ふしぎと野外の会戦が得意なくせに、城攻めはにが手だった。

この点だけは、軍人として上杉謙信型に属している。武田信玄は、野戦・攻城ふたつとも天才であり、豊臣秀吉はどちらかといえば城攻めのほうで古今独往の才器だった。

その城攻めの名人である秀吉が、まもる側に立って設計し、金に糸目をつけずに構築したのが、大坂城である。要塞としての精巧さ、規模の大きさは、日本はおろか、大明、呂宋、南蛮にもこれほどの金城鉄壁はないだろう。

（こまった。……）

家康は、若いころから、悲しみだけは深く蔵する男だ。しかしこまったとき、うれしいときだけは、まるで少年のように露骨に表情に出すくせがあった。これは、かれの美点といえた。家康にこの愛嬌があったために、家康の部下たちはかれを愛しぬいてついに天下取りにまで仕上げたのである。

使者が引きさがってから、本多正純がそば近くまで進み出て、

「いかに大坂城が金城湯池とは申せ、なかにこもっている者は、食いつめ牢人がほとんどで

ござりまするぞ」
「弥八郎、そちはわかい」
家康は、つねに野放図な楽観主義ではない。
「天下の兵を動かして大坂城に攻めかかるとしても、それは、素手の拳で、ささえの殻を割ろうとするに似ているぞ」
「なるほど、ささえを」
「割ろうとすれば、手が痛むだけじゃ。つよく打てば、肉がやぶれ、骨がくだける」
「それならば、ささえをじかに打たず、調略をもって肉を外へ引きだせばよいではありませぬか」
「それしかない」
家康が、大坂城の外堀をうずめる調略を思案しはじめたのは、このときからである。
その夜、家康は侍医に灸をすえさせたあと、午後八時ごろにねむった。
寝所の隣室には襖一枚をへだてて十人の宿直の者が、それぞれ刀をひきつけ、無言のままで端座している。
深夜子ノ刻すぎになって、陣中目付の城和泉守昌茂が城内を巡視し、宿直ノ間の襖をひらいたとき、あっと声をのんだ。
十人が十人とも、首をたれて居ねむりをしていたのである。
「おい」

和泉守がひとりずつのひざをたたいて起こしたあと、
「忍びの者が潜入しているのではないか」
伊賀甲賀の者が城入りをするとき、幻戯を用いるというはなしを和泉守はきいたことがあったからだ。
居眠りしていたところを陣中目付に見つけられて、宿直の者は一様に青くなった。
目付城和泉守昌茂は、部屋のすみずみ、天井の隙間までをしさいにながめ、
「不審がある」
「と申しますと」
「曲者が入ったかもしれぬ」
一同、ひざを立てると、和泉守はいらだって手で制し、
「さわぐな。かえって乗ぜられる」
自分の手の者をよび、榊原伊豆守にこの旨を告げるように命じた。
「城中の固めをきびしゅうするように」
「承りました」
たちまち、廊下に人の足音の往きき繁くなった。
このとき、霧隠才蔵は、天井裏の梁のうえにうずくまって、下の様子をうかがっていた。
内心、舌をうつ思いだった。

（退散するか）

かれは、家康がこの城に到着するよりも前に、京都所司代板倉伊賀守の急使一行が城内に入った機をとらえ、まぎれこんで潜伏していたのである。

天井板の隙間から、下の光がわずかに洩れている。

やがて、声がのぼってきた。和泉守である。

「大御所は、御寝なるや」

（起きている）

才蔵は、そう教えてやりたくなった。

家康は、すでに騒ぎを察し、さきほどから夜具のうえにあぐらを掻き、佩刀をそばにひきよせている。

家康という男は、さすがになみなみな老人ではない、と才蔵はおもった。

馬上、天下をとった男である。軍略と調略の才だけの男ではない。

一見、その風ぼうから鈍重さを想像させるが、わかいときから刀術に興味をもち、すでに三河在城時代から、有馬流の流祖有馬大膳時貞に手ほどきされて奥義をうけ、さらに譜代の奥平貞能の家来奥平休賀斎（別称、奥平急賀斎）が諸国を遍歴してついに神影流をひらいたときくとさっそく招致して天正の初年には皆伝免許をうけている。

たんに殿様芸ではなかった証拠に、芸に対する見識も高かった。

あるとき、上泉伊勢守に推挙されてやってきた疋田流の流祖疋田文五郎景兼の刀技をみて、

「なるほど、古今の名人である。しかし、しょせんは士卒の刀術で、大将の刀術を教える者ではない」

としりぞけ、新陰流から出た柳生又右衛門を自分の子弟の指南役にえらんだといわれている。

家康は佩刀を抱いてしずかにあたりの気配をうかがっていたが、やがて刀をぐゎらりと畳の上へ捨て、

「たれかある」

「和泉守参上」

次室で城昌茂が平伏した。

「軍中、礼はいらぬ。ふすまを開けい」

ひらくと、家康が、すでにひじをついて横臥していた。

「天井裏に、忍びの気配がする。人数を入れてあらためよ。あるいは、もはや屋根へ吹きぬけたかもしれぬゆえ、屋根の上下をかためるがよい」

……家康のみたとおり、才蔵はすでに屋根へ抜け出ていた。

城というものは、軍勢をもって外から攻めるぶんには堅くできているが、いったん城内に忍び入ってしまえば、影をかくす場所にこまらない。

才蔵は、鉤を軒にかけ、細引きを垂らして蜘蛛のように地上へおりた。

おりた所に、足軽らしい男が立っている。
不幸にも背後の才蔵の影に気づかない。
いきなりくびを締め、気をうしなわせて具足を剝ぎ、忍び装束のうえに着けて、足軽のもっていた槍と松明を手にした。
才蔵は、ゆうゆうと歩きはじめた。
要するに、本丸から離れることだ。
二ノ丸は、西にある。そのいずれかの建物に潜伏して、家康の出立さえ待てば、あとは警備がゆるむにきまっている。城外への脱出は容易だろうとみていた。
二ノ丸への石段をおりはじめたとき、大篝火をかこんで、門をかためている一群があった。
「何者か」
才蔵は、とまらない。
数人の者が、手に手に松明をかかげて近づいてきた。
「槍組高木勝之助様の手の者にて、権蔵十内と申しまする」
「いずれへ参る」
「かように」
と火の消えかけた松明を見せ、
「松がしめりましたゆえ、あの篝のなかから火勢のよき薪を一本頂戴つかまつりとうて参りました」

一同、なっとくしたらしい。
才蔵は、大篝火のそばへ近づき、無造作に自分の手にしていた松明を投げ入れ、薪を一本とりあげた。
そのときである。
本丸のほうから馬蹄の音がひびいてきて、たちまち、目の前の石段のうえに騎馬武者の影が一騎あらわれ、
「三ノ門の衆」
とよばわった。
「曲者が忍び入っておる。かがりをふやし、固めに油断あるな」
武者が駈け去ったあと、一同は期せずして火あかりに照らしだされた才蔵の顔を見つめた。
「この男、見おぼえがない」
「左様か」
才蔵は、落ち着いていた。
「そち、たしかに高木どのの手の者か」
頭形の兜をかぶった物頭（将校）らしい男が、才蔵につめ寄り、同時に目顔で命じて足軽の一人を走らせた。槍組の物頭高木勝之助の詰所へたしかめにやらせたのだろう。
「もし、高木どのの手の者ならば、きのう触れだされた御軍法を存じているであろう。いう

てみい」

家康の軍が駿府城を発するとき、全軍に布告された軍令が十一カ条ある。

足軽小者の末にまで報らされたことだから知らぬとはいえない。

「一ツには、喧嘩口論かたく停止のこと」

忍び入るにあたって、合言葉、軍令を知らずに敵陣に入る忍者はいない。才蔵はむろんそれをしらべて知っていた。

「おお、よう申した。二ツには」

「覚えませぬ」

「ならば、三ツ目を申せ」

「仔細なくして他の備えに相交わる者これあらば、武具馬ともに之を取りあぐべし。と」

「よう申したわ」

そのことには不審はなかったが、なおも物頭は目をはなさない。

才蔵は、この三ノ門を越えて西ノ丸に入らねば、身をかくす場所がない、とみていた。

通りぬけねばならないし、その自信もあった。

自信を裏づける仕掛は、さきほど目の前の大篝火の中に投じた古たいまつにあった。

たいまつは、火中で燃えはじめていた。才蔵は、それを見つめている。

「おお」

物頭が、にわかに大声をあげた。

「この者、異装じゃ。肌に鎖を着込んでおる」

そのとき、急報をうけた当の高木勝之助の手の者と思われる足軽が十人ばかり、才蔵を検分するために石段をどっと駈けおりてきた。

「さわぐな」

才蔵は、あざわらいながら、すばやく具足をぬぎすて、忍び装束になった。

「わしは、大坂の真田左衛門佐幸村どのの手にて霧隠才蔵という者じゃ。夜中ながら、大御所にあいさつすることがあって参上した。ただいまからおとなしゅう下城するゆえ、門をあけよ」

「曲者」

槍ぶすまが才蔵をかこんだとき、大篝火が轟然と火をふいてくだけた。

「あっ」

才蔵の仕掛けた火術である。

白煙があたりに満ち、才蔵の姿がみえなくなった。煙のなかを具足の群れが駈けまわった。

そのとき星空から声がふってきた、という。

「また、来るさ」

たしかに、そうきこえた。あとでその声をきいたという者が二、三人あった。

「いや、不敵にも今様を唄うていたわ」

という者もあった。

「まさか」

「伊賀者のくせに傾いた（伊達な）ことをする男じゃ」

真田幸村、霧隠才蔵という名が、変幻自在の能力をもつ名として徳川の全軍につたわったのは、この駿府田中城の夜からであったらしい。

その後、西進する家康の本陣は、

十二日　掛川
十三日　中泉
十四日　浜松
十五日　吉田（いまの豊橋）
十六日　岡崎
十七日　名古屋

という旅程で、海道を押し進んだ。

宿陣の名古屋城に入ったときから天候がくずれ、夜に入って豪雨になった。このため、十八日も家康は城内に滞留している。

すでに浜松城に到着したとき、家康は京の所司代板倉伊賀守から、大坂入城の客将名簿をうけとっていた。

筆頭に、真田左衛門佐幸村とかかれていた。

ついで、土佐の旧国主長曾我部盛親をはじめ、後藤又兵衛基次、仙石豊前守宗也、毛利豊前守勝永、増田兵大夫盛次、平塚左馬助、大谷大学吉胤、堀内若狭守氏弘、同大和守氏満、同主水氏久、同主膳氏時、氏家内膳正行広、明石掃部全登、浅井周防守長房、淡輪重政。

といった顔ぶれであった。いずれも関ケ原以前までは一国一城の大名か、もしくは大藩で一城をあずかっていた名士ばかりである。

「痩せ牢人をかりあつめて大将にしたところで、なんのことがござりましょう」

本多正純がその名簿をみながらいった。しかし家康は相づちをうたなかった。

「ゆだんはならぬ。このなかで、幸村、又兵衛ほどの器量の者は、わが譜代のなかでも数多くない。これらが働いた上に、大坂の堅城と右大臣家の金銀がある。戦さが長びけば、いまは関東に服従しているかにみえる毛利、福島、加藤、島津らの西国大名が、不意に旗を西風にかかげるかもしれぬ。ゆるみは禁物であるぞ」

その十七日の名古屋城の内外の警戒というのは、異常といえるほどのものであった。

夜に入っての豪雨である。露天で篝火が焚けなかった。

そのために軒下で焚き、城の各層ごとの屋根の下でたき、どの建物も灯の数を増して、城外からながめると、城全体があかあかとかがやいて、文字どおり、不夜城の観があった。

忍びに警戒している。

田中城で才蔵がいい捨てた、

「また来る」

のことばが、全軍の神経を過敏にしていたのである。

（これでは、忍び入るすきもない）

才蔵は、醍醐三宝院の山伏の風体をして、暗い名古屋の町並をあるいていた。

雨は、ようしゃなく降りつづけている。

全身ぬれねずみになりながら、才蔵は、佐助がいい残してくれた名古屋の甲賀者の隠れ家をめざして、歩いていた。

名古屋の七ツ寺というあたりに、干物をあきなう小さな家がある。

商う、といっても、店をかまえているわけではなく、売り歩きの行商なのである。

あるじの名を、左平次といった。

六十をすぎた老人で、この七ツ寺の長屋にひとり住いをしている。本人は、

「むかし西国のさる小名につかえ、足軽奉公をして何度も戦場に出た」

といっているが、むろん、つくり話である。

左平次老人は、行商の先ざきで、諸国のめずらしいはなしをしたり、若いころの色ばなしを面白く語ってきかせたりするので、城下の名古屋から宿場の宮（熱田）にかけて、

「噺ノ左平次」

といえば、町家の者はおろか、武家屋敷の奉公人のあいだでも、知らぬ者はない。

その左平次老人が、じつは甲賀忍者なのである。

忍者というものは、せいぜい四十までの仕事で、年をとれば伊賀や甲賀の上忍の屋敷で老後を飼い殺しの余生を送るしかないが、老忍でなければできない仕事もあった。

京、大坂、江戸、東海道の宿場などに常住し、他の商いをしながら、その土地でえた情報を自分の系列の上忍へ送るのである。

左平次老人がそうだった。かれは、猿飛佐助を通じて、真田幸村から内々の扶持をうけていた。

（ここか）

醍醐三宝院の山伏の姿をした才蔵が、その左平次の軒先に立ったのは、十七日の陽が暮れて小半刻もたったころであった。

才蔵は戸をたたいた。

なかから老人らしい咳がきこえて、

「どなたじゃ」

「これは醍醐三宝院の修験者で赤根坊と申す者でござる」

内部がしんとした。才蔵が、その名を使って訪ねてくることは、すでに連絡がついているのである。

「なにをしに参られたかな」

近所への手前、わざと大声で左平次はいった。才蔵も心得たもので、

「去年名古屋に参ったときに頼まれし祈禱のお札を持参した。早うあけてくだされ。まるで

滝行をしたように濡れそぼれてしもうたわ」

ぐわらりとあいた。

才蔵が暗い土間に入ると、左平次は老いた腰をかがめて、手燭をつき出し、才蔵の顔をつらつらとながめた。

「よいつらがまえじゃ。伊賀の霧隠才蔵と申す仁は、話にはきいていたが、見るのはいまがはじめてじゃ。……拙者」

あらためて武家ことばをつかい、

「左平次でござる」

が、すぐ笑いじわを寄せて顔をくずし、

「よいおなごがおまちかねでおじゃるぞ。もう十日ほどのあいだ、才蔵どのはまだか、まだか、とうるさいことでおじゃった」

「ほう、たれであろう」

「会えば、わかるわさ」

左平次の家は、家というより、小屋といったほうがふさわしい。

床はあってもすべて板敷で、畳がない。暑い夜にはむしろを敷いてねるが、寒くなると土間に寝藁を積みかさねてねる。そのほうが、かえってあたたかいのである。

間仕切りをする襖もない。ふるびた屏風が一枚あるだけで、上は天井板もなく、雨露は、

板ぶきの屋根一枚でふせいでいた。

べつにそれは左平次の家だけのことではなかった。農村からはみ出てきたこのころの町の下級庶人は、おもにこの左平次のような家に住んでいた。

「左平次どの」

才蔵は雨にぬれた山伏装束をぬぎすてて下帯ひとつになり、

「乾いた布を貸して呉りゃれ」

「おう、これはうかつじゃった」

体をふきおわると、左平次が奥からいそいそと練り絹の白小袖をとりだしてきた。

「これを着なされ」

どうみても、この家にはふさわしくない。みると、葵の模様が入っているのだ。

「盗んだな」

忍びの術は、一名偸盗術というほどである。下忍のなかには盗癖のある者が多く、武家奉公人が戦場での首数をほこるように、かれらは盗品によってみずからの技術を誇るところがあった。

「葵じゃな」

「いかにも」

うれしそうに笑った。名古屋城に忍びこんで、徳川家の門葉のうちのたれかの納戸を掻きさがしたにちがいない。

「ときどき、城内に入るのか」
「退屈なときは、それをつかまつる」
「その年でまだ城入りができるとは、みごとな腕じゃ。明夜でも、わしと忍び入って、家康の首を掻いてみぬか」
「め」
左平次はあわてた。
「めっそうもござらぬ。盗みはできても大将の首を掻くなどは思いもよらぬ。ことに、今夜も明夜も、城は大そうな固めじゃ。才蔵どのも左様なあぶないことはなされまするな。万一のことがあれば、泣くひとがおわすぞ」
「泣くひと」
ふりかえると、小若がまるい微笑をふくんで立っていた。
（このおんなか。まずい）
という顔を才蔵はみせず、
「いつから、参ってござったか」
「十日も前から待ちかねておりました」
「もはや佐助らとともに大坂へ引きあげたものと存じておった」
できるだけ他人行儀なことばづかいでいったのは、親しみをみせれば、小若がどこまでつけ入ってくるかわからないとおもったからである。

「名古屋でお待ち申しあげていたのは、佐助どのの指しがねでございます。このさき、京までの街道は、関東の警固がきびしく、なかなか男のひとり旅をゆるしませぬ。小若とみょうとで旅をすれば、だいじございますまい」
才蔵は物憂い顔になった。

夜がふけた。
そとは、まだ雨である。
小若がまめまめしく働いて、土間に陽のにおいのするよく乾いた藁を積みかさね、才蔵のために寝床をつくってやった。
「おやすみなされませ」
「左平次老人は、いずれへ参った」
「今夜は、もどりませぬ」
小若は、微笑している。才蔵は、計られたか、としぶい顔をしてみせた。
「なぜ左様なお顔をなされまする」
「べつに、異な顔をしたおぼえはない」
「このあたりに真言寺がございます。その寺に大師講というつどいがあって、左平次は、そのおこもり（参籠）に出かけたのでございます。近所の信者があつまり、終夜、み法のおはなしや、世間ばなしなどを語りまする」

「講で世間ばなしをきくのも左平次の仕事のひとつじゃな」
「でございますから、小若が計ってあの年寄りを外へ出したのではありませぬ」
そういうあいだも、小若は、髪を布でくるんでひたいで結び、くるくると小袖をぬいで寝衣装に着かえてしまっていた。
「そなたは、どこで臥せるのじゃ」
「つれなきことを」
小若は、きゅっと身をよじると、才蔵の横へからだをさし入れてきた。
「あの、な」
才蔵の胸に顔を伏せ、なにがおかしいのかくっくっ忍び笑っている。
「あの、な」
おなじことばを繰りかえし、
「おきらい？」
才蔵は、だまっている。
「このような小若を、才蔵様はきっとおきらいなのでございましょう。小若は、きらわれても才蔵様をはなさぬのじゃ。ご観念あそばしませ」
寝床の藁のなかが、あたたかくなっている。才蔵のからだに、小若のあついももがからみついてきた。才蔵は、じっとしている。
「ね」

「小若」
「なんでございましょう」
小若は、睦言を期待していた。が、闇の中の才蔵はひどく思案ぶかい声で、
「左平次は、もともとはそちの生家甲賀望月家の下忍であったのじゃな」
「まあ、左平次のことなど、いまごろ」
「あの者に、死んでもらえぬか。わしは左平次を連れ、あの者の案内で名古屋城に忍び入り、いかようなことがあっても、家康に見参したい。佐助や真田の殿に約束したとおり、合戦の前に大将の首を頂戴する」
「左平次、家康公などと、かようなときにお口にのぼすべき名ではありませぬ。小若を抱いてくださりませ」
「男には、執念がある」
「おなごにもございまするものを」
「おなごにもあるのか」
才蔵はおどろいている。小若は唇をかみ、
「小若の執念は、才蔵様の御執念などとはくらべものになりませぬ」
小若が、才蔵の胸にもたれたまま、ねむり入ってしまった。抱擁のあと軽いつかれをおぼえたのだろう、手を触れてやるとかすかに唇をあけ、寝息をたてている。

（可愛いおなごじゃ）

ふと、青子、お国、隠岐殿のことをおもった。洛北の八瀬の風呂で隠岐殿の肌のふしぎなかおりをかいだことから青子を知り、これがきっかけになって関東と大坂の裏面工作のなかに身を入れてゆく始末になってしまった。

（よく考えてみれば）

女に動かされている。ひとりひとりの女が、才蔵の体をつぎつぎに運んで行っては、あたらしい局面へ投じてきた。この横にねている小若が、自分にどのような局面をあたえるのか、才蔵は考えるとおかしくなる。

どの女も、いきいきと自分のいのちいっぱいに生きている明るさがあったが、しかしお国だけはちがっていた。深い場所で、いつも自分の運命の暗さに泣いているような所があった。いま、どこにいるのか。

最後に別れたのは江州草津ノ宿であった。

しかし、隠岐殿の侍女でありながら、じつは関東の諜者であったことがわかった以上、大坂城にはもはやもどれまい。かといって、女ひとりで関東のたれをたよって生きてゆくのか。

「才蔵様」

いつのまにか、闇の中で小若が目をひらいている。

「申しあげてみましょう。いま、よいお方のことを思いだしておられましたな」

甲賀の上忍の娘だけに、まるで胸のうちを見すかすような勘がはたらく。

「小若、板屋根の音をきくがよい」

才蔵は、物憂くいった。

「音？」

小若は、おどろいた。

「音がどうなったのでございます」

「雨が小降りになっている」

「小降りになればどうなされます」

「こまる」

事実、才蔵は当惑していた。

「あすもこの雨が降りつづいてくれねば、家康をねらう機会をうしなう。降りつづけば家康はもう一日、城内に滞留する」

「関東のご軍勢が京へつくまでに、まだ何日も宿陣を重ねねばならぬではありませぬか。名古屋にはかぎりませぬ」

「いや、名古屋がよい。何度も城内に忍び入った左平次が働いてくれるかぎり」

夜が白むころに、左平次が大師講からもどってきた。

「姫」

とかつて望月家の下忍だった左平次は、小若をそうよんでいる。

「きりがくれ殿に、告げてやりなされ。大御所は、今夜も名古屋どまりじゃと」
「左平次、ゆうべは大師講に行ったのではありませぬのか」
「いや、すこしのぞいて参りましたわい」
「どこを？」
「名古屋城」
左平次は平然と笑っている。

名古屋城は、家康が北国、西国の諸大名に命じて慶長十五年に起工し、同十九年にほぼ完成した。この時期、木口が初々しく、屋根瓦が銀色にかがやいて、まだ風景に融け入らぬほどに建物が新しい。
城の天守閣をかざる黄金の鯱だけでも小判に換算して一万七千九百七十両をついやしたというほどの巨城で、昼間みれば、白壁、黄金が海道の天にかがやき、凝然として徳川の新政権の威容を目のあたりうかがわせるものだ。
翌夜のことである。
この夜も雨がふりつづいている。
才蔵と左平次は、蓑をかぶって、城の背後にひろがっている左内村の田の畦を歩いていた。
この方面からの忍び入りが最も容易と思われたのである。
しかし、暗い天を背景に、大天守、小天守が各層に篝火を吐いて燃え、石垣の上のどの櫓

の軒下にも数珠のように火が押しならんでいるのをみると、さすがの才蔵も内心たじろぐおもいだった。
城郭だけではない。
外塀のあちこちにも、急造の番所、詰所が建ちならび、犬一ぴきも入れそうになかった。
「はて、のう」
才蔵は、雨のなかでたちどまって、城をみた。
「左平次、これはとても忍びこめまい。そちは、ゆうべ、たしかに忍びこんだのか」
「いや、ここまできて、城の様子をさぐったまでござる。おりよく番所の侍同士の話し声をきき、大御所はあすも御滞留じゃ、ということを知りました」
「それだけのことだったのか」
そうであろう、と才蔵はむしろ安堵した。この厳戒のなかを突破して城内に入る忍者がいるとすれば、それは魔性にちがいない。
「しかし、才蔵どの。外堀を越えて向うの石垣のなかにさえ入れば、城内は左平次が案内つかまつる」
（やってみるか）
才蔵は、自分をふるいたたせた。それには相当の荒事を覚悟せねばならない。
外堀の搦手門に近づいたころ、見まわりの武士が一騎、足軽五人を従えて近づいてきた。
「左平次、あれをことごとく殺せるか」

「殺せまする。騎乗の侍のほうは、才蔵どのにおまかせいたしましょう」
足軽は、二人だけ、遅れて歩いている。
左平次は蓑の中から短い忍び刀をとりだし、きらりと抜いた。
刃を鼻に近づけて毒の匂いをかぎ、十分に塗布されていることをたしかめると、闇に消えた。
この殺法を伊賀流では「蜂」といい、甲賀流では「虻」という。暗夜ひそかに相手の背後にしのび寄り、襟首をねらって、さっと毛ほどの傷をおわせるのだ。
当然、相手は軽い痛みを覚えるが、虫にさされたかと思って、騒がずに二、三十歩はある く。そのうちに声もなく倒れて事切れるのである。
（おお）
才蔵は、耳をすました。
（やったな）
人がふたり、雨中に倒れる音がした。巧緻な忍者になると、倒れる音をきらい、とびかかりざまに抱きとって、そっと地上に寝かせる。左平次のわざでは、そこまでにはいたらないのだろう。
（左平次め、ようやりおるわ）
才蔵は、樹のかげで体を伏せながら、老忍左平次が演ずる、

「虻」の殺戮法に見とれるおもいだった。それは舞に似ていた。
左平次は、まるでいっぴきの虻に化したように、ふわふわと体を中空に浮かせるようにして足軽の背後に近づく。
一颯。
左平次の剣がきらめく。
斬られた足軽はそれでも気づかず、雨中を歩いてゆく。やがて毒がまわり、声もなくたおれる、のである。……四人。
四人目が倒れたとき、五人目の足軽が、やっと同僚の変事に気づき、ぎゃっ、と声をあげかけたときが最期だった。
樹の下からおどり出た才蔵が、鉄笠もろともに首をはねあげた。同時に才蔵の手が馬上の物頭の足をつかんでいる。
「な、なにをする」
物頭が槍をとりなおそうとしたとき、すくいあげられて暗い泥のなかに落馬した。
（ふびんではあるが）
やがて泥のなかから起きあがった才蔵の影は、桃形の兜をかぶり、鉄胴の具足をつけていた。
「左平次、馬」

「かしこまって候」

すかさず馬をひいてきた。左平次も、足軽具足を身につけている。

「松明をつけよ」

左平次は燃え残りの松明を拾った。

「駈ける」

左平次は、口輪をとった。才蔵は槍をかかえ、搦手門めざして、まっすぐに駈けだした。

（あの門までゆけば、あとは何とかなる）

前方にかがり火がみえる。

搦手門である。

搦手門の警備は、門の軒下と、搦手橋の橋づめの番所との二隊にわかれて人数が配置されていた。

橋づめにさしかかるなり、才蔵は、

「これは、滝川豊前守様家来なにがしでござる」

なにがし、という名は発音不明瞭によばわった。滝川豊前守は陣中目付のひとりである。

その家来が城外を巡回しているのは不審なことではない。

「曲者である」

さらに声を大きくし、

「あれなる松の木のそばの路上で、騎乗ひとり、卒五人が討ちとられておる」

そのまま、馬を駆って闇に消えた。

と思ったときは、すでに番所の武士たちは才蔵の仕掛けた詐術にかかっていた。

馬だけが、馬蹄をとどろかせてあらぬ闇の方角に消えてしまっていた、にすぎない。

才蔵は、とっくに地上におりていた。ばかりか、敵の注意が別の方角にむいた隙に、堀の石垣に身をかくし、重い具足を解きはじめていた。

左平次もおなじである。

才蔵と左平次老人は、橋板の裏にはりついて「逆四ツ這い」になった。忍者は、壁を走り、天井をさかさまに歩くことに習熟している。天井を逆四ツ這いで歩くことを、吊り歩きという。

「左平次、吊り歩きができるか」

このばあい、吊り歩きとは、逆四ツ這いのまま、橋板の隙間をつかんで歩くことだ。手と足の指に超人的な握力がなければできない芸である。

「年寄じゃとて、なぶるものではござりませぬ」

「できるか」

「できませいでか」

ふたりは、そのまま橋の裏を歩いて、門のそばまで行った。

橋板一枚をへだてて、上には城兵が立っており、下には才蔵と左平次がいる、というぐあ

いである。

才蔵は忍び声で、

「左平次、煙玉を用意せよ」

「承知」

「上へあがるぞ。あとは、かねての打ちあわせのとおりじゃ」

ふたりは、橋の上へはいあがり、欄干のかげにうずくまった。

門のそばに、足軽が三人、槍をもって立っている。

篝火が一つ、勢いよく燃えているが、あかりはここまでとどかない。

才蔵は、左平次の袖をひいた。煙玉を篝火へ投げよ、と命じたのだ。

「承知」

という意味で左平次はうなずくと、ひょいと、投げた。四つまで吸いこまれるように篝火のなかへ落ちたが、足軽たちは気づかない。

左平次は、煙玉を投げおわると、十字手裏剣をとりだし、くるりと右手首を動かした。

左平次の手首がはねるごとに、十字手裏剣は小さなうなりをたてて中空に飛び、その一枚ずつが、規則正しく足軽たちののど笛に食いこんだ。

（これは、ばかにならぬ）

才蔵は、左平次の意外な腕におどろいた。

異様な、叫び声があがった。

倒れ、もがきはじめたころ、それを待っていたかのように篝火の鉄籠が、轟

とはじけとび、白煙を吹きあげた。

一瞬、搦手門が、もうもうたる白煙で包まれたころ、すでに才蔵と左平次は、門の梁に忍び鉤を打ちこんで、楽々と屋根にのぼり、ひょいと石垣の上にとびおりた。

「騒ぎはじめたな」

橋の上を人数が駈けまわっている。

「もはや、騒いでも手遅れよ」

左平次はそれを見ながら、大口をあけ、声なくして哄笑した。この男は年をとっても忍びわざが好きでたまらぬらしい。

「左平次、背後をみるがよい」

背後は、城内だった。

さわぎをきいて駈けつけてくるおびただしい松明の群れがあった。

あたりが、しだいにあかるくなってくる。松がうかびあがり、その根もとに立っている二人の影がしだいに城兵の目にみえるようになってきた。

「霧隠どの、どうなさる」

足もとに刻々あつまってくる城兵のたいまつの群れをみて、左平次は、あきれたようにい

った。

「どうやら、このぶんでは噺ノ左平次も、名古屋の城壁の上で討死でござるな」

「忍者の討死はめずらしかろう」

才蔵はくすりとわらった。並の武士とはちがい、忍者の討死は恥にこそなれ、自慢にはならない。

「のちのちまで、甲賀伊賀のよい笑い草になりましょうな」

左平次、首をすくめている。こうなってもこの男は冗談をわすれない。

「霧隠どの、こうとなっても、なお大御所のお首をおねらいなさるおつもりか」

「家康の首どころか、この様子では、本丸までたどりつくこともむずかしい。退散するか」

「いかにも。大御所は、命冥加なおかたでござる。しかしせっかくここまできて、大御所にあいさつせぬのも心残りでござりまするな」

「矢立をかせ」

「これに」

才蔵は筆をうけとると紙に六つの文字を書きならべ、小柄をぬいて、松の幹に刺しとめた。

肉太の筆で、まるが六つ、二列にならんでいる。

「六文銭でござりまするな」

真田幸村の定紋なのである。

「幸村参上」といったほどの意味だ。

「これでよい」

「よいことにお気づきなされた。これをみれば敵の胆が寒うなりましょう」

「では、左平次」

「これにて別れましょう。あとは、七ツ寺の拙者の家で」

ぱっとはじけるように、ふたりは闇の左右に消えた。

「わっ」

と足もとの松明が、それぞれの影を追ったが、やがてどの影をも見うしなって、火の群れが右往左往しはじめた。

才蔵が、七ツ寺の左平次の家にもどってきたのは、夜明け前である。

小若が、

「首尾はいかがでございました」

「左平次はもどったか」

「まだでございます」

ほう、才蔵は案じ顔で首をひねったが、小若はむしろ落ちついていた。左平次の腕を信じているからだろう。

そのとき、はるか名古屋城の空にホラ貝の音がひびきわたった。

家康の出城である。

軍勢は大手門を出て南下し、東海道宮の宿場で西へまがるはずだった。

「小若、この家はあぶない」
才蔵は、すばやく牢人風の衣袴をつけながら、
「旅の装束をせよ。出る」
行軍部隊の一部が家の前を通るおそれがあったのである。町を通過するばあい、足軽隊が家あらためをして路上に土下座させられるおそれがあった。

鷹ケ峰

才蔵は、その後も、家康の軍勢の切れ目、切れ目を縫いながら、あとをつけた。
小若をともなっているから、案外、あやしまれない。途中、尋問にあうと、
「肥後阿蘇の大宮司家の家来斎藤縫殿と申す。これなるは妻小若でござる。鹿島、香取両社に使いをしての帰国の途次でござるゆえ、なにとぞお通しくださるよう」
と、偽造した阿蘇大神宮家の花押のある手形をみせる。
近江草津ノ宿では、見まわりにきた宿割奉行落合小平次という家康の旗本が、たまたま尾張国二宮大県社の神主の出身であったために、しつこく尋問した。
「供を連れぬのは不審であるな」
「肥後から関東までのながい旅路でござる。ひとりは病死し、ひとりは逃散いたした」

「阿蘇十二神の神名をいうてみよ」
そのくらいのことは、神宮の家来に化ける以上、十分に記憶している。才蔵はいちいちあげた。落合はさらに、
「祝詞を申せ」
それもたかだかとよみあげると、もはやうたがう理由がなかった。
「なんならば、東軍御勝利の祈願をいたしてもよろしゅうござる」
「左様なことはいらぬ」
あとで小若が、
「あのような戯れごとをおいい遊ばして、もし永井（草津からひがし一二里半。家康の宿陣がある）の御本陣で祈願せよといわれればどうなされます」
「するさ」
才蔵は寝ころんでいる。
「草津はさいわい、甲賀に近い。そちの実家の甲賀望月家もある。人数を駆りあつめて神主に仕立て、それらをひきいて永井の宿陣に入り、火を祭って祈願すれば、ずいぶんおもしろかろう」
「神主になりすまして、大御所の首級をねらわれるのでございますね」
「そうだ」
「しぶといおひと」

「おれがか。……なるほど」

おもわず笑った。われながら執拗な、とおもったのである。駿府、田中、名古屋、としくじってきた以上、あきらめてもよかりそうなものだ。が、やりかけた仕事というものは、仕遂げなければ気がすまない。

翌二十三日朝、さすがの才蔵も事の意外さに唖然とした。あわてて小若をうながし、草津川の堤をあるいて、琵琶湖の岸辺へ出てみた。才蔵はしばらく立ちすくむようにして、沖をみつめる。

朝霧がはれはじめている。

湖上に、旗、幟、指物をなびかせたおびただしい船のむれが南へむかっていた。中央に進んでいる四十挺櫓の大船は、あきらかに家康の座乗する船である。

家康にすればたびかさなる忍者の跳梁に警戒して、いそぎ予定を変え、船で京へ入ることにしたのだろう。才蔵はそれをながめながら、

（逃げられた）

という実感があった。小若が横で、くすくす笑っている。才蔵はこわい目で、その横顔をにらみつけた。

いったん草津の宿場にもどると、家康の本隊から置きざりされた後衛部隊が、つぎつぎと街道を南下しはじめていた。

宿場は、人馬で混雑している。

「これでは、茶ものめぬ」

どの茶屋も、関東の兵でいっぱいだった。

路上まで、かれらの騒ぎがきこえてくる。

三河訛、駿河訛、甲州訛、関東のつばを吹くような訛などがたがいに入りまじって、餅を食う者、酒をあおる者、茶を竹筒に入れさせている者などがひしめきあっていた。

街道に立ちながら才蔵は、

「小若、ひもじゅうないか」

気がついてみると、もうひる近いというのに、朝めしも食っていないのである。さすがに小若は悲しそうな顔をしてうなずいた。

「ひもじい」

「餅を買ってきて進ぜよう」

「才蔵さまは、意外にやさしい所があるのでございますね。しかしあのような混雑では、買えそうにありませぬ。小若はがまんをいたします」

「なに、大事はない。もどってくるまでここをはなれるな」

「才蔵さま」

小若は、心細そうな目をした。どうみても、新妻の表情である。

才蔵は小若を街道わきの松のかげに立たせておき、茶屋へ入った。

軒端に臼をすえ、餅をつくそばでせいろで糯米を蒸している。

つきあがるごとに板にたたきつけるのだが、まるめるのを待ちきれずに、群がる雑兵たちが手をのばして餅を奪いとるのだ。

（なるほど、これでは買えぬ）

才蔵はつかつかと人垣に寄るなり、

「どいた」

と雑兵を押しのけた。

「な、なんじゃ、おのれは」

「どけ」

「なにを」

戦さへ出かける男たちだ。二、三人が、いきなり才蔵の腕、胸ぐらをつかんだ。気がたっているのもむりはない。

才蔵は両手をぱっと扇にひらいて、しがみついている雑兵をはらいのけた。一人がはずみをくらって、ころんだ。

「なんだ、この野郎」

「けんかだ」

わっと、付近の雑兵がむらがってきた。

「触れるな」

才蔵は、まわりをひとわたりにらみつけてから、

「わしに触れる者は神罰によって武運たちどころに落つるばかりか、戦場でかならず怪我をする。これをみよ」

ふところから、阿蘇大神宮の大きな神符をとりだし、

「これをみよ。神州にあまた神のやしろあれども、霊験随一といわれる阿蘇の神のご神符じゃ。わしは大宮司家の家来にて斎藤縫殿という。わしが、おのおのの武運をいのって餅をついて進ぜようと思って参ったのに、それが不足か」

静かになった。

たれにしても、戦場で死ぬことはこわいのだ。

この時代、神主の風俗というのは、なかば武家、なかば公家のようなものであった。平素は髪を公家諸大夫ふうに結い、旅に出ると、武家の装束をして両刀をはさんでいる。合戦をすることさえあった。

才蔵が、

「肥後阿蘇大宮司家の家来」

と偽称している阿蘇家などは、大きな神領をもち、神人と称する武士をかかえ、大名とかわらない。平素は神事を宮司、禰宜がおこない、武事を神人がやるのである。いざ戦さのときには、宮司が総大将になり、禰宜がそれぞれ侍大将になるものであった。阿蘇神宮の神威

と武威は関東にまできこえていて、足軽小者どもは、
「これは、阿蘇の禰宜どのでござったわ」
「おのおの、つつしむがよいぞ」
とくちぐちに叫んで、急に鳴りをひそめ、畏敬の目ざしをむけた。
足軽の年寄株の者がしずしずと進み出、
「禰宜どの、なんぞ霊異をあらわして、われらの大坂表での武運を寿いでくださりませぬか」
「よいとも。とくと寿いでやるぞ」
才蔵にすれば、小若に食べさせる餅が手に入ればよいだけのことだから、気楽だった。まず、右手を懐中に入れ、紙をとりだし、同時に左手で左腰の脇差をすばりとぬいた。
「あっ」
「おどろかずともよい。ただいまから御幣をつくってみせるだけじゃよ」
器用に紙を切って御幣をつくり、足軽のひとりに青竹を切らせて柄をつくった。
「これでよい」
「なるほど、さすがに御家職がらでありまするな」
才蔵は、ウスの上で、三度、
颯　颯　颯

と祓い、まわりをかえりみて、
「みなの者、神事を行なっているのに立っているとは何事か。神罰があたる。わがまわりに土下座をせよ」
「いかにもそのとおりでござる」
わらわらとすわった。
才蔵は、たかだかとかしわ手を打った。やがて、
「杵」
と茶屋の者から杵をうけとり、男のひとりに命じて臼取りをさせ、
「高天ケ原に神しずまります、八百万の神々……」
と、朗々とのりとをとなえつつ、餅をつきはじめた。
餅が出来あがると、そのうちの十ばかりを竹の皮につつませて懐ろにねじこみ、
「よいか、これに五十個ばかりの餅があるが、いずれも神意のこもった清らかな餅じゃ。これを食する者は、矢弾も避け、敵の刀、槍にも触れず、しかも武運めでたい。一同、ひとつずつありがたく食せよ」
「ありがたや」
わっとむらがってくるのを才蔵は手で制し、
「ただではない。銭は茶屋におけ。左様にさわぐでないわ。順よく受けとれ」
小若の姿がみえない。

彼女のいたあたりに、雑兵どもの人垣ができている。

才蔵が雑兵の人垣に近づくと、なにやら、笑いさざめいている。

「おい」

才蔵が声をかけると、二、三人がふりむいて、野卑な顔を笑いくずした。

「おい、みんな、亭主どのがもどってきたわ」

「なにをしておる」

才蔵が、やさしくいった。が、一同、多勢をたのんで、小憎たらしく顎でものをいった。

「なに、亭主どのの留守のあいだに、女房どのとあそんでいただけよ」

「おもしろいか」

「おう、おもしろいとも」

けんかを売るつもりである。

「おれも、あそばせてくれまいか」

ひとりの肩に手をかけた。男はびくっとして、逃げ腰になった。

かれらは、足軽ではない。

足軽ならば、弓矢鉄砲をもち、戦闘に参加する兵だし、それだけの秩序もあるのだが、荷駄をはこぶ小者なのだ。

いわば軍夫なのである。戦闘には参加しないから、犬追いの百姓脇差一本を腰にさし、具

足もつけていない。

定傭いの者もあるが、多くは、戦さがあるごとに領内から徴発されたり志願したりして臨時にやとわれ、戦さが負けはじめるといちはやく逃亡し、勝てば、敵の戦死者から武具をはぎ、民家に押しこんで強姦などをする。あぶれ者同然の仕様のない者が多い。

むろん、こういう軍律違反は味方の物頭にみつかれば断罪されるが、その程度の危険があるだけに、かえっておもしろいという連中なのである。

才蔵は、無言のまま人垣をおしのけてなかに入った。

（ほう、これはしおらしい）

小若がしゃがんで、両手で顔をおおっているのである。

その前に、悪党づらをした小者が三人、大口をひらいて笑いながら、短袴の片方をたくしあげて、立ちはだかっていた。

「お女中」

ひとりがいった。

「これを拝まねえかよ。めったに人には見せねえものだが、おれのこれは、常州一のいちもつといわれたいそうなしろものだ。目の保養に見ておけやい」

「まった」

つぎの男が歩み出て、

「おれのは房州一といわれたいちもつさ。かたちはわるいが味は良いという珍物だぞよ」

「順は遅れたが」
最後の男が、小若の前で中腰になり、前のものを小若にぐっと近づけ、
「おれのは相模のもので、相模太郎と異名をとったほどのものさ」
「にぎやかだな」
才蔵は、微笑した。
微笑したのは、小若がいかにもしおらしく女房ふうにふるまっているのがおかしかったのである。この甲賀望月家の娘がその気になれば、小者の二、三人を手玉にとる体術は心得ているはずなのだ。
「組頭はおらぬのかな」
と横の男にきいてみた。組頭をよんで穏便にこの始末をつけさせようとしたのだ。ところが、
「あれが組頭よ」
「ほう」
なんと、前をはだけている「常州」がそうだった。

「興を醒ましてすまないが」
と才蔵は、前をはだけている組頭のそばに寄った。
「わしはこの女の亭主じゃ。その妙なものを下帯の中にしまってもらえまいか」

「なんだと？　けんかを売る気か」
酒が入っているらしい。
「亭主とあれば面白え。売るなら買おうじゃねえか。なあ、みんな」
そうだ、そうだ、とまわりの者が口々に叫んだ。この連中も、戦さに出かけることで気がたっている。
才蔵は、こういう連中を相手におとなげないとはおもったが、才蔵という男には、なにかに触れれば荒れやすい血がながれていた。それにもともと、主持のただの武士ではなく、世間の裏街道をゆく伊賀者である。武士といってもあぶれ者なのだ。こういう場合の世間なみな節度にとぼしい。
「買おう」
と才蔵が答えた。と同時に、わっと背後から二、三人がつかみかかってきた。それを地面にたたきつけると、
「ぎゃっ」
どちらも血の気をうしない、体を海老のように曲げて悶絶した。投げる瞬間に才蔵が小指の骨をへし折ってしまっていたからである。
「こりたか。怪我人が多くならぬうちに、おとなしゅう退散しろ」
「この野郎」
組頭が、仁王立ちになった。

「われわれに手むかうとは、おそれを知らぬやつ。おそれながら、関東の御威光にさからい、大御所様に刃むかう大悪人とみた」

新興の江戸政権の勢いは、こういう荷駄人足をまで気負いたたせている。才蔵はおもわず吹きだし、

「うぬが大御所というのか。大御所が、街道でおなごをつかまえて、隠し所を見せてござるとはおどろいた。あらためて念を入れておくが、みなも聞くがよい。この男、たしかにたったいま、大御所と申したな」

一同は、沈黙した。

才蔵は、けんかがうまい。

「みなが証人じゃ。うぬは大御所をかたる者とみた」

半歩ふみだした。

「な、なにを」

男は脇差をひきぬくなり、だっと斬りつけてくるのを才蔵は利き腕をとらえた。

「どうだ大御所」

顔を近づけて笑うと、男の白刃がちゅうでふるえて、

「うっ、こ、この野郎」

もがこうとする力を利用して、才蔵は男の体をちゅうにはねあげた。

男は一回転し、右肩を地上に打ちつけ、二、三度ころぶなり背をまるめた。必死で股間を

両手でおさえ、

「や、やりやがったな」

泣くような声をあげた。常州一と男がいっていたその物が、血まみれになってころがっている。

「おれは知らぬぞ。うぬの脇差でうぬ自身のものを切りとったのであろう。早う外科をよべ」

才蔵の早わざにちがいない。相手の利き腕をとり、その刀で細工をした上で投げおとしたのだが、たれもそれに気づかなかった。たれがみても男の自業自得としか思えない。

騒ぎが大きくなって、結局、才蔵は陣中目付に取りしらべられることになった。しかし荷駄人足の頭が大御所の名をかるがるしく口にしたということと、茶屋にたむろしていた足軽たちが、

「あのご仁は、東軍御勝利の祈願をしてくれた阿蘇の禰宜どのでござりまする」

という証言があったために、すぐ召し放たれた、というのも、才蔵のもとからの思惑どおりであった。

街道は、いつになく晴れている。

空の色は染まるように青いが、風がつめたく、忍びよる冬の気配を感じさせた。

草津から膳所へむかう途中、小若が、何度も思い出し笑いをした。

「おかしいか」
「だって、そうではございませぬか。わたくしのお餅を買うために、東軍の武運の祈願を遊ばしたり、荷駄人足とけんかを遊ばしたり、たいそうなことでございましたこと」
「それがおかしいのか」
才蔵も仕方なく苦笑している。
「おかしゅうございます」
「わしも虫の居所がわるかったらしい。家康の首を、駿府でも、田中でも、名古屋でも、もらいぞこねた。その鬱屈していたものが、あの荷駄人足どもにはねとんだのであろう。人足頭には、あわれなことをした」
「でも」
「なにかな」
「わたくしのために、才蔵さまはこうもやさしいお人であったかと、小若はうれしゅうございました」
「益体もない」
才蔵は、にがい顔をした。
「なぜそのようなお顔をなされまする」
「わしは当然なことをしたまでじゃ。そなたに特別やさしゅうしたわけではない。おなごはすぐそのように受けとるゆえきらいじゃ」

「あの申されかた。お口をひねって差しあげとうございます」
大津の宿場までくると、日が暮れた。代官所の前に関所が設けられ、京へむかう旅人が厳重な調べをうけている。しかも、日没後は、関所の門が締まり、通行をゆるさない。
ここで東国、北国の牢人で大坂へ入城しようとするものをせきとめているのだ。
「こまったな」
「この様子では、今夜は大津どまりでございますね」
小若はうれしそうにいった。
一日でも才蔵と泊りを重ねる日の多いのを望んでいるらしい。
旅籠は、どの家もせきとめられた旅人でいっぱいで、とまれそうにない。
しかも、どの旅籠の軒先にも、宿泊人の生国と名前が、一人のこらず貼り出されている。
代官所でそのように命じているのだ。
街路のところどころにはかがり火がたかれ、間断なく見まわりの兵が歩いている。
「なるほど、これはきびしい」
京大坂の風雲のけわしさが、ひしひしと伝わってくるような空気である。
そのときふとすれちがった旅の雲水が、
「もし」
と声をかけ、才蔵が編笠をあげると、近づいてきて、
「伊賀の才蔵どのではござらぬか」

声をかけられて、才蔵は、饅頭笠の下の雲水の顔をじっとみた。四十ぐらいのまるい顔である。

雲水はにこにこと微笑しながら、両手の人さし指と親指とで、日輪の印を結んでみせた。この印は「在」の印という。仏法では、太陽（大日如来）をおがむときの印形だが、忍びの仲間では、

「甲賀者」

というしるしになっていた。才蔵は気をゆるして、

「いかにも、その才蔵じゃが」

「拙僧は」

と、その雲水が、世間ばなしをするような身ぶりでいった。しかし声は忍者特有の声で、響きがない。ふつうの者なら、そばにいても聞きとれないはずである。

「佐助どの下忍にて、雲と申すおとこでござる。平素は、京の鷹ケ峰の山寺の和尚をつとめておりまする。……その寺の名は」

歩きはじめながら、

「雲竜院」

「それゆえ忍び名を雲というのじゃな」

「左様、それで雲」

くすくす笑っている。ひょうきんな男らしい。明るくほおをふくらませながら、

「こうみえても、大津の臨済宗の寺ではたいそうな顔でござるよ。六つの年に甲賀の百地道順どのの下忍となってわざをまなび、二十二の年に道順どのにすすめられて、京の花園の妙心寺本山に入りました。僧になりすましてからこれで二十年じゃ。京の鷹ケ峰では、雲竜院の和尚といえば、里の子供にまでしたわれている」

才蔵はこの男の自慢に、素直にうなずき、

「よい忍びよの」

感心してやった。事実、僧になりすまして、忍者の気ぶりもみせぬというのは、よほどのことである。この男は僧の立場を利用して二十年間、さまざまな情報を手に入れてきたのだろう。

雲は話しずきらしく、

「拙僧はいちど、伊賀の名人といわれる霧隠才蔵どのに会うてみたかった。才蔵どのは、ずっと武士でござるか」

才蔵は、雲の問いかたがおかしいので、ついふきだし、

「いかにも、ずっと武士じゃ」

才蔵は、むかしから、ときどき山伏か、神主になる程度で、ずっと武士の形を通している。

「それはめずらしい」

雲は、妙なところで感心した。

忍者は、多くは、僧、放下師、非人、旅芸人のくらしをしている。武士の生活をしている者は、存外、すくない。雲は、才蔵をそのめずらしいうちの一人として感心したのだろう。

「しかし」

才蔵は編笠のなかで笑いながら、

「やむをえまい。わしは伊賀の上忍の家にうまれたゆえ」

「あ、そうであった。おもいだした。あなた様は上忍の家すじであられた。これは、うかつでございましたな」

上忍とは、伊賀の地侍（郷士）のことだ。

村々に住み、長屋門をもったひろい屋敷に住んでいる階級の者である。この上忍が、百姓の子のなかで見込みのある者を三、四歳のころに買いとり、忍びの術を教えて下忍に仕立て、諸国の大名の用に立てるのである。

「なるほど、上忍のお人が、武士のかっこうをするのは当然なことでござる。しかし、上忍でみずから忍びをなさるとは、これまたおめずらしいことでござるな」

「酔狂か」

「めっそうもない。ただ、よいご身分で、ご苦労なことじゃと思うただけでござりまする」

話すうちに、宿場はずれにある小さな寺の前まできた。

「ここが、今夜のご宿所でござるよ」

と、その鷹ケ峰雲竜院の和尚という甲賀者は、まるで自分の家に入るような気安さでずかずかと山門を入った。

「臨済の寺じゃな」

「左様。この寺の住持は、拙僧がむかし、花園妙心寺の僧堂で修業していたころの弟弟子でござる」

その住持というのは、若禿げの小さな頭をもった僧で、才蔵と小若に鄭重にあいさつした。

はなしをきけば、住持と甲賀者は、妙心寺僧堂以来、二十年のつきあいなのである。それほど心をゆるした親交があっても、この寺の住持は、兄弟子がじつは甲賀者で「雲」というあだなをもった忍者であるとは、つゆも知らない様子だった。

方丈に通された。

住持が去ったあと才蔵は感心して、

「おぬしは、よい忍者じゃ。良忍ハ友ヲ得テ百年徙ラズ、ということばがある」

伊賀流の古語のひとつだ。

その意味は、よい忍者というものは、忍者以外の社会に終生すんで友人から信頼され、尊敬される者でなければならない、ということだ。それでなければ、情報あつめができない、ということである。

家康の諜者に、石川嘉右衛門重之という者がいた。

家康の没後、京の宮廷の動きを探索する密命を帯びて、三代将軍家光の寛永十三年、京の

北の一乗寺村にすみ、丈山と号し、いまでも詩仙堂として名高い隠宅をたてた。

学問がふかく、詩文に長じ、丈山の高風をしたう親王、門跡、公卿が多かったから、九十歳で没するまで、京都の情報をあつめるのに事を欠くことがなかった。忍術とはそういうものをいうので、いまどき週刊誌にのっているような奇妙奇天烈なうそばなしをいうのではない。

おなじく家康の諜者で、小幡勘兵衛景憲という者がいた。

その出生は武田家の武将小幡豊後守昌盛の子で武田家がほろんでのち、四歳で家康にひろわれ、秀忠の小姓となった。

これほど徳川家から恩愛をうけた勘兵衛が、十八歳のときにみずから望んで牢人となり、諸国を遊歴している。すでにこのころから諜者になっていたものとみられる。

そのくせ、関ケ原ノ役がおこると武士にもどって戦さに参加し、戦後また牢人にもどって諸国をあるき、大坂ノ陣のときは、京都所司代板倉伊賀守勝重と謀って、大坂の豊臣家の牢人募集に応じ、大坂城内の事情を逐一関東に報じていた。

のちその功によって旗本千五百石の身上をもらい、かたわら、武田信玄の戦術を研究して、甲州流軍学の祖となり、門弟二千人をかかえる軍学者として世を終えた。

この「雲」も、そういう忍者なのだ。だから、臨済関係の寺ならば、この男の顔でさまざまな目的に利用できる。

「ところで」

と雲は、才蔵のそばへすり寄った。

「猿飛佐助どのから伝言がござる」

その夜、才蔵と小若は、本堂の裏につづいている客殿に寝かされた。

ふとんが、ふたながれ敷かれている。

小若は、寝支度を終えてから灯を吹き消し闇のなかで才蔵に声をかけた。

「才蔵さま。小若は、もう今夜でお別れでございます」

「ほう、どこぞへ参るのか」

「いまの雲どののはなしでは、大坂の隠岐殿が、早う帰城するように申されているとのことでございます。隠岐殿は、きつうおいかりなされているそうじゃ」

「隠岐殿が？」

この女も大坂の隠岐殿の支配下にあるらしい。

「小若はなにも旅さきで遊んではおりませぬのに、才蔵さまと夫婦あそびをしてつとめを忘れていると申されます」

「そのとおりではないか」

才蔵は、くすくす笑った。小若は才蔵の同情のなさに腹が立ったのか、枕もとににじり寄ってきて、

「まことに左様おもわれますか」

「思わぬでもない」
「つめたいおひとさま」
「左様かな」
どうせ、痴戯なのだ。才蔵はいいかげんにあしらっていると、小若は真剣に腹をたてているらしく、
「最後の夜と申すのに、なんというつれないことを申されます。小若は、いままで口には出しませなんだが、ちゃんと存じております。才蔵さまは、隠岐殿がお好きなのでございましょう」
はなしが、別な方角にそれてしまった。
「おれには、好きなおなごというのがない」
「うそ、うそじゃ。隠岐殿でなければ、青姫、さもなければ関東の諜者ということがわかって追われたお国、ではありませぬか。小若はなんでも存じておりまするぞ」
「わかった。どうせよと申すのじゃ」
「わたしが大坂へ帰れば、いずれ戦さがはじまり、そとには出られませぬ。今夜が最後じゃ。たったひとこと、お言葉をくだされませ。才蔵さまとは、仮のめおとであったが、あれはうそであったと」
「というと？」
「まことのめおとであったと申してくだされませ」

「わからぬことをいう。忍びの世は、すべて仮じゃ。たとえば雲も生涯僧として暮らすであろうが、その僧の身も仮にすぎぬ。うらむなら、忍びの家にうまれたことをうらむがよい。われわれの道は虚仮の道じゃ。真実というものがない」
「わかっておりまする。ゆえに、ことばだけでよい。真実のめおとでなくてもよいのじゃ。ただことばだけを」
小若のあついからだが、才蔵の横にすべりこんできた。
「な、才蔵さま。ことばだけでよい。小若とはめおとであったと。大坂の城が落ちれば、小若の命もどうなるかわかりませぬ。ただひとことだけのおことばをいうてくだされ」
「小若」
才蔵は、闇のなかで小若のからだを引きよせた。才蔵は息をつめ、やがてそのことばをささやいた。

才蔵が佐助と再会したのは、慶長十九年十月二十五日、洛北愛宕郡の鷹ケ峰の雲竜院においてである。
すでに家康はその前々日の二十三日夜に京の二条城に入っており、入城するとすぐ藤堂高虎、片桐且元らを召して大坂攻撃の軍議をかさねているほか、京の市中は、ぞくぞく入ってくる関東の軍勢でごったがえしていた。
ここ鷹ケ峰の山里は、京の市中からざっと二里。密会の場所としては絶好の地といってい

い。山里の細流をくだれば京の市中へ入って紙屋川となり、逆に山一つを越えれば丹波となる。むかしは京に夜な夜な稼ぎに出る盗賊の巣になっていたという。

すでに山里には秋が深い。

雲竜院は、崖の上にあった。その崖をつつんで、さまざまな落葉樹が紅葉し、この小さな禅院は、錦のなかにあるようなたたずまいをみせている。

才蔵が、雲に案内されて雲竜院の方丈の座敷におちついたとき、佐助はまだ大坂から到着していなかった。

「佐助はまだか」

「おそらく、夜陰になりましょう。峰ぞいに来るならいざ知らず、市中を通るとすれば、警戒がきびしゅうござるゆえ」

陽が落ちて一刻ほどたったころ、佐助が相変らず旅芸人の装束をしてやってきた。

「おう、才蔵」

抱くようにして、なつかしみ、

「すこし日焼けしたな」

「ひどい道中だった」

「苦労をかけた。殿は、おぬしの働きを謝しておわした」

「苦労のわりには、なにもなっておらぬ。大御所は、いまも大元気で、二条城で大坂攻めの法螺を吹いていようわ」

「なに悔いることはない。大御所などはいつでも討てる」

佐助は、大そうな自信だった。才蔵はおどろき、

「討てる？」

「討てるわさ。智謀神のごとしといわれたわが殿が、堂々の軍陣を張って大御所を理詰めに詰めきってしまおう」

「佐助、大坂が勝つとおもうのか」

「わしもそのことを疑うていたが、大坂城に入るにおよび、その軍容をみて、これはわが殿ご健在のかぎり天下がもう一度くつがえると思うた。大坂はかならず勝つ」

「勝つか」

「かならず」

「佐助がそこまでいうことなら間違いあるまい」

皮肉ではない。才蔵は、この男の分析力と勘を信頼するようになっていた。

「ところで、戦さは殿にまかせるが、われらには別な仕事がある。こんどは荒仕事ぞ」

京における徳川方の重だつ者を斬れというのである。

西軍の軍師・真田幸村の命であるという。

なるほど佐助がいうとおり、

「荒しごと」

にはちがいなかった。

「もそっと、くわしく聞こう」

「つまり」

と佐助がいうのは、京に集結している関東方が、作戦行動をおこすまでのあいだ、かれらに動揺をあたえる心理作戦のひとつだというのである。

「辻斬りじゃな」

「左様」

と佐助がうなずいた。

「物頭をえらんで斬るのか」

「いうまでもない」

「何人斬ればよい」

「殿の申されるのは、斬れるだけ斬れというのじゃ。弁慶の千人斬りのようなものか。辻斬りは王朝のむかしから、事あるごとに京の名物になっている」

「佐助もやるのか」

「おうさ。才蔵のみに難事を背負わせるわけにはいかぬ。わしもやる。おぬしとわしとで、京の町を騒ぎみだしてみせよう。忍びとしては、快事にちがいない。……しかしこのほか」

「なにをやる」

「忍び百人を京に入れて、流言を市中に撒かせる。たとえば、江戸に留守居を命じられている芸州の福島左衛門大夫正則が西軍に寝がえるとか、防長の毛利、薩摩の島津、肥後の加藤家が大坂の豊臣家に呼応して旗をあげるとか、左様なことをつぎつぎにいいふらして、東軍相互に疑心暗鬼を起こさせ、士気をにぶらせる」

「その元締めは、佐助か」

「わしも介添えはする。元締めは隠岐殿じゃ」

「ほう」

「うれしいか」

「佐助、なぜ左様なことをいう」

才蔵は、いやな顔をした。

「いや、隠岐殿は才蔵に会えるので、およろこびのご様子であった。それだけのことよ」

佐助は笑わずにいい、

「隠岐殿はすでに京へ来ておられる。市中のいずれかへお住いのはずじゃ。その場所はまだわしにもわからぬ。しかし才蔵」

「なんじゃ」

「会いたければ、わしが手引きをする」

才蔵は、それよりも、菊亭大納言のむすめ青子の安否を調べたかったが、そのことは口には出さない。

（いずれ孫八にでも確かめさせよう）

とおもい、
「じつは雲」
「なんでござろう。なんなりともお役に立ちまするぞ」
「たのみがある。わしの伊賀の生家の下忍どもが、むかしから京の室町で口入れ稼業の店を出している」
「分銅屋でござりまするな」
「これは抜け目がない。よう存じているの。その分銅屋の番頭にて孫八と申す者に、わしが京にもどっていることを告げてくれぬか」
「さっそく、今夜にでも」
僧衣の雲はもう立ちあがっていた。

影法師

雪かあられか大宮の
月の宮居のわびずまい
世を憂しと住む影法師
憂しや憂し

酔うも憂し
うたうも憂し
恋うるも憂しや影法師

ちかごろ急にはやりはじめた今様（流行歌）である。はじめは、六条室町の遊女町でうたいだしたものらしい。
「憂しの影法師」というこのうたで、いまでは京のみやこでは上は堂上の若者から、下は河原の乞胸（乞食）までうたっている。
「きこえたか」
武士のひとりがいった。
「いま、道ゆく京の者があの歌をうたいおるわ」
家郷をあとにして戦場にむかおうとしている武士たちにとって、この歌には士気をにぶらせるようなふしぎな力がある。
「あの歌をきくと、戦場の功名などが、ついむなしゅう思うようになる」
「都とは、いやな所じゃ。聞くもの見るもの、武士の血気をにぶらせるものが多い」
と、他の者がいった。
「わしらの血には合わねえわい」
「いかにも」
所在なげに仲間同士で酒をのみながら、ついたれかが低くこの歌を口ずさんでしまってい

る。

「うたうな。耳ざわりじゃ」

ひとりが、いらいらと板敷をたたいた。

ここは、二条城にちかい町寺の本堂で、伊奈筑後守忠政の部隊の宿陣となっている。忠政は「出頭衆」のひとりで家康の親衛隊といっていい。

「きのう、本願寺の壁に墨くろぐろと落書した者がいたというが、きいたか」

「きいた。が、まだつかまっておらぬ」

「落書は、四条坊門の柳の木をけずって書いてあったともいうぞ」

「どういう落書か」

「なんでも」

と、ひとりが、あたりの耳をはばかりながら、小さな声で口ずさんだ。

御所柿は

独り熟して落ちにけり

木の下に居て拾う秀頼

「御所柿とは、もったいなくも大御所という意味に掛けたものらしい。所司代役人がやっきになって犯人をさがしているらしいが、影もかたちもつかめぬというはなしじゃ」

「影法師じゃな」

「左様、影法師」

とうなずいた男が、ほんのすぐあと、方丈の西のはしの濡れ縁で、肩から血をふいてたおれていたのである。

その者は、「憂しの影法師」の今様を口ずさみながら、厠から出てきた。そのとき、かれはなにを見つけたのか、

「曲者」

とさけんだ声が、たしかにした。

その叫び声を朋輩の全員がきいた。が、かけつけてみると曲者の影はなく、左袈裟に心ノ臓まで一刀に斬りさげられて死んでいるその男を発見しただけだった。

白昼、しかも、出頭衆伊奈筑後守の宿陣のなかである。

当然、大さわぎになった。

筑後守は二条城に登城中だったが、さいわい弟の典膳という者が宿陣のなかにいた。

典膳は死体を検分し、斬り口のすさまじいのをみてうばいした。

「下手人は、ただ者ではない。手だれの兵法使いとみた」

伊奈筑後守の人数は、士分、小者まで入れてせいぜい五十人くらいのものである。そのなかに、刀術を修めているものはほとんどおらず、ましてこれほどの腕の者もいないから当然下手人は外部の者とみていい。

「どこから侵入しおったか」

「陣中目付にまでお届けいたしましょう」
「家の恥じゃ。かの者は病死とせよ」
典膳はおしとどめた。むりはなかった。宿陣の外で斬られたのならいざしらず、宿陣のなかでの事件だから、警備のゆるみを指摘されても仕方がない。
ましてこの伊奈家というのは、先代忠次が、尾州荒子村にすんでいた「熊蔵」という百姓だった。
べつに武勇があったから出世したのではない。はじめ同村の地侍佐藤弥藤次に中間奉公し、経理の才があったので、侍とした。ところが当時、家康は領国が大きくなるにつれ、武官だけでなく文官も必要としていた。そういう者をさがしている最中だったから弥藤次は熊蔵を家康に推挙した。それが出世のはじまりである。
家康は熊蔵の才を珍重し、その後、筑後守に任官させて一万石をあたえ、関東郡代にまで出世させている。
当代忠政は、その熊蔵の子である。しかし世間はこの宿陣での事件を聞けば、
「しょせんは、そろばん上手でとりたてられた出来星大名じゃ。武備のゆるいのもむりはない」
とあざけるのは、見えすいている。
「よいな。他言はかたく無用ぞ」
典膳は一同にそう命じた。

命じたあと典膳は手を洗って自分の部屋へ引きとった。
それが、一同が典膳をみた最後だった。その直後、
「ぎゃっ」
という叫び声とともに、典膳の部屋の杉戸がはずれ、杉戸とともに、典膳のからだが庭へころがり落ちた。
即死だった。
右袈裟に斬られている。
このうわさは、その翌日には、京にある関東の諸部隊だけでなく庶民のあいだにまでひろまった。
むりもない。場所は、家康の二条城のそばである。町寺とはいえ武士の宿陣は城にひとしい。それに、あるじは、家康の親衛隊長のひとり伊奈筑後守なのである。しかも白昼、筑後守の弟と物頭が同時に殺されている。関東の威信を傷つける点でこれよりはなはだしいことはない。
家康は、京都所司代板倉勝重と陣中目付城昌茂から同時に報告をうけた。
「落書といい、こんどの騒ぎといい、大坂方の策謀かと存じまする。市中警戒を厳にして、日ならず下手人をひっとらえまする」
家康はだまっていた。

「古人物語」（旧参謀本部編・日本戦史所載）という江戸初期にかかれた随筆には、家康は意にも介さなかったという。

「捨ておけ」

とだけいった。ただし、これは落書の件についてのみのことである。

理由は、落書が出たからといって神経をとがらしてさわぎまわっては、山のごとき印象を世に与えるべき関東の軍容が、かるがるしくみえると家康はおもったのだろう。

しかし、かんじんの伊奈筑後守の宿陣での事件については、なにもいわなかった。

陣中目付の城昌茂はかさねて、

「いかがとりはからいましょう」

「わしの口からそれをいえるか」

「は？」

城昌茂には、その意味がわからない。

板倉勝重はそっと袖をひき目顔でしらせて、両人そろって退出した。

あとで、板倉が城昌茂に、

「この一件だけは、大御所様のお口からなにも申せまい。もし、なにか申されれば、伊奈筑後は、切腹をまぬがれぬ」

そのころ、才蔵と佐助は、鷹ケ峰の雲竜院でしぶ茶をのんでいた。

雲がやがて雲水すがたで京からもどってきて、

「あの一件、京の市中ではうわさで持ちきりでございまするぞ。町人どもの申すことには、影法師のしわざじゃと」

「影法師？」

佐助は、意外な顔をした。

「いまはやりの今様の影法師のことか」

「左様。才蔵どのがあの宿陣のまわりを歩いておられたときに、影法師の今様をおうたいなされていたでありましょう。宿陣のなかまでその歌の声がきこえていたそうでござりまする。所司代では、下手人は、影法師を低吟していたその男にちがいないとみて、探索中でござる。それゆえ、市中では、影法師をうたう者が、はたと絶えたということでござりまするわ」

「影法師とはよい異名じゃ。才蔵、ふたりが影法師になって、京の市中であれ狂うてみようではないか」

佐助にしては、ひどく血の気の多い語調でいった。

五条大橋の東袂を鴨川ぞいに北へ入ると、安倍晴明をまつる塚がある。

晴明とは、王朝のむかし、宮廷の陰陽師として、うらない、予言などに長じたいわば易者の祖のような人物である。

「その塚に人魂が出る」

というのだ。うわさが市中のそこここでささやかれはじめたのは、伊奈筑後守の宿陣での

事件があってほどなくのころだった。

「おおかた、きつね火であろう」

という説もある。

なるほど、鴨川を東にわたれば京も田舎である。日が暮れれば、ふだんはひとり歩きする者もない。

このあたりは、むかし法城寺という寺のあった所で、草の中に礎石がのこっており、地を二尺も掘れば人骨が出る。人魂やきつね火が出そうな所なのである。

「聞いたか」

と朋輩にいったのは、近所の建仁寺に宿陣をかまえる藤堂高虎の家中のなにがしという者である。たちまち宿陣の詰めノ間は、そのうわさの花が咲いた。

「このあいだも、本多家の家中の者が、その人魂に追われて路上に絶倒したというぞ」

「なんと」

はなしをきいただけで、青ざめている男もある。

「よりにもよって、われらが殿の宿陣の近所で妖異があるというのは不吉きわまる。だけでなく、お家の武名にもかかわることじゃ。山伏に加持（祈禱）してもろうてはどうであろう」

このころ、たいていの大名の軍陣には、武運をいのるために、山伏数人が従軍しているのが常だった。その山伏に加持をさせようというのである。

「慈音房どのをよべ」

とたれかがいったときに、板敷のすみで黙然とすわっていた男が、はじめて口をひらいた。

「待て。それはおそらく、幽鬼のしわざではあるまい。慈音房の加持では、歯がたたぬ」

「おう、彦坂どのか」

一同、はじめて気づいたように目をみはってこの男の口もとへ視線を集中した。

彦坂伝蔵は、天下に知られた大捨流の達人である。

藤堂家に仕官したのは、慶長十八年のことで、当時高虎は伊予今治城主から伊勢の津城にうつり、二十二万九百石の大大名になったとき、新規に召しかかえられた者である。藤堂家は関ケ原以来、急速に封地のふえた家だから、家中の武士も譜代がすくなく新参者が多いが、彦坂伝蔵は、なかでも顔があたらしい。ここで発言したのはひとつには、自分の武名をほこるつもりもあったのだろう。

「それがし諸国で修業中、左様な妖異を何度か見たことがある。ところが、城下でおこる妖異の十中八九は、他国から潜入した伊賀、甲賀の者のなせるわざじゃ。おそらく大坂方の忍者のしわざであろう」

「あのきつね火は、大坂方の忍者のしわざと申されるのか」

「いかにも」

彦坂伝蔵は、兵法者らしくよく光る半眼でうなずいた。

「すると、影法師」

「かもしれぬ」
「かの影法師ならば、加持祈禱では用をなさぬと申されるのでござるな」
「知れたこと」
物わかりのわるい男だ、という顔を伝蔵はして、
「相手は忍びじゃ。兵法をもって、かの者の術をうちくだくより法はない。それも、なまなかな腕ではくだけぬ」
「ほう」
たれもが、彦坂を見、声をのんだ。
「彦坂どの、そこもとが京の市中をさわがす影法師を仕止めなさるのじゃな。所司代でもてあましておるときくゆえ、もしこれを藤堂家が仕止めれば、お家のほまれになることじゃ。彦坂どの、やるか」
「やる。いや、やってもよいが、このこと容易ではない。まず殿のお耳に達し、人数を頂戴したうえで仕止めてみせよう」
彦坂がそういったのは、主人の高虎にまず予告しておきたかったのだ。かげでやったのでは手柄にならない。
「ほう、伝蔵がやるか」
このはなしをきいてよろこんだのは、藤堂高虎の侍大将同姓仁右衛門高刑である。すぐ近習の者に、

「伝蔵をよべ」
仁右衛門にすれば、大坂出陣にさきがけて京に跳梁する「影法師」を討ち止めれば、軍陣の血祭りとして幸先がよいばかりか、家康に対する藤堂家の立場がさらによくなる。
伝蔵が来ると、待ちかねたように、
「人数は、どれほど必要じゃ」
「士分二十騎、足軽百人は要り申す」
「ほほう。それでは、まるで合戦ではあるまいか。相手はひとりと申すのに」
「いや。相手を仕止めるのは拙者ひとりがつかまつるが、万一仕損じて逃げられてはなにもなりませぬ。遠巻にして、人数を伏せておきたいのでござる。猪狩とおなじことでござるよ」
「道理である」
仁右衛門は、高虎にその旨をいうと、高虎は、にがい顔をした。
「伝蔵がそう申したか」
「かならず仕止める自信がある、と申しておりまする」
「ばかめ。兵法者などは、おのれの名をあげるがためには、さまざまな手を用いる。そちまでがあの者の手に乗ることがあるか」
「はて？」
「捨てておけ」

仁右衛門にはわからない。が、高虎は、槍一筋で戦国の風雲を立身してきた男である。仁右衛門のように高虎の血縁によって成りあがっただけの器量ではない。

「考えてもみよ、それほどの人数を出して影法師一人を仕止めたところで、藤堂家の名誉にはならぬ。もし仕損ずれば、これほどの恥はない。やめておけ」

あとでこれをきいて、平静になれなかったのは、彦坂伝蔵である。

伝蔵は、その翌夜、暮五ツ（午後八時）の鐘が鳴ると同時に、藤堂家宿陣のある建仁寺の西門を出た。

西門を出れば、南北に大和大路が走っている。すでに人通りは絶えていた。

西のほうをみると、鴨川の流れのむこうに京の市中の灯がまたたいていた。

星があった。星のあかりで大和大路の両側の松の並木はかろうじて見えるのだが、踏みしめる足もとはくらい。

伝蔵は、軽装をしていた。

太刀打ちには、軽装がよい。ただ鉢巻をしめ、革襷で袖をたくしあげ、草鞋をたっぷりとぬらしている。紐がゆるんで不覚をとらぬための心得である。

そのころ高虎は仁右衛門をよび、

「伝蔵は、いずれにおる」

「それが……」

仁右衛門は、口ごもった。高虎はそれと察して濁った微笑をうかべた。

「あの者、さては出かけたものとみえる」

「は」

「わしが人数を出さぬというたとあって、進退に窮したのであろう。おのれが影法師を討ちとめるというた手前、いまさら人数が出ぬためにとりやめるとは申せまい。そうか。案の定、出かけたか。わしは、きっと伝蔵ひとりで出かけるとみていた」

老獪な男なのだ。仁右衛門はさすがにあきれて、

「……すると殿は、その」

「伝蔵を見殺しにする、というのじゃな。見殺しにはせぬ。人数はひそかに出す」

高虎にすれば、伝蔵の案を蹴ったのは、人数を出して万一仕損じたときの物笑いをおそれたのだが、ひそかに出すぶんにはかまわない。討ちとれば手柄だし、仕損じても口をぬぐっておればすむのである。

「仁右衛門、上士、徒士をとわず兵法手だれの者をすぐ二十人あつめよ」

伝蔵は、南へくだっている。

足さぐりの闇のなかを三丁も歩いてゆくと、晴明の塚のある草原へ出た。

崩れ残った法城寺廃趾の土塀の横に、くろぐろとした塚が立っている。

（はて、ここにきつね火が出るのか）

伝蔵は、草の中に立ち、鯉口を切って怪異を待った。

ほどなく、目の前の塚があおあおと光りはじめた。
（おのれ）
飛びさがった。
と同時に塚の燐光が消え、伝蔵の目の前五尺の空間に、ふわり、とほおずき色の鬼火が燃え、浮遊しはじめた。
が、伝蔵はうごかない。
闇をすかして、この鬼火をあやつる者の正体を見さだめようとしたのである。

伝蔵の目の前の鬼火が、にわかに大きくなったのである。
「やあ、見えた。幻戯とみたぞ」
伝蔵はさっと飛びさがるや、腰をひねって刀をぬき、右足を引き、切っさきを天につきあげ、拳あがりに大捨流独特の八双にかまえて、鬼火を恫喝した。
「出よ」
「……」
「姿をあらわすがよい。わが目をくらまそうとは、あさはかな」
「見えたか」
闇のなかにしずかな声がわきあがって、伝蔵に話しかけた。伝蔵はさらに声をあげ、
「見えたわ」

「ならば、とくと見せようぞ」
「あっ」
鬼火がにわかに巨大なものになり、伝蔵にむかって突進してきた。
伝蔵はとっさに刀をふりおろし、右へ飛んでさらに一撃し、鬼火のまわりの闇を数度とびまわっては、必死に斬りあげ、斬りおろした。
五度目の伝蔵の斬撃のときにたしかに手ごたえがあった。骨を断つにぶい音とともに血のにおいが、あたりに満ち、鬼火が消えた。
「妖怪、往生したか」
「うしろをみよ」
はっとふりかえったが、なにもみえない。さらに、飛びさがって背中をかえしてみた。そのとき、目のはしにかすかにさきほどの鬼火がうつった。
「うぬっ」
鬼火は伝蔵の背にはりつくようにして浮かび、伝蔵がうごくたびに鬼火もうごいて、背をはなれないのである。
「おのれ」
伝蔵は水をくぐったように汗みどろになった。身をしずめて剣を背後に旋回させ、独楽のように身をまわしながら、目のはしに映る背中の鬼火を斬った。
「ぎゃっ」

鬼火が、声をたてた。
「見たか」
伝蔵は誇りながらとびさがった。
そのとき伝蔵の五官が戦慄して、殺気をおぼえた。
目のまえに、白刃の鳴る音がした。かろうじて身をかわし、かいくぐって、横一文字になぎはらった。
手ごたえがあった。
人の倒れる音がした。
「伝蔵……」
はっ、とふりむいた。
「さすがに藤堂の家中きっての使い手といわれただけはある。みごとな腕じゃ。しかし妖怪はまだ尽きておらぬ」
「おのれは、何者じゃ」
「この晴明ケ原の明神よ」
ぼっ、と目の前があかるくなり、青いほのおが、団々ともえはじめた。
「斬れるか」
「斬れいでか」
ふみこんで一撃したとき、ぱっと血のにおいが立った。

伝蔵はとびさがるや、原を突ききって法城寺の崩れのこった土塀をひらりと越え、大和大路の路上に出てから、やっと人心地がついたように、ながい吐息をついた。
（手ごわい相手じゃったわ）
手にもった刀を布で丹念にぬぐい、あたりを見まわした。あいかわらずの闇である。真昼にこのときの伝蔵の目つきをたれかが見たとしたならば、狂気した目としか見えなかったろう。
藤堂家の宿陣にもどってから、納屋に入りこみ、正体もなくねむった。
あけがた、納屋の戸ががらりとひらいた。
「おお、ここにござったか」
伝蔵はわらの上に飛びおきた。
朋輩たちが、心配そうにのぞいていた。
「案じていた。ゆうべは、あれから晴明塚に参られたのか」
「参った。たしかに影法師を斬った」
「おお」
一同がおどろいた。
「いかにも、仕止めた」
伝蔵はスラリと刀をぬいてみせた。あぶらが浮きあがっている。

（さいわい、夜があけている。あの原へ検分に行ってみよう）

と伝蔵は、納屋を出た。

門を出るとき、背後で人の立ち騒ぐのをきいたが、何気なく門を出、法城寺の西の晴明塚の原へ行ってみた。

朝霧が立っていた。すでに原には人影が動きまわっていた。みると、藤堂家の足軽たちだった。

「おお、これは」

伝蔵をみて足軽たちはあいさつした。のぞいてみると死体が四つあった。

（あっ）

どれもこれも、家中では刀術の手だれといわれた若侍たちばかりではないか。

（これは）

蒼白になった。

伝蔵はその場から逐電した、という報告を家老藤堂仁右衛門がきいたのは、その日の陽も高くなってからである。

「読めたわ」

にがい顔をして、高虎の前に伺候した。

「昨夜はたしか、伝蔵めがあの原に参っておりました。証拠はござりませぬが、あとを追って原へ行った加勢の人数四人をあやまって斬ったのは、伝蔵めであったかもしれませぬ」

「影法師の仕わざではなかったのか」

「同士討かもしれませぬ。その証拠に伝蔵が勝手に退転しております。原で死体を片づけておった足軽の一人に、伝蔵は、影法師をかならず仕止めるゆえこのまま退転する。と申し残しておったそうでござりまする」

「この一件、かたく秘しておけ」

藤堂の陣中が影法師にほんろうされたというのは、この上ない恥辱だった。豊臣家の恩顧大名のなかではもっとも家康に信任のあつい高虎は、そのことだけをおそれた。

しかし、たれが伝え歩くのか、この事件は、その日の夕方には、京の市中ではたれ知らぬ者のないうわさになってひろまった。

京の色町といえば、かつては二条南北のあたりの柳町ときまったものだったが、いまいちばんのにぎわいをみせているのは、六条室町のくるわであった。

この里は、その柳町の遊里を慶長七年に移されてできたもので、毎夜絃歌の音が絶えない。

「ほう、これは目もまばゆい」

才蔵は、あたりをぞめきあるく遊客をかきわけながら、連れの佐助に話しかけた。

きょうの佐助の服装は、めずらしく牢人風で、細身の両刀をたばさんでいる。

ふたりの様子は、たれがみても、近く行なわれる合戦をあてこんで田舎から京へのぼってきている「陣借り牢人」といったかっこうだった。陣借りの牢人とは、合戦のとき、大名の

陣場を借りて槍かせぎし、功名しだいでは、立身のいとぐちをつかもうという手合である。
「家並がふえたのう」
と才蔵が感心した。
「まったくふえた。このくるわの半分ほどは、こんどの関東の諸隊の京入りをあてこんで、ここ一、二カ月のあいだに急ごしらえした家ばかりじゃ」
そのあいだも、ふたりは、軒先に立つ女どもに袖をひかれては、あやうくひきずりこまれそうになる。
「女もよ」
「ふえた。この戦さ騒ぎをあてこんで、にわかに田舎からかきあつめたのであろう。才蔵、そちらではない」
佐助は先に立って路地を西へ折れ、
「こちらへござれ」
「なるほど、ここはますますにぎやかじゃな」
木の香が路上にまでかおってくるほど、あたらしい普請の家が多い。
「しかし、佐助、おぬしが色町に案内するとは思わなんだ。雨でも降りはせぬか。それともなんぞ、わしに隠したこんたんがあるな」
「ないわ。わしもまんざらの金仏ではないゆえ、色里ぐらいは知っておる」
「ひとこんたんありと見た」

才蔵は、扇子で肩をたたきながら、うたうようにいった。すでに酔っている。その左肩へどんと突きあたった酔漢があった。小袖の上に枯れ葉色の陣羽織をはおった男で、足腰もたしかでない。
「あっ、こいつ」
よろよろと軒先へ泳いで、どさりと尻もちをつき、いきなり刀に手をかけた。
「ぶ、ぶれいな」
「これはすまぬことをいたした」
才蔵が編笠をとろうとしたとき、酔漢のまわりに、わっと黄色い声がわきあがった。さすがは色町であった。ぞめき客に不粋な刃傷をわざとさせまいとして、軒先にいた女どもが、
「殿さま、ようこそござれ」
と、倒れた武士のそばにむらがった。
「おあがりくだされませ。ご武運をつけて進ぜましょう」
わめく男の手をとり足をとって、家のなかへかつぎこんでしまった。
「なるほど、色町じゃ、弓矢を用いずにあざやかに兜首をとる」
「才蔵。この家じゃ」
「ほう、まるで、小城のようであるな」
二階建ての家で、相州屋、とある。佐助は、編笠をとって軒をくぐった。

才蔵がおどろいたのは、妓楼「相州屋」に入ると同時に土間さきから男衆がとびでてきて、
「これは」
と佐助にあいさつしたことである。佐助によほどのなじみがあるらしい。やがて男衆は才蔵のそばにもすりよってきて、
「お武家さまは、こちらでございます」
と二階へ案内した。すでに佐助のほうは、階下の廊下に消えてしまっている。
「どこへ参る」
廊下を歩きながら男衆はそれには答えず、
「へへ、香のかおりがいたしませぬか」
「そう申せば、廊下にまでよいにおいがかおってくるようじゃ。どの部屋にも香をたいておるのか」
「上客には、香をたきまする」
「わしが上客か」
「左様でござりまするとも」
「この部屋は？」
と、才蔵は、足をとめた。
初霜ノ間
とある。

気がついてみると、そのつぎの間は、
雄鹿ノ間
であり、さらに、
若菜
関守
源氏
呉越
花王
と、部屋がならんでいる。いずれも、香の種類（組香の名）なのである。当節、京の公卿や、堺の大町人のあいだで、茶道のほかに香道というものがはやっていることを才蔵も見聞している。
香の原料を組みあわせて練り、それをかいで、種類の当てあいをしたりする悠長な遊びであった。
「大そうなものじゃな。それぞれの部屋に、その名の香を炷いておるのか」
「左様で。……さあ、これへ」
廊下のつきあたりに杉戸がある。男衆はその重い戸をあけ、才蔵をなかに入れると、
「手前はこれにてさがりまする。あとは、小女がおりまするゆえ」
なるほど、派手な小袖を着た童女が、走り出てきて、才蔵の手をとって先導した。やがて、

柱に黒うるしを塗り、金の桐花の釘隠しを打ったみごとな部屋の前へ出た。
「どうぞ、お武家さま」
「この部屋じゃな」
「はい。入らせられまするよう」
「待て。この部屋だけは、なぜ他の部屋とちごうて、香の名をつけておらぬ」
「おほ」
童女は手の甲を口にあて、
「お武家さまはごぞんじでありましょう。この部屋のおあるじさまは、香のかおりを借りずとも、ご自分のおからだがかおる観世音のごときお方でございます」
（ほう、隠岐殿か。これはおどろく。あの大坂の隠密がしらが、遊女のごときなりわいをしているとは……）
やがて、正面の御簾があがった。この妓楼はすべてが御所風の仕組に出来ているらしい。
「影法師どの、ようこそいらせられたな」
「なにをいう」
才蔵は、苦笑した。
「ひさしゅう会わなんだ。とはいえ、近江でわかれてからまだ二月ほどだというのに、世の動きは、はげしゅうかわったな」

「駿府への旅は、大そうな難儀であったと佐助どのからきいております」
「まず、命からがら京へもどったといっていい。とはいえ、一度は大御所の寝所にまで忍び入った。しかしつい討ち果せなんだ。家康と申すひとは、若年のころからまれにみる命冥加のよい人ときいていたが、こんどの旅で、ほとほと、それがわかった。骨折り損であったよ」
ほほ、と隠岐殿はわらい、
「くたびれもうけ、でございましたな。しかし、才蔵どのはくたびれもうけでも、わたくしには、才蔵どのの駿府行きは大きな収穫がございました」
「と申すと？」
才蔵は、まゆをひそめた。この女のいうことは、いちいち、人の意表をつく。
「なんでもございませぬ。才蔵どのが、その道中で、難儀をかさねてゆくうちに、大坂方にお味方申しあげるお気持がついたということです」
「なるほどそのことか」
才蔵は自嘲し、
「わしもここまでくれば、関東と大坂とがどういうことになろうとも、右大臣家の命運の行末まで見とどけるつもりになっている」
「うれしいことと思います」
「しかし隠岐殿、な」

と、才蔵は、あたりを見まわし、
「これが、そなたの京での巣か」
「巣とは、まるで鳥のような」
隠岐殿は、くすくすと笑った。才蔵は、笑わず、
「察するところ、この相州屋は、右大臣家の金銀で建てたものじゃな。客と枕をかわす女衆も男衆も、どうやら、そなたの手先とみたが、どうか」
「お察しのとおりでございます」
「京のまんなかで、妓楼一軒を右大臣家の隠密屋敷にしてしまうとは、おそれ入った胆のふとさじゃ。女とはおもえぬな」
「わたくしはおなごでございますもの」
「それで読めたわ。ちかごろ、京で、さまざまな流言がとんでおるが、その煙のたつ火種は、この相州屋であったとはおどろいた。さまざまなうわさは枕をかわす客たちに、おなごどもがささやくのであろう。そのたばねをそなたがするとは、おそろしいおなごじゃ」
「才蔵さま」
隠岐殿は、笑顔で小首をかしげ、
「左様に申されるなら、ちかごろ京でもののけのように関東の武士を襲うて殺める影法師とは、どなたでございます」
「それは申さぬことよ」

酒が運ばれてきた。
秋の陽足ははやい。すでに陽が落ちたのか、部屋のなかは薄ぐらくなりはじめている。
隠岐殿は、つややかな髪を垂れ髪にし、下着を三枚かさね、その上に金箔を松皮菱の模様にすりこんだ小袖を着、さらに白あやの小袖をゆったりと着て、ほのぼのと微笑した。
灯が入った。
杯を重ねるうち、遠い寺町のあたりから鐘の音がきこえてきた。夜がふけはじめている。
階下に多勢の客がつめかけているらしく、絃の音や歌声がきこえてくる。才蔵は、杯をふくみ、じっと耳をかたむけていたが、
「関東の者じゃな」
隠岐殿もちょっと耳をすまし、
「そのようでござりまするな」
隠岐殿は、才蔵のひざに手をおき、よりかかるようにして酒をすすめている。
「もっと、おすごしなされませ」
「大そうな繁昌じゃ。まさかあの者どもは、この妓楼が、じつは右大臣家の隠密の出城であるとは気づくまいが、知れば魂も消えとぶほどにおどろくことだろう」
「しっ」
隠岐殿は、冗談で指を唇にあてた。

いつのまにか、階下の歌声は、京ではやりの「憂しの影法師」にかわった。

隠岐殿は、才蔵のひざの上においた手を動かし、指で拍子をとりながら、低声でその今様をうたいはじめた。裏声のさびた声で、まろまろと美しくしめっている。

雪かあられか大宮の
月の宮居のわびずまい
世を憂しと住む影法師
憂しや憂し
酔うも憂し
うたうも憂し
恋うるも憂しや影法師

今様の意味は、月の光をあびて都大路をそぞろ歩きをしている者が、どこまでもついてくる自分の影が憂鬱であるとなげいているのである。歌うても憂鬱であるし、恋をしても憂鬱である、というかるい厭世の気分の歌であった。

隠岐殿は、ふと歌をやめ、小首を下から傾けて、

「もうし、影法師さま」

「影法師とはおれのことか」

「おうたいなされませ。いま京でおそれられている影法師ご当人さまのお口からあの歌をききとうございまする」

「おれは、歌がへたじゃ。うたえぬ」

「左様なことを申されずに、な」

と隠岐殿は、目もとがゆるむほどに酔っている。

「おきかせくださいませ。わたくしが舞をつかまつりましょう。いまは隠岐殿では無うて京の室町の遊び女でございます。お客さまのご酒興のためには、おつとめいたさねばなりませぬ」

はらりと朱地に金で紅葉をえがいた扇子をひらいて立ちあがった。立ったまま、

「さてお歌を」

「ならば、歌おうか」

「うれしいお言葉じゃ。今宵は、ふたりきりにて、心ゆくまで遊びましょう。いずれは大坂の命運とともに亡ぶかもしれませぬ身。隠岐にもかような一夜があったとおもえば、後生のよろこびでございます」

ふと涙をにじませている。

（このおなごにも、かような所があったのか）

才蔵は、息をつめ、やがて低く吟じはじめた。

ほどよいころになると、童女がやってきて、才蔵を寝所に案内した。

平素は隠岐殿の居間につかわれているらしく、ちがい棚に料紙、硯箱、書物などがおかれ

ている。どうやらこの間の造作は、隠岐殿が大坂城の殿中で用いている局に模しているらしい。

童女が才蔵の着がえを手つだってくれた。才蔵は用意されていた白絹の小袖に手をとおし、床のなかに入った。

「ごゆるりとおやすみなされませ」

部屋は、あたたかい。

四隅に火桶をおいて間ぬくめをしているからだろう。隠岐殿の行きとどいた心づかいがうかがえる。

才蔵は、灯あかりを消した。

闇がきた。

半刻のあいだ、ぐっすりねむったが、不意にただよってくる芳香に目がさめた。枕もとに、影がすわっている。

「おお」

「隠岐でございます。よくおねむりあそばしておりましたな。あのぶんでは、寝首をかかれても、お気づきあそばさぬかもしれませなんだわな」

「なんの用があって参られたかな」

「なんの用、とはつらい申されかたでございます。わたくしは、室町の遊び女でございますもの。お客さまと枕をかわすのはあたりまえではありませぬか」

「つねづね、枕席にはべるのか」

「こともあり、こともなし。左様なことはさだかには申せませぬ」

「なるほど、よほど身分のよい武士がくれば、寝物語をききさぐるために共臥しをするのであるな」

「才蔵どの」

隠岐殿は、ひくい声でよんだ。才蔵の横へ身をすべらせてきて、

「お胸がやけまするか。左様、と申してくださりませ。わたくしは、かねて才蔵どのを慕わしゅう存じておりました。わたくしのようなおなごにも、このようにしおらしい気持になることがございます。しかしお慕い申したところで」

と、ことばをのんだ。臥床のなかがあたたまるにつれて、隠岐殿のもつ異様な芳香が、才蔵の肌を名香を空薫きするように薫きしめてゆくようであった。

「かような右大臣家の御用をしているわたしの身には、恋うるも憂しでございましょう」

「まして相手はかげろうのごとく心もさだかでない伊賀者じゃ。たがいに恋うたところで、花もひらかず、実もむすばれぬ。しかしそなたとは、八瀬のふろで会うて以来、縁のふかいことであったな」

「花も実も成さずともよろしゅうございます。こよいは、隠岐殿では無うて室町の遊び女としてお抱きくださりませ」

「こうか」

「はい、そのように」

とまでは平素の隠岐殿であったくせにあとは才蔵の胸に顔をうずめて、身を小さくふるわせている。

「隠岐殿、そなたは、奇態なおなごじゃな」

「……」

才蔵には小さなおどろきがあった。

「まだ未通女であったのか」

そっと手をはなした。隠岐殿は、どういう意味か、だまってはげしくかぶりをふった。

子ノ刻（午前零時）の鐘が鳴った。才蔵は、やむなく、女の肌にふれた。

あの早暁、藤堂家の京における宿陣を脱走した彦坂伝蔵には、影法師をひとりでさがしだす手がかりが、かいもくなかったわけではない。

ひとつあった。

（はて、その男がおれの役に立ってくれるかどうか）

多少の不安はある。しかし礼金は、十分に用意している。

（どうせ、金で動く命しらずだ）

訪ねたのは、六角堂の裏に住むビゼ六という男である。

ビゼ六は、いわゆる放免であった。

放免とは、のちの目明しのことだ。ばくち、たばこ売買の禁制など軽罪をおかした囚人のうちとくに犯罪社会に通じている男を所司代役人が、解きはなち、犯罪捜査の手先につかうのである。のちの江戸の岡っ引とおもえばよい。

六角裏にあるビゼ六の家は、仕舞うたや風の紅殻格子の二階だてで、表むきは人足の口入業をいとなんでいる。

伝蔵は、格子をあけた。足をふみ入れると、広い土間に、ひと目みてあぶれ者とわかる立髪のそそけだった五、六人の男が、蓆をしいて、骰子をふっていた。

「いるか」

どの男も、じろりと伝蔵の顔をみた。それだけで、そっぽをむいた。この手あいは、侍を侍ともおもっていない。

「ビゼ六はいるか、ときいている」

「おあるじさま、といえ」

子分のひとりが、歯をむいてどなった。

「ビゼ六でわるいか」

ビゼ六とは、備前うまれの六蔵というのを略した通称である。むろん市中の者が蔭でささやいている蔑称だった。

「うぬは何者ぞい」

「おのれらに名など名乗れぬ。ただ、ビゼ六に、わしがきたと申せ」

「こいつ喧嘩を売る気か」
一同が、大脇差をつかんだ。
「怪我をするぞ」
「こいつ」
ひとりが抜き打ちに斬ってかかったが、大捨流の使い手としてひびいた伝蔵に刃むかえるわけがない。伝蔵のためにきき腕をとってねじあげられ、
「どうじゃ。へし折ってやろうか。それとも、ひと思いに殺されたいか」
家じゅうが、大騒ぎになった。
騒ぎをきいて二階からおりてきた四十すぎの目のほそい小男が、
「おう、これは彦坂はん」
「ビゼ六じゃな」
「久しゅうお顔を拝みまへんなんだが、このさわぎはなにごとどす」
伝蔵が手みじかに話すと、ビゼ六は土間にとびおり、刃物をぬいている男の腰を力まかせにけった。
「ど畜生ども。土下座をさらせやい。このお人にそうがあっては、ただではおかんぞ」
伝蔵は利口な男だ。子分をどなりつけるビゼ六をかえってなだめ、
「おれも名をいわぬのがわるかった。まあ、かんにんしてやれ。あとでこの者どもの助けを

借りることもある。これで」
と銀一枚を投げ、
「酒でも買わせてくれぬか」
伝蔵はビゼ六の居間に通されると、すぐ、人払いをさせた。
「たのみがある」
「なんなりとも。あんたには、むかし、あやうい所をたすけられている」
悪事を働いていたころ、ビゼ六は伝蔵に恩を着ることがあったのか、それとも悪事の仲間だったのかもしれない。しかし伝蔵もビゼ六も、過去の話題にはふれない。
「ちかごろ、所司代の御用をつとめているそうだな」
「そのとおり」
「影法師は、どこにいる」
「なに、もう一度いうてくだはれ」
「影法師よ」
ビゼ六のあめ色の顔が、ゆがんだ。伝蔵は藤堂家でおこった事件を手みじかに話し、
「おれが斬る」
とむすんだ。
「なるほど、影法師をあんたお一人でさがして斬れば立場がようなる、ということどすな。しかし、影法師についてわれわれ市中の放免どもはお役所から火の出るようなお下知で毎日

探索させられているが、まだ居所の見当もつかぬ。あんたからききたいくらいや」
「そうか」
伝蔵はちょっと考え、
「では、しばらく、ここに泊めてもらうことにする。わしもさがす。そのかわり、影法師がみつかれば所司代に報らせる前に、わしに斬らせてもらいたいが、よかろうな」
「それはこまる」
「なぜじゃ」
「それでは、おぜぜ（銭）にならぬ」
影法師については所司代に通報するだけで、銀がもらえるのだ。手柄を横どりされてはたまらない。しかし、伝蔵も心得たものだった。胴巻のなかの金銀をたたみの上にぶちまけ、
「金なら、ここにもある。それにわしと協力した、とあとで役所へいえば、ほうびはさがるだろう」
「しかし、彦坂はん」
ビゼ六は、金には手をふれずるそうな目を光らせた。
「あんたの腕で討てようかいな」
「たかが相手は伊賀・甲賀者であろうとみている。それに、わしの腕についてはそちもよく存じているはずではないか」
「わかった」

ビゼ六はちらばった金をかきあつめ、自分の胴巻に入れてから立ちあがった。
「じつは、ここ数日、わしはどうも臭いとにらんでいる筋がある。人をやってさぐらせているが、まだしっぽがつかめませぬ。今夜あたり、わしがじきじき行って嗅いでみようと思うていたが、ちょうど都合がええ。あんたの供をして参じましょう」
「場所は？」
「室町六条の女宿で、屋号は相州屋や。ちかごろできたもので、所司代への許可は相州屋太左衛門という堺のあきんどの名義で受けているが、その者はちかごろなくなったときいている」
その日、伝蔵とビゼ六は、室町の相州屋に出かけて、宵の口からあそんだ。
琉球ふうのアンペラを敷きつめた間で、にわか普請の妓楼にしては、造作も調度品もこったものである。
ふたりは、円座を尻にあてて、それぞれの女につがれるままに、酒をのんだ。ビゼ六は物めずらしそうに部屋のすみずみを見まわしながら、
「豪しゃな間じゃ。うかれ男は一夜大名、とはよう申したものどすな」
彦坂伝蔵はあまり酒はのまず、大キセルを女にもたせて吸いながら、
「あるじはおるか」
「先代の太左衛門さまは亡くなりましたが、いまはその甥御の二代目太左衛門さまがあとを

継いでおられまする」
「よべ」
「あるじが酒席にまいらぬのがこの町のしきたりでございますゆえそれはごかんべんくださりませ」
「よべぬなら、わしのほうからあるじの居間へ罷り通ってもよい」
立ちあがりかけるのを、女はそでをひいて制し、
「それほど申されるなら、ここまでよんで参りましょう。ただあるじが客席に出てきてご酒興をさまたげるのをおそれただけでございます。お客さまさえおよろしければ」
くどくどと弁解して女が去ると、やがてあるじがあらわれて、廊下に、平伏した。貧相な小男であった。月代をきれいにそってはいるが、元結は銀糸一筋でくくって、みじかい髷をたらしている。
「亭主か。わしは彦坂伝蔵という者である。さかずきをとらせよう」
「へっ」
と恐縮したが、生来不調法のために酒はのめぬ、とものやわらかにことわった。
「では、世間のことなどを聞かせよ。ここへ参れ。時には話もさかなになる」
とまでいわれると、やむをえない。
亭主はひざであるいて、座敷のはしにすわり、やがて一礼して顔をあげた。
佐助であった。

「なんなりとも」
佐助は微笑した。
才蔵も知らないことだが、猿飛佐助は、鷹ケ峰の雲竜院で才蔵とともに暮らすかたわら、この相州屋の亭主になりすましている。
「亭主、訊くが」
「へへっ」
卑屈なほどいんぎんな態度である。そのくせ佐助は、先夜、才蔵とともに晴明塚の原で幻戯をみせてからかったときの相手が、この彦坂伝蔵であると百も承知しているのだ。
伝蔵は、この相州屋のなりたちなどについてつぶさに質問した。佐助はたくみに受けこたえして相手をそらさなかったから、ごうを煮やして、
「客の名を記帳したものがあろう。それを見せい」
佐助はさからわず、手代をよんでそれを持って来させた。
「これはおもしろい。関東の諸軍の遊び者の名がようわかる」
関東の諸部隊が入って以来、京の市中の旅籠には、毎日の宿泊人の名を軒先にはりだすように触れが出されており、遊里も遊客の名を帳場で記帳することになっている。
彦坂伝蔵は、記帳されている名に目を走らせてゆくうち、ふと、
「この阿蘇大宮司家来斎藤縫殿と申す仁は、二、三日前から流連けているようじゃが、神主、

禰宜、神人のたぐいで、ようも銀のつづくものよの」

「へい」

佐助はにがい顔をした。これは本心だった。隠岐殿が才蔵を手ばなさないのを、にがにがしく思っているのである。

「のう、ビゼ六、不審ではないか」

伝蔵がふりむいた。すでにかれらの疑惑は、相州屋そのものよりも、(客に大坂方の諜者がいるのではないか)という点に、かわってきている。

「左様」

ビゼ六は、あいづちをうった。

「亭主、この仁は、どの間にいる」

「お客さまのお居間などは、お教えできませぬ」

「相州屋はん……」

ビゼ六は、横から、ひくい声でいった。

「わしの顔を見知っていよう。六角堂裏にすむ口入屋やが、それは表稼業で、裏にもう一つの稼業がある。きょうはその裏の筋の御用でここへきている。気つけてものをいうてもらおうか」

「存じあげておりまするとも。でなければ、かようなお客のお名簿などはお見せいたしませぬ」

「わかっていれば、可愛らしゅう、その斎藤縫殿とやらの間を教えねばなるまい」

「へい」

佐助の亭主は思案して、

「その斎藤さまに、ここまでご足労ねがうということではいかがでございましょう」

「ならぬ」

「それならばやむをえませぬ。ご案内させまつりましょう。……これ」

と手代をよぼうとすると、伝蔵は手で制し、

「そちがみずから案内せい」

「手前がご案内するのでございますか」

佐助はわざと声を大きくした。その声を、廊下で忍んで立ちきいていた相州屋の手代が、はっと襖のかげを離れ、いそいで二階へあがりはじめた。

手代といっても、佐助の手の下の甲賀者なのである。

すぐ才蔵に通報した。

「なに、所司代役人が？」

「いえ、役人ではござりませぬ。手先の放免と、彦坂伝蔵という男でござります。伝蔵とは例の」

「わかった。すでに斎藤縫殿は、一足ちがいで外へ出たと申せ」

そばにあった編笠をひろった。

出ようとする才蔵の背へ隠岐殿が、低い声をかけた。

「ここで身をかくす場所はたんとありますのに、外へなど出てはなりませぬ」

「この家でうろうろしておれば、相州屋がうたがわれるだけさ。その男につけられる覚悟で外へ出る。今夜は、雲竜院へもどる」

才蔵は別の階段から階下へおり、金銀こしらえのぜいたくな大小を腰におとして、相州屋の軒をゆったりと出た。

日は暮れおちたが、室町の路上は、あいかわらずのにぎわいである。

才蔵は、西へさしてすたすたとあるきはじめた。

男衆が道を横切って辻行燈に火を入れたが、あたりはまだそれほどに暗くはない。すれちがう遊客の目鼻がよく見える。この刻限のことを京ことばでは、

「かわたれどき」

という。彼は誰と書き、誰そ彼（黄昏）とおなじことである。

才蔵は、朱雀の方角へ歩きながら、

（明るうては、まずいな）

自分の力を知っている。かれの剣法は、夜でこそ世に無双の自信はあるが、真昼では、彦坂伝蔵のほうが立ちまさるかもしれない。

（あの残照が消えねば）

目の前には陽が入ったばかりの西山の空が、赤く燃え残っているのである。

彦坂伝蔵は、すでに六条室町の辻行燈のところで、才蔵の背をみつけていた。

「旦那……」

ビゼ六は、さすがに声がふるえている。世間の裏道ばかりを歩いてきた男だが、こういう修羅場をふむとなると、さすがに平素の落ちつきがない。

「所司代に報らせやしょう。あれがもし影法師とあれば、もし討ちもらせばもとも子もない」

「討ちもらしはせぬ」

伝蔵は、前をむいたきりだ。

「勢子の百人もよびやしょう」

「そちの子分だけでよい」

伝蔵にすれば、手柄を役人にうばわれたくないのである。

「しかしあの畜生どもは、たよりにならしまへんどすえ」

「べつに頼りにはしておらぬ」

ビゼ六の子分が、七、八人、それぞれ、大脇差をこも包にして、才蔵のあとをつけている。所司代では庶民が大刀をもつことをきびしく禁じているため、形ばかりの包に刀をくるんで歩いているのだ。

才蔵が最初に道を西へまがったとき、伝蔵はビゼ六にきびしくいいつけた。
「子分どもに小石を拾わせておけ」
さらに才蔵が本願寺の北塀のそばの小道を歩きはじめたとき、人通りは、やっと絶えた。さすが伝蔵はいらだってきた。あたりは、薄墨をながしたような暗さになってきている。
「ビゼ六、二人ばかりつれてあの者の前を駈けろ」
「ど、どういうわけで」
「ころをみて、小石を前後から打ちかけるのだ。その隙にわしは討ちかかる。早くゆかぬか」
「い、いやじゃ」
「行け」
背中を突いた。ビゼ六は観念したのか、突かれた勢いで子分二人と一緒にかけだした。
才蔵は、そういう背後の様子に気づいていた。
ビゼ六が、才蔵の左側を追い越した。才蔵の左手が脇差の柄にかかった。とはビゼ六も気づかない。ビゼ六はさらに数歩走ったが、やがて前へつんのめった。子分が駈けよったときは、ビゼ六の首が、皮一枚をのこして、胴から離れていたのである。
「ぎゃっ」
と声をあげた。
そのときすでに才蔵の影は路上になかった。

才蔵は、ビゼ六の首を左手でぬいた脇差でうち落すと同時に、はねあがっていた。
本願寺の塀むこうにとびおりたのである。
さらに塀の根にそって東へ二十歩ばかり走り、塀の上へとびあがった。
ビゼ六の子分は、すでに逃げ散ってしまっていた。その死骸のそばで、彦坂伝蔵が、腰を居合に落しながら、あたりをうかがっている。
才蔵は、伝蔵の背後にとびおりた。伝蔵は地を蹴ってとびさがった。
「あたりは暗い」
才蔵はひくい声で、
「わしが勝つ。無用の手むかいをやめて、引きとるがよい」
「影法師じゃな」
「藤堂家の家中の彦坂伝蔵とみた。大捨流の使い手として、名は年来、きいている。おそらく骨身をけずるほどの修業をかさねたのであろう。術こそちがえ、わしにも覚えがある。たがいに芸をする身じゃ。おぬしがただの戦場の武功自慢の武士とはおもえぬゆえ、この場は、見のがしてとらせよう。……待て」
相手が右足をふみだしたのを制し、
「わしを討って何になる」
「ほざくな」

「たかが加増があるだけではないか。おぬしはそれだけの芸者でありながら、石高は百五十石小姓組ときいている。大名というものは、刀術というものを低く見、戦場働きのうまい者を高く扶持するのが常例じゃ。命を捨ててまでして、刀術の意地を立てることはないぞ」

「伊賀者め」

「なるほど、伊賀者はいやしい。しかし、おなじ芸をする身ゆえ、このように事を解けて話している」

「退けというのか」

「そのとおり」

あとは伝蔵が沈黙した。

じりじりと足をすすめている。才蔵を斬るつもりなのである。

才蔵は、ふところから、一尺ばかりの筒状のものをとりだした。

かざすと、ぼっと光った。

彦坂伝蔵は、はっとしたらしい。

「おどろくことはない。先夜、おぬしを燐火で迷わした正体がこれよ」

空中にとばした。紐がついているらしくすぐ手もとにもどり、さらに左右前後に動いた。

「伊賀の雨松明というものさ」

雨松明の製法は、まず材料として牛の角の白色のものを選び、その厚さを紙ほどに薄くし、その筒のなかに鵜の羽のくきを二、三十本入れる。羽のくきには、それぞれ水銀をつめてあるから、水銀の蒸気によって月のかさのような曇った光を発するというのだが、くわしいことは伝わっていない。

やがて、その光が、才蔵の周囲をめまぐるしく飛びはじめた。

「ひ、卑怯ではないか」

「伊賀には伊賀の刀法があるわさ」

飛びまわる光のために、才蔵の姿がみえない。

妖怪、と伝蔵はおもわざるをえない。

目の前に現ずる光の弧線が、ときにひとがたをえがき、ときに流れ、ときに地をはうような錯覚を伝蔵におこさせる。

（手のうちはわかっているのだ）

種は、才蔵が割ってみせたとおりなのである。が、そのとき、

「彦坂伝蔵」

背後で才蔵の声がした。

はっと身をひるがえした。しかし背後にはたれもいない。才蔵の手なのである。相手に別の方面から声を感じさせる術は、伊賀では「つばくろめ」という。腹話術のたぐいなのだろうか。そのため、一瞬伝蔵の構えが崩れた。

「いまならおぬしを斬れた。しかし、わしは斬らなんだ。もはやひきとるがよい」

「見たぞ、影法師」

伝蔵はふみこむなり、右にはらった。才蔵の手もとのヒモが切れ、雨松明ははるかに飛んだ。やがて本願寺の塀のむこうへ弧をえがいて落ちた。

「なにを見たのかな」

と、才蔵は、刀を中段にかまえ、キラリと刀の刃を横に寝かした。異様な構えである。

そのとき、才蔵の影が、ツツッと背後に数歩さがるなり、パタリと、路上に伏せた。

「……」

あたりが暗くなっている。伝蔵の目には、路上の才蔵が、黒い布が落ちたように平たくみえた。

（これも何かの手か）

とおもうと、容易に踏みこめない。

が、才蔵にすれば、別の目的だった。

人の足音が聞こえたのである。

それも、一人や二人ではなく、おびただしい数のようにおもわれた。地に伏せ、右耳を地面につけて、足音の近づく方角をたしかめたかったのである。

（所司代の人数じゃな）

逃げるか。

それとも、伝蔵を斬るか。

才蔵は、白刃を左肩にのせたまま、思案した。

遠くで、犬のほえる声がした。所司代の人数にほえついているのだろう。

やがて、あちこちで犬が鳴きはじめた。

「伝蔵、所司代の人数がきたようだな」

と、仲間に話しかけるような口調で、しずかにいった。

伝蔵も、すでに気づいている。逃げたビゼ六の子分が告げたのだろう。所司代の人数が到着しないうちに、この影法師を仕止めなければ、藤堂家には帰参できない。というあせりが、伝蔵の足を跳躍させた。

「かあっ」

と、けものの絶叫のような気合が、才蔵の体を乗り越えた。乗り越えたあと、才蔵は立ちあがった。みぞをとび越え、さらに土塀を乗り越えていた。

伝蔵は、暗い路上で息が絶えていた。

またたくまに、本願寺かいわいは、所司代の人数がもつ松明の火でかこまれた。

町の木戸はすでにおろされ、路上には、各大名から警戒の人数が出て、蟻のはい出る隙もない。

伝蔵とビゼ六の死体が路上で簡単に検視された。触れてみると、まだ肌がなまあたたかった。……とすれば、

「遠くへは逃げていまい」
とたれかがいった。
「……寺か」
と所司代役人のたれもがうなずいた。
「本願寺に逃げこんだのであろう」
すぐに本願寺家老下間丹後守頼道に通報された。
すでに本願寺では、界わいのさわぎに気づいていた。使が到着したころには、すでに外がこいの各門に警戒の篝火が焚かれはじめている。
なにぶん、寺とはいえ、ただの寺ではない。
寺侍、中間、小者までふくめて千人におよぶ大名然とした大寺なのである。
かつては強大な武威をほこった時代もある。それも遠い昔ではない。元亀、天正のころ、石山本願寺（のち、秀吉の大坂城となる）に全国の門徒をあつめ、十一年の歳月にわたって織田信長を相手に世にいう石山合戦をたたかった宗門である。
のち、秀吉が京の下京の地をあたえて移らせて武装を解かせ、家康が先年、本願寺末寺を分割して本山を東西両本願寺にわけ、勢力を半減させた。以来、往年の武威はないとはいえ、警戒の人数にことかくようなことはない。
才蔵が逃げこんだ本願寺は「西」のほうである。
家老下間丹後守は、大名屋敷そのままの本願寺長屋門を八ノ字にひらかせ、人数にまもら

れて床几に腰をすえた。丹後守は若いころ、石山合戦に参加して城方の一方の大将として奮戦した老人で、大きな目が油断なく光っている。
やがて、所司代の筆頭与力平田源左衛門があらわれ、
「役儀によって、境内をあらためさせていただきまする」
というと、丹後守はしばらくだまっていたが、やがて、
「お役儀と申されるか」
「いかにも」
「ならば、境内への踏みこみはゆるされぬ」
寺院は、鎌倉以来、守護大名不入の地になっており、徳川幕府も、とくに寺院に対する司法措置は、寺社奉行がにぎっている。
しかし寺社奉行は江戸にいるのだ。
遠隔の京都では、便宜上、その役目を京都所司代が代行することになっているが、あくまでも所司代の「役儀」ではない。「役儀」は寺社奉行がもっている。丹後守が与力筆頭の不用意な失言をついたのは、そこである。
しかし源左衛門は老練な与力だから、本願寺と事をかまえるのを好まず、いまの失言をわび、あらためて、
「なにぶん火急のことでもあり、境内に人数をさし入れることを、ゆるされたい。この境内に賊が入っておりまする。異名を影法師という」

「なに影法師が」
下間丹後守の表情が、興味ぶかげに動いた。
本願寺家老下間丹後守が、影法師、という名にひどく興味をもった理由は後述するが、すぐ顔色だけはもとにもどして、
「当山に逃げこんだのは、たしかなことでござるかな」
「いかにも」
所司代筆頭与力平田源左衛門はうなずき、
「こうしているまも惜しい。曲者はよそへ逃げるかもしれませぬ。なにとぞ、ご機嫌ようおゆるしあれよ」
とまでいわれれば、下間丹後守も異をたててことわるわけにもいかない。
入山をゆるした。
「人数もお貸しくださらぬか」
それもやむをえない。
やがて所司代と本願寺の人数あわせて五百人ちかい者たちが、手に手に松明をもって広い境内をさがしはじめた。
源左衛門がはじめに想像した以上に大変な作業だった。境内には、阿弥陀堂、本堂のほかにおびただしい建物があり、さがすとなれば、楼門の天井裏までつぶさにさがさねばならな

い。
境内に二十ほどある井戸の中までさがしつくしたとき、
「おらぬ」
絶望的な声がささやかれはじめた。すでに東の空が白みはじめている。
「下間どの、このうえは、阿弥陀堂、本堂の天井裏だけが残っているのでござるが、おすすをはらうつもりで、捕吏をあげさせていただくわけにはいきませぬか」
「それはこまる」
丹後守は、にべもなかった。寺としては当然なことである。
「まげて」
「なりませぬな」
「では当方所司代板倉伊賀守さまから、じきじきご法主に願いたてまつることにいたしてはいかがでありましょう。もしおことわりになるならば、あの影法師は大坂方の諜者ゆえ、ご当山に不利なことになりまするぞ」
「なぜかな」
「なにぶん、ご当山は故太閤殿下と因縁浅からざる寺でござる。あとで影法師が出て参った場合、大坂にご気脈を通じているのか、と痛からぬお腹をさぐられることになるかもしれませぬぞ」
与力は、おどしの手をつかった。

「やむをえぬ」
と丹後守はゆるしたが、顔に出た不快の色はおおえない。
しかし、阿弥陀堂、本堂をさがしても、ついに影法師の足あとも見つからなかった。
夜があけようとしたころ、疲れきった所司代の人数は本願寺からひきあげ、下間丹後守も、境内にある上屋敷にひきとった。
ところが、自室のふすまをあけたとき、たれもいないはずの部屋のなかから、香のにおいがながれてきたのである。
「た、たれじゃ」
「影法師でござるよ」
才蔵がねそべっていた。

さすがに剛愎（ごうふく）の下間丹後守も、声がふるえた。
才蔵はゆっくりと起きあがりながら、
「すこし、ねむらせていただいただけでござる。金品や命までとろうとも思わぬ。お望みなら、刀をあずけてもよい」
「よい度胸じゃ」
丹後守は才蔵から目をはなさず、
「教えてつかわそう。ほんのいましがた所司代の人数はひきあげた。しかしこの部屋も探索したはずであったが、おぬし、どこにいたのか。不審じゃな」

「あのなかよ」
才蔵はあごで、ふすまを指さした。そのふすまをあければ三間間口ほどの大きな仏壇がはめこまれている。才蔵は、その仏壇の上に寝そべっていたらしい。
「ところで、影法師、腹はひもじゅうないかな」
「ついでに酒もほしいの」
「厚顔な賊どのじゃ。ただいまととのえさせよう」
部屋を出ようとした。才蔵は声をきびしくし、
「待った、人をよんではならぬ」
「わしが、所司代へ通報すると思うのか」
「思いはせぬ。が、もし漏れては、ご当山の立場がわるくなる。わしが台所まで行って酒やさかな（ととの）を調えて来よう」
「途中、人にみつかるぞ」
「影法師よ、見つかるようなことはせぬ」
やがて才蔵は、ありあわせの干ざかなと酒をはこんできて、
「まず毒味」
と、ひと口、酒をのんだ。丹後守はあきれて、
「どちらが客やらわからぬ」

このえたいの知れぬ影法師に好意をもったらしい。

「ところで影法師とやら、わしは大坂の豊臣右大臣家がまだご幼少のころに拝謁したことがあるが、ご壮健かな」

「秀頼などは」

才蔵はよびすてにして、

「わしの知らぬことじゃ」

「これはしたり。京に名高き影法師とは、大坂方のまわし者ではないのか」

「まあ、そういうことになる」

「それが、御大将の消息を知らぬとは」

「わしにとっては頼まれしごとじゃ。いちいち、雲の上の人々のお顔までは知らぬ。しかしさすがは本願寺であるな。太閤への恩義をわすれず、わしのごとき者でもかくもうてくれるとはありがたい」

「ただし一度きりぞよ」

丹後守は念を押した。しばしば来られてはたまらぬと思ったのだろう。

才蔵がいったように本願寺には、太閤への恩義がある。

本願寺法主がかつて信長のために大坂の石山本願寺を追われて紀州をさまよったが、のち秀吉の好意でよびかえされ、この下京に土地をもらって壮大な伽藍を営むことをゆるされた。それが今日の西本願寺である。

ところが、本願寺本家であるこの西本願寺は、徳川家に対しては根強いうらみがあった。余談だが、このうらみはその後二百数十年をへた幕末にまでつづき、維新前夜には西本願寺が勤王派になり、東本願寺が佐幕派になっているほどのものだ。

すこしくわしくのべよう。

いわゆる石山合戦ののち、信長と屈辱的な講和をむすんだ本願寺は、城をあけわたし、紀州鷺ノ森、泉州貝塚、摂津天満などを転々とした。ときの法主は、顕如である。

その後、天下の主は秀吉にかわっている。秀吉は、この落魄の法主をひろいあげて、京の七条堀川の地に本願寺を営ませたが、ほどなく顕如は病死し、長子教如があとをついだ。

教如は、気性のはげしい人物で、石山合戦が長期戦になって信長が手をやき、ついに朝廷を動かして和睦を申し入れたときも、あくまで抗戦を主張し、父の顕如と激突したほどだった。

教如は、本願寺の石山退去後、父とはなれて、諸国を流浪した。教如の胸には、

「信長憎し」

の思いが去らなかったであろう。その信長が本能寺で死に、秀吉が織田政権の後継者として天下に君臨するようになっても、教如のにくしみはおとろえない。織田が豊臣にかわっただけのことだ、と思っていたにちがいない。

秀吉のほうも、この教如のはげしい気性をあやぶみ、

「あの男に法主の位をあたえておけば、いつか石山合戦のむしかえしをやるかもしれない」
とみた。
顕如の死後、教如があとをついだが、わずか三年で、秀吉は、教如をして弟の准如に位をゆずらせている。
教如はその後、豊臣政権のつづくかぎり、不遇の歳月を送った。ところが、世がかわった。秀吉が死に、関ケ原での勝利をさかいに政権は家康の手にうつったのである。
家康は本願寺という眠れる獅子を自分の手飼いにしたいと思い、教如にすすめて別の本願寺をつくらせた。それが東本願寺である。いわば、西本願寺は豊臣家の創建であり、東本願寺は徳川家の創建であるといっていい。
そういういきさつがあったから、西本願寺の家老・下間丹後守頼道が、豊臣びいきであるのは、当然なことだった。才蔵もそこを見ぬいて、この老人の居間にかくれたのである。
丹後守は、才蔵が気味わるくおもうほどに親切だった。
「まだ、市中には警戒の人数がみちみちている。夜になるまで、ゆるりとすごされよ」
才蔵は礼をいい、
「所望がある」
と、自分の小袖をつまんでみせた。すでに小袖の模様、色あいなどをひとに見られているために、着かえないと外に出られない。
「おう、気づかなんだわ。すぐととのえてとらせよう。ついでに、大小はどうじゃ。よい刀があるぞ」
丹後守が、無造作に才蔵に手渡したのは、大刀が長船新十郎祐定、脇差が堀川国広の在銘のものであった。
「これは伊賀者づれにもったいない」
「いや、寺にあるよりも影法師どのにこそふさわしい。わしは、豊臣の世が再来することをいのっている」

才蔵は、鷹ケ峰の雲竜院にもどってから、数日、居ねむって暮らした。
雲がさすがにあきれて、
「影法師どのも、このところお休みでござるかな」
「ああ、休みじゃ」
市中に出むこうにも、警戒がきびしすぎて、仕事にならないのである。第一、六条室町の相州屋じたいが、つぶれた。きのう、所司代の手入れがあって、戸口を釘付けされてしまった、という。
その日の早暁、所司代の役人が手入れにむかったときは、すでに相州屋には、なにも知らぬ遊女や小女がうろうろしていただけで、あとは、風をくらって逃走していた。むろん、佐助の亭主、隠岐殿はおろか、甲賀者がばけていた男衆などは、影もなかった。
ところが、才蔵の気がかりなのは、佐助も隠岐殿も、この雲竜院にもどって来ないのであ

る。

きのうから何度も雲を相手に、

「どうしたのかな」

と、くびをひねっている。

「ふしぎじゃな。大坂へ帰ってしまったのではあるまいか」

「まさか、霧隠どのをおいて、左様なことをいたすはずがございませぬ」

「わからぬことよ。わしはよそ者じゃからな」

「おひがみなされまするな」

雲は、あいかわらず、朝早くから市中へ托鉢に出かけてゆく。

ところがその日は、まだ陽も高いのにあわただしく帰ってきて、

「一大事でござる。六条河原に、われらが仲間の甲賀衆の首が八つ、さらされてござる」

相州屋の男衆に化けていた者ぜんぶが、首になっているというのだ。

六条河原の所司代の制札には、

「この者盗賊の所行あり、よって斬首した」

とかかれているだけで、市中の引きまわしさえなかったという。

「どこで、どう捕えられた。市中のうわさをあつめたか」

「聞けるかぎりのうわさはあつめました。なんでも、きょうの未明、所司代の人数が寺町の本寿寺という寺を押しかこみ、一人のこらず討ちとったというのでござる」

「本寿寺？」

「ご存じなかったか。本寿寺と申せば」

雲の説明では、この鷹ケ峰雲竜院における雲とおなじように、甲賀者の僧が、弱年のころから仏門に入って浄土宗本寿寺の住持になっていたというのである。

「すると、六条室町からその本寿寺へのがれていたところを、所司代の密偵にかぎつけられたわけじゃな。ところで、佐助と隠岐殿はどうじゃ。消息をきかなんだか」

「おなごがひとり」

さすがに雲は、声をのんで、

「いた、と申す。その者はたしかに捕えられたと申すが、消息はわかりませぬ。それが隠岐殿でござろうか」

明けがた近くになってから、猿飛佐助が、鷹ケ峰の月光を踏んで雲竜院にかえってきた。

顔にあぶらが浮き、目だけが光っている。ひどく疲れている様子だった。小袖のあちこちに血のあとがあるのをみて、才蔵がわけをきくと、

「返り血よ」

自分自身も何カ所か薄手をおっている。

京の市中を斬りぬけて、やっとここまでたどりついたらしい。

「くわしく話をきこうか」

「いや話にもなにも、あの本寿寺に踏みこまれるとは、おもわなんだわ。佐助の一期の抜かりよ。しかも、隠岐殿が捕われるのを目の前で見ていながら、自分の前の敵をはずすのに精一ぱいであった。敵の目をくらまそうにも、あたりは明るい。どうすることもできるものか。やむなく一同を見すてひとり逃げた」

「隠岐殿はどこにいる」

「わからぬ。おそらく所司代の牢か、大名の宿陣に連れ去られたのであろう。なんとしても隠岐殿を奪いかえさねば、殿や大野修理様に面目がたたぬ。ところが甲賀者のほとんどは大坂城内に入れてしまったうえ、手だれの八人は、本寿寺でことごとく斬られている。奪いかえそうにも、もはや手の者がおらぬ。才蔵、なんとか助けてくりゃれ」

「どうすればよい」

「例の、あれよ」

佐助には、めあてがある。才蔵自身の下忍を使うことだった。

伊賀の霧隠家が代々、京に店を出して下忍たちに商いをさせている。室町の分銅屋がそれなのだ。さきに出てきた孫八をはじめ数人のかしらだった者が、この店の番頭、手代をつとめている。

「分銅屋を使うのか」

「たのむ」

「しかし」

才蔵は、苦しそうな顔をした。

「佐助も存じているように、甲賀と伊賀とはしくみがちがう。おぬしらは主従のつながりで働くが、伊賀は、ひとりひとりの術者がいるだけじゃ。わしはいかに上忍の家にうまれたとはいえ、その者たちに、生死の境をくぐれとはいえぬ。第一、酔狂にも豊臣方についているのはわしだけのことで、あの者たちには、それぞれ別の料簡があろう。それが伊賀者じゃ」

「なるほど」

「わかるか」

「つまり、金じゃな」

「ようみた。伊賀者は、甲賀者のように義では動かぬ。金で動く。佐助、おぬしは軍用金をもっているか」

「ある。……雲、御用金をこれへ持って参れ」

やがて雲が、竹の鋳型に流しこんだ金塊三十個を才蔵の前にならべた。竹流し金一個で大判十枚には吹きかえられるはずだ。大判三百両といえば、なみなみな黄金ではない。

「これだけでどうじゃ」

「承知させてみよう。雲、使いを分銅屋にやって孫八をよんでくれぬか」

「ありがたや。伊賀者が働けば甲賀者より心強い」

「佐助、どこへゆく」

「もう一度市中へもどって、隠岐殿のありかをさぐってみるわ」

霞ノ陣

分銅屋の秘密組織が動きはじめた。

ひとたびかれらが動きはじめれば、そのはたらきは甲賀衆の比ではない。

分銅屋には、孫八ら三人の番頭のほか、手代になりすましている伊賀者が二十人いる。それだけでは手が足りぬために、ほかに伊賀の本国や上方の各地にちらばっている古い仲間をよびあつめ、たちまち孫八の手もとに五十人の精練の者を得た。

当の孫八は、鷹ケ峰雲竜院の才蔵のそばにいていちいちかれらの指揮をしている。

やがて伊賀者の探索によって、隠岐殿の身柄が、所司代から藤堂高虎の宿陣にあずけられていることがわかった。

……それだけではなかった。

あす、ひそかに斬られるというのである。

この二つの事実を、分銅屋の伊賀者たちは、わずか一日で探り出してきている。

甲賀者の佐助は、ただ感心するばかりだったが、これには、からくりがあった。

伊賀者のあいだで、

「市」

とよばれる集りがある。

市とは、噂の市である。甲賀者の社会にはない。市というのは敵味方各家につかえている伊賀者が、京なら京、大坂なら大坂で、月の何日かの夜陰、ひそかに会合し、それぞれが耳にしている情報を交換しあうのである。世の情勢は大小となく、この「市」でわかってしまう。

孫八は、京にいて他家につかえている伊賀者をよびあつめ、市をたてて、隠岐殿の居所をきいてみたのである。この市で、藤堂家につかえている伊賀者が、

「われらがお家におわす」

と教えた。しかも、処刑の日は十一月一日の夜であるらしい。

才蔵は、雲竜院で孫八の報告をきくと、

「これは合戦になる」

といった。

忍者五十人をあつめて一挙に藤堂部隊の宿陣に攻めこむしか手がなさそうだった。隠岐殿をうばうと、すぐ洛外へそれぞれ散ってしまうのである。

「大仕事でござるな。しかし、それだけの荒仕事をやってしまえばそのあと、室町の分銅屋はつぶさねばならぬ」

「つぶせばよかろう。関東と大坂のいずれが勝つにせよ、ゆくゆくは、もはや戦国の世にはもどるまい。忍者は不用になり、分銅屋などは、無用の存在になる。店のあり金は、みなで

分配しておけ」
「しかしわしはよいが」
孫八は狡猾そうに才蔵をのぞきこみ、
「縁もない豊臣家のためにこれほどの大仕事をするわりには、ほうびの黄金が足りませぬな。一同が諸国へ散ったのちも一生食えるほどの金銀をわけあたえておきたい」
「佐助にたのんでみよう」
佐助に相談すると、
「もっともなこと」
と、五十人の伊賀者に、それぞれ大判十枚ずつをくばることにした。その金が利いたのか、あるいはどの伊賀者にとっても、これが生涯に最後の仕事になるかも知れないと思ったのか、異様な気組で才蔵と佐助の下知を待った。

霧隠才蔵が、孫八以下霧隠家手飼いの下忍をふくめて五十人の伊賀者を鷹ケ峰雲竜院の一室にあつめたのは、慶長十九年十月三十日の夜であった。
顔ぶれをみると、さまざまな風体をしている。旅芸人もおれば、小商人もおり、雲水、あぶれ者までいた。
「才蔵さま、ひさしぶりでござりまするな」
と、すり寄ってくる老忍もいる。

才蔵は、まず、三人の忍者をよび、一同の前へ出した。男たちの名は、いかにも異風だった。まず最初の男が、
蘭
というのだ。あとは、
菊
梅
といった。いずれもみやびた忍び名である。この種の植物の異名をもつのは、伊賀でも名張川流域の出身の者の特徴だった。このあたりの育ちの者は、城入りを特技としていたから、才蔵はあらかじめとくに三人をえらんで藤堂家の宿陣である建仁寺に忍ばせ、その地理をたしかめさせておいたのである。
「隠岐殿の牢は、いずれにある。蘭、みなに得心のゆくように説いてやれ」
蘭がふところから建仁寺の絵図をとりだしてひろげた。
建仁寺の境内はひろい。
鎌倉のむかし、建仁二年に僧栄西が工を起こした一大禅刹で、南は五条、西は鴨川、東は下河原まで五万余坪あり、伽藍の様式は栄西の好みによって、中国の百丈山にまねたといわれている。
一時は京都五山の一つに数えられて栄えたこの寺も天文年間に兵火にかかってのちはながく荒廃していた。しかし近年は、関ケ原の敗戦大名のひとりであった安国寺恵瓊が生前再建

に力をつくしたために堂塔諸門がほぼととのい、いまは藤堂家の兵のうち約五百を収容して、なお余裕があるほどである。

「隠岐殿はたしかに、ここにいる、とそれがしはみた」

菊は、絵図面の一点を指さした。

「ほう、それは浴殿ではないか」

境内にある独立建造物で、名のとおり浴場である。浴場といっても、湯をつかうそれではなく、むし風呂のようなものだ。牢にするにはかっこうの建物である。

「ただし、いまは使うておらぬ。この浴殿のなかに牢格子を作って隠岐殿は入れられている」

「見張りは」

「士分三騎、足軽十人」

「手薄じゃな」

「大坂方の間者とは申せ、隠岐殿は女性の身にあられる。出陣を前にしてたかがおなごひとりにぎょうぎょうしい人数を配置するのは、藤堂家としても武門の手前、恥ずるのであろう。それが、こっちにとっては思わぬさいわい」

「いかにも」

才蔵は、手配りをこまかくのべた。

五十人を四隊にわけ、午後十時の時鐘を合図に東西南北から侵入し、一隊は隠岐殿をうばう。他はふせぐ。仕事がおわると同時に、地上から蒸発するのだ。

「陣法は」

とひとりがたずねた。才蔵は即座に、

「霞ノ陣を用いる」

伊賀者が城入りをするときにつかう得意の戦法なのである。

「とは、ひさしぶりでござるな」

老忍の田草という男が、微笑した。若いころ、石山本願寺にやとわれて霞ノ陣を用い、織田方をさんざんになやました経歴をもつ男である。

「したがって、火術は用いてはならぬ」

と才蔵はいった。

「知れたこと」

老忍はいった。霞ノ陣では、火は禁物だった。第一、藤堂の宿陣に火を掛ければ、市中に屯営している関東の諸軍がいっせいにわきたち、京へ入る七口を押えられて五十人の伊賀者は逃げ場をうしなうのだ。

「しごとがおわれば、めいめい、思う方へ逃散せよ。これは、当座の路用じゃ」

それぞれに金銀をくばった。忍者はもともと禄をもらわず、金をもらう。金銀のつめたい感触が無性にうれしいらしく、

「ありがたし」
「さすが天下の豊臣家じゃ」
と、口々にいった。
「では才蔵どの、散ってよいな」
「念のためにもう一度いおう。蘭、菊、梅は、埋兵となる。すぐ出立せよ。他は、いまから市中に散るがよい。明夜、四ツ（午後十時）の時鐘が鳴れば、それぞれ忍び口から入るのじゃ。そのときわしは矢ノ根門の屋根のうえにおり、甲賀の佐助は矢ノ根門の下にいる。よいな」
「承知」
散った。
その中の蘭、菊、梅が埋兵として建仁寺に潜入したのは、この夜のうちである。三人は明夜の忍び入りまで、いっさいの支度をととのえておかねばならない。
埋兵のしごとはいそがしい。井戸に毒を投じておくことなどもそのひとつである。
毒は三度にわけて投ずる。最初の毒は「惨」といい、飲めば軽い下痢をおこす。つぎを「瘴」といい、倦怠感をおこさせる。最後に投ずるのが「癘」である。睡気がおこり、運動能力が麻痺し、戦闘に役だたない。敵を殺すほどの毒物を用いないのは、毒死が出たばあい、城内がさわいで、その水を飲まなくなるからであった。
そのほか、牢にいる隠岐殿へ連絡しておかねばならない。大事なことは、井戸に毒を投じるために隠岐殿には宿陣で作る食事をたべさせないようにしなければならなかった。

そのため、飢渇丸を隠岐殿にあたえておくのである。
飢渇丸というのは、忍者特有の食餌で、この丸薬を一日に二、三粒のめば十日ぐらいは一片の食物もとらなくても大丈夫だという。
伝書では、ニンニクの粉末十両、ソバコ二十両、カンゾウ粉末一両、ヨクイニン（薏苡仁）粉末十両、ヤマノイモ粉末若干を、三カ年にわたって酒三升にひたし、酒がかわききったところで、モモの実ほどにまるめるのである。

その夜、四ツの時鐘が鳴ったとき、隠岐殿は、牢のなかで、外を吹きすさんでいる風の音をききながら、身を固くしていた。さむい。すでに秋も暮れはて、あすから霜月なのである。
ふと、格子の間から牢番の足軽の顔がのぞいた。
「おい、どうした、寝ねえのか」
隠岐殿は横をむいたまま黙殺した。
「寝ろ」
「寝れば、こごえてしまいましょう」
夜具といえば板敷の上に蓆が一枚、その上に紙でつくった衾が重ねられているだけである。
「お吟味を洩れきいたのだが、てめえは京をさわがした影法師の女親玉ということじゃねえか。それが、そのくれえのことで寒がるなんざ、妙なこった。寝ろ。刻限になりゃ寝るというのが御牢のご法度だ。痛え目にあわされたいか」

「どうするのです」
「こうするのさ」
足軽は、六尺棒を差し入れてきた。あつかいが巧みなのは、棒の心得のある男らしい。避ける間もなく、とんと胸をついた。
「なにをなさいます。無礼があっては容赦はいたしませぬぞ」
「なにをいやがる」
罪人の権高な態度に、足軽はむっとしたらしい。どうせ明夜は密殺される女だ、というはらもある。
「影法師の親玉といや、安達ケ原の鬼女のようなおなごかと思うたが、面相だけはしおらしい。どれどこが鬼の相なのか、ゆるりとみてやろう」
あっというまに隠岐殿の股に棒が蛇のようにからみついてきてすそを割った。隠岐殿は倒れた。懸命にとざしているひざを、棒が楽々とこじあけ、足軽は息をのんだ。
「なるほど、いいなりをしてやがる。……おい」
となにかいいかけたとき、足軽のまぶたが急に垂れ、関節の力が溶け、手から棒が離れた。そのままずるずると格子の前に折りくずれた。
隠岐殿は、異変におどろき、はっとすその乱れをなおして起きあがった。
格子から外をのぞくと、男は死んだわけではないらしい。寝息をたてている。おなじ土間で仮眠している他の二人の牢番も、体を横たおしにして正体もなくねむりこけていた。

ふと、隙間風がさしこんだのか、すっと燈火が消えた。
同時に隠岐殿の背後に黒い影が立ちのぼった。かと見るうち、影は隠岐殿の手をつかんで、固いものをにぎらせた。
「飢渇丸でござる。食されよ。そのかわり、あすの夜まで、牢の食物は食されるな」
「あ、あなた様は」
「霧隠才蔵さまの下忍にて蘭と申す者でござる。明夜、四ツにお迎えに参上する」
ついにその当日がきた。
隠岐殿は、朝から日の暮れるのを待ちかねていた。
(たしか、才蔵どのの下忍は、四ツに来ると申したな)
何度も思い暮らすうち、ついに鐘が鳴った。四ツを報らせる僧堂の半鐘が、しずかにひびきわたった。最後の音を数えおわって、隠岐殿の胸はおどった。
不幸にも風はない。
しかも板のすき間から、星空がわずかにのぞいている。忍び込みには、有利な夜ではなかった。
そのとき不意に数人の人の足音がして、牢の錠ががちゃりと鳴った。あっと隠岐殿は立ちあがった。
「おんな」

声がちがう。

「陣中目付どののお見廻りである」

目付という男は、平服の士分の者三人を従えていた。隠岐殿がぎょっとしたのは、片方の目が焼けただれてつぶれている。

「牢番、用意はよいな」

目がするどいわりには、声に力がない。ふしぎとどの男も病人のように青ざめている。それが、蘭、菊、梅が工作した「死井」の術のせいであろうとは、むろん隠岐殿は気づかない。いつも夜になれば境内を駈けまわりながらなく犬の、ほえる声も今夜はきこえなかった。蘭たちが始末したのだろう。

隻眼の武士は、ぬっと牢内に入ってきた。あとの者は、水を張ったタライをかつぎ入れた。狭い牢内は、数人の男で身動きがとれぬほどになった。

「おんな。ふびんじゃが」

隻眼の男は、じっと見つめた。隠岐殿は眉をあげた。

「ころす」

隠岐殿の唇は、わずかにひらいた。いつか非業に倒れることは、豊臣家の家老大野修理から密命をうけて以来、覚悟をしていたことだが、さすがに身のうちに小さなふるえの走るのをどうすることもできない。

「うわさにたがわぬ美貌じゃ。殺すにはいかにも惜しい」

隻眼の陣中目付が、扇子をさしのべて、隠岐殿のあごの下にあてた。扇子のさきにぐっと力をこめると、隠岐殿の顔があおむけざまになった。

「形のよい唇をしている。なんぞ、ものをいえ。いわぬか」

「無礼でございましょう」

「よい声じゃ。その声がやがて聞こえ無うなるかと思えばふびんじゃな。しかし、軍陣の法として諜者の罪はおもい。車裂きにされるか、鋸引きで一寸刻みにされるか、尋常の手段では冥府にゆけぬものと思え。しかし、所司代からひそかに息の根を断て、というお指示があった。首をはねるのもよいが、ここは寺門のなかじゃ。血でよごれることを僧たちがきらう。よって、溺死させる」

（溺死？　鴨川へ投げ入れるのか）

「だらいをもて」

足軽たちが運んできた。

「溺死させるのに、大河や海は要らぬ。数升のこの水があればたくさんじゃ、それ両腕をねじあげよ」

足軽たちが、隠岐殿のからだをおさえ、両側にいた二人の者が腕をねじあげた。

「顔を浸けい」

「厭っ」

といったのが、隠岐殿の最後の声だった。あとは、髪の毛の生えぎわが濡れるまで顔を沈

められた。

才蔵は、建仁寺矢ノ根門にあがって、星空の下にくろぐろとうずくまる諸堂諸門を見おろしていた。

矢ノ根門というのは、勅使門のことだ。平家の六波羅府の門を移したと伝えられ、いつの時代の合戦のものか、門の扉に矢傷が無数にあるところから俗に矢ノ根門とよばれている。

四ツの鐘が鳴った。

……動いた。

いや、うごく気配がした。才蔵自身の目でさえさだかでなかったが、このひろい建仁寺境内の四方で、むくむくと盛りあがりつつある黒い影の気配がした。

（ぶじ、忍びこんだな）

門の下には佐助がいるはずだった。才蔵は脚を曲げ、ひょう、と黒い天に跳んだ。

「才蔵か」

待ちうけた佐助が唇の動きだけでものをいった。声はない。

「ほう、殺生をしたな」

佐助の足もとには、足軽の死体が両三人横たわっている。

「やむをえぬ。……ところで才蔵、霞ノ陣は、わしひとりで下知をするゆえ、おぬし、浴殿へ行け」

「浴殿には、蘭、菊、梅がいる」

「とはいえ、隠岐殿を救いだすのは、おぬしでなければなるまいぞ」

「なぜじゃ」

「なぜか、とまではわしのような男にはわからぬわ。しかし男女の情とは、左様なものではあるまいか」

佐助は仏頂面のまま、とん、と才蔵の背をついた。行け、というのである。

「やくたいもない」

才蔵は、境内の闇に視線を移した。

……霧が流れはじめていた。

五十人の伊賀者が仕掛けた霧であった。

仕掛けは、簡単である。境内のあちこちに焚かれている篝火のなかに、煙玉をほうりこむだけのことだ。ただ、篝火をかこんでいる足軽たちの気づかぬように煙玉を闇のどこかから投げ入れることは、異常な習練を要した。

そのころ、のことである。隠岐殿がタライのなかで、

「溺殺」

されようとしていたのは。隠岐殿はすでに死を覚悟していた。苦しみに堪えた。しかし苦しいのはあやうく絶息しかける瞬間、はっ、と顔をあげさせられることだった。息を半ば吸いこんだときふたたび目鼻を水中に投入せられる。気管に水が入り、覚悟はできていても体

が夢中でもがいた。それが陣中目付たちの役得というものだった。この美しい罪人のもがく肢姿を楽しみたかったのである。

そのとき、不意に片すみの燭台がにぶい轟音とともに倒れた。

「な、なにごとぞ」

そのとき、白煙のこもる牢内で、たれにも気づかれぬ小さな異変があった。天井の板が一枚はずれたことである。その穴のなかから、黒い蜘蛛のような影が、すーっと群れのなかに落ちた。

影は、三つ。最初の影は蘭である。つづいて、菊、梅が、白煙のなかに降り立った。

かれらは、するすると群れのなかにまじった。

一瞬、異様なことがおこった。

「ぐゎっ」

という奇妙な声が陣中目付ののど奥から洩れた。あごがはずれたのだ。この男だけではない。目付の家来、足軽のあごが、いっせいにはずれたのである。

あごだけではなかった。

またたくまに手足の関節がはずされ、骨のない軟体動物のようになって床の上にころがった。

それぞれののどの奥から奇妙なわめき声があがったが、それも瞬時だった。三人はすばや

く作業をした。どの男の口にも、布が押しこまれた。

蘭が隠岐殿をおこした。覆面のなかから微笑して、

「お気分はいかがでござる」

「あなたは、どなたでございます」

と隠岐殿は蘭をみたときはじめてこの「異変」に気づいた。それほどかれらの作業は神速だったのである。

「拙者でござるか」

覆面はとらない。

「昨夜の蘭でござる」

「あ、才蔵どのはどこにいますか」

「お連れ申そう」

牢のさやの外に出た。土間にも、数人の足軽がころがっている。かれら三人とは別の一隊が始末したものだ。

ぐゎらり、と浴殿の戸をあけると、星の光が境内にみちていた。霧は、薄れはじめて、境内のそこここの物影が、くろぐろとみえている。……まずい、と蘭は思ったらしく、菊をふりかえって、

「あいにく西風が出ている。あらかた、霧が消えうせたわ」

「とにかく、矢ノ根門まで駈けよう」

そのとき、境内のどこかに吊るされている半鐘が、気がくるったように乱打されはじめた。
「気づいたな」
蘭は眉をひそめた。
遠い境内の一角で、おびただしい人の影が走りはじめ、なにかを口々に叫んでいる。
「隠岐殿」
「はい」
「目をつぶられよ」
いきなりかつぎあげられたかと思うと、蘭は飛雲に乗ったかのように駈けはじめた。その前後を、菊と梅が駈けてゆく。法堂の東がわまできたとき、物蔭からとび出してきた武者が、槍をかまえて立ちふさがろうとしたが、菊の投げた十字手裏剣でのどを掻かれて倒れた。
武者がとび出してくるたびに、菊と梅の十字手裏剣が始末した。さえぎる者をゆるさない異神のようなたくましさだった。
「あれよ、あとを追え」
背後から声がきこえた。
方丈のほうから、松明をもった一団の者が、地響きたてて追ってくるのである。
矢ノ根門がみえる所まできたとき、蘭は息の乱れもみせぬしずかな声で、
「隠岐殿、このあたりは、われらの仲間が鉄ビシをまいてござる。足では歩けませぬ。よろしゅうござるか。すこし跳びまするぞ。しっかと肩につかまっていてくだされ」

蘭は、あらかじめその地点に竹竿を置いていた。それをひろい、ひらり、ひらり、と奇妙な足どりで走りはじめたかと思うと、やがて、
「はあっ」
とするどい呼気を吐き、黒い天にむかって数丈飛びあがった。
隠岐殿が蘭に背負われて矢ノ根門の脚にとびおりたとき、佐助が待ちうけていた。
「ごぶじで何よりでござったな」
地に伏せながらいった。
「才蔵どのは、いずれにおりますか」
「それに控えおりまする」
「どこに？」
隠岐殿は必死の目であたりを見まわしたが、闇のなかにそれらしい影はなかった。
「みえませぬ」
その実、才蔵は、隠岐殿とほとんど背合わせするほどに近い松の木の影に埋もれて立っていた。ただ、気息を絶ち、隠形の術を用い、ひたすらに法堂の方角をにらんでいた。その方角から、敵の松明の群れが近づいてくるのである。
「いずれ」
と佐助はいった。

「あとで才蔵があいさつ仕りましょう。いまはそれどころでございませぬ。早うお逃げくださるように。……蘭どのお頼み申す」

佐助の声がおわらぬうちに、蘭は隠岐殿の体を抱きあげた。菊、梅がそれをかこみ、門扉をひらいて大和大路の方角の闇に消えた。

と同時に、境内の北の方角から、けたたましい犬の鳴き声が群がっておこった。声の急迫した調子では、犬が曲者を見かけて追いまわしている様子だった。しかも声は次第に遠ざかって、下河原の裏門の方角に移動してゆくではないか。

その声をきいて、追手の松明の群れが動揺した。

「あっ、裏門の方角に逃げたのではあるまいか」

「追え」

追手が二分された。藤堂兵は、みごとに霞ノ陣のからくりにかかったのだ。犬は裏門の伊賀者たちの擬声である。

擬声につられて追手が裏門にまで駈けつけたとき、右側の開山堂の大屋根の上に、ぽつり、と星のように青く小さな光が浮かんだ。

「星か」

とみるまに、青い火は十ばかりにふえた。追手のなかに戦場馴れした者があり、

「ではあるまい。伊賀者が用いる大国火矢であろう」

そのとおりであった。やがて星のように美しい伊賀の大国火矢が、ひょう、ひょう、と飛

んだ。

つぎつぎとおびただしい数の星が、星空に乱舞しはじめ、それらが境内の松の一もとずつに突き刺さっては、白煙を噴きあげた。「忍霞ノ術」という。大国火矢に仕込んだ煙薬の燃焼によって、霞のとばりをつくるのである。

一方、才蔵と佐助がいる矢ノ根門の付近では、藤堂兵たちは一面に撒きつめられた鉄ビシを踏み抜いては、悲鳴をあげていた。

「さがれっ」

と物頭らしい男が大声で下知をした。

「それ、雨戸、畳のたぐいをもて。これを矢ノ根門まで敷きつめよ」

それをきいたとき、門のそばで才蔵が、そっと佐助にむかってほくそ笑んだ。

「佐助、どうやら敵は思う壺にはまってきたようじゃな」

「いかにも。こうしてみるところ、味方はそれぞれ無事に逃げ散ったらしい。境内に残っているのは、おぬしとわしだけじゃ。京の置きみやげに、今夜は藤堂の宿陣を思うさまに荒らしてみるか」

「おもしろかろう」

たちまち、矢ノ根門までのあいだに、畳、戸板が敷かれた。一面にまかれた鉄ビシを川にたとえれば、これは一すじの橋といっていい。

「わあっ」

と藤堂兵が、二列縦隊に押しならんで畳の橋を渡った。才蔵と佐助にとっては、これまた思うつぼだった。この隊形では何百人がいどみかかって来ようとも、相手は前面の二人にすぎないからである。

「おう、えたいの知れぬ者があれにおりまするわ」

たれかが叫んだ。なるほど、矢ノ根門の門扉を背にして、忍び装束の才蔵と佐助がならんで立っているのである。

「いたか」

物頭が槍をしごいて進み出、

「何者ぞ。名があろう」

「影法師……」

あっと一同が動揺したとき、物頭だけはつんのめるような勢いで佐助にむかって槍を突き入れてきた。

佐助は跳びあがって物頭の兜の眼庇の下を蹴った。どうと相手が倒れるすきに、そのまま門の軒をつかんだ、と、みると、くるりと屋根の上へはねあがっていた。目もあざやかな早わざといえた。

その間、才蔵は敵から槍を奪いとり、前列の二、三人を突き倒している。

「矢で射すくめよ」

鉄砲を用いなかったのは、藤堂家としても京の夜を騒がせることを好まなかったのだろう。弓組が前に出た。

が、屋根の上から佐助が射はじめた半弓の矢のほうがはやかった。

矢つぎばやに十数条の矢が降ってきて、追手はばたばたと倒れた。指揮者がたまりかねたのか、

「鉄砲」

と下知したとき、異変がおこった。矢ノ根門の脚から閃光がほとばしり、

轟っ

と白煙が舞いあがった。と同時に門が煙のなかにつつまれてしまった。

才蔵と佐助は建仁寺境内からぬけ出ると、大和大路を南へ、魔のように駈け、さらに東に折れて東山に入り、山中を北上して鷹ケ峰の雲竜院にもどったのは、すでに陽も高くなってからであった。

隠岐殿が出むかえた。

「才蔵どの、礼をいいます」

「恩に着てもらうほどのことでもない」

「なぜでございましょう」

「佐助の手もとに竹流し金があったればこそできたことで、金のおかげさ」

「でも」

「おれはねむる」

この男の常で、その場にごろりと横になると、正体もなくねむり入ってしまった。

淀の川風

それから数日たった夕刻、京の粟田口から伏見への街道は、兵馬の往来でさわがしくなった。将軍秀忠の率いる関東の本隊が到着したのである。慶長十九年十一月十日、この日は夜に入って霧が深かった。

秀忠はその夜伏見城に一泊し、翌朝はやくから二条城の家康に謁して着陣の報告をするとともに、大坂攻めの作戦の打ちあわせを行なった。

関東の兵は、すでに十万にふくれあがった。京の住民は、これから行なわれる大合戦に恐怖し、唇を青くして遠来の人馬をぼう然とながめている様子だった。

十一日の昼すぎ、才蔵は、馬に乗って、京から伏見を通過した。途中、何度か、関東の兵の検問に遭ったが、そのつど例によって、

「肥後国・阿蘇大宮司家来・斎藤縫殿」

で押し通した。そのための手形も用意している。

「所用は」

と問われれば、

「香取・鹿島へ参拝して東国にくだり、ただいま九州へくだる途次でござる。これなるは」

と佐助を指さし、

「若党の長次。あれなるは」

とわざと街道の塵にまみれた旅装をして馬上に横座りをしている隠岐殿をあごでさし、

「妻でござる」

伏見から大坂までは九里。才蔵たち一行が淀川堤をくだって枚方ノ宿のあたりまできたときに陽が暮れた。

「隠岐殿、このあたりのやどは、旅客で満ちているはずじゃ。里の家も戦さ騒ぎで、うかつに人を泊めまい。野宿でもするか」

「大坂の京橋まであと五里と申すなら、あすの朝までには着きましょう。このまま夜をこめて歩きまする。京における任を終えた以上は、一刻もはやく大坂へもどりたい」

「それほどにもどりたいのか」

城にもどれば、兵火が待っている。あすの命も知れがたいのだ。しかし隠岐殿は自分の宿命をあきらめきった者のように、

「わたくしが生まれて育ったお城でございますもの。それにあの城のほかに、もどる家がありませぬ」

隠岐殿は白い横顔に微笑をのせた。この女らしくしんの強い表情である。

「それとも、才蔵どのが、ここから、どこぞ遠い国へ連れて逃げてくださるというのでございますか」

ほほ、と笑った。

「これ、佐助がきいている」

佐助はとみると、隠岐殿の馬の口をとりながら、下をむいて、ぽくぽくと歩いている。その様子では歩きねむりをしているのかもしれない。

「もう隠密の仕事はおわりました。あとの合戦は殿方のなさることで、わたくしには御用はございませぬ。もし才蔵どのさえよければ」

才蔵はだまっている。

佐助がわざと咳ばらいをした。

河内守口の宿場についたのは、あけ方に近かった。この宿場から大坂城の京橋口まで、あと二里ほどしかない。隠岐殿は、かぶ畑のなかの宿場の灯をみながら、

「ここまで来れば、お城内に入ったようなもの」

事実、堤の上から見おろすと、そこここに篝火をたいて駐屯している大坂方の兵のたまりがみられるとおり、このあたりは大坂城防衛の最前線といってよかった。

「わたくしは、着更えをいたします」

隠岐殿の旅装がよごれすぎているし、使いを走らせて城内から乗物の迎えを待たなければならなかった。

旅籠十六屋武兵衛方へ入った。

才蔵がひと風呂あびてもどると障子のそとが、すっかり明るくなっている。そのむこうに、巨大な大坂城の天守閣がちかぢかとみえた。

「才蔵、隠岐殿とはここでわかれる。隠岐殿には、大野修理どのの迎えがくる」

「われわれは、どうする」

「すでに城内に使いを出してあるゆえ、穴山小助が人数をつれて迎えにきてくれるはずじゃ」

「おれの仕事も終わったな」

「なに？」

佐助が、けげんな顔をした。

「まだ終わるどころか、戦さはこれからじゃ」

「その戦さは、槍武者、葉武者どもがやればよかろう。わしはごめんこうむる」

「また左様なことをいう。真田の殿がお待ちかねであるぞ。城に入るのが、いやか」

「いかさま、気がすすまぬな」

「なぜじゃ」

佐助は、うんざりした調子である。

「真田殿の家来になれば、ただそれだけのことじゃ。こうして青空の下にただ一人おれば素牢人ながらも天下に頭をさげねばならぬ義理はどこにもない」

といいながら、才蔵はふと路上を見おろした。その拍子に、これほどの男が、顔色を変えた。
「どうした」
佐助がのぞきこみ、
「おお、あの巡礼女は」
「見たか。佐助、逃がしてやれ。さわぐなよ」
笠の下の顔は、まぎれもなく草津から姿をくらましたお国であった。隠岐殿の侍女として仕えながら、その実、関東の諜者だった女である。
「逃がすわけにはいかぬ。敵方の諜者とわかれば、有無をいわせず斬りすてるのがこの道の常法じゃ」
見られているとは知らず、そのお国が、何気なく笠をあげた。不意にお国の目が才蔵の視線をとらえた。
（あっ！）
という表情をお国はした。意外にも怖れがなく、はげしいよろこびがうかんだ。
お国のその表情を見たとたん、才蔵は刀をつかんで立ちあがっていた。なぜ惹き入れられるように立ちあがったか、その心の動きは、才蔵自身でさえ説明がつかない。……まして佐助は、
「どうしたのじゃ」

と、あきれたように才蔵をみている。才蔵はやや当惑したように佐助を見返してしばらくだまっていたが、やがてみじかく、
「出る」
「どこへ出るのじゃ。ほどなくお城から穴山小助らが迎えに来るというのに、うろうろされてはこまる。ここで落ちついていやれ」
「佐助、あれはわしがおなごじゃ」
「おぬしのおなごか」
佐助は、一瞬、複雑な表情をした。しかしすぐ袴のすそをとらえ、
「たのむ、ここに居てくれ。小助らがきておぬしがおらぬとなれば、わしの顔が立たぬではないか」
「はなせ」
「離さぬわ」
佐助は、この仲間が、いかに気まぐれな男かを知っている。そのまま旅籠を出れば、ゆくえも知れなくなることを恐れているのだ。
「才蔵、さては、おのれ、戦さが恐ろしゅうて逃げるのじゃな」
「おれが臆病かどうか、おぬしが一番知っていよう。いずれ大坂城におぬしを訪ねてゆくこともあるかもしれぬ。佐どの（真田幸村）によしなに伝えておいてくれ」
「女を追うて雲隠れしたとな」

「それでもよい」
才蔵は、深編笠をかぶって旅籠を出た。旅籠の裏口に、淀川の堤がある。
お国は、その堤の根にしゃがんで、才蔵を待っていた。才蔵がかならず出てきてくれるものと信じきった表情である。
「あの」
と歩み寄ってきた。
「すこし歩こう」
堤の上へ出た。足は、自然、大坂のほうにむかっている。
「なぜ左様な巡礼のかたちをして、このような所にうろうろしている。まだ関東の隠密をしているのじゃな」
「ちがいまする。そのようなあぶないことはあの草津ノ宿でお別れして以来、ふっつりとやめました」
「そちはうそをついている。そちがやめようと思うても、隠密の組織というものは容易にやめさせぬものじゃ」
「逃げました」
「ほう、味方の手から？」
「はい」
「しかし、それにしてもなお旅姿でいるとは、つじつまの合わぬことじゃな」

「おわかりいただけませぬか」
お国は、淀川くだりの川船の帆をながめながら、ひくい声でいった。
「ずいぶんとおさがし申しました。お別れしてから、お国は、才蔵さまをお慕い申している自分の気持が、これほど強いものだったのかとあらためて気づいたのでございます。……それで」
「やめるがよい」
才蔵は、つよい語調でいった。
「男女の色恋などくだらぬ」
そのくせ編笠のなかの才蔵の顔に、ほのかな血がのぼっている。この男にすればめずらしいことだった。

才蔵にとっては、夏いらい数カ月ぶりの大坂だったが、町の様子は、これが大坂かと思うほどに変貌してしまっている。ひと口でいえば、この国最大の武装都市だった。
「目がさめるようじゃ」
才蔵は、足にまかせて市中を歩いた。そのあとをお国がすがるようについてくる。
防衛の規模は、とほうもなく大きい。
大坂の北東を流れる淀川の鴫野、今福から片原町にいたるまでのあいだの堤は、まるで城塁のように土あげしてあるのだ。しかもそのところどころに櫓を組んであるから、唐土の万

里ノ長城を連想させる風景である。さらに川のなかには乱杭を打ちこんであるために、敵兵は舟で渡ることはできない。

また、玉造から猫間川まで新しく堀を二丁ばかり掘さくし、そこにも塁壁を設け、南は、生玉から玉造まで高さ一丈の石塁をえんえんと築き、十間ごとに櫓を設け、銃眼をうがち、それぞれ鉄砲十挺ずつ入れてある。

さらに急造の防塞を木津川尻、博労ケ淵、阿波座、土佐座、河原町、福島に築き、遠く野田、海老江、中之島、伝法、九条にまで兵の駐屯所をおき、さらに伝法の川口には、海路の敵を迎え撃つために、ろ五十挺を装備した日本最大の戦艦安宅丸をつないである。

（これは大そうなものじゃ）

才蔵はあきれる思いだった。

城兵は十万。

町に充満している。

お国も溜め息をついて、

「才蔵さま。おなごにはわかりませぬが、大坂と関東の合戦は、いずれが勝つのでございましょう」

「このぶんでは、かならずしも関東が勝つとはかぎらぬな。よい勝負じゃ」

旅籠は、本町橋から西へ二丁ばかり歩いたあたりにある大和屋平右衛門にとった。

宿は、大そうなにぎわいである。自然、才蔵とお国は、十畳に六人も相客のある部屋に押

しこめられた。

同室の客は、ほとんどが西国の各地からのぼってきた商人たちだった。大坂城はぼう大な軍需物資を要求しているためにいまが儲け時というのだ。

いざ床につこうとしたときになって、にわかに階下がさわがしくなった。

やがて亭主に案内されて、足軽四、五人をつれた武士が、才蔵たちの部屋の障子をがらりとあけた。

「阿蘇大宮司家の家来斎藤縫殿と名乗る者はおるか」

「……」

才蔵は、じろりと武士をみた。

城下のきまりによって、旅籠の軒下には宿泊人の名をはり出すことになっている。名を知っているのは当然のことだが、それにしても問い方が乱暴すぎるようである。

「わしが縫殿だが」

「詮議すべきことがある。者ども、それっ」

足軽たちが踏みこんできて、才蔵の両腕をとった。その間、武士はギラリと大刀をぬいた。すっと手をのばして、切先を才蔵ののど元に擬した。

捕縄が体にまきつこうとしたとき、才蔵は、

「なぜ縄を打つ」

「理由は、屯所で教えてやる。おとなしゅう縛に付け」

京橋口の屯所の裏側は、仮設ながらもせまい白洲になっている。
旅籠大和屋からひきたてられた才蔵は、「士行総角」という縛法でしばられたまま、その白洲にひきすえられた。
罪人のしばりかたにも、それぞれ罪人の身分によって法があるものだ。
大将の身分の者には「将真総角」という法を用い、後ろ手にしばらない。軽卒に対しては「軽卒草総角」を用い、牢人に対しては「本陽十文字」とし、婦人には「女五方」といい、両乳の下をしめあげるような結び方をする。そのほか、町人、出家、山伏などに法があり、すべて十八法とされていた。
縄目の様子では、才蔵は、士分のあつかいをうけているわけである。
もともと引きたてられるときから、才蔵はあらそわなかった。
これは面白し……。
とおもったのである。多分に酔狂なところのある男なのだ。
大坂城の京橋口の指揮官は、兵数三千をもってここを固める藤野半弥という武士である。
秀頼の近習から取りたてられた男で、みたところ、将として格別の器がありそうにおもわれなかった。
「これは痛み入る」
と才蔵は、かるく頭をさげた。

「御大将、じきじきのお取りしらべでござるか。して、罪状はまだうけたまわっておらぬが、申しのべていただこう」
「そのほう、阿蘇大宮司家の家来斎藤縫殿とは、真っ赤な偽りであろう」
「これはしたり」
「陳弁にはおよばぬ」
と藤野半弥は薄ら笑いをうかべ、
「肥後の斎藤縫殿と懇意の者が、城内におる」
嫌疑の内容がほぼわかった。肥後の斎藤縫殿と懇意の城士が市中を歩いていると、旅籠大和屋平右衛門の軒先に右の名がかかげてある。不審におもって、注進したものらしい。
「それはその仁の思いちがいでござろう。拙者はたしかに斎藤縫殿」
「だまれ。当の斎藤縫殿は、二年前の夏に労咳をわずろうてみまかったというぞ」
「ほう」
これには、さすがの才蔵も内心意外におもった。
「しかし、ごらんのとおり生きている」
「ふとぶとしいやつ。関東の諜者とみた。ありていに述べたてればよし、さもなくば、痛い目にあわするぞ」
その顔を才蔵はまじまじとながめながら、
（これでは大坂は戦さに負けるな）

と別のことをおもった。この黄色い声の中年男は、どうみても三千の兵を動かして、百戦練磨の関東の大名を相手にまわす器ではない。察するところ、淀殿か、大野治長の権勢をつるに出世した男だろう。……それを思うとなんとなく相手になっているのが物憂くなって、

「どうとでもするがよいわさ」

あっと一同が声をのんだ。

才蔵のからだから、はらはらと縄が抜けおち、かれはゆっくりと立ちあがったのである。別に奇術ではない。上体の関節を一つずつはずして縛をゆるめてゆけば、縄抜けなどは容易なことだ。

「お、おのれは忍者じゃな」

藤野半弥の声がふるえていたが、左右に目くばせすることはわすれなかった。

「それ、撃ちとめよ」

縁のそばにひかえていた鉄砲足軽五人が、すでに火縄に点火して、すばやく銃口を才蔵の心ノ臓にむけた。

「鉄砲で仕止めるとは、ご念の入ったことじゃな」

たれも答えない。白洲にいる者のすべてが息をのんで才蔵を見守っている。

「はて、こわいことじゃ」

いいながら、才蔵はすばやく五つの銃口を見た。かれらの射撃順位を見はからったのである。

（どの鉄砲から撃つか）

もし五つの鉄砲が斉射してくれるなら、才蔵には逃げる手がある。銃口はすべて才蔵の心臓に集中しているから、かれらが引鉄をひく瞬間に身をかわしさえすれば、どの弾もいっせいに他の方向にそれる。

しかし、もしかれらが、二段、三段にわかれて発射すれば、いったん身をかわしても、次の場所で射止められるのは、必至である。

（それではこまる）

才蔵は、五人の足軽に幻戯をかける必要があった。つまりかれらの心理をあやつって、一斉射撃をやらせねばならない。

「ここじゃ」

と才蔵は、足軽たちの表情をじっと見ながら、自分の胸をさした。

「よく見定めて撃つがよい。撃つ前にわしが稲富流の砲術を伝授してやろう。死にみやげと思うてきけ。……二番目の異風よ」

と、二人目の男を指さした。

「異風」とはこの時代、鉄砲の射撃手をさしたことばで、弓の者を「射手」という。「左の拳があがりすぎている。それでは弾が天へそれるぞ。……三番目の異風、そちの右目は死んでいる。閉じた左目に力を入れすぎるせいじゃ……」

そのあいだも才蔵の視線は、かれらの呼吸をとらえてはなさない。撃とう、と表情を動かした者には、間髪を入れず、

「五番目」

と声をかけた。気をくじくのである。

「火縄が消えかけている。四番目と三番目は左肘がゆるんでおる」

才蔵の体は動かず、目だけは足軽たちの目を食い入るように見つめている。しかも、五人の男の呼吸を才蔵は見はずすことができない。かれら五人の呼吸を一つのものにそろえさせる必要があった。呼吸がばらばらになったとき、かれらは自分自身の意識にもどり、それぞれの判断で引鉄をひく……となれば、才蔵は斃れざるをえないだろう。

（ころは、よい）

と才蔵はみた。一瞬、幻戯の呪縛から足軽たちを解いた。と同時に短い気合で、

「撃て」

才蔵のことばにひきいられるように、足軽たちは同時に引鉄をひいた。

轟然と五つの銃口が火をふいた。

煙があがり、一瞬ののち、薄れた。一同、総立ちになった。すでに才蔵の姿はその場にはなかったのである。

背後の壁の上にとびあがっている。

「面妖な」

と、京橋口の大将藤野半弥は恐怖の色をうかべ、白洲に駈けおりると、意味もわからぬ叫びをあげた。

「射手、射手」

どうやら、弓組の足軽を呼んでいるらしい。

才蔵にとっては、いまがもっとも安全な「時間」だった。鉄砲は一発うてば、次を用意するまでに時間がかかるからである。

そのとき、藤野半弥の前に、つつと進み出た長身異相の武士があった。

この者だけは具足をつけず、柿色の袖無し羽織に革袴をはき、平装のままでさげ緒の襷をかけている。髪は総髪にして肩まで垂れ、目尻がするどく切れていた。ふたつの白眼がやや黄味を帯び、一見して尋常の者でないことがわかる。

「藤野殿」

と、その武士は、半弥の姓をよんだ。藤野半弥の家来ではない証拠である。客分としてこの京橋口の陣屋に陣借りしている牢人であろうか。

「あの者、いかにも奇怪でござる。拙者が仕止めましょう」

藤野半弥は、この事態に声がつまって出ないのか、いそいで二、三度うなずいた。

武士はつと目を転じ、そばにいた半弥の家来に、

「あの塀のむこうは、たしかお堀でござったな」

「さ、左様」

「それならば外へまわって固めなされ。あの者、お堀に飛び入って逃げるかもしれませぬ。弓、鉄砲の用意を十分にいたされるように」

命じおわると、武士ははじめて塀の上の才蔵を見あげ、二歩近づいた。足をふみだすと同時に、脇差を抜き、左手にぶらさげた。

容易な男ではなかった。

才蔵は動けない。動くと、この男の左手の脇差が、矢よりも早く才蔵の胸をつらぬくだろう。

……何者か。

才蔵は、生涯のうちで、これほど異様な精気をもった男に出あったことはなかった。背に、はじめて汗がながれはじめていることを感じている。

（大坂の豊臣家は、諸国の牢人によびかけてすでに入城した者が、五万とも、七万とも伝えられている。なかには、関ケ原以来、高名の牢人がいるというが、この男は何者か）

兵法者である、とはわかる。しかしただの兵法者ではあるまい。

武士は、さらに三歩近づいた。塀の上の才蔵は、武士を誘いこむためにふっと殺気を抜いた。ことさらに軽い表情を作ってみせた。

が、武士はその手には乗らない。体を動かすともなく、土を擦って最後の半歩を踏みこんだ。その地点で、ゆったりと塀の上の才蔵を見あげた。一見、ぼう然とした立ち姿である。

「お名は？」

と塀の上から才蔵はおだやかにたずねた。

「新免宮本武蔵という」

と、武士は答えた。

年は、三十二、三である。才蔵は、かつてこの美作国讃甘郷宮本村の郷士の出の男が、京の兵法の名門吉岡家の一族一門の幾人かを斃した高名の兵法者であることは聞き知っている。

十七歳のときに、西軍の宇喜多秀家の家来新免伊賀守の手に属して関ケ原に出役し、その後流浪して剣を自得した。いま大坂城に入城しているのは、かつて青年のころに西軍に属したゆかりがあってのことだろう。

「ぬしは、なんという」

「忍びじゃ。名などはない。しかし人は、霧隠才蔵とよんでいる」

「きりがくれ？」

武蔵は、むろん知っている様子ではない。風がきた。空は、冬にはめずらしくうらうらと晴れている。武蔵はさりげなく立ちながら、その異様に大きい目を半ばにひらき、小首をわずかにかしげていた。一見、詩句でもひねりだそうとしている風雅の者の様子だった。この男が、人と太刀をあわせるときのくせであった。

（この男、斬るな）

才蔵は、用心をして武蔵の目を見なかった。その目をみれば、吸いよせられるような野性の力があった。ちょうど、蛇の目が、蛙の力をうしなわせるように。

才蔵は、かすかな微笑を絶やさない。しかも武蔵をみず、武蔵の影のみを見つめていた。おりから、ひるさがりの太陽が、この兵法者の影を濃く短く大地に彫るように色づけている。

その影には、武蔵の色身とはうってかわったぎらつくような鬼相があった。渾身の精気が、地上にしたたり落ちている。

「きりがくれ、とやら」

と武蔵の唇が、重くひらいた。声が低い。

「いつまで塀の上にいるつもりか」

「はて」

才蔵は唇を動かさず、しずかに武蔵の影に話しかけた。

「都合がわるいかな」

「むしろおことの損ではあるまいか。すでに気づいていようが、人数が、その背後の堀にまわっている。そのうえ、わしの背後では、そろそろ鉄砲に、二ノ弾をこめる用意ができる様子じゃ。これ以上、塀の上におれば、まるで冬枯れの烏のように射とめられるだけであるぞ」

「おこと、たしかに、新免宮本武蔵と申したな」

「いかにも」

「武蔵ほどの兵法者が、わしを仕止めるのに鉄砲の力を借りるとはどういうわけであろう。意外じゃな」

「意外ではない」

武蔵の声はいよいよ低く、

「兵法とは相手を倒す工夫をいう。太刀で倒そうと、弓矢で倒そうと、時と場合によってえらびはせぬ。いま、わしの兵法は、おことを塀の上に釘づけしている」

「……」

いかにもそのとおりである。動けば、武蔵の左手の小刀が、数間はなれた才蔵の胸を刺し通すだろう。

「おことを釘づけにし、そこを鉄砲でうたせる。わしの兵法をもって倒したのとおなじ理になる。兵法は、ただに太刀さばきだけではない。天地のあらゆる動きを利用し、機に臨んで変に応ずる。いまわしの背後で火縄の煙をあげている鉄砲も、ただの鉄砲ではなくわしの太刀のうちに込められていると考えてよい」

「……」

事実、才蔵は、鉄砲足軽が、ついに銃をかまえたのを見た。かれらの一人が左目を閉じた、撃つだろう、とみたとき、才蔵は反射的に行動を起こした。体が塀をはなれ、天にむかって飛んだ。

同時に、武蔵の左手の小刀がかれの手をはなれた。生けるもののように空中の才蔵にむかって飛んだ。才蔵の剣がキラめき、

憂

鉄を打つ音が鳴った。小刀が白光を曳いて落ちた。それを追うように、それよりも一拍子遅く才蔵の体が、ふわりと地上におり立った。が、すぐ跳ねた。退いた。武蔵の長身が、才蔵にむかって殺到したからである。

武蔵は、またたくまに才蔵を三間の間合にまで追いつめ、そこで、はっと足を踏みかえた。すでに太刀をひるがえして、八双にかまえている。

しかし才蔵は、さきにとびおりた瞬間、刀を鞘におさめたまま、ついに抜かない。どういう工夫があるのか、両手を前にダラリと下げて立っている。しかも、もはや退きようがなかった。才蔵の背後は木戸であり、すでに寸土もない。

（なぜこの男は抜かぬか？）

武蔵の目に疑問がある。すばやく才蔵はそれに答えた。

「斬ってみよ」

わざと、隙を作ってみせた。さそったのである。

が、武蔵は、乗らなかった。かれの頭脳のなかに、兵法者としての精緻な計算があった。かれの計算によれば、間合は十分である。斬れる、と武蔵は「見切って」いる。見切る、

とは武蔵が独創した術技で、相手との距離、相手の腕と自分のそれとの「たけくらべ」（武蔵の造語）、相手のくせ、位置、心理、などを計算しきった境地をいう。見切れば、武蔵のばあい、もはや太刀をふりおろすまでもなく勝ちであった。

が、武蔵は、なおも動かなかった。かれの前にいる者が、兵法上の計算外の相手だったからである。相手は、太刀さえ抜こうとしないではないか。武蔵は、用心をとった。伊賀者である以上、意外な秘術を蔵しているのではないか。

「かあっ……」

と、武蔵は剣尖をつきあげて、異様な気合を発した。この法は、どの流儀にもある、……相手の心が見え分かたぬとき、強く仕掛ければ、敵は思う太刀をみせるものだ。これを武蔵の流儀では、「影をうごかす」とよんでいた。

が、むなしかった。

才蔵の影は動かなかった。かれの立場は、悠揚として無機物のようであった。

このとき、才蔵自身、伊賀流でいう「虚」に化していたのである。「虚」の術とは、五体から精神をぬきとる法である。武蔵の前に立っている像は、心神のないただの五体であった。……才蔵自身、この法を用いたがために、あとで、武蔵との立ちあいの記憶が、ない。

武蔵も、三十歳まで六十余たびという試合をかさねてきたが、このような相手にあうのは、はじめてであった。

（木か）

と思えば、そうもみえる。石か、とおもえば、才蔵は、まさしく石であった。

ところが才蔵もまた、武蔵を切れない。なぜならば、かれは「虚像」に化し、木石になりはててしまっている。

が、武蔵も、このえたいの知れぬ虚像を斬ることができず、いたずらに剣をつきあげたまま、右足の親指で土をにじるばかりであった。

そのとき、武蔵の背後で人のさわぐ声がして、やがて、数人の者が白洲にとびおりる気配がした。その先頭の者が、

「御両所」

と声をかけた。

「太刀をひかれよ。たがいに傷つき合うてはならぬ。その霧隠才蔵なる者は、右大臣家にとって仔細ある者じゃ」

「お手前、なにびとにおわすか」

武蔵は、剣を構えたまま、背後の者に問うた。

「わしか」

声に、おのずから、位があった。

「真田左衛門佐よ」

ことのわけは、幸村は、この日たまたま京橋口の守将藤野半弥に所用があって訪ね、この

騒ぎをみておどろいたのである。才蔵と武蔵の双方に、

「まず打ち融けよ。くわしくは、その席できこう」

さっそく両人は別室に通され、幸村は藤野の児小姓を借りてこのふたりに酒食をあたえた。

ところが武蔵はにべもなく、膳の上の杯をおさえ、

「拙者は、酒を用いませぬ」

「さらば、菓子を」

と取りよせてあたえた。武蔵はまだ三十をすぎてほどもないころで、晩年のようにその名が広く世間にきこえているというほどでもない。言葉かずが少なく、この座ではついに数語しか発しなかった。

才蔵も、だまっている。たがいに、うかつな言葉を発すれば、どういう結果をみるか、ということを怖れている。たったいままで、殺しあいをしていたあいだなのだ。

幸村はさすがに長者で、この異様な二人の間を温和なことばで周旋し、

「武蔵とやら、わしは刀術のことはさまでわきまえぬが、この才蔵を木戸まで押しつけたとき、なぜ、打ちこまなんだのか」

武蔵は不機嫌そうな目をあげ、

「なぜ、と申されますると？」

「わしの目でみてさえ、才蔵の姿は隙だらけであった。というより、隙そのものの姿であったが、あのとき打ちこめば、かならず才蔵は斬れた、とみたが、いかがかな」

……武蔵は、むっと唇を閉じた。

たしかに、あのとき、才蔵は「虚」の術を用い、木石同然に化した。幼児でも斬れるはずであった。しかも、才蔵は両手を前に垂れ、刀さえ抜いていなかったではないか。

「のう、才蔵」

と幸村はそのほうへ話をむけた。才蔵は苦笑し、

「はて。宮本どのには斬れますまい」

「……と？」

武蔵は、眉を動かし、

「それがしをあなどるか」

「左様ではない。あのときのわしは、相手が子供なら斬られていた」

「こどもなら？」

「お手前がように全身兵法でかたまったご仁の目でみれば、なんぞ意味や理外の理があるよう思うたはずじゃ。お手前はみずからの兵法にやぶれ、おかげでわしは斬られずにここに生きている。先刻のは虚の像でござった」

「なんと、まことか。その虚の像と申すのを、も一度ここで見せてくださるわけにはいかぬか」

「なにゆえに」

「拙者は弱輩のころから六十余たびの試合をしてきたが、おことのごとき相手ははじめてであった。その理由をまなびたい」

「それはむりなことじゃ。あれはやれと申されてやれる術ではない。危機にのぞめば、自然とわれらが心は虚しゅうなり、ついには心が絶え、五体はただの皮袋と化す。ただそれだけじゃ。いまそれをせよと申されても、わしの心は左様にはならぬ」

「ふしぎな術をみた」

武蔵は、才蔵を怖れるように早々に幸村の前を退出した。

幸村は才蔵に、

「のう」

とおかしそうに笑った。

「もはやにがさぬぞ、わしの陣所へ来い。佐助も小助も晴海入道も待っておる」

冬ノ陣

慶長十九年十一月十六日、家康は奈良の宿陣を発し、翌日は法隆寺宿営。

一方、二代将軍秀忠は、河内枚方を発し、生駒山麓の枚岡明神で、さかんな宿営の篝火を焚きちりばめた。

十七日、家康はさらに進出して、大和・河内ざかいの関屋峠をこえて河内に入り、その日

のうちに摂津住吉にある住吉明神の社家津守家に入った。

その日の朝、秀忠は枚岡明神を発している。夕方には摂津平野郷に着陣し、土井利勝を連絡将校として住吉明神に急行させ、家康の指示を仰がしめた。

家康は上機嫌で地図をひろげ、

「ここにこぶがあるわな」

とんと地図の一部を突いた。それが天王寺の茶臼山である。もともと摂津の古代豪族の墳墓にあった人造の岡で、一部、堀がのこっていた。戦国の初期、細川勝元の部将がここに築城したこともあった。

「わが本陣をここにおく。あす払暁、大樹どの（秀忠）と、ここで会おう。そのとき、わしは諸軍を巡視する。よいかな」

……当日、茶臼山の頂上に鉄製の楯が二重にめぐらされ、軍議の場所とされた。岡のふもとには、藤堂高虎の兵が、銃三十挺をもって警戒し、付近は、数万の軍勢によって固められている。

家康は平装のままである。その子秀忠をともなって岡の道をのぼり、つと北方をみて、

「見えるのう。元気よう舞いおるわ」

「はて」

「そちにも見えるか」

「城でござりまするな」

秀忠は、絵にかいた君子のような男で、口をつぼめ、小首をかしげた。

「城が舞うか。鷹よ」

家康は、秀忠の生真面目さを笑うようにして城の方角の空を指さし、

「さきほど、わしが鷹をはなっておいた。あれに舞うておる」

「おそれ入りまする」

鉄の楯のなかに入ると、家康は熊の皮の敷物の上に片膝をたててすわり、

「あの城はな」

と、秀忠にむかい、子供にさとすようにいった。

「容易には落ちぬ。故太閤が国力を傾けてつくった、海内はいうにおよばず、唐、南蛮にもない巨城じゃ。たとえ無理押ししても、外郭の一部を落すのに、人数の五万も要るかもしれぬ。それでももし落ちずに、われらがうろうろと攻めあぐんでいては、せっかくのこの掌で得た天下が」

と、右の掌を出し、

「この掌から落ちる。世の者は、わしがどのようにして攻めるかを見つめている。もし攻めあぐねば、徳川家の不吉。わしの実力はその程度かと察して、付き従っている豊臣家恩顧の諸大名も、踵を接して大坂方につき、国もとで兵を挙げるにきまっておる。よいか。……さすれば」

と家康は、近習のさし出した湯をのみ、

「持久の策をとる。あの城のまわりに対城を多く築造し、城との交通を扼してしまう。そこもとは、軍を伏見へ帰してしまえ」

「え、ただいま着陣したばかりでありまするのに」

「それでよい。世の者も城中の者も、われらの軍容をみて、山のごとき関東の威武をひしひしと見覚えたであろう。ところでわしは」

「なんとなされまする」

「このあたりで鷹狩でもして駿府へもどることにするわ」

「はっ？」

「あとは、わが胸中にある」

大坂城の南に、小高い岡がある。麓は小橋村があり、藁屋根が散在している。その村のなかを一筋の街道がうねって通り、城の平野口門にまで通じていた。

この岡は外堀のそとなのである。笹が多く、土は赤く、のぼって南北を見わたすと、城西の大坂市中の風景とはうってかわり、蕭条たる冬野田園が起伏していた。

真田幸村がこもる真田丸は、この岡の上にそびえていた。

城塞は急造ながらも、三層の高櫓をかまえ、その左右に走り櫓をめぐらし、堀をうがち、矢狭間の一つ一つから黒光りのする鉄砲がのぞいて、田舎の小城ほどの重量があった。

才蔵は、ここへ案内されたのである。

外堀から突き出しているために、関東の軍勢はおそらくここへ引きつけられ、大坂方の難戦は、幸村が一手に負うことになろうとみられた。

「この真田丸を築くについては、おもしろい話があってな」

と、穴山小助が、才蔵にきかせてくれた。

幸村は、大坂に入城すると同時に、城の内外の地勢を検分し、あとで譜代筆頭の大野修理に献策した。

「さすがに故太閤殿下のおみずからのおなわ（設計）だけあって不落の名城でござるが、ただ一カ所だけ、難がござる」

と、絵図でこの小橋村の一点を指さし、

「敵はおそらく、この街道に集中しましょう。ところが、これをまもるのは、平野口だけになる。できれば、この城外に出丸を設け、それがしに給わりたい」

大野修理は複雑な顔をして即答せず、そのあと牢人組七将のひとり後藤又兵衛基次をよんで、幸村の案の是非をたずねた。又兵衛はわが意を得たように微笑し、

「左衛門佐どのの目の深さに敬服つかまつった。問わるるまでもなく妙案と存ずる」

「しかし」

修理の表情がにごった。目が、別のことを物語っている、……又兵衛はこの男の意中がわかった。

「おうたがいはもっともでござる。なるほど左衛門佐どのの御実兄は、信州上田六万三千石

の真田伊豆守信之（信幸）どのであり、早くから徳川家に忠勤をはげんでいた。しかもこのたびも大坂攻めの軍勢のなかに加わっておらるる。修理どのは、左衛門佐どのが城外に出丸を築くことをもって、東軍に内応しようとのはらありと見らるるのでござるな」

「いや、そこまでは思わぬが」

むろん、修理は、それを考えてのことだった。又兵衛は、かねてこの男が無能にして権をにぎるのをよろこばず、あるとき、修理が部将のひとり渡辺糺（摂津御霊神社の神官）と口論してついに双方刀の柄に手をかけ、一座の者が引きわけたことがあるが、あとで又兵衛が「惜しいかな」と大声でつぶやいたという。

「あの二人、なぜ死ななんだか」

「修理どの」

又兵衛は、顔に怒気をみせ、扇子で、丁と畳を打った。

「そのご猜疑が、城を崩すもとになる。左衛門佐どののお人柄、お志、とくとみれば、死力をつくして名を後世に残そうとなさる御様子じゃ。右大臣家から采配をあずかる貴殿にはそれがわかりませぬか」

「いや、これは、ここだけの戯れごとよ。他言せずにおいてくだされ」

真田丸はそういういきさつで、できた出丸である。その位置が敵前の野に突き出ているだけに、一見して、幸村の精神のたたずまいが、城の形をなして天にそびえているようであった。

才蔵は、ひどくこの出丸が気に入った。この男には幸村自身を見るような気がしたからである。

家康は壮年のころから海道随一の弓取りといわれてきたが、当時から長短はあった。野戦に長じ、城攻めはへたといわれてきた。しかし大坂の攻城戦にかぎっては、自分の短所を十分に研究し、城取りの名人といわれた秀吉の攻城法をまなんだ。その遺児を攻めるのに、その亡父のもっとも得意とした軍法を用いたのである。

秀吉の戦法は、城を力攻めにせず、敵城の周囲に、いばらの輪をまくように対城をつけ、長期包囲の策によって城を立ち枯らせることである。

この法によって家康の攻城戦は、まず土木工事からはじまった。かれが急造を命じた対城の位置と数は、

天王寺、茶臼山、今宮村、木津川尻、伝法口、大和路筋、今福村、守口と天満とのあいだに三つ、ほか二つ、あわせて十二城である。

そのほか、大坂城の北で天然の堀になっている天満川の水を干あげるために、新堤を春日井に築き、淀川の水を長柄川にみちびく策をたて、工事を諸大名に命じた。

家康は日をきめ、それらの諸陣を巡視しはじめた。さすがに馬には乗らず乗物を用いていたが、その軽快な指揮ぶりは、七十をこえた老人とは思えないほどのものだった。

真田丸にこもる幸村は、家康に前線巡視の日課があるのに気づいて、

「老人、よいくせをお持ちじゃわ」

と膝をうった。幸村の見るところ、家康ひとりを倒せば、この戦さは勝つ。家康の死によって東軍の外様大名の多くは徳川方に参陣する理由をうしない、旧主の秀頼に呼応するだろう。

早速、佐助と才蔵をよび、

「当分、かまりの仕事は、家康の動きだけをしらべればよいぞ」

かまりとは、戦場における諜報、または諜者のことである。幸村の戦法が他の部将とちがう点は、戦場諜報を重視する点であり、そのためにこそ、かねてから佐助や才蔵の価値を高く買ってきたのだ。

真田丸には五十人の甲賀者がいた。甲賀組は佐助の支配に属し、才蔵は物頭格で佐助の与力となって手伝っていた。

むろん、真田丸の五十人のかまりは、百姓、川筋の漁夫などにばけて城外に散在しており、夜陰になると、その日の敵陣の動きを伝えるために、城内にもどってくる。かれらの出入りが盛んなために城内では真田丸のことを間忍丸ともよんでいた。

「佐助、わしが出よう」

退出してから、才蔵がいった。十一月二十七日の夕刻のことである。

「おぬしがみずから出ぬともよかろう。人手はありあまっている」

「いや」

才蔵は夜陰を待って城門を出た。さいわい、雲が低く、星も月もなかった。才蔵は、黒装束、黒覆面の忍び仕立てである。

（家康とは海道以来、縁がふかい。さて、茶臼山の本陣へでもゆくかな）

平野街道をしばらく南にくだると、北面して東軍の重厚な陣地がみえ、おびただしい篝火が天を焦がしているのがみえた。

才蔵は、井伊直孝と松平忠直のふたつの陣地の接触点を縫って茶臼山に到着したとき、まだ夜半にもならぬというのに、兵がしきりと動いているのをみた。

（例によって家康の出支度じゃな）

やがて、騎馬五十、銃卒三百にかこまれて、一挺の乗物が、山を降りはじめた。進路は、西にまがる。その方角に、今宮村、木津村がある。

才蔵は、道わきの灌木のあいだに寝そべり、暗い天にむかって目をとじた。聴覚に注意を集中するためであった。さまざまな場所でささやかれている人の声を聴きわけようとした。

そのあいだも、草を分け、人が何度もかれのそばを通りすぎてゆく。武者わらじが、あやうくかれの体を踏もうとしたことがあった。そのつど、才蔵は、かすかに身をずらせる。何度か身を動かし、何度か、人の足が踏みこえた。才蔵は、軍勢のなかで寝そべっているのだ。

ふと、

……お舟の数が足りぬというが、まことか。

という、ややあわて気味の声がきこえた。

……なに、足りぬことはあるまい。木津川尻には、漁家が多い。それに、あのあたりに陣のある浅野殿も、お手持の舟を多くお持ちじゃ。もし足りねば、借りるにことは欠くまい。

……しかし、福島村の岸には、九鬼の水軍が舟をうかべているはずじゃ。なぜ、九鬼の舟をお用いにならぬのかな。

……ばかな。水戦さをしに出かけるのではない。ご巡視は、お身軽なほうがよい。

（なるほど、家康は、陸路ではなく水路で各陣を巡視するものとみた。行くさきは、福島村じゃな）

才蔵は、起きあがった。そのまま東へ走って平野川の堤へ出、風のように北へむかった。夜半に真田丸にもどってその旨を伝えると、幸村はよろこび、

「とすれば、家康は、狗子島と葦島のあいだを通り、九条村の岸を西にみながら、下福島村に着き、さらに舟を進めて中之島から天満川に出るつもりじゃな」

「おそらくは。……」

「才蔵もそうみるか」

幸村は上機嫌ですぐ小助をよび、

「すぐ城を出る。鉄砲に巧者なものを五十人ほどえらべ。さらに、刀槍にたくみな者を二十人ばかり。……才蔵」

だまって顔をあげた。

「たまには、戦さをしてみぬか。いまから下福島村へゆけば、夜明けまでにつく。葦のあいだに兵を埋めておくのじゃ。あるいは、大御所のお首が頂戴できるかもしれぬぞ」

「お供つかまつります」

それからほどもなく、七十余人の軽兵が、すべて騎馬で、真田丸の城門から走り出た。

風が雨をふくみ、手綱をとる手が、こごえるほどに寒い。

幸村は、天神橋まできたとき、一同を下馬させ、橋の南詰めを中心に陣を布いている西軍の毛利勝永にたのんで馬をあずけた。休息ののち舟に乗り、天満川をくだって博労ケ淵の南にうかんでいる葦島に上陸した。

葦島は島というより、河口の洲といったほうがいい（いまの元松島遊郭付近）。葦が生いしげり、身をかがめると、七十人の兵を埋めるに十分だった。

夜明けまでは、半刻ほどもある。まだあたりは暗い。おりから霰を吹きまじえた風が、兵の具足を凍らせた。兵たちは、たがいに抱きあって暖をとった。

幸村は用意の酒樽をぬいて与え、夜明け前には餅をくばって飢えをしのばせた。

やがて、ころはよしと火縄を用意させ、手の指に油をぬらせた。指がこごえて引きがねがひけぬ場合を防ぐためである。才蔵の智恵であった。

「はて、才蔵、大御所は来ようか」

と、幸村は暗い水面を見つめながら、問うともなく才蔵に問うた。

「それは大御所のご運次第でござろう。ご運勢盛んなれば、あるいはこれへあらわれぬかもしれませぬ」

そのころ、家康はすでに木津村の岸から舟に乗ろうとしていた。

にわかに後方が騒がしくなり、ただ一騎、家康供奉のむれに駈けこんで、「お待ちあれ」と叫んだ者がある。

家康は駕籠のなかから、

「孫十郎ではないか」

「さん候」

秀忠の部将榊原遠江守康勝であった。かれは秀忠の命をうけて、家康の巡視を諫止しようとしてやってきたのである。

「今晩は、寒さが一段ときびしゅうござる。ご尊体に万一のことがあってはならぬと、大樹様が、お身がわりに巡視すると申されておりまする」

「案ずるにおよばぬ」

家康はきかなかった。秀忠が自陣の巡視をしても、家康が巡視するほどには外様大名が感奮しないことをかれは知っている。それに、すでに触れ出してしまったことで、福島方面の東軍の諸将は心待ちに待っていた。それが中止になれば、家康急病のうわさが飛んで士気が落ちぬともかぎらない。陣中、もっともおそるべきは、妄言蜚語であった。

「わしはゆくぞ。早う舟を出せ」

そのとき家康の謀臣本多佐渡守正信が、僧正天海をつれてあらわれ、

「一大事でござる」

といった。家康はみるみる不機嫌になり、

「そのほうとも覚えぬことをいう。一大事などとは陣中で用いてはならぬことばであることは知っていよう。士卒がそのことばをきけば動揺するものぞ」

「しかし、これだけはやむをえませぬ」

と天海をふりかえった。天海は進み出、

「ただいま、このご巡視を占いましたるに、二度卦を立てて二度とも不吉のきざしありと出ました。なにとぞ、おやめなされますように」

「ならぬ」

家康は、風評の立つのをおそれているのだ。半世紀以上を戦場で送ってきたこの老人は戦さというものがどういうものであるかを骨の髄まで知りぬいている。

「されば」

と本多正信は、家康の駕籠ににじり寄り、

「茶臼山の御本陣に、きょうの昼、京から勅使がご来着なさる予定でござりまするが、味方にはすでにそれがご来着なされたとし、それに事寄せて御巡視の中止を仰せ出されれば、諸

大名もなっとくし、いかがわしい風説も立ちますまい」
「いかがでありましょう」
「道理である」
家康は正信の智恵で、内心ほっとしていた。この老人としても、あられまじりの寒風のふくこの払暁に福島村の前線を視察するような荒行はしたくなかった。豊臣家がほろぶまでは、自分の老いをいたわらねばならぬ。
正信はわが智を誇るように、
「京の無用の長袖（公卿）も存外なことに役にたつものでござりまするな」
「これ、正信」
家康は、にがい顔でたしなめた。家康は、この男をこよなき謀臣として重宝しているが、この男の智恵は、一つまちがえば奸智になりかねない所があった。それに口さがない癖がある。もとを洗えば三河の田舎者だけに、虚位を擁しているだけの京の天子や公卿を何者とも思っていなかった。もっとも家康自身が、京の御所を中心に集まり暮らしている天子、公卿という奇妙な血族集団を飾りもの以上に考えたことはなく、これは徳川家一般の家風といってよかった。
「戦さというものには、なにが役にたつかわからぬ。京からきた勅使は、このような夜寒除けにもなるが、まだほかにも役に立ってもらわねばならぬことがある――それ駕籠をかえせ」
家康の駕籠が茶臼山の方角に動きはじめると、それと同時に正信をはじめ家康の幕将たち

が岸辺に降り、舟に乗った。
「それ漕ぎいだせ」
正信はひくく命じた。
一方、葦島で兵を伏せている幸村は、凍えきっている兵をはげましながら、時の移るのを待った。
ほどなく生駒の山なみから夜がしらじらとあけはじめ、博労ケ淵の川面に靄が立ちはじめたころ、
「櫓の音が」
と、才蔵は幸村にささやいた。
「するか、そちの耳には聞こゆるか」
幸村は聞き耳をたてた。はじめは才蔵の耳にしかきこえなかった櫓の音が一同にもきこえるようになり、やがて靄のなかから旗を林立させた三艘の舟影があらわれ、島に近づいてきた。
その馬じるしや旗指物を幸村は食い入るように見つめていたが、やがて、ふっと力を抜き、
「才蔵、大御所はおらぬ」
「それがしの目にも馬じるしばかりか、それらしい人相の者もおりませぬな」
幸村はしばらく考えていたが、
「退く」

「惜しい。あれに関東の幕僚がひしめいてござる。大御所を逸したとしても、せめてあの者どもを撃ちとめればいかがでござろう」

「いや無用に発砲すれば、われらは腹背に舟中からの銃撃と福島からの銃撃を受けねばならぬ。大御所とならば刺しちがえてもよいと思うてここまできたが、あの者どもの命では、幸村の命のほうが重かろう。かえせ」

一同ひそかに走って、葦島の北岸につなぎとめてある舟にのって対岸へ退き、風のように城内へ舞い戻った。

しかし才蔵だけは、ひとり葦島の枯れ草のなかに残って、銃をかまえていた。

幸村のゆるしをえて才蔵ひとりが残ったのは、全員帰城してしまうのは、あまりにも芸がなさすぎると思ったからである。一発でも発射して敵軍の心胆を寒からしめるのも一興であった。幸村は去りぎわに、

「そち、命を粗末にするつもりではあるまいな」

才蔵はこともなげに笑い、

「かような所にしか、伊賀流忍術の役立つ場がござるまい」

才蔵は、鉄砲をかまえた。火縄の燃えるあまい匂いが、才蔵の鼻さきにただよった。敵船がいよいよ才蔵の銃口から二十間のところにまで近づいたとき、才蔵は、へさきに立つ緋の陣羽織をきた男にねらいをつけた。やがて、

轟っ

と撃ち放ち、緋の陣羽織が船中にころがり落ちるのをまざまざと見とどけた。才蔵はゆっくり鉄砲をもやの満ちた天に投げ、

ざぶん

とことさらな水音をたてた。

と同時に才蔵は別の方角にむかい葦の間を縫いながら影のように走っていた。

一方、舟のなかは大騒ぎになった。

「それ、伏兵はその葦島ぞ」

口々に叫んだ。

正信はじめ幕僚たちが座乗している舟はいちはやく流れの中央にむかって退避したが、それを護衛する二艘のうちの一艘が、櫓をきしませながら葦島にちかづいてきた。

舟が葦島につくや、数十人の武者がばらばらと飛びおりて、槍をもって葦をかきわけながら捜索した。しかし才蔵の影はなかった。

「おらぬ」

「面妖な」

やがて探しあぐねた一人が、ふと島の北側の水面をみて、

「あっ」

と声をあげた。

その声につられて、一同がいっせいに、葦の間から水面を見た。もやのわきあがる水面に、ひとりの白衣の影が立ち動いているではないか。

「物の怪ではあるまいか」

それほどにその者の影は奇怪だった。水面をしきりと両足で歩きすべりながら、島を離れてゆくのである。

才蔵にすれば、この程度の芸は、なにほどのことでもなかった。「水蜘蛛」という伊賀流独特のうきを両足につけ、腰でたえず重心を安定させながら水上を滑ってゆくのだ。「白衣」と関東の兵が思ったのは、もやの中で身をくらますために、才蔵が白衣を肩にかけていただけのことである。

「あれをうて」

弓、鉄砲の者が岸辺に走ってそれらの飛び道具をかまえたとき、すでに才蔵との距離は四十間を遠ざかっていた。

轟音がもやを打ち破ってきこえ、才蔵の周囲の水面に弾丸、矢が突きささったが、いずれもあたらなかった。よほどの強薬をこめないかぎり、四十間以上の目標を射通すには、鉄砲は非力だった。

才蔵はやがて対岸にとびうつると、くるりとふりかえった。すぐそのまま葦のなかに消えた。

大坂冬ノ陣は、小部隊のせりあいが各所で頻発しただけで、ほとんど戦いらしい戦いもなく十二月の酷寒期に入った。

家康は、早々にこの陣を講和にもちこみ、あとは謀略をもって城をおとすつもりであったから攻撃を手びかえ、諸軍にもそれとなく行動を自重させていた。

幸村は家康の心中を読み、敵を挑発して激戦に引きずりこもうと考えた。

真田丸の正面の敵は、

前田利常　一万二千人
松倉重政　二百人
榊原康勝　三百人
吉田重治　千人
寺沢広高　五百人

あわせて、一万四千人であった。

ある日、幸村は才蔵と佐助をつれて望楼にのぼり、眼下の野をみせた。

見おろすと、楯をならべ、馬印、旗指物を林立させ、野に人馬の満ちるほどの景観である。

その野陣と、真田丸とのあいだに小橋村がよこたわる。

「才蔵、敵に打ちかからせる手はあるまいか」

「造作はありませぬ」

と、才蔵は真田丸と敵陣との間に横たわる小橋山を指さし、

「あの小山を利用して、甲賀、伊賀の幻術を使うてみましょう」
「それは面白し」
と、手をうったのは佐助であった。佐助は才蔵の計略を読みとったのである。
……東軍側の諸記録でのちのちまでふしぎの合戦として伝えられたこの事件は、慶長十九年十二月四日の未明におこった。
東軍の目の前にある小橋山のふもとに、二個、三個と狐火のようなものがあらわれ、やがて十個にふえ、明滅しながら動きはじめたのである。
「あっ」
と仰天したのは、前田勢の最前線にある先手組の本多安房の隊の者であった。
「あれはなにか」
とさわぐうちに、狐火はいよいよふえ、見ているまに百個ばかりがおしならんで、かすかに動いている。
「まさか、篝火ではあるまい」
「いや、篝火にしては、火色が弱いわ。鬼火のようにみえる」
「鬼火ではなかろう。しかし篝火でもないはずじゃ。あの山にはもともと真田勢はおらぬ」
「何ごとか」
と本多安房が出てきたときは、暗くて物の文目もさだかでなかったが、目をこらすと、その狐火のまわりに旗指物の群れが動きつつあるような気がするのである。安房は、はっと顔

色をかえた。
「城方の夜討ぞ」
「すわ！」
と陣中は大さわぎになった。
「しずまれ。さわげば、敵に乗ぜらるる」
安房は、さすがに戦さ上手な男だった。この夜討勢を逆に討ちとって自分の功名にしようと思った。そのため、わざと自分の主人の前田利常にさえ報らせずに行動をおこした。
本多安房は、すぐ強兵五十人をえらび、具足の草摺を縄で結んで摩擦音を消し、槍衾を作ってじりじりと小橋山に肉薄した。
目の前にあるのは、たかが、樹の一本もない笹山一つである。百人以上の人数はかくせまいし、押しつつんで残らず討ちとるに手間ひまはかかるまいと安房は思った。
ところが、近づくにつれて、旗指物の群れの幻影が、はたと消えたのである。
（いかに？）
と思ううち、狐火が、一せいに消えた。
（なぶるか）
安房は豪気にも腹が立つだけの余裕があったが、ひきつれている兵は戦場不馴れの者が多い。ひどく動揺した。

夜間戦闘には、恐怖がつきものであった。敵の所在が見えているあいだはよかったが、それが消えると、闇そのものが敵にみえてくる。敵が突如脇腹にあらわれるか、背中にかぶさってくるか、疑心暗鬼をよぶものだ。そのとき、

「あっ」

禁物の声を出した者がいた。

「そ、そこにいるわ」

目の前の道祖神を指さした。その者には、真田の武者影にみえた。と同時に、安房をはじめすべての者が、自分たちのまわりにむらがりおこった異様な物音をきいた。数百人の武者がたてる具足の音である。

「出たあっ」

安房も、その声にひきずられた。

「それっ、突っ込め」

喚声をあげて笹山へのぼった。むろん、敵はいなかった。

しかし安房の隊の喚声をきいておどろいたのは、隣接部隊の松倉重政、寺沢広高の諸部隊であった。

「それっ、前田勢は、抜け駈けをしたぞ」

どの男も、功名にはやっていた。兜首一つをとれば、家禄がふえ、子々孫々まで家が栄える稼ぎ場が、目の前にある。

「加賀者どもに功名をとられるな」

「戦さは、真田丸の前ではじまったぞ」

すでに夜が明けようとしていた。諸部隊がわれ勝ちにと小橋山から真田丸にむかって押しよせた。ところがこの動揺は、はるか西方に布陣している井伊、藤堂の部隊にまでつたわり、武者が、一群れ、ふた群れと飛びだしていった。

最初にまぼろしの敵にむかって突っこんだ本多安房の部隊は、敵よりもむしろ、背後からひしひしと押してくる味方の武者の群れに、前へ前へと押しだされた。

ところが、たれも、弾丸よけの楯、竹束も持っていない。いわば裸のままで、真田丸の銃丸の前に押し出されてしまったのである。

夜明けとともに、才蔵と佐助は、忍び装束に身をかためた二十人の甲賀者とともに真田丸にひきあげてきた。

「大儀であった」

と幸村は、矢狭間から眼下の野をのぞきながらいった。

「どうやら、思う壺にはまったかにみえまする」

「まるで狐に憑かれたがようにひきよせられてきおったわ」

「あの人数は、さらにふえましょう」

この戦闘で、かろうじて命びろいをした前田家の先手組富田弥兵衛高則という士は、後に

回顧して、なぜここまで押し進んだのか、あとで考えてみてもよくわからないと書きのこしている。

「まだふえるかな」

幸村は、目をはなさない。

才蔵のいうとおり人数はいよいよ増加し、ついには越前少将忠直の舎弟松平出羽守直次までひしめく軍勢とともに押し出されてきた。幸村は微笑した。その数、ほぼ万余と数えられるまでになったとき、幸村の右手にあった采配が、さっとあがった。

その瞬間、百雷が一時に陥ちたかと思われるほどの大音響とともに、真田丸から弾丸、矢が、雨のようにふりそそいだ。

野は、鮮血にみちた。

身をかくしようのない野であった。それに、どの武者も、それぞれの主人の命令によって押し出てきたわけではなく、抜け駈けで自ままに進んできたために、退き鉦をたたくべき総司令がいない。

見栄もあった。

この烏合の衆は、前田、松倉、寺沢の諸隊のほかに他の陣からなだれてきた松平、藤堂などさまざまな隊の兵が入りまじっているためにたがいに恥を思って退くに退けなかった。この場合、先んじて退却すれば、名が全軍に喧伝されてしまう。

かれらは、弾をよけるために死体のかげにかくれたり、みずから死体をよそおったりして、

一寸も動けなかった。

そのうち城方では、真田丸の銃声をききつけて、青木民部少輔、伊藤丹後守、野々村伊予守、真野豊後守など七組の諸将がそれぞれ銃隊をひきいて駈けつけ、はしり櫓、高櫓、狭間裏からさんざんに撃ちおろした。敵は野にびっしりと満ち、しかも伏せて動かないために、ただ射角を下にして射つだけでたれかにあたった。

「妙な戦さじゃな」

真田兵は、笑いながら撃っている。ある老兵は、

「わしは関ケ原にも出たが、かようにふしぎな敵に逢うたのは、はじめてじゃ」

といった。

はるか後方の茶臼山の本陣で、真田丸の方面の銃声をきいておどろいたのは、家康であった。

家康の使番が、やがて茶臼山の本陣に走りもどってきて、状況を報じた。

家康は、鞭をすてて立ちあがった。

「なに、二万の兵が真田丸の前にはりついて死んだふりをしているというのか」

すぐ寄せ手の退きあげを命じたが、全員虎口を脱して撤退したときは、すでに日没前であった。討死九百、負傷二千を越えたという。

家康は、前田利常、藤堂高虎、井伊直孝ら諸将をあつめ、この老人にしてはめずらしく怒

声をはりあげ、

「下知もなく自ままに城にかかったのは、そもそもどういう料簡であったか」

一同ふるえあがったが、年がしらの藤堂高虎が進みでて、

「われわれが下知をくだしたのではござりませぬ。それぞれの侍大将、足軽大将などが、勝手にいたせしことでござりまする」

「家来がいたしたというのか」

「いかさま、左様で」

「おことらの家来は、主人の下知を聴かぬばかりか、このわしの軍令も聴けぬ者どもとみえる。そのように上を軽んずるように平素しつけてあるのか」

「いや、それは」

高虎は汗をかくよりほかにない。

事件の発端をつくった前田家の先手隊長本多安房をはじめ、山崎閑斎、本多丹下などが家康の前に引きだされて問詰をうけたが、かれら自身もなぜ抜け駈けをしたのか、自分でもわからない。家康はにがりきって

「狐にでもつままれたか」

とそれぞれを所属の陣へ追いかえすしか手がなかった。

冬ノ陣で真田方の忍者がたてたもっとも大きな功績は、以上のようなものであった。

そのあいだも、城内に対する家康の和平工作は進んでいた。

家康は、この合戦をはじめるにあたって、城将織田有楽に密使を送り、関東の諜者になることをすすめた。有楽はこれを承知し、その子庄蔵を人質として江戸に送ったうえ、城内の状況をつぶさに報じていた。むろん、その密事は、城内のたれもがしらない。

家康はこの有楽に城内での和平工作を命じ、さらに秀頼の生母淀殿に対してはその妹常高院をして説かしめた。

この和平に対しては、真田幸村、後藤又兵衛基次、明石掃部全登、長曾我部盛親、毛利豊前守勝永などいわゆる牢人出身の五将は口をきわめて反対し、城内首脳部の意見は分裂した。

家康は、織田有楽からの諜報で城将たちの意見の分裂を知ると、

「あとひと押しじゃな」

と、南蛮渡来の火砲二門のほかに大鉄砲の名手数十人をえらび、南部戦線では藤堂高虎の陣地から、北部戦線では備前島から城内にむかって射撃させた。

この弾丸が、一発は天守閣の柱を撃ちくだき、一発は、淀殿が使っていた千畳敷ノ間に落ちて、婦人たちが泣きわめいて逃げまどった。

ために淀殿は恐怖し、鶴の一声で、家康の和平勧告をうけることにした。

冬ノ陣が終わったのは、慶長十九年十二月二十一日のことである。

才蔵は、町へ出た。

白椿

停戦によって籠城の将士十万は城外や三ノ丸にあふれ出た。三ノ丸といっても、こんにちの上町台の半分、船場のすべてを含んだ広大な地域で、この三ノ丸のうちに武家屋敷だけでなく、商家、旅籠、娼家までが建ちならんでいる。

真田幸村、長曾我部盛親、後藤又兵衛など諸侯待遇の牢人大将も城郭のなかから出て下屋敷をもち、塙団右衛門程度の侍大将も、それぞれ三ノ丸のなかに宿陣をとった。

「才蔵」

と佐助はいった。

「お屋敷には侍長屋があるから、気に入ったおなごでも連れてきて住むがよいぞ」

佐助としては精いっぱいの粋をきかせたつもりだろうが、才蔵は顔をしかめ、

「おれはいまだかつて自分の屋敷などを持ったことがない。居心地がわるいわ」

「どうする」

「堺へでも行ってみようかと思う」

「なぜ」

佐助の知らないことである。堺の商人津野宗全の屋敷には、菊亭大納言の娘青子をあずけっぱなしにしてあるのだ。その後の様子が気になりながらも、まだ訪ねてみないのである。

（しかし）

と才蔵はおもった。

（青子は、津野屋敷にさえかくまわれていれば安全なのだ。青子よりも、お国をさがしてやらねばならぬ）

お国はあの旅籠の事件以来、才蔵が戦いのなかに巻きこまれてしまったために行方が知れなくなっている。

（哀れのかかることではある）

才蔵は、ある日、金銀こしらえの大小にえんじの袖なし羽織、南蛮なめしの黒の革ばかまといったこの男らしい豪奢な装束で、真田屋敷を発った。

町にはまだ、二、三万の東軍が駐屯し、顔見知りの西軍の将士と、娼家などで落ち合うては交驩している。この時代の武士は、なお戦国の余風を残し、武士たちは自分の名誉をまもることを第一とし、合戦がすめば敵味方の憎悪などはのこさない。

才蔵は、それらの武士たちがたむろしている茶屋、旅籠の一軒ずつをのぞいてまわったが、ついにお国の姿はなかった。戦さを避けて、遠い土地へでも行ってしまったのだろうか。

やむなく才蔵は堺へ行った。

市ノ町の津野宗全の屋敷では、才蔵にとって軽い驚きが待っていた。

青子がいなくなっていたのである。

才蔵をみた津野宗全は、この剛愎な男が手をついて男らしくあやまった。

「どうしたのか」

「堺は、ご覧のとおり徳川殿の軍勢がかためておる。そのなかで、あの姫御料人をさがしている諜者もいたのであろう。いつのほどか、わしの屋敷にいることが知れてしまい、京都所司代から使いがきて、渡せば、当家になぜかくまわれておるかなどの野暮な理はきかぬ。……しかし渡さねば」

「闕所にするといわれたのじゃな」

「そのとおり」

「いつごろのことか」

「この冬の合戦がはじまるすこし前であった。せっかく頼まれたのに、おぬしに申しわけがない」

「よいわ。青子もすでに危機が去っている」

才蔵は、堺の市ノ町の津野宗全の屋敷を出てから、所在なく市中を歩いた。

町の辻々で人が群れ、大坂からの旅人らしい者をつかまえては大坂のうわさをききただしている。大坂の動乱はやんだが、市民はそれで天下に平和が来るとは信じていない。冬ノ陣は単なる予震で、本格的な地震はかならず後に来ると思っているのだ。

……いつ来るか。

かれらの関心は、そこにある。

……どのくらいの規模で？

それがかれらの心配の中心だった。

自然、大坂の様子をみてきた旅人からさまざまの現状をきき、それらの問いの答えを自分たちで出そうとしているのである。

（しかし、おれは所在がない）

もともと才蔵は求めて大坂に加盟したわけではなかった。そのきっかけは、ほんの偶然からだった。

偶然とは、かつて洛北の八瀬で「菊亭大納言の娘青子」と偽称する隠岐殿に逢ったためであった。そのために才蔵は青子の事件にまきこまれ、青子をかどわかそうとする関東の「黒屋敷」の勢力と対抗した。

自然、そのため、才蔵自身も気づかぬままに大坂方の隠岐殿、猿飛佐助の一群のなかに身を置いてしまったのである。

（この奇妙なおれの運命は、もとはといえば、青子からであった）

と才蔵は考えながら町をゆく。

（その青子が、江戸の手に渡り、おれの目に見える世界から消えてしまった。となれば、おれが大坂方についている理由はなくなるのではないか）

考えごとの好きな男だから、才蔵はさまざまに「自分」というものを犬が骨をなめずるよ

うにして考えてみる。

（理由が消えた、ということは、おれ自身が大坂から消えた、ということとおなじではないか）

と思ってから、そういう妙なりくつを考えだす自分の頭が可笑しくなり、

（どうかしている）

とふきだした。

（おれは、落ちついているつもりでも、ひどくうろたえるのだ。青子をうしなったことが、おれにとってそれほど大きなことであったのか）

才蔵は、ふと足をとめて、目の前の三層の楼閣を見あげた。

管絃の音が、湧くようにその楼閣から洩れている。妓楼である。

（酒を飲み、女を抱くか。このばあい、それしか手があるまい）

軒先で、

「津野屋敷の者だ」

というと、男衆が出てきて、上の部屋に案内してくれた。

板敷の上に敷かれた円座にすわり、まわりを見まわすと、調度はすべて南蛮渡来のものであった。

窓には、青、赤、黄で色どられたステンド・グラスがはめられており、紫檀の台座の上には、ぎやまんのランプが、妖しい光を放っている。

やがて老女につれられて妓が入ってきた。色の白い柔和そうな女だが、目に小皺があった。あまり年若くないことが、この町のさびれようを物語るようであった。江戸に政権が出来て以来、この町の経済力は日に落ちる一方になっている。

「この者、桔梗と申しまする」

と老女が型どおり挨拶し、引きさがった。

女は、一礼し、立て膝のままで酒器をとりあげた。酒をつごうとして、ふと、

「もしやあなた様は」と微笑を消した。「才蔵どのと申されませぬか」

じろりと才蔵は女を見る。

「なぜ左様なことをきく」

「いえわたくしの朋輩が」

女は酒をつぎながら、

「あなた様のような御人相の殿方をおさがし申しているときいているからでござりまする」

「人違いであろう。しかし、その女はなんという」

「世にいたときの名は、たしかお国とか」

「酒をつげ」

と女のほうは見ず、

「左様なおなごは知らぬ」

あとで小用を足すふりをして廊下をあるいた。才蔵の胸に、驚きと疑問がうずいている。なぜあのお国が、堺のかような所にいるのか。

中庭に面した東棟に出たとき、庭をへだてた廊下に人影がさした。

影は二つであった。嫖客である。一人は小柄な武士で、他の一人は髪を立髪にのばした兵法者風の男で、どうやら小柄な男につき従っている様子らしい。

（あれは、小幡勘兵衛ではあるまいか）

相手の影は、すぐ庭の蘇鉄のむこうにかくれてしまった。

小幡勘兵衛とは例の真田丸の寄せ手のなかにいた東軍の武士で、退去するとき酒杯の絵を染めた旗指物を置きわすれ、勇敢にもたった一人ひきかえしてきた男である。

「何者ぞ」

と城内から真田の兵の一人が呼ばわると、

「わしか」

とふりかえった。城内ではこの男をからかい、

「おのれのほかに人はおらぬわい。矢弾の馳走をしようか」

「あたるものなら、あててみよ。おれはたまたまいまは加賀殿に陣借りしておるが、もとは徳川家でさる者ありと知られた小幡勘兵衛景憲という者じゃ。射ってみよ。射ちとって損をする相手ではあるまいぞ」

「いかにも馳走しようわ」

鉄砲隊長が銃撃を命じようとしたとき、幸村がおしとどめた。

「ただ一人を、数十挺の鉄砲で射ちとるのはおとなげない」

たしか、その勘兵衛であった。あのとき距離が遠かったために真田丸の城兵たちはたれ一人勘兵衛の目鼻だちまではみえなかったが、才蔵の目にはよくみえた。そのユーモラスな行動のわりには、陰湿な小悪人の印象があったことをおぼえている。

（その勘兵衛が、なにをするつもりで堺にきたのか）

なんとなく、事件のにおいがした。

その夜、才蔵は、妓が寝入ってしまうのを見すますと、そっと起きあがった。妓は酔いと愛撫に疲れたのか、目をさまそうともしない。

才蔵は、妓の足もとに立ち、ひらり、ととびあがった。同時に天井の桟をつかみ、やがて逆さ四つ足になってはりついた。ゆっくりと羽目板を二枚はずし、身を天井裏へ入れた。再び板を閉じる。

そのあと、ひらひらと蝶が舞うように梁の上をあるきはじめた。どういう工夫があるのか、この梁渡りをするときは、いっさい天井裏の埃を五体に付着させないのが、忍びの極意の一つといわれている。

（ここじゃな）

小幡勘兵衛の部屋である。

かすかに話し声が湧きあがってくる。男が二人、女が一人、酒器をかこんでかたまっている様子だった。天井裏の才蔵は、梁に両足の甲を掛け、ぶらりとさかさに垂れさがった。

両手は、胸に組んでいる。垂れさがった顔を、やがて天井のハメ板の隙間に密着させ、下の部屋をのぞいた。かすかに様子がみえる。

（妓は、お国じゃな）

声でわかった。しかし、低い。男たちの声も低い。

この一座の会話の内容までわかりにくかった。才蔵は、それから二十分もおなじ姿勢でそれらの声を聴きつづけたが、笑い声がきこえぬところがふしぎであった。おんなをまじえた妓楼の酒席で、ふつうならありえないこととみてよい。

ただひとこと、

「調略」

ということばが、きこえた。才蔵は、勘兵衛という男が、ただの武士ではないとみてとった。

（諜者か）

勘兵衛の履歴についてはのちに才蔵は知ったが、この男はもと甲斐武田家の遺臣の子で、主家がほろんだときはまだ幼童だった。家康はあわれんで秀忠の児小姓とし、十六歳で元服させ、知行二百石の近習役にした。非常な才物で家康は他の者がそねむほどに愛したが、これほど恩寵をうけながら勘兵衛は十八歳で、無断で徳川家を出奔した。当時、自ままに主人

のもとを退転すれば、

「主人を見かぎった」

との罪で、上意討にかけられても仕方のないことだった。が、家康はさわがず、

「捨てておけ」

といっただけだという。勘兵衛の晩年の文章によればその後諸国を遍歴して「武者修業」したと回顧している。家康の諜報係になっていたのである。

大坂冬ノ陣がはじまるや、ことさらに家康の旗本に帰参せず、牢人分として加賀の前田家の陣借りをした。前田家ではとくに勘兵衛を鄭重にあつかい、客分の礼遇をとっていたといわれる。

大坂ノ陣がおわると勘兵衛は江戸に帰参して知行千五百石を与えられた。のち、甲州流軍学をおこし戦さの駈け引き、城取りの法、築城法、調略、諜報のことなどを教えて九十余歳まで生きた。

（ようやく読めた。お国は、勘兵衛の手先であったとみえる）

隠岐殿のもとにいたころから、お国の背後には勘兵衛が糸をあやつっていたのであろう。

（すると、兵法者めかしたあの男は、勘兵衛がやとっている護衛役のようなものか）

おもしろくなってきた、と才蔵は思った。

伊賀流忍術には、奇妙な法がある。

「ナイの術」

といわれるものがそれだ。「ナイ」とは地震の土語で、人工的に地震をおこさせるのである。甲賀流では「鳴動術」というのだが、術の内容は大差がないらしい。

余談だが、戦国中期の伊賀の名人百地三大夫は、武田信玄から頼まれて信州諏訪の豪族諏訪頼満の居館に忍び入ったとき、姿を見あらわされて逃げ場をうしなった。

「そのとき」と伊賀流のたいていの伝書に、

「一屋鳴動し、人々魂を消す。われさきに屋外に走り出、難を避く。三大夫無事退散。……」

とある。

三大夫が「ナイの術」をつかって逃げたのである。

その「ナイの術」を才蔵は用いようとした。家屋を鳴動させて人々を屋外へ走らせ、その混乱に乗じてお国を奪うつもりであった。お国一人をひそかにとらえて事情をききただすにはその方法しかない。

才蔵は、天井裏からおりた。やがて屋内をひそひそと忍び歩いた。

……家屋の構造には、かならず、その屋根の重さをささえている中心があるものだ。才蔵はまずその中心をさがさねばならない。そこに立って両脚を踏みかまえて力を入れる。千貫の釣鐘も、その反動を利用することによって指一本でついには大きく振り動かせるのと同様、呼吸しだいでは、これだけの妓楼を鳴動させるのもわけはない、といわれる。

（ここか。……）

納戸の片すみに才蔵は立った。

根気が要る。両足に交互に力を入れる。百度もくりかえすうち、かすかに「揺れ」がつたわってくる。才蔵はその微動を機敏にとらえた。さらに力を入れた。さらに反動が大きくなってもどってくる。やがて妓楼は大きく鳴動しはじめた。

「地震ぞ」

妓楼のなかは大さわぎになった。

男衆がとびだし、女どもが叫びながら廊下を駈けはじめた。才蔵はなおもやめず、はげしく揺さぶった。

そのとき、中庭にとびだした男があった。小幡勘兵衛である。つづいて例の立髪姿の男、さらにお国がとび出した。

中庭は、闇である。

才蔵がお国の背後に立ったとき、すでに地震はやんでいた。

「ほう、やんだか」

勘兵衛とその連れの男がぬれ縁へはいあがったとき、才蔵の手が、お国の口をおさえた。お国はもがいた。しかし才蔵にくびをひきよせられ、耳もとへ、

「才蔵じゃ」

とささやかれると、びくりと体をふるわせ、おとなしくなった。

「外へ出よう」
そのままお国の体をかかえて屋外へ出、塀を越えて路上にとびおりた。
しばらく歩くと、旅籠があった。男衆が軒先へ出て、早立ちの旅客のために行燈に灯を入れようとしていた。才蔵はその肩をたたき、
「連れが病いじゃ。静かな間をたのむ」
「へい」
といったが、男衆はお国の派手な小袖をみて、これは旅の者ではないと思い、なにを想像したかにわかにふるえあがって、
「医者をおよびいたしましょうか」
「代官所に報らせるつもりか」
旅籠の男衆はふるえあがり、
「さ、さようなつもりは、毛頭ございませぬ」
「ならばよい。要らざることをすると、そのぶんではおかぬ。亭主にもよく申し伝えておくがよい」
何枚かの銭をにぎらせた。
男衆は、才蔵とお国を奥まった一室に通すと、逃げるようにしてひきさがった。才蔵を野稼ぎの頭目とでも思ったのだろうか。

「お国……」
と、才蔵はすわった。
「そなたは、まだ性懲りも無う関東の隠密をつとめているのじゃな」
「……」
「かくしてもむだじゃ。すでにわしは、そなたと小幡勘兵衛との密議を」
「えっ」
「この目で見てしまっている。女だてらに隠密など、やめろ」
「やめませぬ」
お国は、怨ずるような目で才蔵を見あげ、
「お国は才蔵様の妻にでもしていただかぬかぎり、関東隠密とは縁はきれませぬ」
「なぜじゃ」
「勘兵衛様は、亡祖父の主筋にあたるお方でござりまする」
初耳である。
「そちの祖父は、甲州の武士か」
「はい」
「はじめてきいた」
小幡家はもと遠州葛俣の城主で、小幡山城守虎盛という者の代になって今川家に亡ぼされ、甲州の武田家数代につかえた家である。お国の家の伊能家は小幡家の家祖山城守虎盛以来の

郎従で、お国の祖父伊能元右衛門は甲州武田家の滅亡後、幼い勘兵衛を護って甲斐の山にかくれていたが、のち主従もろとも家康にひろわれたという。

勘兵衛が家康の諜者として諸国を流浪したとき、勘兵衛の命によって名を佐治助右衛門と変え、豊臣秀吉につかえて祐筆五十石をつとめた。その間、城内のことを勘兵衛に伝え、勘兵衛はそれを家康のもとにおくっていた。

「とすると、血脈二代の関東の諜者なのじゃな」

「はい」

お国は、うつむいたままうなずき、

「真田様の伊賀衆である才蔵様の妻にしてくだされば、いかに勘兵衛様とてわたくしを使うわけには参らぬであろうと存じまする」

「これは賢う売り込むわ。妻にせよ、というのか」

「隠密をやめよと申されるなら、やめられるようにしてくださりませ」

ずるい女じゃと思った。

才蔵は苦笑した。

才蔵はしばらく考えていたが、やがて、はじめてその生き物を見るような目でお国の華奢な体つきを見た。お国は気味わるそうに裾を掻きあわせ、

「なぜそのような目でご覧あそばします」

「そち、勘兵衛の情婦じゃな」

「……」

一瞬、お国の目もとが蒼白になった。

「とみた。なるほどそちにとって勘兵衛は主筋にあたるかもしれぬが、男なら知らず、ただそれだけで女のそちが勘兵衛の手先になることはあるまい。勘兵衛は牢浪のころからそちを〝くの一〟にするためにひそかに大坂城の大野屋敷にいるそちと情を通じていた。そちは情夫の命ずるままにあぶない橋をわたってきた」

「ち、ちがいます」

声が弱かった。

「よいわ、たれのつまであろうとも」

才蔵は、自嘲するように、

「わしの知ったことではなかった。わしは生涯、行く雲、流るる水を相手に生きてゆく」

といいおわるや、右手をとんと刀の柄にかけ、

「お国、これを見ろ」

お国は、才蔵が狂気したかと目を見はった。

一閃、才蔵の刀は、ふすまに描かれた白椿の絵を真っ二つに斬り裂いた。お国は、あっと叫んだ。奇妙にも白椿の絵がみるみる赤く染まったのである。

「出ろっ」

才蔵は、足をあげてふすまを蹴倒した。そこに、左肩を血でにじませた例の兵法者が立っていた。

「とうとう来たか。わざとにぎやかに退散したゆえ、おそらく後をつけるであろうと楽しんで待っていた。客人、名をうかがっておこうか」

「聞き知っていよう。中条流の兵法者日野左内」

「勘兵衛に銭で傭われたか」

「くらえっ」

すさまじい抜き打ちだった。才蔵は受けるいとまもなく、畳の上をそのまま背後へはね飛んで、床ノ間まで一挙にひきさがり、青磁で獅子を形どった香炉を倒した。

左内は中段に構えながらお国のほうへ顎を振り、

「早うお逃げなされ。小幡殿が待っている」

「逃げませぬ。わたくしは、この才蔵さまのつまじゃ」

「血迷いなされたか」

「左内」

と才蔵はいった。

「どうやら勘兵衛とお国のあいだに痴話喧嘩があったようじゃ。連れもどして仲をさばいてやれ」

「うぬっ」

電光のように左内の刀が刺突してきた。才蔵は、かわしもせず軽く腰を沈ませた。

瞬間、左内は死体になって転がった。……胸に、才蔵が抜き投げた脇差が突きさされていた。

「お国」

才蔵は脇差をぬきとりながら、

「もう会うことはあるまい。わしはそちを想うたこともあった。しかし伊賀者の心には、本来、女は、棲まぬはずじゃ。いまにして思えば愚かなことよ」

才蔵は、廊下へ出た。

夏ノ陣

才蔵はその後堺を出て京へ行き、伊賀へまわってひさしぶりで故郷で骨休めしてから、桜が咲きそめるころに大坂へもどった。大坂の町に入ると、

（なんと、これは）

とおどろいた。二ノ丸から三ノ丸にかけての城内の町の様子が一変しているのである。

数万の人夫が町にあふれ、蟻のように働いていた。よくみると、堀をうずめているのだ。

堀ばかりか、二ノ丸千貫櫓が引きくずされ、西ノ丸へまわってみれば大野修理の屋敷までが破壊されようとしていた。

才蔵は真田丸にもどるとすぐ佐助をつかまえ、
「なんじゃ、あれは」
「妙なことよ」
佐助は、やるせなさそうな笑いをうかべた。
佐助の話によると、停戦のときに開かれた関東との講和会議では、家康は秀頼に対して、左の旨の誓紙を入れた。
一、豊臣家の本領（摂河泉六十五万七千石）を安堵する。
一、城内新旧将士の身分については異議はない。
秀頼もまた家康に誓紙を入れ、
一、家康、秀忠に対して決して異心は抱かない。
一、諸事、前々のごとく取行なう。
と誓ったが、どちらの誓紙にも「城割」のことは触れていない。
ところが、会談のとき、家康は「口頭」で軽く、
「わしもわざわざ関東から出むいて参ったのじゃ。その出陣の印に総構の堀をほんのわずか埋めさせてもらおうか」
家康の本意はここにあった。しかし城方では、相手の口ぶりの気軽さについつりこまれ、
「総構の堀ぐらいならば」
と黙認した。

家康はさっそく、松平忠明、本多康紀、本多忠政を奉行に命じ、諸藩に城割の土木工事を割りあてさせて、自分は軽兵を率いて駿府へ帰ってしまった。
しかし、工事がはじめられると意外な事態になった。諸藩が競争で人夫を督励し三ノ丸ばかりか二ノ丸の堀までうずめはじめたのである。大野修理は仰天し、松平忠明ら奉行の幕営を歴訪してその違約をなじったところ、
「大御所のおいいつけでござる。ご異存があれば駿府へお使者を立てられい」
と答えるのみであった。
淀殿もまた侍女阿玉局を家康の部将成瀬隼人正のもとに派遣して問詰させたが、隼人正にいたっては詰問にも答えず、阿玉の美貌を大げさにほめちぎり、
「これはお美しい。そなたのようなお人と一夜でも契れば、この不粋な三河者の隼人正などは命もいらぬ」
などとたわむれるだけだった。
ごうを煮やした大野修理らは京でとどまっていた家康の謀将本多正信に訴えると、正信は驚くふりをして、
「それは不都合な。あの奉行どもは愚かにも大御所のお言葉を取りちがえたのでござろう。拙者、さっそく駿府に参りそのことを大御所に訴えたいが、なにぶん拙者は風邪気味でござる。なおるまでお待ちくださらぬか」
大坂方はその後、家康にも使いを出した。家康はただ驚き、

「きっと奉行どもを叱りおこう」

というのみでらちがあかず、そのうち工事のほうが進んで、いまや大坂城は裸同然になりつつあるというのである。

才蔵が見るところ、大坂城の首脳部は、この世の人間とも思われぬほどに無能者ぞろいであった。

最高の権力者は、淀殿である。これが、二位局、大蔵卿局、正永尼など小才のきいた婦人にとりまかれ、軍事、外交の主導権をにぎっていた。この取りまきのなかでただ一人の男は、秀頼の家老大野修理治長だった。

治長は、淀殿の女官大蔵卿局の息子というだけでこの権勢の位置にのぼった男で、小商人程度の才器しかなかった。

家康は最初からこの寡婦と女官と女官の子のグループを嘲弄してかかっていた。まるで赤児をだますような幼稚な外交手段でうまうまと大坂城を裸にしてしまった。家康が老獪なのではなく、大坂方が無能すぎたのである。

この首脳部の無能ぶりには、後藤又兵衛、真田幸村、明石掃部、長曾我部盛親などいわゆる牢人組の大将は腐りきっていた。

かれらは、戦闘のみを担当するだけで、戦略と外交には、ほとんど口を入れることはゆるされなかった。

冬ノ陣の講和のときも、かれらは、

「家康のワナにかかるようなもの」

と極力反対し、若い秀頼までがこの牢人諸将の意見に同意したが、治長はひそかに秀頼に謁して、

「お家の大事をあの牢人どもの考えで決されてはなりませぬ。あれらは、もともと餓えてこの城に拾われた者、もし合戦がなくなれば再び野で餓死せねばならぬのをおそれているのでござりまする」

といった。秀頼も、

「なるほど、左様なものか」

とうなずいたという。とうていこの首脳陣で、関東を相手に天下を二分する戦いが行なわれようはずがなかった。

才蔵は、幸村のもとに伺候して帰城のあいさつをすると、

「おう、もどったか」

と、ひどく上機嫌だった。幸村は、この霧隠才蔵というどこか世の組織からはずれた場所にいる男が好きでならないらしかった。

「堺、京の様子はどうであったか」

「申しあげ難うございますが、町衆から下人にいたるまで、もはや大坂の勝ちをとなえる者はありませぬ」

「そうであろう。城というものは敵によって陥ちるものではなく、城をまもる者自身が崩すものじゃ」

幸村は、べつに壮語しているわけではなく、この男は慶長五年秋、父昌幸とともに石田三成の挙兵に呼応し信州上田城にこもったとき、進軍してきた家康の第二軍秀忠の軍勢をひきつけて善戦し、ついに秀忠をして関ケ原合戦に参加する時間をうしなわしめた実績の持ちぬしである。幸村にすれば、上田の小城でさえ天下の大軍を相手にして陥ちなかったのに、大坂城は、軍略の次第では陥ちる城ではないというのであった。

「しかし、裸城となったいまでは、もはやどうしようもないわ。こんどの戦さでは、城外の山野でぞんぶんに戦い、真田左衛門佐の名を後世の武士の語り草にしてみせてくれよう。それを思うと、わしは夜の目もねむられぬほどに楽しい」

幸村は、さわやかな声で笑った。

家康は、大坂城が裸になったことを見すますと、二、三の難題を秀頼にもちかけた。おどろいた淀殿が家康の温情を乞うために大蔵卿局、常高院、二位局などの女たちを駿府に派遣したが、家康は相手にせず、元和元年三月、諸大名に大坂討伐の出陣を命じた。

やむなく大坂方でも兵備をととのえ、さらに諸国に牢人を徴募し、その数、十万以上にのぼった。

城内では毎日軍議がひらかれ、幸村をはじめ、後藤又兵衛、木村長門守重成らは、

「敵に先んじて出戦せよ」

と主張した。

もはや、籠って戦うべき堅塁がなくなったために野外決戦をせざるをえない。ところが家康は、野戦にかけては古今の上手であるため、大会戦を避ける必要があった。自然、策としては、家康の本軍が出てこない前に、その前衛部隊を全力をあげて殲滅し、家康の手足を断ってから決戦に持ちこむべきであった。

ところが、これほどの平明の理が、大野修理にはわからないのである。

「それは不利である」

と、こまごまと理由をあげては、大会戦主義を主張し、軍議はそのためにはかどらなかった。

ある夜、後藤又兵衛が真田丸に訪ねてきて幸村に、

「修理の様子、妙ですな」

と首をかしげた。幸村はうなずき、

「貴殿もそう思われましたか。修理のことばをいちいち聴くに、冬の合戦のときよりははるかに軍略にくわしい。わずか数カ月のあいだにああも兵語を覚えられるものであろうか」

「いや、一夜漬に軍書を読んだわけでもありますまい。おそらく、悪い狐が憑いたのではあるまいかと存ずる」

「なるほど」

幸村は、鈴をふって近習をよび、

「才蔵をこれへ」
と命じた。
又兵衛は言葉をついで、
「先日の牢人徴募で、だいぶ新顔が入ってきている様子です。あるいはそのなかに、関東の利け者が諜者になってまぎれこみ、修理にとり入ってその幕営に参じているのかもしれぬ」
しばらくして、才蔵が、はるか下座のほうにあらわれた。
「近う」
と幸村は手まねきし、又兵衛に、
「この者は、狐退治の名人でござる」
と紹介した。又兵衛は下座の才蔵をふりかえって、
「伊賀者か」
「左様」
才蔵はひくく答えた。
「伊賀者には惜しい面魂じゃな。真田殿は多数忍びの名人を抱えられているときいたが、その者を見るのはいまがはじめてじゃ。名をなんという」
「はて」
才蔵は又兵衛の素朴な質問に苦笑しながら、
「忍びには、名などござらぬ。しかし人はよんで、霧隠才蔵と申しているようでござる」

才蔵はやむなく、
「大野修理の狐おとし」
に出かけた。
城内の各陣所を通過するときにあやしまれないように、真田幸村自筆の関札を用意し、身分は幸村の「使番」になっている。服装は平装で、供もつれていない。
才蔵は、昼さがりに真田丸を出たのだが、城内の曲折した道路を歩いているうちに、本丸の郭内に入ったときは、陽が沈みはじめていた。この城内は、それほどに広い。
まず、隠岐殿に会おうと思ったのである。彼女ならば、肉親の大野修理の身辺についてくわしかろうと思った。
……しかし困難はあった。彼女は淀殿の女官で、京で隠密を働いていたときなら知らず、城内に入ったいまは、容易に会えるはずがない。いわば、雲の上の人といってもよかった。
（相手は、上臈じゃ。会うために手続きを通せば、かえって途中で話がこじれ、場合によっては左衛門佐どのの迷惑になるような事態がおこるかもしれぬ。これは、夜を待って忍ばねばなるまい）
隠岐殿の長局は、つつじ屋敷と俗称される建物のなかにあった。
……隠岐殿はその日は非番で局で起居していたが、夕食後は退屈なまま家来（侍女）三人を相手に南蛮骨牌に興じていた。

時がすぎても、隠岐殿はやめない。そのくせ骨牌をとる手がどこかうつろなのである。家来のひとりがたまりかねて、

「旦那さま、もう遅うございます。あすはお宿直でございますから、おやすみなされましては？」

「よい」

われにかえったように、微笑した。

彼女は、きょうは夕刻から妙に胸さわぎがしている。どういうわけか、才蔵のことが思いだされてならず、このままでは寝つかれそうにないと思っていた。

「あけ方まで遊んでいてもよいのじゃ」

「まあ」

家来たちは、そっと目顔でおどろき合った。

そのころ、才蔵は、天井裏で、うつうつと居眠りしながら、部屋のなかの話し声をきいていた。ときどき思いだしたように天井板の隙間から下を見た。

（これが、あの隠岐殿か）

とおどろくほど、いまの才蔵の目には、隠岐殿がまるで別の女にみえた。

ものの云い様、笑いかた、冗談のいいぶりなど動きのすべてが、無邪気な小娘にすぎなかった。

（いや、もともとの素顔は、このような罪のない娘なのかもしれぬ）

そういう娘が、京にいるときは隠密の棟梁という荷の勝った仕事のために、幾重にも自分を武装し、持ち前の才気をもって無理な演技をしていたのであろうか。

そのとき、家来の年がしらの者がきっと形をあらため、

「ね、旦那さま」

と、まるで童女にいいきかせるような口ぶりで、

「もう御寝なされましな。骨牌は、またつぎの夜にいたしましょう」

「厭」

と隠岐殿はかぶりをふり、「そなたたちがねむいなら、さきにおやすみなされ」といった。この隠岐殿のしぐさが、才蔵の目に、痛いほどの新鮮さでうつった。

その隠岐殿も、戌ノ下刻（午後九時）の太鼓がひびきわたってきたときは、さすがにねむ気を催したのか、

「寝間に入ります」

と骨牌を置いた。

「そうなされませ」

女たちは、衣装をぬがせ、夜の小袖に着かえさせた。三人の女家来衆は、よほど主人の隠岐殿を愛しているらしく、幼児に着せかえをさせるような態度だった。

「さあ、お手洗水に参りましょう」

一人が手燭をもって立ちあがった。
隠岐殿は、長い廊下を歩きながら目をこすった。
「だいぶ、お眠むでございますね。あのような勝ち負けに意地をお張りなさるからでございます」
「うん」
というあどけない顔を、隠岐殿はしてみせた。
隠岐殿は侍女から手燭をうけとり、厠のなかに入った。
厠は四畳ほどの広さで、畳が敷かれ、香がたきこめられている。
隠岐殿は用を足しおわって立ちあがろうとしたとき、不意に風がきて手燭の焔がはげしくゆれた。はっとして上をみると、板が三枚はずされ、黒い穴がのぞいた。
（あっ）
懐ろの短刀に手をかけたとき、それよりも早く、才蔵がとんとおり立っていた。
「おれだ」
「なぜこのようなはずかしい場所に参られます」
「厠の神というものもある」
才蔵は大真面目でいった。
「あなた様は、厠の神でございますか」
隠岐殿は、くすりと微笑った。任務のなかにあったときは、みせたことのない無邪気な表

情である。才蔵はこの男にしてはめずらしく、いとおしさに抱きしめたくなった。手をそっと隠岐殿の肩にかけると、彼女はそれをはずして、
「守口ノ宿で、お国に会われたそうでございますね。どうなされました」
「はて、どうしたかな。わしの心は大ていの過去を忘れる仕組になっている」
「結構なことです」
「用がある」
「いまさら、このわたくしになんの御用でございますか」
「お城の大事と申してよい」
「わたくしは、もはや隠密などはいたしておりませぬ。あなた様と京ですごしたことは、もはや遠い過去のよう。わたくしも忘れはてました」
「左様に冷とう申すものではない」
「これはめずらしい」
ほ、ほと隠岐殿は笑い、
「才蔵様も、そのようにおなごの機嫌をおとりなさることがあるのでございますね」
「しっ、外にきこえる」
「では、あと、半刻のちにわたくしの寝所にお忍びなされませ。家来の者を遠ざけてお待ちいたしておりまする」

その刻限、隠岐殿は、枕もとに端然とすわって才蔵を待った。

やがて、襖が音もなくひらき、才蔵が足を踏み入れた。隠岐殿は視線をくずさず、じっとその忍び足袋をみながら、

「茶などお立てつかまつりましょう」

「まず、衣装を解く」

黒装束をはらはらとさわるとたちまち解け、才蔵の平装の姿があらわれた。

部屋のすみに炉が切ってある。炉のわきに屏風がめぐらされ、湯のたぎる音がきこえていた。

「ではいただこうか」

才蔵は、すわった。

隠岐殿は、炉の前にすすみ、静かな姿勢のなかに、生気のみちた巧みな手さばきで、一服の茶をたてた。やがて茶わんを才蔵の膝もとにすすめ、自分もゆっくりと両掌で抱きあげながら、

「お久しゅうございましたな」

といった。

「守口の宿駅でお別れしてから幾ばくも経ちませぬのに、その間に合戦がありましたせいか、ずいぶん遠いむかしのように思います」

「そなたも達者でよかった。あの合戦のとき、家康が放った和蘭陀大砲の弾が、本丸にとび

こんで柱を打ち砕き、そばにいた淀殿の侍女たちが逃げまどうたときいたが、そなたもやはり逃げたか」

才蔵は、からかっている。

「逃げました」

隠岐殿は、そのときの自分を思いだしたのかおかしそうに笑いながら、

「ひょっとすると、泣き声をあげたかもしれませぬ。京ではあのような女にふさわしからぬ仕事のせいか、ずいぶんと臆れ心をおさえて振舞うておりましたが、お城へ帰りますと、もとのわたくしになりはてました。あの日、朝から間断なくきこえていた遠雷のような大砲のひびきが、いまだに耳に残っております」

「優しいことをいう」

「わたくしは、もともと優しいおなごでござりますもの」

「左様かな。この才蔵にも、幾度か手痛い目にあわせたことが一再ではなかった」

「お願いじゃ。もう、申されまするな。京でのわたくしは、わたくしではありませぬ」

「用がある」

才蔵は、話の腰を折った。隠岐殿は不満そうに口をつぐんだ。

「そなたの兄の修理（大野治長）殿のことじゃ。修理殿がちかごろ召しかかえた牢人衆のなかで、軍陣のことにくわしく、才気あり、能弁で、修理殿に可愛がられている男を知らぬか」

「名を何といいます」

「それを訊いている」
「はて、兄の口からはききませぬが、淀殿が、近頃修理は重宝な者を召しかかえたそうじゃ、と申されているのをきいたことがございます。名を、小栗利兵衛と申しまするげな」
「そなた、その者を修理殿の屋敷などで見たことがないか」
「ございます」
と、隠岐殿は利兵衛の年恰好、顔つき、背丈などをのべた。
（やはり、小幡勘兵衛にちがいない。城内の権臣の懐ろに入るとは、さても放胆な）
「その男が狐じゃ」
「と申しまするとと？」
「もと家康の近習をしていた小幡勘兵衛が化けた名じゃ。去る冬の合戦では、加賀の前田の陣を借りて戦さ働きまでしている。いまは諜者よ」

「諜者」
つぶやいて隠岐殿は、遠い目をした。自分もそういう騒ぎのなかにいたころを思いだしたのであろう。
「で、才蔵様は、その小幡勘兵衛とやらを、どうなされるのでございます」
「人知れず、斬るわ」
事もなげにいった。

「しかし、兄の寵臣でありますのに、それではあとで事がもつれましょう。わたくしから兄にそれとなく申しましょう。兄の手で始末をするほうが、よいかと思います」
「いや、それは浅慮じゃ。ただでさえ、そなたの兄の修理殿と、真田、後藤、長曾我部という牢人あがりの大将と間柄が旨うない。右の者を諜者じゃと真田がいうたとわかれば、修理殿は中傷と受けとり、どのような臆測を加えるかもしれぬ。これは、忍者の作法どおり、闇から闇に葬るほうがよい」
「しかし、わたくしが見たときは、あの者は、自分が連れてきた屈強の者を五人ばかり引き具しておりました」
「五人？」
（風魔かもしれぬ）
風魔は常に五人一組になっている。才蔵は、なんとなく直感した。
「やはり、訪ねてきてよかった。それだけでもきけば、たすかる」
立ちあがろうとする才蔵を隠岐殿は、視線だけで見あげ、
「才蔵様は風のような」
と唇を小さくひらき、
「才蔵様には、ひとの心というものがないのではありませぬか」
「心か」
無いのが、才蔵が学んできた伊賀の術の理想であった。しかし隠岐殿を見おろした才蔵の

目には、この男にはめずらしく愛憐の思いがやどっていた。これが隠岐殿を見る最後になるかもしれぬと思ったのである。

「そなた、戦さがはじまっても、矢弾のそそぐ場所には出るでないぞ」

「お城に火がかかりましたならば？」

「逃げるがよい」

「右大臣様や、おふくろ（淀殿）様や、兄の修理などを見捨てましても」

「そなたの仕事は、京で豊臣家のためにあれだけ尽したことでおわっている。おなごの身で城を枕に死んでも、たれもほめはせぬ。それよりも、残された春秋を自分のために生きよ」

「でも、もし落城のばあい、火がかかり、寄せ手が乱入してくるなかを、おなごの身でどうして逃げられましょう」

「……」

「才蔵様が、助けにきてくださいますか」

「やむをえぬ」

才蔵は、渋面をつくっていった。

「わしが云いだしたことだ。万一の場合、わしがどこにいても、そなたを救いだしてやろう」

「まこと？」

隠岐殿は、急にあどけない顔になり、

「きっとまことでございまするな」

「霧隠才蔵が請けあうのだ。わしがそのとき生きているかぎり、まちがいはない」

「きっと？」

隠岐殿は、両ひざで立ちあがりながらいった。死ぬことはすこしもいやでなかったが、才蔵が死を賭してでも迎えにきてやろうといってくれたのが、魂のふるえるほどにうれしかったのである。

「才蔵様、わたくしを抱いて。でなければ、わたくしは倒れそう」

小幡勘兵衛は、戦慄した。

むりもなかった。

毎日、かれの手もとから一人ずつ郎従が減っている。すでに五人のうち三人までが消えているのである。

どこで、いつ殺されるのかわからなかった。ただわかっているのは、朝になると、死体が本丸下の堀に浮きあがっていることであった。傷口はいずれも右袈裟懸であり、悽惨なばかりの腕で、いずれも一刀で仕止められている。

（なぜ、曲者はおれの家来のみをつけ狙う？）

敵が見えないだけに、また敵の意図が不明なだけに、勘兵衛にとっていっそう不気味だった。

大野修理は、陣中目付からこれらの報告をきき、さすがに疑問をもった。勘兵衛をよび、
「妙じゃな。なぜその方の郎従ばかりが斬られる。人に恨まれることがあるのか」
「殿、これは」
さすがに、のちに軍学者として江戸で盛大な門戸を張った男だけに、巧みな答弁を用意していた。
「ゆゆしいことでござりまする。あの者どもは、陪臣とはいい条、殿のご家来でござる。おそらく、城内で殿の御権勢をそねむ者の仕わざでござりましょう」
「しかし、わしの家来、与力衆もあまたあるというのに、なぜその方の郎従のみが斬られるのか」
「それが……」
勘兵衛はちょっと考えて、
「新参ながらも、殿の寵をかたじけのうし、幄幄の末座に参じさせていただいておりまする。いわば、殿の腹心でござる。それがしに害を与え、それによって殿の御心胆を寒からしめようというのが、相手の魂胆でござる」
「相手とは？」
「お耳を」
勘兵衛は五尺の近さまで進み、
「かような芸のこまかさから察するに、真田左衛門佐のほかに思いあたりませぬ」

勘兵衛の諜者としての仕事は、実力派の牢人諸将と譜代の大野修理らとの離反をはかるのが主目的だったから、これは弁解と謀略の両刃の言葉といえた。しかしさすが愚物の大野修理も失笑し、
「いかに真田左衛門佐が芸達者とて、左様な小細工はすまい。その方すこし思いすごしておる」
勘兵衛は、宿陣にもどってから、不安に堪えられなくなった。
（曲者は、よほど腕がたつ男とみえる）
勘兵衛の郎従は、才蔵が察したとおり、かれが城に入るときにひそかに駿河、甲斐であつめた風魔の族であった。いずれも忍びに練達の者で、むざむざと討たれる者どもではないはずであった。
勘兵衛は、宿陣の一室に生き残った風魔ふたりをよびよせ、
「相手は何者と思うか」
「伊賀者ではありませぬか」
勘兵衛は、恐怖をふりおとすような勢いで、唇をかんだ。いざとなれば、単身敵城に入るほどの男だから、細心な一方、異常な豪胆さがある。
「座して待てば、曲者は図に乗ってついには何をしでかすやら知れぬ。今夜からこの宿陣のまわりを仔細に調べ、見つけしだい、討ちとってくれよう」

勘兵衛がそういいおわったとき、部屋の隅に、ぱっと火光があがったかと思うと、濛々と白煙が立ちこめた。

一同、はっと立ちあがった。

「曲者ぞ。出合え……」

叫ぼうとした勘兵衛の首すじに、つめたい白刃があたっていた。

「さわぐな」

低い声の持ち主である。白刃が、じわじわと首に食いこむために、勘兵衛は、ついに四ツ這いになってしまった。

「な、なに者じゃ。土蔵」

風魔の一人の名をよんだ。

「猪太郎。な、なにをしている」

「呼んでもむだじゃ。……見ろ」

あっと勘兵衛は叫んだ。煙が薄れはじめた。畳の上に、風魔二人の首がころがっている。一つは上をむき、一つは目をひらいたまま燭台を見つめていた。

「ああなりたくなければ、しずかにすることじゃ」

「……」

「話をきいてもらおう。小栗利兵衛、いや実の名は小幡勘兵衛と申すのであったな」

勘兵衛は肘を折りまげた。観念したらしい。

「わしは、堺のさる青楼でおぬしと出会ったことがある」

「……」

「ひそかに、おぬしの密計を聴いた。敵の城に乗りこむとは、いかに功名のためとはいえ、みごとな度胸じゃ。わしは伊賀者としてほとほと敬服した」

「うふ」

勘兵衛は笑う余裕ができたらしい。

「それほど感心なら、わしの弟子になるがよい」

「なってもよい。伊賀ではいっぱしの者といわれたわしでも、これほどの城に入って味方になりすます芸はない。素人ながらあっぱれなことよ。しかし、あの堺では地震があったであろう」

「ふむ」

「あれは、わしがおこした」

勘兵衛は疑わしそうな表情で口をつぐんだ。

「あれほどの術があっても、城入りはむずかしいものじゃ。はたして素人のかなしさで、おぬしは事に破れていまわしの白刃の下にいる。これに懲りてもう二度とこの城に帰らぬようにせよ」

「ほほう」

勘兵衛はずるそうに唇をゆがめ、

「おれを放つ、というのか」
「念におよばぬ。あすの朝、城門がひらくとともにどこへなりとも消えてゆくがよい。おぬしのような狸を一つ二つ捕えたところで、この城がどうなるものでもなかろう」
「もう一度きく、逃がしてくれるのじゃな」
「ああ」
「礼をいうぞ。関東御勝利のあかつきは、おぬしを推挙してもよいわな」
「死にぞこないめ」
才蔵は冷笑した。
「恩売りがましいことをいうわ。礼をいいたければ、わしにいうより、お国にいうがよい。お国には多少の義理があり、それによっておぬしを放つ。それだけのことじゃ」

家康が大坂攻撃のために駿府を発したのは元和元年四月四日である。
すでに諸侯に出陣の命をくだしてあったが、家康自身は企図をかくすために、この西上は、
「尾張宰相義直の婚儀のため」
と触れだされていた。
同月十日、家康は名古屋城に入った。その日、大坂城を脱走してきた小幡勘兵衛を謁見し、また同十三日には、勘兵衛とともに関東の諜者として大坂城内にあった織田有楽とその子尚長が脱走してきてこの三人からこもごも城内の情勢を聴きとっている。

同月十八日、家康は京の二条城に入り、将軍秀忠は、二十一日伏見城に入った。
すでに京には、奥州の伊達政宗、筑前の黒田長政など遠国大名が到着し、大坂攻略に動員される関東の軍勢は二十万というぼう大な陣容であった。
一方、これを迎えうつ大坂方では、戦略を、
「先制出戦」
に決定し、東軍のせまるのに先だち、兵を大和、和泉に出して、郡山、堺を焼いた。
堺を焼いたのは、堺の商人たちが豊臣家の領内にありながら、ひそかに関東に通じていたからである。
その日、堺の町の燃えあがる火煙が、才蔵のいる真田丸からも遠望できた。
おそらく津野宗全の屋敷も燃えあがっているだろうと痛ましく思いながら、
「まるで、佐助。子供っぽい」
と吐きすてるようにいった。
「野盗のたぐいじゃ。あきんど相手の戦さなら、たれでも勝てるではないか」
大坂方は多少常軌を失っていた。
大和方面に出戦した大坂方の敵は、郡山城であったが、わずか一万石の城主筒井正次の居城で、正次は衆寡敵せずと見、城をすてて逃げた。大坂方は、城下を焼き、余勢を駆って奈良へも乱入放火しようとしたが、大坂から使番が飛んできて、
「奈良には大寺が多い。入るな」

と押しとどめたため、奈良は焼失をまぬがれた。火に狂ったかれらは、やむなく法隆寺村、竜田村などに放火し、国分峠から大坂にひきあげた。

堺を焼いたのは、四月二十八日である。この部隊は、大野治房の直轄部隊で、五人の部将によって指揮されていた。

大野道犬、塙団右衛門、御宿勘兵衛、岡部大学、長岡正近であったが、かれらは堺乱入後、畿内の諸城を攻めつつ岸和田に入ったときに大野治房は、先鋒の大将を岡部大学に命じた。功をあせった塙団右衛門はこれをよろこばず、

「われをさしおいて、なぜ、大学づれを先鋒に選ばるるや」

と、無断で突進し始め、ついに軽兵を率いたまま、樫井の付近で浅野勢と激突し、乱軍のなかであっけなく討死してしまった。

樫井の敗報は、翌日、城内に伝わり、団右衛門の猪突が作戦を狂わせたことをみな非難したが、才蔵は、そうは思わなかった。団右衛門は、すでに大坂に勝算なしと見、男として名を残す死場所だけを考えていたのだろう。自殺といってよかった。

泉州樫井の敗兵が、血とほこりにまみれて城にもどってきたのは、五月一日の昼すぎであった。よほど疲労しているらしく、城内に入ると、あちこちで具足を解き、涼しそうな物蔭をえらんで、素裸で寝ころがった。

才蔵は、幸村の使番として本丸へゆくべくその群れのなかを歩いていた。

あちこちの群れが、声高に戦さばなしをしている。

「なぜ、あれが負け戦さじゃったのかな」

と首をかしげている武者もあった。その仲間があいづちを打ち、

「おれもわからぬ。おれは後詰めにいたゆえ、前のほうで鉄砲がきこえるばかりでついに敵の姿を見なんだ。味方は多勢だし、勝っているものとばかり思うていたが、ほどなく、退け、ということじゃ。なんのことはない。岸和田、貝塚くんだりまで歩きに行ったようなものじゃ」

「おれは、先手にいた。それゆえ、戦さは見た。あれは勝っている戦さじゃった」

「なぜじゃ」

と、たれかがたずねた。

「先手の塙団右衛門どのがなるほど駈けすぎて討死はなされたが、それだけのことではないか。全体からみれば城方はほとんど無傷であったし、人数も多い。なぜもう一押しやらなんだか」

「大野どのは、気弱におわすよ」

「おれは若いころ関ケ原に出たが、戦さというものは夢中なものじゃ。乱軍のなかにいると、味方が勝っているのやら、負けているのやらわからぬ。そのとき大将たる者が、味方の勝ちぞ掛かれ掛かれ、と声すさまじく喚いてくれれば百倍も元気が出て押してゆく。大将とはそういうためにあるもので、大野どののように、先手がすこし怪我をすればあわてて退き鉦を

たたくようでは、大将とはいえぬわ」

大坂城の首脳部への不信は、軽い身分の士卒のあいだにまではびこっていた。

才蔵が、本丸への石段をのぼろうとしたとき、上から大兵の武将が、近習の者をひきつれておりてきた。後藤又兵衛である。本丸での軍議のもどりらしく、沈鬱な表情をみせていた。

才蔵を見ると又兵衛は足をとめ、急におだやかな微笑をうかべた。

「おう、これは先日の名無しどのではないか」

「……」

才蔵は、石段の右わきに片ひざをつきながら、苦笑している。

「よい所で会うた」

又兵衛は気さくに寄ってきて、ひょいと小腰をかがめ、戯れるように、

「そちは色男じゃな。こうして顔を見ると、わしと同様男くさい面つきじゃが、わしはおなごには縁がうすい。そちはなぜおなごに人気があるのか、きいてみたい」

「おなぶりなされてはこまりまする」

「いや、感服しているのじゃよ。どうじゃ、菓子でも食べぬか」

又兵衛は、本丸で出されたらしい菓子の包みをとりだしてひろげ、地面においた。

酒をのまない又兵衛は、甘いものには目がないらしく菓子の一つを自分がまずつまみ、

「そちも食え」

すすめながら後ろの近習のほうをむき、

「たれぞ、親切はないか。野だてで、茶でもたててくれる親切が」

「はっ、つかまつりましょう」

二、三人が、付近の赤座直規の屯所へ走った。みな、又兵衛のこういう稚気を愛している様子だった。どの男の顔にも、明るい微笑があった。かれらは又兵衛を主人として畏敬するだけでなく人間として愛している、と才蔵はみた。これはよほどのことだった。又兵衛とその家来の間柄は、累代の主従ではなく、たがいに牢人として城に入ってきて結ばれただけの縁だが、かれらの間の濃やかなふんい気は、百年の主従にもみられないものがあった。

やがて、近習たちがもどってきた。

一人が炉のかわりに焚き火をおこし、茶釜のかわりに鉄鍋をずしりとかけた。

一人は茶わんのかわりに、軍陣で水筒につかう竹筒を二つ用意した。

最後にもどってきた一人が、どこで見つけたのか、古屏風をかついできた。

「ほう、大そうなものを持ってきたな」

「これがなくては、茶ノ湯のお気分は出ますまい」

「しかし風で倒れるぞ」

「ご安心あれ。手前どもが屏風のかげでおさえておりまする」

「殿、お敷物を」

と、一人が又兵衛とその客のために藁束を地面に敷き、

「これで、万事ととのいました」
「ありがたいのう」
又兵衛は、いちいちうなずきながら、目をしばたたいた。若いころ、武勇日本一といわれた後藤又兵衛も、ことしで五十六になる。折にふれて感ずることの多い人間になっているのかもしれない。
「こうして、藁の上にすわって竹筒で茶などをのんでいると、京の河原で乞食をしていたころを思いだすのう」
「伊賀者づれの身で茶を賜わるとは分際にすぎた仕合せでござる」
「なんの、わしももとは乞食じゃよ」
と笑いながら、
「人間と申すのは妙なものじゃのう。命があと幾何もないと知れば、そのあたりを歩いている人間までみな愛しゅうみえてくる。まして、そちのようにめずらかな面魂をもった男をみると、矢も楯もたまらず懐かしゅうなるわ。ついこうして、路傍にひきとめることになる」
「過分でござる」
「ところで、さいぜんの色男の一件じゃ」
と、又兵衛は茶わんをおき、
「きのう、隠岐殿に会うた。そちと会いたいと申していたぞ」
「これはしたり。後藤殿と隠岐殿とはどのようなお知りあいでござる」

「縁がふかい。わしは京で、あの者から隠し扶持をうけていた」
「なるほど」
才蔵も、茶わんをとりあげて、自分の照れをかくそうとした。
「とまれ」
と又兵衛は笑いながら、
「隠岐殿が、そちに会えばぜひ顔をみせてくれとのことであったぞ」
「おからかいは、痛み入る。しかし、隠岐殿は、左様にはしたなきことを申すおなごではござりますまい」
「これ」
又兵衛は愉快そうだった。
「そちは、隠岐殿とこの又兵衛との仲のよさを知らぬゆえ、左様なことを申すのじゃよ。隠岐殿は、又兵衛にかぎってはなにごとも包みかくさずに物語をする。京でのそちとのことも、すべてこの耳できいているわ。申しておくがそちは、わしには頭があがらぬぞ」
「……」
「ひとつには、この城もいつ落ちるかわからぬ。おなごの身にすれば、いのちのある束の間でも、この世の恋の味を楽しんでみたいのであろう」
又兵衛は、がらにもないことをいった。

ふと才蔵は、この又兵衛にだけは、落城前に隠岐殿を連れて落ちのびることを告げておこうと思った。

「殿」

といいかけて次の言葉をのみこんでしまったのは、才蔵をのぞきこんだ又兵衛の目があまりにも明るかったからである。自分の運命を達観しきった者のみがもつ明るさだろうか。

又兵衛は話題をかえて、

「才蔵、そちは忍びじゃが、忍びというものは具足を着て戦陣に出るものか」

「出ませぬ」

「それは詮ないことじゃ。戦さはおもしろいものぞ。真田殿にそう願い出て、出てはどうか。真田殿が出さぬというなら、わしが貰いうけてもよいぞ」

「いや、人には分がござる。拙者にとっては指物をさして敵に馬を乗り入れるなどの働きは、考えるだけでも物憂うござる」

「物憂いか」

「左様」

「そうかもしれぬ。隠岐殿からきいたが、そちは、京や海道で、関東の手の者を震えあがらせたという。そちの戦さは、この城に入ると同時におわったわけじゃな」

下戸の又兵衛はほろほろと茶に酔っているような姿であった。

「茶をいま一服、どうか」

「足りましてござる」

「わしは」

と又兵衛は右のあごをたたき、

「歯が痛む。茶は歯痛によいときくゆえ、もう一服喫することにしようか」

「左様にお痛みならば、歯を治療して進ぜましょう」

「ほう、忍者とは、歯の治療までできるのか」

「少々は」

「まあよい。いま、本丸の軍議で敵を砕く秘策を申しあげてきたばかりじゃ。これが図にあたれば、帰城してからそちに治療してもらおう。あたらねば、かの地で討死じゃ。もはや歯痛のない所へゆく」

「死に急ぎをなされますな」

「いそぐものか。そちも生きられるだけ生きるがよいぞ」

又兵衛はゆっくりと立ちあがった。風は西むきにかわったのか、目の下の赤座の陣営の旗の群れが、はげしく空に鳴っていた。

その夜、才蔵はなんとなく気になり、隠岐殿の宿所に忍び入った。

枕もとにすわり、隠岐殿の小さな耳たぶに口をつけて、

「後藤殿から口伝てをきいた。なんぞ、わしに用があったか」

「あっ」
　才蔵はその口をおさえた。
「声をたてるでない。そちの侍女が隣室で寝ている」
　隠岐殿は才蔵の手をとり、
「たしかに才蔵さまでござりまするな」
「いかにも」
「いま、才蔵さまの夢をみておりました。まるで夢のつづきのようでございます」
「用を早う申せ」
「べつにありませぬ。ただお会い申したかっただけ」
「そうか。では、後日かならず来る。そのときから、わしらの戦いははじまる。敵のみちみちているなかを修羅のごとく駈け入らねばならぬ。さればそのときまで、陣中堅固にくらせ」
　才蔵は立ちあがろうとした。
「なりませぬ」
　と、隠岐殿は、急にいつもの高調子でいった。
「ここにいて、わたくしをなぐさめてくださらねばなりませぬ。才蔵さま、おなごの口からこのようなことをいわせるお前さまは、善いひとではありませぬ」
「おれは、悪人よ」

「きっと地獄に堕ちましょう」
「おお、堕ちるわ」
　城内は、明るさをうしなっている。話は自然、死のことに結びつきがちになった。
「望むのは地獄じゃ。獄卒を相手に一騒動をおこすのもおもしろい」
「才蔵さまが地獄へ行かれるならば、わたくしも地獄へ参ります」
「よせ、左様に陰気なはなしは」
　才蔵は、持ち前の明るい声でいった。
「この城はおちる。おちるべくして大坂城はおちる。能なき者が、能ある者に亡ぼされるのは、自然の理じゃ。太閤も、その主人信長の子弟を追うて、天下のぬしになった。家康が太閤の遺児をほろぼすのは、すでに太閤が生前に示した手本どおりのことじゃ。もし逆に大坂城が勝ち、家康が亡びるとすればどうなる」
「……」
「天下は闇になるぞ。あの厚化粧の老婦人が愚昧な右大臣家の手をひいて天下に君臨し、その幕下として、おぬしの兄治長のような暗い頭の人間が政道をにぎることになる。豊臣家はいさぎよくほろびよ。ほろびることによって世に尽すことになる。天下の諸侯も利口じゃ。それを知って、旧主を救援せぬのであろう」
「才蔵さま、逆心……」
「逆心なものか。おれはおれなりに、縁もないこの豊臣家にずいぶんと手を砕いて尽してき

た。しかしそれなりに、おれ自身もずいぶんと面白かった」
「もうよい。お家のことは申されまするな」
「おぬしは聞きづらかろう」
「はい」
外は、雨になったらしい。雨戸をうつ音が繁くなり、才蔵と隠岐殿は、ふとだまって、その音を聴いた。

大坂城の頽勢を一挙に盛りかえす必勝の作戦案が後藤又兵衛によってたてられ、軍議の結果、採用された。
はじめ、真田幸村、長曾我部盛親、木村重成らは、四天王寺近辺に東軍を引きつけて決戦を強いる案をたてたが、又兵衛はうなずかなかった。
「四天王寺近辺は、広すぎる」
というのである。又兵衛は、裸城の大坂城をすてて野外決戦を行なうという点では、幸村と同意見だが、それにしては四天王寺付近は予定戦場として平野でありすぎるというのであった。
「家康は野戦の名人でござる。そのうえ、東軍の兵は、われにくらべて精練の者が多い。平野で戦えば、家康公の術中におち入り、よいように引きまわされてしまうでありましょう」
「もっともであるが、しかし」

と、大野修理治長が、故障を入れた。
「当城のそばには山がありませぬぞ。野はきらいじゃという又兵衛どのは、いまから摂河泉の野に山でも築きあげるおつもりか」
「なに……」
又兵衛は、怒気を含んだ。修理は格別の悪人ではないが、秀頼側近という権威を笠に着、いちいちの物のいいかたが、ひとの気にさわるのである。又兵衛は白い目を修理にむけて、
「たれが山を築くと申したか」
「いや、これは物のたとえである」
「左様な話の筋に物のたとえなどは要らざることじゃ」
又兵衛は、横をむいて黙ってしまった。幸村がとりなし、
「後藤どの。かんしゃくは戦勝の暁まで蔵にしもうておこうではありませぬか。いまはまず、家康が相手じゃ。さあ、貴殿の軍略をつづけて頂こう」
明石掃部全登、長曾我部宮内少輔盛親らもこれに和し、
「後藤どの、あとを聴きたいものである」
といったので、又兵衛も気分をとりもどし、
「修理殿の申されるとおり、摂河泉の野には山はない。しかし河泉と大和の国境いには、生駒・信貴・葛城・金剛の山波がうねっている。敵の動きからみれば、主力は大和から進出するに相違ない、とそれがしは見る」

「もっともな見方じゃ」

と幸村もうなずいた。

「この河内、大和の国境いに兵を集中して敵の来るのを待ち、これをつぎつぎに撃砕すれば、おそらく敵は奈良、郡山まで退却し、再来するまで数日を費やすでござろう。そのときに臨んで応変の策をたてれば、いかがであろう」

雄大な作戦である。

大和と河内の間の山脈には、間道をふくめておよそ十七の山越え道があるが、大部隊の通過をゆるすだけの大道は、北から暗峠、亀ヶ瀬越え、関屋越えの三つである。この亀ヶ瀬、関屋越えの二路は、河内国分で合している。国分の地勢は袋の口のようにせまいため、この国分に主力部隊を置けば、かならず敵に勝つと又兵衛はいうのである。

「面白かろう」

他の諸将も賛同した。

後藤又兵衛基次の案が容れられ、いよいよ、大坂方は、大和口にむかって出撃することになり、諸将の部署がきめられた。

前隊は、

後藤基次、薄田兼相、井上定利、山川賢信、北川宣勝、山本公雄、槇島重利、明石全登

以上、計六千四百人。

後衛は、

真田幸村、毛利勝永、福島正守（東軍福島正則の実弟）、渡辺糺、小倉行春、大谷吉胤、長岡興秋、宮田時定

以上、計一万二千人。

城内は、出撃準備でごったがえしたが、ここに思わぬ事故が起こった。後藤又兵衛が、なにに憤慨したのか、自分の部隊二千人をひきい、後続部隊のそろうのを待たず、五月一日の夜、孤軍粛々と城門を出て先発してしまったのである。

これには、さすがの淀殿も秀頼もあわてたらしく、急ぎ本丸に諸将を招集した。

真田幸村は、近習数人を供につれて真田丸を出るとき、廊下に平伏している才蔵に、

「そち、先日、後藤どのと本丸下の石段の下で茶を喫したそうじゃな」

「は」

「そのとき、機嫌はどうであった」

「後藤様は、いま秘策を献じての帰りじゃと申され、かくべつのうるわしさでござりました。その後その策が容れられたと申しまするのに、なぜ後藤様は、悲憤なされ、軍令を待たずに出発なされたのでござりましょう」

「あの仁らしいふるまいよ」

幸村は、苦笑するしかない。

「つまり、修理様の要らざる節介に憤慨されたのでござりまするな」

「そちは存じているのか」
「城中、知らざる者はありませぬ」
士卒のはしばしまで取沙汰しているうわさでは、又兵衛の折角の献策を、大野修理治長は、自分の立案であるとして手柄顔に秀頼に上申したのである。又兵衛は、秀頼の近習からそれをきいて悲憤し、
「この存亡の秋にのぞんでも、なお他人の手柄を横取りするとは、なんと腐れはてた男か。あのような者が大将では、このうえは、一時も早く敵にまみえて討死するのみぞ」
とわめいた。
五十歳をすぎた又兵衛にすれば、この大坂攻防戦をもって武将としての自分の最期を飾りたいという欲のほかはなかった。死後に自分の功名が語りつがれるように、事歴を明確にしておきたかったのである。豊臣家譜代の大野治長は、そういう牢人あがりの部将の悲願をこめた事績をさえ盗んだ。
「もはや、討死ぞ」
と又兵衛がいきまいて、孤軍をひきいて先発したのはむりもなかった。
幸村が軍議に出ると、秀頼は蒼白な顔をひきつらせて、
「卿、すぐ又兵衛に後続せよ」
と命じた。
後隊の指揮官である幸村は、まだ兵の準備がととのっていなかったが、やむなく又兵衛が

率いるべき前隊の諸将の采配をとることになった。
一方、東軍は、これより先に諸隊大和の宿営地を発し、五月五日には、三万の大軍が、又兵衛の観測したとおり、河内国分越え付近に進出しつつあった。
この日、又兵衛の部隊はすでに、大坂の南郊平野郷にあり、幸村の部隊はさらにそれよりも後方の天王寺に宿陣していた。
才蔵は、幸村の使番として馬一頭で従い、相変らず兜、具足を用いず、平装のままであった。幸村が、
「それでは、矢弾が防げまい」
というと、才蔵は不敵に微笑して、
「なに、このほうがいざ逃げだすときには身軽うござる」
その日、日暮前に幸村は毛利豊前守勝永とともに、平野郷にある又兵衛の幕営をおとずれ、あすの決戦の打ちあわせをした。
そのあと、幸村、又兵衛、勝永の三人は訣別の杯を汲みかわし、三人がこもごも、
「あすは長駆して、家康、秀忠の本陣に突入し、二人の首を獲るか、それともこの野でみずからの死を送るか、二つに一つしかない」
といった。
又兵衛は、このとき涙を揮って物語ったという。

「拙者には、城内の何者が撒きちらしたか、寝返りの風説がござる」

むろん、そのうわさは、幸村、勝永も知っている。

さる冬ノ陣がおわったあと、家康は、謀将本多正信の縁者に相国寺の僧揚西堂という者がむかし又兵衛と懇意だったことを知り、かの僧を又兵衛のもとにつかわして、

「貴殿もし大坂城を立ちのけば、播磨一国五十五万石を当て行なうが、どうか」

と帰降をすすめさせた。又兵衛は、敵将の家康がそこまで自分の価値を重くみてくれていることに感泣したが、

「しかし」

と答えた。

「もし逆に大坂が勢い盛んにして関東の命運旦夕にせまるというときならば、又兵衛はよろこんで仰せに従いましょう。が、こんにち落日の豊臣家を捨てて徳川に走るとなれば、後藤又兵衛は利によって動いたといわれ、男の道がたちませぬ。この話、なきものと水にお流しくだされ」

そういういきさつがあり、これがさまざまなうわさに作りかえられて城内にはびこり、大野治長らの疑惑をまねいたことがあった。

家康が、籠城諸将に工作したのは、又兵衛だけでなく幸村に対しても同様に好餌をもって誘ったことがあり、そのとき幸村も又兵衛と同様拒絶し、あとで治長らから疑惑をもたれている。

「されば」

と又兵衛は、幸村と勝永にいった。

「あすの合戦は力の尽きるまで戦い、生きては城にもどらぬつもりでござる」

その夜、午前零時、又兵衛は兵二千八百を率いて平野郷を発し、数百の松明をつらねながら、大和街道を南下して、払暁、藤井寺村に着いた。

藤井寺村のすぐさきに道明寺村があり、そこで未明に幸村、勝永らの後発の部隊一万数千と合流するはずであったが、不幸にして当夜は濃霧のために後発部隊の足が意外に遅れ、すでに前方に敵兵が散見しつつあるというのに、味方は後藤隊のほかに一兵もなかった。

(待つか、進むか)

又兵衛は一瞬思案したが、すぐ進撃を決意した。

又兵衛は、大和街道を見おろす小松山を占領して、松の切株に腰をおろした。

「さて、敵をどう料理ろうか」

と眼下にむらがり進んでくる人馬を見つめていたが、やがて兵を数隊にわけ、それを自在に進退させつつ、押しよせる敵を小気味よく撃砕しはじめた。

まず一隊によって東軍先頭の松倉重政の隊が崩れたち、そのすきに又兵衛はすかさず新手の一隊を急進させ、銃隊の援護を与えつつ敵の本隊水野日向守勝成の大軍に激突させた。たちまち勝成の先頭隊に混乱がおこった。又兵衛はその機をのがさず、

「掛かれ」

と予備隊の一部を投入した。

その後、わずかのあいだは又兵衛の圧倒的勝利とみられたが、そのうち国分の丘陵上に東軍の伊達政宗の大部隊があらわれ、さらに本多忠政の率いる中備えの大軍がこれにつづき、ほどなく後衛部隊の松平忠明の軍までぞくぞく進出してくるにおよんで、又兵衛の正面の敵は二万三千を数えるにいたった。後藤隊はわずかに二千八百である。

乱戦となった。

又兵衛はついに自ら馬上の人となり、左右にわずか三、四十騎を率いて山麓をめざし駈けおり、まさに足もとの叢を飛びこえようとしたとき、伊達隊が放った一弾が胸を貫いた。

馬上からころげ落ち、なお息があった。家来の金馬平右衛門が下馬して肩にかつごうとしたが、

「やめよ」

と又兵衛は手をふり、血をはき、たんを切ってからやっと声をふりしぼって、

「この首を打ち落せ。敵にとられるな」

平右衛門は茫然とした。又兵衛がさらに叱咤したためにやむなく背後にまわって打ちおとし、かたわらの田の中にうずめ、乱軍のなかに駈けもどった。

この日、又兵衛の戦死をきいてその場を去らずに殉じた部下が多かったのは、譜代の主従でもないだけに奇話とされた。又兵衛がよく将士の心を攬っていた証拠というべきであった

ろう。この戦いで、後藤隊に後続していた薄田隼人正兼相、井上定利も相ついで討死した。

霧のために遅れた幸村の部隊が藤井寺に到着したのは、その直後午前十一時ごろであった。まず、敗走してくる残兵を収容し、応神帝陵のそばの土手の上に布陣し、追尾してきた東軍を撃破して、七、八丁まで退けたが、途中城内から急使が汗馬に鞭うって駈けつけ、若江、八尾方面を併進していた味方が敗退したことを告げた。

「その方面の敵が城下へ迫ろうとする勢いでござる。疾く引き取られよ」

との治長の命を伝えたためにやむなく兵をひきあげた。

城内にひきあげてから、猿飛佐助は才蔵のもとへ訪ねてきて、

「どうやら、戦さも決着するようじゃな」

といった。才蔵は所在なさそうに苦笑して、

「右府様（秀頼）というお人は、よほど御運のないお方と見える。きょうの戦さで霧さえなければ真田の兵が急進して後藤隊と合流し、手をあわせて国分峠から敵を追い落したであろう。運、才、勇の三拍子揃うて持ちあわせぬ総大将を上に頂いておれば、城が亡びぬのがふしぎじゃ」

「ところで才蔵、おぬしは茶臼山の御陣には参らぬのか」

と佐助がいった。茶臼山の御陣とは、幸村の野戦陣地である。

道明寺、八尾、若江に敗れた大坂方は、幸村の案を容れてあすの主決戦場を天王寺付近と

きめ、主将幸村は茶臼山に陣し、茶臼山の南には、嫡子真田大助幸綱、大谷吉胤、渡辺糺、伊木遠雄、福島正守らを配し、毛利勝永には四天王寺南門を固めしめ、吉田好是をはじめとする豊臣家譜代の十二人の部将をその左右に配置し、江原高次ら七将を四天王寺と一心寺の間に置き、さらに、いまはすでに主将の亡い、後藤又兵衛、薄田隼人正、木村重成ら諸隊の残兵は、後方陣地である四天王寺毘沙門池の付近に配置した。

「あすは、関ケ原以来の大合戦になろう。しかし忍びは、合戦には出ぬものじゃ。万一、討死などすれば、伊賀の故郷の物笑いになる」

才蔵は、しらじらと笑った。

「臆したか」

「臆しはせぬ。が、ただ、あとの仕事のことを思えば、いまから心の縮む思いでいる」

「あとの仕事とは」

「隠岐殿を城から落す」

ほう、と佐助は顔をやわらげ、

「おぬし、それを引き受けてくれるか。あの女性は京ではわしの主人であったゆえ、万一のときはなんとか救い参らせたいと思うていた。おぬしがそれを引き受けてくれるならば、甲賀者を三人ほど貸そう」

「城を落ちるのに人数は要るまい。わが身一つでも邪魔になるほどじゃ。とにかくわしは、天王寺には出ぬ。わしが天王寺に出たところで、戦さがどうなるものでもあるまい。あす、東軍のほとんどは天王寺に攻めかかる。もし天王寺の備えが崩れたとなれば、大挙して城に攻めかかろう。その間のわずかな時間だけしか、城を脱け出す機会があるまい。……ところで」

と才蔵がいった。

「おぬし、討死するつもりか」

「せぬ」

佐助も、昂然といった。

「忍びに討死はあるまい。ただ天王寺の備えがもし崩れたとき、殿か、若殿を落し参らせる仕事をせねばなるまい。そのためにわしは茶臼山の本陣にゆく」

「よかろう。そうとなれば、きょうが別れになるかもしれぬな。互いに行くすえ、堅固に暮らそうぞ」

「思えば、おぬしには難儀をかけた。かような大仕事に引き入れ、しかも豊臣家はかようなていたらくじゃ、詫びの仕様もない」

「よいわ。徳川が勝ち、豊臣がほろびるのも天命であろう。この城にきて、そのことがよくわかった。腐れきった豊臣家が、もし戦いに勝って天下の主となれば、どのように愚かしい政道が行なわれぬともかぎらぬ。亡びるものは、亡ぶべくしてほろびる。そのことがわかっただけでも、存分に面白かった」

「では、わしは、いまから天王寺に出かける」

佐助は、立ちあがった。

五月七日の暁天、南、北、西の三方から攻城を開始した東軍は、文字どおり雲霞の大軍だった。

東軍の人数は、当日大坂城に籠城していた「日本基督教史」の著者レオン・パゼーの記録しているところでは、三十万であったという。これを誇大としても、実数二十万はくだらなかったであろう。これに対して城兵はほぼ十二万にすぎなかった。

幸村は、その前夜、茶臼山の陣営を訪れた大野修理治長に説き、

「あすの合戦こそ右府様の御運のわかれる日でござろう。われら死力をつくし働き申すゆえ、右府様おんみずから城を出てお旗を陣頭にお進めくだされ。されば味方の士気は百倍するでありましょう」

治長もこれを諒とし、すぐ帰城してその旨をお伝えすると、約束した。

ところが、その翌朝になっても秀頼の姿は陣頭にあらわれなかった。

幸村は茶臼山から刻々迫ってくる敵の大軍を望みながら、

「右府様はまだか」

と何度かつぶやき、かれはただそのことに望みをつないだ。

ついに嫡子大助幸綱を呼んで、

「そのほう、いまから急ぎ城中へ帰り、即刻御出馬あるように嘆訴申しあげよ」

しかし大助は、決戦を目の前にして後方にさがることをきらった。

「お言葉ながら、このこと、なりませぬ。たとえ地獄に参ろうとも父上と馬をならべて参りとうござる」

幸村は、言葉をつくして十六歳の大助を説き、

「この戦場に豊家の馬じるしがあらわれるかどうかで勝敗はきまる。右府様が御出馬なさらねば、わしや、死んだ後藤殿などのこんにちまでの苦労は水の泡となろう」

大助は泣きながら馬を城の方角にむけたといわれる。

そのあと、東軍の先鋒本多忠朝の隊からしきりと鉄砲をうちかけてきたが、幸村は秀頼の着陣を待つために全軍に令して開戦をひかえさせた。

ところが、時は容赦なく移った。やがて陽が頭上にかがやこうとする頃おいになっても、秀頼は姿をみせない。

目を細めれば、押しならぶ敵の旗のなかにひときわ高く家康の馬じるしを望見することができるのである。七十をすぎた老人が、はるばる東国から着陣しているというのに、二十三歳の秀頼は、城外半里の前線にさえ出ようとしなかった。幸村は切歯したであろう。事情は、生母淀殿が、秀頼の怪我をおそれて出陣をおさえていたという。淀殿にすれば、戦さは牢人にまかせておけというのであったろうか。

幸村はなおも待ったが、戦いのほうがそれをゆるさなかった。決戦は、東の本多忠朝隊と西の毛利勝永隊の射撃戦からはじまり、やがて天地が晦冥するような乱戦になった。

秀頼はついに来ず、大坂方は崩れ去った。幸村は奮迅のすえ、戦死した。年四十九歳であった。

真田大助幸綱が、本丸の桜門まで帰ったとき、秀頼の旗奉行以下が、旌旗を用意して門内に集まっていた。

「右府様は？」

駈けこんできた大助がたずねると、「まだお出ましにならぬ」という。きけば、秀頼はきょうの朝一たんは出馬を覚悟したらしかったが、城内で、秀頼出馬とともに火を放って内応する者ありとの流言が飛んでいたため、出馬をひかえたのだというのである。

ほどなく幸村戦死の報がもたらされた。同時に、天王寺、岡山方面の敗報が相次いで入り、さらに敗兵がひきあげてきて城中、騒然となった。

そのとき、本丸の台所付近から火の手があがり、折りからの強風に火はみるみるひろがりはじめた。かねて東軍に内応していた台所頭大隅某が放火したものだという。

東軍は城内に火があがったのをみて諸隊あらそって進み、すでに守備兵のいなくなった三ノ丸の南部の木の柵を乗り越え、大野治長の屋敷をはじめ、ほうぼうの建物に放火し、黒煙が天に冲した。

（いよいよ落城じゃな）

才蔵は、桜門の前を通り、二ノ丸の入り組んだ道を北にむかってゆっくりと歩きながら、

西の城塁をみあげた。陽はすでに傾いて石塁のむこうに沈もうとしている。これが、豊臣家が迎える最後の落日なのであろう。

才蔵の左右には、逃げまどう男女の群れが、間断なく走りすぎて行った。さすがに槍をもった武士はいない。この大坂城には、士卒のほかに、女だけで一万、雑人が二万ほど常住し、城内の混乱はかれらの悲鳴によっていよいよはなはだしくなっていたのである。

才蔵は、その群衆のなかで、かれらとおなじ雑人の風体をしていた。刀は菰にくるんで肩から背負い、破れた麻の着物で腰までを覆い、縄の帯をしめ、すねを出し、脚絆で足を締めている。

（まだ、刻限はあるな）

隠岐殿との待ちあわせの刻限である。才蔵は、その前日に、佐助の甲賀者を一人借りてひそかに隠岐殿のもとに忍ばせ、時刻と場所を伝えてあった。

……明神ノ榎、暮六ツ（午後六時）。

というのである。明神ノ榎は京橋口のそばにある老樹で、城内ではたれ知らぬ者はなかった。

才蔵が、京橋口付近をえらんだのは、それが城郭の北部の唯一の門だからである。

東軍の主力は、前夜から城南の天王寺方面に吸い寄せられ、北はほとんど手薄といってよかった。城から落ちのびるとすれば、京橋口から天満川を渡って対岸の片原町の葦のなかにのがれこむ……あとは、運だけが二人の命を救うであろう。

京橋口まで近づいたとき、城内でここだけがなお将帥を仰ぎ、完全体制のまま射撃をつづけていた。長曾我部盛親五千の部隊である。

（はて、こまったな）

かれらだけが戦闘しているとなると、容易に城門は開けまい。

そのとき背後でどっと櫓が燃え落ち、火の粉が才蔵の肩にふりかかった。その猛煙のなかから女がひとり飛び出してきた。

「隠岐殿か」

才蔵が声をかけると、素足の隠岐殿は、いそがしくうなずいた。頬が煤煙でよごれ、するどく切れた一重まぶたの目だけがきらきらと光っている。妙なことだが、才蔵はこのときほど隠岐殿を可憐に思ったことがなかった。

榎のそばの石垣を背負って明神の祠があり、その横の物蔭に隠岐殿をさそい、片手で肩をだきよせると、きらりと両刃の鎧通しをぬいた。

「目をつぶれ」

いうなり隠岐殿の黒髪をにぎった。すばやく一尺ばかり切りすて、そのあと茶染めの長い布で頭を巻かせた。

「さて、その小袖ではまずい。これを着てもらおう」

と垢じみた雑人の着物をあたえ、

「城から六里、北河内の杉という山中の村に存じ寄りの家がある。そこで旅衣装を借りて女の姿にもどしてやるゆえ、しばらくの辛抱じゃ。さてその杉という村までは夜をこめて駈け通さねばならぬ」

「はい。……でも」

と、隠岐殿は、燃えあがる本丸のほうをふりかえった。そこにいる秀頼や淀殿などを捨てて自分だけが城をぬけ出すことになおためらいがあったのだろう。

「見るな。いまは無用の情は禁物じゃ」

才蔵はするどくいった。隠岐殿は、はっとわれにかえったように才蔵を見あげた。

「才蔵さま、行くすえ、わたくしを可愛がってくださいますか」

「……」

「これは睦言のつもりで申しているのではありませぬ。わたくしは、いままでこの城のために女らしい生き方ができませなんだ。きょうからは、自分のために生きるつもりでありまする。だけど才蔵さまが可愛がってくださらねば、このさき生きながらえたところで詮はありませぬ。もし、いやと申されるならば、わたくしはいまからあの炎のなかにもどりまする」

まるで脅迫ではないか、と才蔵は苦笑して、

「そのようにする」

「たしかに？」

「みつが」

と才蔵は隠岐殿をはじめてその本名で呼び、

「火に身を投ずるというなら、これは可愛がるより仕方がないではないか」

「末永う?」

そのとき、にわかに京橋口の銃声がやみ、と同時に城門が八ノ字にひらいて、城内の兵馬がどっとなだれを打って外へ出はじめた。城内で最後まで組織的な戦闘をつづけていた長曾我部部隊が、ついに隊を解き、各個に退城しはじめたのである。

才蔵はそうとみると、折から馬をあおって駈けすぎようとした武者の片足をはねあげて巧みに馬から落し、ひらりと馬上の人になった。

「悪く思うな」

地にころがった武者に笑いかけ、隠岐殿をさらうようにして引きずりあげると、突風のように城外に出ていた。

京橋口を出るや、才蔵は京街道の細道を砂塵をまきあげながら馬を駆ったが、守口村まできたとき、前方の地蔵堂のかげに十人ばかりの土民が、槍を伏せてたむろしているのをみた。

(はや、出ておるのか)

いうまでもなく、合戦のあとには付きものの落武者ねらいなのである。近在のあぶれ者が、落武者を押しかこんで惨殺し、刀槍具足などをはぎとり、名ある者なら勝った側に首をさしだして褒賞にありつこうとするのである。

才蔵は、背中の菰包を崩して刀の柄をのぞかせておき、胸に顔をうずめている隠岐殿に、

「なにがあっても、手を離すでないぞ」

といいきかせるや、やにわにその群れをめがけて馬を突進させた。土民たちは、うろたえて槍をとりなおそうとする瞬間、

「……」

才蔵の馬は、声もなく土民の頭上を越えた。馬の後ろ脚のあたりで血煙がたち、ひたいを斬り割られた死体が一つ砂にまみれてころがったが、そのときには才蔵の馬は、薄暮の街道のむこうへ駈け去っていた。土寇たちにとっては、まるで通り魔のようなものだったろう。

庭窪村まできたとき馬がつぶれた。ここから東へ脇街道が出ている。あとは徒歩で山にむかって歩いた。

日はすでに暮れはてていた。気がつくと、飯盛山の上に糸のように細い月が出ている。背後の空が赤い。大坂の落城の火である。炎はいよいよ燃えさかっており、城の上の雲を異様な色に染め出している。

「右府殿は、どのようにおなりあそばしたでござりましょう」

「死んだろう」

才蔵は、乾いた声でいった。

「お袋さまは?」

「死んだにちがいない」

これも、つめたくいった。

「兄（大野修理）は？」

「おそらく死んでいる。後藤又兵衛殿も、真田幸村殿も何万の士卒も、あの護り甲斐もない豊臣家のために死んだ。いずれも、すさまじきばかりの死にざまで死んだが、どの者もいまごろ冥土で後悔はしていまい。自分の男の一生をこれほどの合戦で飾ることができたからだ」

「才蔵さまは、これからどうなされまする」

「おれか」

才蔵はだまった。答えようにも思案がなかったのである。そのとき、隠岐殿は、足もとの暗さに何度か石に蹴つまずいた。才蔵が隠岐殿の足に触れてやると、つまさきに血がにじんでいる。

「おぶってやろう」

隠岐殿は、うれしそうに体をもたせかかった。

隠岐殿を背負って、北河内の山中の杉という村についたのは、夜がしらじらと明けようとするころであった。

「杉ノ長者」とよばれる銭屋与兵衛の裏口をたたくと、まるで待っていたように家人が桟をはずしてくれた。

この家は、百年来、伊賀の才蔵の家とつきあいがあり、祖父も父も、京や西国筋で仕事をするときに足場につかってきた。才蔵は、冬ノ陣がおわったとき、万一を考えてこの家に使いを出しておいたのである。与兵衛方では、大坂の落城をきいて、おそらくきょうあたり、顔を出すものとみて待っていたのであろう。

「杉ノ長者」の屋敷で疲れをやすめたあと、才蔵と隠岐殿は、夜半に発った。このあたりも落武者の詮議がきびしいことがわかったからである。

ふたりは、山あいの道を北へむかった。

隠岐殿は市女笠をかぶって女姿にもどり、才蔵は「ほろほろ法師」のすがたをしていた。着流しの旅姿で浅い編笠をかぶり、尺八を腰にさしている。ほろほろとは、のちの世の虚無僧のことである。

「はて、どこへ行くか」

京は、あぶないという。才蔵はいったん宇治へ出、山中に入った。尾根の道をさらに北へむかってあるきつづけるうちに、しだいに杉木立がふかくなり、苔に冷えた山中の日ざしは、はやくも初秋をおもわせた。

洛北八瀬ノ里に入ったのは、その日の薄暮であった。

「ここは八瀬ではありませぬか」

隠岐殿は、おどろいてみせた。

「左様さ」

と才蔵は、答えた。日が沈んだせいか、谷を流れる高野川の瀬音がひときわ高くきこえてきた。

「そなたと逢いそめたこの里でしばらく静養しながら、この先どこへ行くかを考えてみたい」

才蔵は、渓流に面した茶屋に宿をとった。この里には上古から奇妙な沐浴の風習があった。温泉のない山城では、王朝このかた、京の公卿や門跡などで湯治のためにこの里に滞留する者が多い。俗にかまぶろという。

沐浴のあと、才蔵は濁りの多い八瀬の地酒をのみながら、

「はや一年半になるな」

「なにがでございましょう」

「そなたとこの里ではじめて逢うた日からかぞえれば……」

めずらしく才蔵は目もとに酒気をのぼらせていた。

「あのとき、そなたはわしにとって謎のような女性であった。ただ、そなたの肌には万人に稀れな芳香があり、それがこの世のものでない奇瑞のように思われた。わしはそれをめあてにそなたの正体をさぐろうとしているうち、いつのまにか、大坂の騒動に巻きこまれてしもうた。わしはわしなりに生死をかけてその騒ぎのなかに身を入れてみたが、そのすべてが落城とともにおわり、そなただけがわしの手中に残った」

「まあ」

隠岐殿は小さく笑い、

「好きませぬ。ご迷惑であったようにきこえまするな」

「すねるものではない。これは話じゃ。考えてもみよ。わしにすれば豊臣家はなんの縁もなかった。その家のためにこの一年半、わしという男は、なにに憑かれたか、命をかけて働いた。しかしいま、この八瀬ノ里であらためてそなたを見ると、なんのことはない。そなた一人を獲るだけのためであったらしい」

「……」

「しかし豊臣家がつぶれてはじめて遂げえたとは、これは高価な恋じゃ。おたがい、おろそかにはできまいぞ」

才蔵は、隠岐殿の手を引きよせると、ごろりと横になった。しばらく目をつぶっていたが、

「はて」

とつぶやいた。ひどく明るい表情で思案している。このさき、どう世を送るかということらしかった。

そのとき、谷を渡る風のむきがかわったのか、瀬音が手枕のそばを走り渡るほどにちかぢかときこえた。

「あきゅうどにでもなるか」

才蔵はむしろ、このさきの自分の運命を楽しんでいる表情であった。

解説

多田道太郎

『風神の門』は昭和三十六年六月から翌三十七年四月にかけて『東京タイムズ』に連載された新聞小説である。単行本になったのは昭和三十七年十二月、版元は新潮社である。

忍術ブームというものは、足立巻一氏の説によればインフルエンザ・ウィルスに似て、十年ないし二十年ごとに新型があらわれて旋風をまきおこす。最新型の忍術ウィルスは、昭和三十年代のそれで、三十一年の『柳生武芸帳』をハシリとし、だいたい四十年で終熄している。この期の代表作は、右の五味康祐作『柳生武芸帳』、柴田錬三郎作『赤い影法師』および司馬遼太郎作『梟の城』の三作である。『風神の門』は『梟の城』につづく司馬遼太郎の忍者小説の第二作である。忍術を題材とした好短編はほかに数多いが（『飛び加藤』『果心居士の幻術』など）、長編としては、この『風神の門』が『梟の城』とならんで、彼の代表的なものである。

昭和三十五年『梟の城』で直木賞を受けた司馬遼太郎は、三十六年には長年の記者生活をやめ、文筆生活に入る。いわば作家として独立した第一作が『風神の門』である。しかも、この作以後、彼は『燃えよ剣』『竜馬がゆく』の維新もの へ興味を転じている。『風神の門』

は『梟の城』の余燼であり、しかも新局面への転機ともなっている、そういう作品である。『風神の門』には、忍者小説の円熟と同時に、早くも立ち去ろうとする忍者ブームへの見切りのようなものがうかがえる。その味は、敏感に熟しきろうとする果実のそれに似ている。

この小説には、穴山小助、筧十蔵、海野六郎、三好晴海など、真田十勇士が登場する。舞台も大坂冬の陣、夏の陣の攻防である。立川文庫や講談でなじみのお膳立てである。主人公はこれまたなじみの霧隠才蔵。

足立巻一氏の綿密な考証によると、霧隠才蔵が立川文庫に初登場するのは、文庫の第五編『真田幸村』（明治四十四年六月）においてである。この才蔵は、石川五右衛門と仲間の盗賊で、岡山の山奥竜王山の砦から天下をうかがっている。いわば山賊の親玉だ。そこへ諸国漫遊中の猿飛佐助があらわれ、忍術くらべののち、才蔵は負け、真田の郎党となる。司馬遼太郎えがく才蔵とはイメージがまるでちがう。

もっとも同じ立川文庫でも第五十五編『霧隠才蔵』（大正三年一月）となると、いささか司馬才蔵に近くなる。浅井家の侍大将の遺児才蔵は、浅井滅亡のとき郎党に抱かれて伊賀名張にかくされる。長じて忍術の名人百地三大夫に術をさずけられ、元服して霧隠才蔵宗連と名のる。才蔵はここでは山賊ではなく伊賀の忍者である。のち、佐助とやはり術くらべをやり、けっきょく佐助が手裏剣をうけとめて佐助の勝ちとなる。それから二人は兄弟分となり、才蔵が真田十勇士の一人に数えられることは、もとの話と同じ。

同じ立川文庫の霧隠才蔵といっても、これだけイメージがちがう。「ただ共通することは、

才蔵はいつも佐助に負けることである。つまり、才蔵は佐助の弟ぶんであり、二流の悲哀を宿した忍術名人といえる。佐助を孫悟空とすれば、才蔵は沙悟浄といったところである」（足立巻一『大衆文学の伏流』）。

真田十勇士のうち、講談で映画で、もっとも人気を博し、後世に名をのこしたのは、猿飛佐助と霧隠才蔵である。「二流の名人」がどうしてそのような人気を保ちえたのだろうか。司馬遼太郎の着眼はおそらくそのあたりにあったと思われる。彼の解釈によれば、才蔵は二流の名人ではない。むしろ術において佐助を圧している。しかし、つねに佐助の影として扱われるのは、才蔵が「影の人」だからである。佐助は甲賀の忍者であり、集団組織の人である。それに反し、才蔵は伊賀の忍者であり、孤独の技術者である。集団戦においては、いきおい影の人とならざるをえず、悲哀を宿す人となる。

雪かあられか大宮の
月の宮居のわびずまい
世を憂しと住む影法師
憂しや憂し
酔うも憂し
うたうも憂し
恋うるも憂しや影法師

この今様が司馬才蔵の主題歌である。また大正昭和の才蔵ファンが才蔵を愛しつづけたのも、こうした気分のゆえであろう。才蔵を二流の人としてではなく、悲哀の人としてとらえたところに、司馬遼太郎の好みの着眼がある。

『風神の門』の猿飛佐助は才蔵を評してこう言っている。「狂人かもしれませぬ。ただしく申せば、風狂の者でござりましょう。あの者、才幹もあり、志も大きゅうござるが、そのこころざしの方向が決まっておりませぬ。自然、世に身を置く場所がなく、場所がないままに、世を相手に自在に遊び呆けようというのではござりますまいか。男には、まれに、左様な型の者がござりまする」。

作者はたしかにここで一人の男、「男には、まれに、左様な型の者が」あるというその一人の男を描いたのである。

才蔵は、その昂然たる面を見れば、次のような男である。「ただこの虫は、なにものの手にも屈せず、なにもののためにもはたらかぬ。ただひたすらに、おのれのためにはたらく」個人主義者、あるいは自立を尊しとする男である。しかし同時に、彼はまた、自嘲的に自分をこうも言う。「われら、土くれのごとき人間は、男を売って生きるしか手がござらぬ」。組織と集団でかためられた社会では、「男」を切り売りするしか方法はない。ただ、乱世の時代ともなると、風雲が彼を呼ぶ。自分でもわからぬ野望がうずく。江戸と大坂とを手玉にとって風雲に乗じようという野望が首をもたげる。

当然のことだが、霧隠才蔵は司馬遼太郎の血族の一人である。作者は言う。「ぼくはなんらかの情熱を持った男――これは〝漢〟の字をあてた方がふさわしいかもしれないが、その

男たちのこっけいさと悲壮さを書いているのです。情熱的になればなるほど内面は悲壮となり、またこっけいにもなる、変革期にはそれがそのまま鋭角に現われる」。もう一つの忍者小説『梟の城』の主人公葛籠重蔵もそういう男の一人だった。「男というものは、おのれの情熱の矢をつがえて曠野を駈けている猟人のようなものじゃとわしは所存している」。

伊賀者は金で傭われる。金は自立のための手段である。しかし、家来になって身や心まで売り渡しはしない。「技術だけでのびのびと世をひろやかに生きてゆく」と才蔵は言う。技術本位、個人本位、また仕事本位である。このあたりに、昭和三十年代の日本大衆の心がある。才蔵はそういう心のえがく夢の人物である。個人本位とはいうものの、仕事と契約についてはじつにきびしい。才蔵が真田幸村と「契約」するくだり——、真っ赤にやけた炭火をにぎりしめ、掌の肉を焦がす「伊賀者の作法」には、その契約観念のきびしさが躍如としている。これは忠節の誓いではない、むしろおのれと仕事との誓いである。これは戦前の日本では、少数の職人仲間をのぞいては、めずらしい道義観念であった。

ふしぎな魅力をたたえたこの曠野の猟人に、なぜ悲哀の影が宿るのであろうか。それは志がさだまらず、人生の第一の目的を失っているからである。真田幸村は、智恵のふかさと謀略の大きさで才蔵を圧倒してしまう。（負けた）と才蔵は思う。志をもつ者と、志を失った者とのちがいである。才蔵は自分を影法師と思わずにいられない。

「良忍ハ友ヲ得テ百年徒ラズ」という言葉がこの小説に出てくる。忍者はふつうの社会に住んで終生の友にめぐまれるほどでなければ、情報あつめはできない、ということである。政

治をうごかす忍者とはそのようなものであり、石川丈山や小幡勘兵衛が適例である。彼らは忍者とはいえない忍者である。いわば「政治忍者」である。十字を切ったり、霧隠れしたりするのは、下忍の仕業である。末端技術者にすぎない。——そういう認識が作者にある。そのことを十分、承知のうえで、作者は上忍の家柄である服部才蔵に下忍同様の「活躍」をさせる。才蔵には、忠義の志、つまりは、政治志向が欠けているのである。

そこに才蔵の「悲哀」があり、また人柄の艶やかさがある、と作者は言おうとしているかのようだ。青子、隠岐殿、お国、小若といたるところ、美女に惚れられる才蔵の艶やかさは、無欲の悲哀者のみのかもしだす、いわば男の色気といったものなのである。肥後の阿蘇大宮司家の家来斎藤縫殿頼仲という偽称がいっそ似つかわしい。「諸侯の部屋住みの庶子」という人柄は、才蔵が伝統的な伊賀者というより、文化のただなかで志を見失ってしまった都会人を思わせる。そういえば、隠岐殿の香りにうごかされ、事件の渦中に入るというプロットじたい、野人の嗅覚のするどさよりもむしろ、鋭敏な都会人の嗅覚を作者は前提としているように思われる。

最後に、私にとってもっとも魅力ある場面は、風魔獅子王院の最期であった、と言っておこう。『梟の城』においても甲賀の摩利は敗れてその死体をみずから無の中へ運び去ったのであった。

（昭和四十四年三月、評論家）

この作品は昭和三十七年十二月新潮社より刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める。

二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。

三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。

四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける。

司馬遼太郎著

項羽と劉邦（全三冊）

秦の始皇帝没後の動乱中国で覇を争う項羽と劉邦。天下を制する〝人望〟とは何かを、史上最高の典型によってきわめつくした歴史大作。

司馬遼太郎著

胡蝶の夢（全四冊）

巨大な組織・江戸幕府が崩壊してゆく――この激動期に、時代が求める〝蘭学〟という鋭いメスで身分社会を切り裂いていった男たち。

司馬遼太郎著

歴史と視点

歴史小説に新時代を画した司馬文学の発想の源泉と積年のテーマ、〝権力とは〟〝日本人とは〟に迫る、独自な発想と自在な思索の軌跡。

司馬遼太郎著

覇王の家

徳川三百年の礎を、隷属忍従と徹底した模倣のうちに築きあげていった徳川家康。俗説の裏に隠された〝タヌキおやじ〟の実像を探る。

司馬遼太郎著

馬上少年過ぐ

戦国の争乱期に遅れた伊達政宗の生涯を描く表題作。坂本竜馬ひきいる海援隊員の、英国水兵殺害に材をとる「慶応長崎事件」など7編。

司馬遼太郎著

果心居士の幻術

戦国時代の武将たちに利用され、やがて殺されていった忍者たちを描く表題作など、歴史に埋もれた興味深い人物や事件を発掘する。

司馬遼太郎著

城塞（全三冊）

秀頼、淀殿を挑発して開戦を迫る家康。大坂冬ノ陣、夏ノ陣を最後に陥落してゆく巨城の運命に託して豊臣家滅亡の人間悲劇を描く。

司馬遼太郎著

花神（全三冊）

周防の村医から一転して官軍総司令官となり、維新の渦中で非業の死をとげた、日本近代兵制の創始者大村益次郎の波瀾の生涯を描く。

司馬遼太郎著

峠（全二冊）

幕末の激動期に、封建制の崩壊を見通しながら、武士道に生きるため、越後長岡藩をひきいて官軍と戦った河井継之助の壮烈な生涯。

司馬遼太郎著

関ヶ原（全三冊）

古今最大の戦闘となった天下分け目の決戦の過程を描いて、家康・三成の権謀の渦中で命運を賭した戦国諸雄の人間像を浮彫りにする。

司馬遼太郎著

新史太閤記（全二冊）

日本史上、最もたくみに人の心を捉えた〝人蕩し〟の天才、豊臣秀吉の生涯を、冷徹な史眼と新鮮な感覚で描く最も現代的な太閤記。

司馬遼太郎著

燃えよ剣（全二冊）

組織作りの異才によって、新選組を最強の集団へ作りあげてゆく〝バラガキのトシ〟――剣に生き剣に死んだ新選組副長土方歳三の生涯。

司馬遼太郎著

国盗り物語（全四冊）

貧しい油売りから美濃国主になった斎藤道三、天才的な知略で天下統一を計った織田信長。新時代を拓く先鋒となった英雄たちの生涯。

司馬遼太郎著

人斬り以蔵

幕末の混乱の中で、劣等感から命ぜられるままに人を斬る男の激情と苦悩を描く表題作ほか変革期に生きた人間像に焦点をあてた7編。

司馬遼太郎著

梟の城

直木賞受賞

信長、秀吉……権力者たちの陰で、凄絶な死闘を展開する二人の忍者の生きざまを通して、かげろうの如き彼らの実像を活写した長編。

司馬遼太郎著

アメリカ素描

初めてこの地を旅した著者が、「文明」と「文化」を見分ける独自の透徹した視点から、人類史上稀有な人工国家の全体像に肉迫する。

白石一郎著

秘剣

剣に生き剣に死ぬ、信念に生き信念に死ぬ誇り高き者たちの織りなすさまざまな人間ドラマを、重厚な筆致で描く力作士道小説7編。

津本陽著

深重の海

直木賞受賞

明治十一年暮れの百数十人の犠牲者を出した大遭難と猖獗を極めたコレラと。死の影に怯える鯨とり漁師たちの悲劇を描く長編小説！

池波正太郎著

剣客商売③陽炎の男

隠された三百両をめぐる事件のさなか、男装の武芸者・佐々木三冬に芽ばえた秋山大治郎へのほのかな思い。大好評のシリーズ第三作。

池波正太郎著

男の系譜

戦国・江戸・幕末維新を代表する十六人の武士をとりあげ、現代日本人と対比させながらその生き方を際立たせた語り下ろしの雄編。

池波正太郎著

忍びの旗

亡父の敵とは知らず、その娘を愛した甲賀忍者・上田源五郎。人間の熱い血と忍びの苛酷な使命とを溶け合わせた男の流転の生涯。

池波正太郎著

おとこの秘図（全三冊）

江戸中期、変転する時代を若き血をたぎらせて生きぬいた旗本・徳山五兵衛――逆境をはねのけ、したたかに歩んだ男の波瀾の絵巻。

池波正太郎著

さむらい劇場

八代将軍吉宗の頃、旗本の三男に生れながら、妾腹の子ゆえに父親にも疎まれて育った榎平八郎。意地と度胸で一人前に成長していく姿。

池波正太郎著

雲霧仁左衛門（全二冊）

神出鬼没、変幻自在の怪盗・雲霧。政争渦巻く八代将軍・吉宗の時代、狙いをつけた金蔵をめざして、西へ東へ盗賊一味の影が走る。

藤沢周平著

刺客 用心棒日月抄

藩士の非違をさぐる陰の組織を抹殺するために放たれた刺客たちと対決する好漢青江又八郎。著者の代表作《用心棒シリーズ》最新編。

藤沢周平著

漆黒の霧の中で
―彫師伊之助捕物覚え―

竪川に上った不審な水死体の素姓を洗う伊之助の前に立ちふさがる第二、第三の殺人……。絶妙の大江戸ハードボイルド第二弾！

藤沢周平著

密謀
（全二冊）

天下分け目の関ケ原決戦に、三成と密約がありながら上杉勢が参戦しなかったのはなぜか？ 歴史の謎を解明する話題の戦国ドラマ。

藤沢周平著

春秋山伏記

羽黒山からやって来た若き山伏と村人とのユーモラスでエロティックな交流――荘内地方に伝わる風習を小説化した異色の時代長編。

藤沢周平著

橋ものがたり

様々な人間が日毎行き交う江戸の橋を舞台に演じられる、出会いと別れ。男女の喜怒哀楽の表情を瑞々しい筆致に描く傑作時代小説。

藤沢周平著

用心棒日月抄

故あって人を斬り脱藩、刺客に追われながらの用心棒稼業。が、巷間を騒がす赤穂浪人の動きが又八郎の請負う仕事にも深い影を……。

山本周五郎著

新潮記

幕末の動乱期に、心の屈折から時流を冷やかに眺めるだけであった青年が、生死の間をくぐりぬけることで己れのなすべき事を悟る。

山本周五郎著

風流太平記

江戸後期、ひそかにイスパニアから武器を密輸して幕府転覆をはかる紀州徳川家。この大陰謀に立ち向かう花田三兄弟の剣と恋の物語。

山本周五郎著

楽天旅日記

お家騒動の渦中に投げ込まれた世間知らずの若殿の眼を通し、現実政治に振りまわされる人間たちの愚かさとはかなさを諷刺した長編。

山本周五郎著

彦左衛門外記

身分違いを理由に大名の姫から絶縁された旗本が、失意の内に市井に隠棲した大伯父を天下の御意見番に仕立て上げる奇想天外の物語。

山本周五郎著

山彦乙女

徳川の天下に武田家再興を図るみどう一族と武田家の遺産の謎にとりつかれた江戸の若侍。著者の郷里が舞台の、怪奇幻想の大ロマン。

山本周五郎著

天地静大

変革の激浪の中に生き、死んでいった小藩の若者たち――幕末を背景に、人間の弱さ、空しさ、学問の厳しさなどを追求する雄大な長編。

柴田錬三郎著

人間勝負（上・下）

琉球に眠る財宝を持ち帰るため、謎の老人、空知庵によって選ばれた十人の男女が江戸をたった。泰平の徳川の世を騒がす意外な事件。

柴田錬三郎著

邪法剣

剣聖・上泉伊勢守が将軍・足利義輝に真影流の理を説く「邪法剣」。妖気漂う幻の剣法と黄金伝説を追う伝奇小説「木乃伊館」など9編。

柴田錬三郎著

御家人斬九郎

表沙汰にできない罪人の介錯をかたくわざとする御家人松平残九郎。今日も彼のもとには奇妙な依頼が舞い込む。著者晩年の痛快連作。

柴田錬三郎著

徳川浪人伝（全二冊）

織田信長の血を享けた孤独な剣士重四郎を中心に、徳川に一泡ふかせようとする豊臣家の残党など、権力に抵抗する浪人群像を描く。

柴田錬三郎著

眠狂四郎異端状

大飢饉下の秋田藩と武部仙十郎が共謀する清国との密貿易に巻き込まれた狂四郎は、初めて日本を離れ、南支那海を舞台に活躍する。

柴田錬三郎著

赤い影法師

寛永の御前試合の勝者に片端から勝負を挑み、風のように現れて風のように去っていく非情の忍者〝影〟。奇抜な空想で彩られた代表作。

永井路子著

この世をば（上・下）

三男坊で大人しい性格だった藤原道長は、血族の熾烈な権力争いに巻き込まれて行く……。〝王朝カンパニー〟の構造を描き出す傑作長編。

永井路子著

からくり紅花

口紅の原料紅花の売買を一手に取扱う御用商人轟屋の番頭貞吉の失踪には、からくりがあった。表題作などミステリー時代小説7編。

永井路子著

悪霊列伝（正・続）

菅原道真、楠木正成、平将門、伴大納言……熾烈な権力闘争に敗れ、悪霊となった人間たち。彼らの怨念とその背景を探る人物評伝集。

永井路子著

絵巻

栄枯盛衰のめまぐるしい源平時代――常に変わらぬ人間の欲望と、変転きわまりない時代の流れを〝絵巻〟にたとえて綴った連作小説。

永井路子著

日本史にみる女の愛と生き方

美しい女とは、賢い女とは？　小野小町、清少納言など、歴史に名を残す女性33人を新たな視点で見つめた、ユニークな女性史探訪。

永井路子著

茜さす（上・下）

E女子大国文科四年のなつみ。輝かしく生きた万葉人に導かれ、彼女は自立への道をいま歩き始めた……。著者初の長編現代小説。

古川薫著　**高杉晋作**
―戦闘者の愛と死―

雄藩長州に奇兵隊を組織し、28年に満たぬ生涯を討幕・維新に捧げて幕末の動乱を駈け抜けた天性の革命児の生涯を生き生きと描く。

古川薫著　**狂雲われを過ぐ**

現代の法廷に、山県有朋、伊藤博文らを次々に冥界から証人として喚問し、維新史の暗部に横たわる謎に迫る表題作はじめ3編を収録。

小松重男著　**ずっこけ侍**

主君の逆鱗に触れ「永の暇」を頂戴してしまった三毛蘭次郎。だが人生ずっこけてからが面白い。激笑仕掛人の艶福ひょうきん行状記。

笹沢左保著　**剣士燃え尽きて死す**
―人間・沖田総司―

必殺の剣が宙を舞い、閃光となって落下する。幕末の青春とは？　死とは？　天涯孤独の青年剣士、沖田総司の数奇な一生を描く長編。

笹沢左保著　**新大岡政談**

悪のはびこる現代さながらの江戸社会、頻発する難事件に挑戦する越前の知恵と、その片腕〝町人侍〟こと水木新八郎のニヒルな剣。

平岩弓枝著　**風の墓標**

南蛮貿易で海外に活躍する日本人に、突然鎖国令が下された。帰国を禁じられ母国を失った人々の万感の想いをこめて綴る歴史長編。

新潮文庫最新刊

赤川次郎著　**密告の正午**

軽い気持ちで引き受けた仕事のために、友情も恋愛も裏切ることになってしまった女子大生・亜希。彼女が最後に手にしたものは……。

田辺聖子著　**夢のように日は過ぎて**

お肌の張りには自家製化粧水、心の張りにはアラヨッの掛け声。ベテランOL岸村タヨリさんの素敵に元気な独身生活を描く連作長編。

山田太一著　**遠くの声を捜して**

二十九歳の青年を突然襲った女の声。この淫蕩な感覚はなんなのだ。独自の愛の世界を描く山田ファンタジー三部作、待望の完結編！

ビートたけし著　**浅草キッド**

ダンディな深見師匠、気のいい踊り子たちに揉まれながら、自分を発見していくたけし。浅草フランス座時代を綴る青春自伝エッセイ。

小林信彦著　**裏表忠臣蔵**

忠臣蔵――虚構と伝説の厚化粧を落としてみれば、気絶するほど愚かしい。時は元禄、滑稽舞台の幕が開き、鳴るはパンクな陣太鼓！

原田宗典著　**十九、二十**

僕は今十九歳で、あと数週間で二十になる。彼女にはフラれ、父が借金を作った。大学生・山崎の宙ぶらりんで曖昧な時を描く青春小説。

新潮文庫最新刊

藤村由加著　**人麻呂の暗号**

〝歌聖〟柿本人麻呂。その雄大な歌風の底には巧妙に隠されたもうひとつの風景があった。しなやかな発想で読み解かれる新『万葉考』。

塩野七生著　**マキアヴェッリ語録**

浅薄な倫理や道徳を排し、現実の社会のみを直視した中世イタリアの思想家・マキアヴェッリ。その真髄を一冊にまとめた箴言集。

小沢昭一著　**背中まるめて**
―「小沢昭一的こころ」のこころ―

サラリーマンなら定年の歳を迎えた著者が、「人生ふた山時代」を生きるこころの奥をちらりと覗かせた、オリジナル・エッセイ集。

景山民夫著　**どんな人生にも雨の日はある**

原稿締切りとの格闘の数日間をくぐり抜けて出かける旅の話や、遠い日の酒と西部劇への憧れなど、遊び心に気骨が光るエッセイ集。

中村征夫著　**全・東京湾**

漁船に乗り、ヘドロにはいつくばり、テント暮らしで東京湾に潜ってるうちに十年経ってしまったぞ。海洋カメラマンの渾身超絶ルポ。

吉田秀和著　**この一枚**

バーンスタインのブラームスやアシュケナージのショパンなど、豊饒な音楽の世界から選び抜かれた名盤の数々に寄せた思いを語る。

新潮文庫最新刊

C・カッスラー
中山善之訳　**死のサハラを脱出せよ**（上・下）

サハラ砂漠の南、大西洋に大規模な赤潮が発生し、人類滅亡の危機が迫った――海洋のヒーロー、ピットが炎熱地獄の密謀に挑む。

J・クランツ
小沢瑞穂訳　**ダズル**（上・下）

アメリカ西海岸の眩光の下、若く才能溢れる女性フォトグラファ、ジャズ・キルクレンのめくるめく愛の遍歴と骨肉相食む苦悩を描く。

R・タイン
高野裕美子訳　**ボディガード**

今を時めく美貌のスーパースターに迫る魔の手。敏腕のボディガードは彼女を守りきれるのか？　息詰まる展開のラブ・サスペンス。

M・モンテシーノ
石田善彦訳　**大いなる時**（上・下）

ギャングに追われるピアノ弾きサルと、ビリー・ホリデイの再来のような娘イザベル。二人が織りなす華麗な運命のタペストリー。

D・スティール
白石朗訳　**情熱のエトランゼ**

エメラルド色の瞳と炎のような赤毛の持ち主ゾーヤ。ロシア、パリ、ニューヨークで繰り広げられる波瀾に満ちたラブ・ロマンス。

J・キャメロン
P・J・クリストマン
高橋良平訳　**風と共に去りぬ　写真集**

今なお読みつがれる名作『風と共に去りぬ』の映画作りの舞台裏を、スカーレット役探しのエピソードや幻のフィルムなどで紹介する。

風神の門（下）

新潮文庫　し－9－35

昭和六十二年十二月二十日　発行
平成　四　年十一月二十日　十一刷

著者　司馬遼太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部（〇三）三二六六－五一一一
編集部（〇三）三二六六－五四四〇
振替　東京四－八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Ryôtarô Shiba 1962　Printed in Japan

ISBN4-10-115235-7 C0193